
砂漠の蝶

Akka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の蝶

【Nコード】

N4388E

【作者名】

A k k a

【あらすじ】

世界に二つの大きな国がありました。長い間の不和を解消するために、両国は約束を取り交わします。すなわち、王子と姫の交換を。様々な思惑が交錯する中、思いの行き着く先は？砂漠の国の皇帝と水の国の姫君が織り成す物語。

小唄

閨国から渴たる国へ 蝶が迷い込みました
憂う国から活たる国へ 蝶が飛んでいきました

蝶の羽は陽に焼かれ 蝶の羽は火に焼かれ
蝶が休めるその場所は 砂漠を潤す大樹の木陰

砂漠に花が咲きました 小さな小さな花でした
枯れる運命さためのその花を 慈しむのは蝶でした

やがて花は枯れました けれども大樹のその下に
その木陰に守られて 新たな花が咲きました
蝶と大樹は見つめあい 微笑み浮かべ眺めます

これは昔の物語。

今でも皆が口ずさむ、蝶と大樹の物語。

その者は

正妃が死んだ。
それはレイヴスにとって『他の者を立てなくてはならない』というだけのことだ。

長い間まともに顔も見なかった女。儀式のたびにベールを被った姿は横にあったが、それが本人だったのかはわからない。

気位ばかり高くて可愛げなど欠片もない、形だけの正妃。最後に閨を共にしたのはいつだったか、思い出すことも出来ない。

それでも血統は申し分なく、実際に彼が求めたことはそれだけだった。

国が正妃に求めたものも又、それだけだった。

愛したことはないし、相手もまた然り。自分に愛情を持ったことなど無かっただろう。

所詮は政略結婚だ。初めて華燭の儀で顔を見た相手に、愛情など持てるはずもない。

だからあえて黙認した。

正妃が他の男と楽しむことを。薬に溺れていくことを。

閉鎖的な後宮の中で、そのくらしいの楽しみを与えることはそれほど罪ではないはずだ。籠の鳥の運命ならば、せめて籠の中では自由にすればよい。

他の男と子さえ成さなければ、それでよい。

死因が薬の中毒であったとしても、責める気になどなれなかった。面倒なことをしてくれた、生家に何と伝えるべきか、頭をよぎったのはその程度のことだった。

正妃の死を迎えて感情がまったく揺さぶられない自分にため息を

つく。

感情さえも頭で制御できるようになって、どれくらいになるだろう。最初は、便利だからそれを覚えた。次第に切り替えが出来るようになり、いつしか切り替える必要性を感じなくなった。

「陛下、お疲れのようですよ」

「……シンか」

「お休みになられてはいかがですか？皇后陛下の葬儀の準備も終わったことですし」

「まだ仕事が残っている」

ばさりと書類の束を卓上に投げ出す。その投げやりな様子が『皇帝』から『レイヴス・シャルディア・リュミシャル』個人へと変わったことを告げている。

近頃はほとんどん私人として過ごす時間が短くなっている。いつかレイヴスという個人がいなくなるのではないか、時にそんな危機感を覚えることがある。

しかし国はレイヴスそれを求めている。少なくともそう感じている。

だからせめてシンレットはそれに歯向かう。幼い頃からともに育った友人を失くさないために、レイヴスが個人として振舞うときには名前を呼びかけるのだ。

「ひどい顔だぞ、レイ。見れたもんじゃない」

「お前に言われたくはない。そっちも徹夜続きだろう」

「まあ……ねえ」

気安い会話を続けながらも、皇帝の疲れが肉体的なものではないことはわかっていった。

褐色の肌に金の髪。ルビーの赤と血の紅の瞳を持つこの国の若き皇帝の体力は並ではない。

必要となれば軍隊の最前線で戦う者が、この程度でこんなにも疲れれるはずはない。とすれば、この疲労は精神的なものだろう。

「面倒な仕事なんて、大臣に押し付ければいいのに。但し、僕以外

で」

「面倒と言う程でもない。ただ、気が重いだけだ」

「なら余計に、僕なら誰かに押し付けるね」

「最年少大臣の名が泣くな」

こんなことを言いながらも、この幼馴染で今は政治的な右腕でもあるシンレット・トリスバールが有能な政治家であることは間違いない。口で軽薄なことを言っても頭の中では常に冷静な状況判断が行われていると知っている。

きつと今も、自分が疲れている原因を探っていることだろう。自分でも明確でないことが、意外と他者から見ればあからさまなのかもしれない。それは恐ろしいことではないだろうか。

「で、レイ。残ってる仕事って何？」

「次の正妃を定めて、立后の儀を執り行なう」

「なんだ、そんなこと？」

呆れた様子でシンレットは続ける。

「あのねレイ、君何人の皇妃がいると思ってるのさ。側室合わせたら僕にも把握できないよ？順当に第二皇妃が立后すればそれで済む話でしょ。それとも何？身分の低い側室を皇后にしたいとか言い出すの？」

まさか君が。と当たり前のことを子供に諭すような調子で口にする。

そのまさかがあれば面白い。

慣例に逆らってまでレイヴスが欲しいと思うモノがあるのなら、自分は何を差し置いても望みを叶えようとするだろう。

しかしそんなことはない。レイヴスは何も欲しがらない。

「そのまさかだ……と言いたいところなんだが、違うな。その『第二皇妃』が問題だ」

「第二皇妃？」

予想通りの僅かな落胆を隠して誰だっけ？と首をかしげる。後宮

の内部事情はあらかた把握しているつもりだが、個人の顔まではさすがにわからない。彼女たちは皆、『皇帝の所有物』だ。他の男の目に触れるなど、原則あつてはならない。

「……オースキュリテの、姫だ」

「オースキュリテの……『忘らるる姫君』」

オースキュリテ。

このリュミシャルと世界の勢力を二分する大国。海を越えて遙か東の、水と闇の国。

熱と光の国と言われるリュミシャルとは、長い間覇権を巡って穏やかでない関係が続いていたが、10年前に先代が交わした約束によりその不和は少なくとも公には解消された。

その約束こそレイヴスとかの国の姫君の結婚。そしてレイヴスの弟とかの国の姫君の結婚だ。レイヴスの弟は海を渡ってオースキュリテへ旅立っていった。

レイヴスの弟も、この国へやってきた姫君もいわば人質。その価値は計り知れないだけに扱いにも気を使う相手だ。

しかしその姫がこの国で脚光を浴びたことはない。思い出してみれば十年前の婚儀こそ華々しく行われたが、『存在してさえいればよい』姫がその後どうなったかは関心を払っていなかった。

今となつては一年に数度、相手国の大使を迎えるときに名前が上がる程度。

ついた通り名が『忘らるる姫君』

「そりやまた面倒な。でもお姫様を飛ばして第三皇妃を立后させるわけにはいかないね。オースキュリテからどんな文句が飛んでくるかわからない」

思わず吐き出すように笑った。

和平が成ったといつても、それが恒久的なものと考えるほど誰の頭も目出度く出来ていない。現在の和平は二人の人間の上に危うい

均衡で成り立っているに過ぎないと言うことは、誰の目にも明らかだ。

だからこそ危険をはらむ可能性があるものは、虱潰しにしていかなければならない。

「そんなことはわかっている。だから『気が重い』と言ったんだ。近々迎えに行かなければならないな……」

「後宮にいるんじゃないの？」

「ドーブのオアシスに立てた離宮にいるはずだ……逃げ出してさえいなければだが。この国に来てからずっとな。この城の奥ハイレムにいたのは最初の数日だな」

「そりゃまたなんで」

「『面倒』だ。習慣も宗教も文化も言葉も全てが異なる。共に生活すれば衝突は避けられない」

それに、と続ける。

「オースキュリテの帝が出した要望の一つだ」

「随分と愛されたお姫様だねえ」

あきれたように嘆息する。

普通、皇帝との子をなして自分の血で相手国を支配したいと願うだろう。それなのにかの姫君はその責務を負わされていない。それがどれほど守られ甘やかされていることなのか、その姫君は把握しているのだろうか。

「で、レイどうするのさ」

「あくまで『要望』だ。無視するさ。あちらも代替わりしているからな、今も先代の意思が生きているとは限らないだろう」

「妥当だね。で、お姫様の名前は？」

レイヴスは極めて事務的な、何の感情もこもらない声でその名を告げた。

「シヨウコ・リーダー・オースキュリテ」

葬儀の夜

突然の死から1週間後、国葬により正妃であった女は冥府へ送られた。

久々に見たその顔に死化粧が施されていたのは皮肉であったのだろうか。薬の中毒で変色した顔色を白粉で隠し、赤すぎる紅で死という事実を塗り隠す。

自分にはこの女が本当に自分の正妃であったのかもわからない。もし仮に正妃が男と蒸発したことを隠すための身代わりだとしても、それはそれでよいとさえ思う。

誰か一人でもこの豪華で堅牢な鳥籠から逃げ出すことが出来たのなら、それはそれで良いことだ。

他愛もないことを考えながら、棺の中で眠る女を見下ろした。この女は明日靈廟に納められる。冷たく暗い靈廟は、歴代の王族の罪も恨みも押し込めて、新たな罪をまた飲み込む。

父や兄弟らが眠る横に、この女もまた眠る。いつかは自分もそこにいくのだろう。そう考えるとあまりの醜悪さに反吐が出る。

不幸な女であったと思う。せめて穏やかな眠りについてほしい。

葬儀は常に生きる者のためにある。気持ちに区切りをつけるためか、あるいは罪悪感を拭い去るためか。死が解放であると思うほど悲観論者ではないが、何某かの救済ではあるのかもしれないなとふと思った。

皇帝のプライベートな空間の一面を抜けて、奥^{ハイレム}への扉をくぐる。

正妃が死んだといっても、後宮はいつもと変わらない。むしろ次の女主人はどのような人物であるかと言う話で活気ついているよう

だ。現金なようだがそれが世間と隔絶されたこの空間の実情だ。

皇帝も皇后も所詮形代でしかない。必要なはその席を埋める者の存在だ。

今晚訪れた目的は女と閨を共にするためではなく、新しく迎える正妃の居室を確認するためだ。それは前正妃の居室を明け渡せと言うことに他ならない。

他の人間はともかくとして、前正妃に長く仕えた者にとっては酷なことであろう。

今だ死から一週間。悲しみに浸ることが許される時であるし、そうあるべきだ。しかし明日にはドーブへの姫を迎えに行く事になっている。早ければ3、4日中に、新たなハーレムの女主人がここに君臨することになるだろう。

しかも今回は非常に気を使わなければならない相手だ。やってきたときに部屋の準備がされていないなど、許されることではない。

両国の和平を維持するために、ただ一人の女の機嫌を伺うなどおかしなものだ。また、それほどまでに重いものを背負わされた姫にも同情を禁じえない。

「陛下のお越しです」

長らく立ち入らなかつた、後宮で最も広く贅沢な歴代正妃の居室。ここは『母の部屋』ではあつたが、『自分の正妃の部屋』ではなかつたことに苦笑せずにはいられない。

その間取りに覚えはあるが、内装や染み込んだ香り、そこに居並ぶ者には馴染みはない。

部屋には何人かの女官が控えていた。

「今回の事は、突然の不幸であつたな」

「はい。ですが盛大な式で冥府の王の元へ送られ、こうして陛下がお越しくださつたこと、ライラ様もお喜びでしょう」

「…そうであるといいが、な」

ライラという名前であったのか。

そんなことさえ忘れていた。死者はどのような葬儀でも分かりはしないし、自分が今ここにいるのは死を悼むためではない。

涙ぐむ者には悪いが、その悲しみを分かち合うことは不可能だ。

口先だけの言葉ならいくらでも出てくるが、それは死者に対する冒瀆以外の何者でもない。

可能なのは、この者たちがこの先の生活に困らぬように次の仕事の世話をするくらいのことだ。

「この部屋は3日のうちに空けて、次の者の荷物を運び込む。そのつもりで動いてほしい。それが済めば前皇后付きであった者は城から出て行くように。次の仕事が決まっていない者は侍従長に相談しろ」

以上だ。そう言って立ち去ろうとすると、年かさの女官から悲鳴じみた声がかかった。

「陛下、3日とはあまりに……！」

「気持ちは分かるが決定事項だ。変更はない」

「では、城を出るとは！」

「悪いが」

一旦言葉を切って、女官たちを見回し、縋る女官を一声の元に切り捨てる。

「悪しき前例を知る者を、残しておくことはできない」

多くの者の顔が強張る。この者たちはどうやら、正妃の密通がばれていないと信じていたらしい。

先代皇帝の所業を見れば、そう考えるのも当然か。裏を返せばこの者たちは己が断罪される危険を犯してまで皇后に仕えていた忠義者といえるのかもしれない。あるいはただ単に考えが甘いだけか。いずれにしる既に関係の無いことだ。

「以上だ」

今度こそ、部屋を後にする。

あの者たちは必死で仕事を片付けるだろう。密通の手助けをして

いたなど、いつ首が飛んでもおかしくない。王城以上の仕事を見つめるのは不可能だが、己の命には代えられないはずだ。一刻も早く城から出るためには夜通しの作業さえ厭うまい。

「陛下」

「陛下」

「皇帝陛下」

ハーレムの中庭を歩いていくといたるところから声がかかる。媚びた声に艶やかな仕草。そんなものでこの空間はあふれている。

目指す場所はハーレムでも最奥に近い場所にある、側室の部屋だ。今晩はこのまま居室に戻り、政務の続きをするつもりだった。しかしあの部屋の湿った空気を、そのまま自分の居室に持ち帰る気にはなれなかった。

訪問を告げてはいなかったが、先触れの者が来訪を知らせていたらしい。部屋の扉は開いていた。

「いらつしやいませ、陛下」

嫣然と微笑む女のほかは、誰もいない。この女は街の高級娼婦上がりの側室で、愛情などを求めないし与えない距離のとり方が好ましい。お互いに利害関係が一致するだけの割り切った関係が続いている。

「なんだかお疲れのようですね。新しい正妃様ですか？」

「お前に関係があるか？シユー」

疲れた身体を椅子に投げ出すと、思いのほか灯りが強く目に刺さった。

「ありませんわね。御酒などいかがです？」

諦めたように女が笑う。しかしそれさえ演技だろう。

何者にも囚われずに生きてきたこの女を、生活の安定と豪華な暮らしを条件に後宮に上げた。利権も地位も関係なく、子を残すことを望まずに身体を重ねることの出来る相手が欲しかった。

王宮も娼館も、そこに真がなく虚飾に満ちているという点で何ら変わりはない。

「いらん。明日は早い」

「そうですか。私は頂きますわよ？」

余裕のない男を嘲笑うように、葡萄酒を杯に注ぐ。

名のある貴族の女であればこのように振舞うことはないだろう。

しかし決して不愉快ではない。皇帝と言う名前だけに傳かれるよりも、よほど気が楽だ。

「第三皇妃様が大騒ぎですわね。あの方も事情がありますから大変なんでしょうけれど、少々見苦しいことになっていますわ」

「知ったことか。まだ皇后の選定をした覚えはないな」

「あら」

葡萄酒に僅かに濡れた唇が歪む。否、笑ったと表現するのが正しいのかもしれないが、何かを含んだ表情は時として酷く醜悪だ。

「では、違う方をお考えですか？」

そう言つて伸ばされる手を払い落とす。

危害を加えるために伸ばされる腕ならば切り落とす。つけ入るうとするのならば無視すればいい。しかしただ触れ合うことを目的とした腕は拒否するより他に対処の方法を知らない。

「二度も言わすか？」

払われた手を擦りながら、シユーは立ち上がり衣服を取り去っていく。元々男を誘うために来ていた衣服は、見事な身体の線を滑り落ち床に蛇の様にとぐるを巻く。

「いいえ、陛下」

一つ一つの仕草さえこれ以上ないほど扇情的に、生まれたままの姿になつて嫣然と微笑みこれまで何度も繰り返してきた通りに男を誘う。

「抱いてくださいな。思うが俛に」

女を寝台に押し倒すと、寝台に染み付いた香が鼻を突く。一時面倒な現実から頭を休められればそれでいい。

女が男を誘うことが仕事であるように、自分にとってはこれも義務でしかない。

皇帝が子を成すことは、おそらく現体制を維持したいと考える者たちには急務であろう。先代のことがあればこそ表立って言われることはないが、自分が長く後宮を空けていたとなれば万どうな事態になることは間違いない。

自分が組み敷いた女は美しいがそれだけだ。豊満な肉体も、長い髪も、ただそれだけのものではない。

そこに何らかの特別な価値を見出すことなど、自分には出来ない。ただ快楽を得るために事務的に首筋や胸に口づけを落とし、すりとした脚を撫で上げる。

「陛下……っ」

高まった女が絶るように伸ばす手を拒否して頭の上でまとめて押さえつける。

所詮は欲求を処理するためだけに身体を重ねるのであって、人の温かみなど不愉快なだけだ。

身体が熱を持つのに逆らうように、頭がやけに冷えていくのを感じる。

女が達したのを冷静に確認して、腹の上に虚しい欲望の残滓を吐き出した。

「お姫様はどんな子かな？」

シンは一人自分の執務室で、資料をめくる。両国の間に取り交わされた文書には、姫の情報は殆ど記されていない。ただ皇子と姫を取り替える旨だけが記され、膨大な資料の殆どは戦後処理や国境、中立地帯の設定などに関することばかりだ。

どちらにとつても何某かの事情があつたと見るべきか、重要なことのために紙面を費やしたと見るべきか。それはおいおい判断していくことになるだろう。

「21歳つてことは、レイと僕より4つ年下か。こんなことでもなきや、忘れ去られた存在のままではいられたのに」

これから姫はどんなに抵抗しようとも政治の中心に引き出されることになる。たとえ本人が何もしなくても、周囲がその存在を疎み利用し搾取する。

忘らるる姫君はそれをどう受け止めるのか。

大きな窓から、折れそうな程細い月が見て取れた。

その形はまるで嘲笑う人間の口の形にも見える。嘲笑う相手は一体誰なのか。

「明日は新月かも、ね……」

出来ることなら、人質の姫がレイ個人を見ることが出来る人であつてほしい。

全てを手に出来るのに何も欲しがらない、何かを欲することを忘れてしまった、孤独な皇帝。

長い間その虚空を埋めようとしてきたけれど、事情を知る自分には出来なかった。

「奇跡みたいなもんだよ……」

砂漠で花を見つけるような。その花が枯れずに生き残るような。

「でも……、ね」

そう願わずにはいられないから。

砂漠の蛹

「嘘でしょう……?」

思わず赤い口唇からこぼれた眩きは、乾いた熱とともに風が押し流した。

皇后が若くして亡くなったことは知っていた。葬儀も確か3日前に行われたはずだ。

しかしそれが自分にこのような形で関わってこようとは。

時の皇帝の第二皇妃である女は、送られてきた書状を読んで思わず眉をひそめた。

こんなときに倒れられるほどか弱くできていない自分が恨めしい。一時でも現実から逃げられれば楽なのに。

普段は強くあることを望んでいるくせに、身勝手なものだと自嘲する。

「姫様、どうかしましたか?」

「皇帝陛下からの書状よ」

そう言って一番の親友で筆頭女官であるアオに渡す。先程書状が届けられてから、常とは違う様子を心配してくれていた。

「姫様、私にはこちらの言葉は読めません」

「ああ、そうだったわね」

しゃべることは出来るのに、と続ける。祖国から私と共にやってきたこの友人は、決して読み書きを覚えようとしなかった。

それはいつか祖国に帰るのだという彼女の信念のようで、少し寂しい。

アオはいつでも帰ることが出来るし、その場合は引き止める心算は無い。ただシヨウウコは帰りたいと願うことさえない己を恥じ入り

悲しく思うだけだ。

「陛下がいらつしやるみたい。私が次の皇后ですって」

「……。……はあっ?!」

アオは叫んだとたん、あっさりと気を失った。前置きも無いあまりに突然な話に、頭がついていかなかったのだろう。

思わず苦笑せずにはいられない。きっとこれが、一般的な淑女の反応なんだろう。

「ケン、入ってきて頂戴」

鳴らされた手の音に、扉の外に控えていた衛兵が入ってくる。

「……またアオは倒れたのですか」

低い声は決して不機嫌なわけではない。それが分かるまでは苦手な相手だったが、彼もまた国を出てシヨウコに従ってくれる一人だ。その武人としての実力はもちろん、その人柄も信頼している。

何も知らなかったシヨウコに根気強く言葉を教え、様々な知識を押し付けることなく教えてくれた。幼いシヨウコには常に厳しくも尊敬できる師であった。

「申し訳ないけど、アオを長椅子に運んでもらえるかしら。私は冷たい飲み物でも貰ってくるから」

「仰せのままに。……シヨウコ様、原因はコレですか?」

ケンはアオが握った書状を指した。書状の押印は間違いなく皇帝のもの。聡いケンがそれに気が付かないはずが無い。

「読んでいいわよ。どうせ言わなきゃいけないことだし」

言い置いて部屋を出た。

人工的な緑が生い茂る中に優美な装飾に飾られた廊下を歩きながら、思考をまとめる努力を放棄する。

自分に来ることなど何も無い。与えられた役割を拒否すること

など出来るはずもないのだ。

ただ諾々と従うのみ。

「皇后か……。」

皇帝に会ったのは、華燭の日のみ。それ以来10年間、儀礼的な時候のやり取り以外は一切の接触をしていない。

時候の挨拶さえあちらは毎年同じ文面、同じ品だ。文だって当然代筆だろう。

10年という歳月で人はどれほど変わるだろうか。

10年前は皇太子だったかの人物について覚えているのは、温度を持たない赤と紅の瞳だけ。本来冷たさとは対極にある色に、触れてはならない冷たさを感じた。

その男の正妃になり、この国の皇后になる。

この十年間ですっかり見慣れた、どこまでも青い空。

祖国の空を思い出すことは、今はもうない。雨に打たれる感覚を、もう覚えていない。

わが身を嘆くことはすまい、そう決めてこの国で生きてきた。

部屋に戻るとケンが難しい顔で書状を眺めていた。その奥の長椅子にはアオが横たわっている。彼が自分に同行することになったのは、彼がリュミシャルの言葉を読み書きできるからだ。

博識であったことがこんな不幸に繋がるなど、思ってもいなかったことだろう。

わが身を嘆くことはないけれど、彼らは明らかに自分の被害者だ。「私、それを読むまで自分が第二皇妃だって忘れてたわ」

より正確に言うのなら、自分が既婚者だという感覚さえ持ってい

なかった。頭で知っていることと心で感じることはまるで別だ。

「……お戻りでしたか」

気付いていなかったらしい。武術全般に長け人の気配に敏感な彼には珍しいこともあるものだ。それほど文の内容が衝撃的だったのだから。当事者であるシヨウウコでさえ未だに半信半疑なのだから。

「驚いた…わよね？」

「ええ、流石に。押印に間違いはございませんか？」

「多分、ね。一応確認してみましようか」

冷たい茶の入った茶器を置き、机の引き出しから文箱を取り出す。繊細な金細工鍵がついたの文箱には鍵を掛けてはいない。自分と皇帝の間のやり取りには守るべき機密が存在せず、厳重な保管を要するものはすべて国で保管がなされている。

それだけの関係、それだけの信頼度。

そんな男の皇后になるのか、と一瞬適当に選び出した文を持つ手に力が入った。

「シヨウウコ様？」

「…これね。やっぱり押印は同じみたい」

僅かに皺のよった文を受け取り照らし合わせたケンが呟く。

「確かに押印は同じものですが…筆跡が大分異なるのでは？」

「うん…。多分、今回来たほうが陛下の筆でしょうね」

「……シヨウウコ様」

目を眇めたケンからつと視線を逸らす。

言いたいことは痛いほどよくわかつている。これまで軽んじられてきたという事実が明るみになってしまったのだ。故国のためにここにいるケンには決して気分のいいことではないだろう。

「軽く見られているのは私個人であって、オースキュリテという国ではないわ。大げさに騒ぎ立てるほうが見苦しいというもの」

「そうではなく…シヨウウコ様、私は貴女がそのような扱いを受ける謂れは無い、と申し上げたいのです」

悔しさのにじみ出る声音はどこまでも優しい。

「ありがとう…だから私はいつまでたつても自立できないんだわ」
際限ない甘さに溺れてしまうのではないかと思う。それぐらいケンとアオはシヨウウコに優しかった。

「十分ご立派です。これ以上強くなられては剣を捧げた意味がなくなつてしまいます」

「貴方の剣は…私はひとまず預かっただと思つてゐるわ。貴方の剣を錆付かせる心算はないの」

だから縛られること無くいつでも好きなときに国に帰つていい。依存することで束縛しないよう、これは常に自分に課してきた鎖だ。

「いかなさるおつもりですか？」

これまでに幾度となく繰り返されてきた会話を打ち切り、ケンは単刀直入にシヨウウコに問を投げかける。乏しい中にも複雑な表情を浮かべていることがわかるくらいには、長い付き合いだ。

「どうしようもないわねえ」

我ながらあつげらんかんとした声が出た。

杯にお茶を注ぎケンに渡すと、アオの額に水で絞ったタオルを乗せた。これはアオが倒れたときの儀式のようなもので、なくてもいずれ目を覚ますことはわかつてゐる。

「拒否なんか許されないわ。陛下にしたつて私を選んだわけではなく、それが適当だと判断されただけでしよう。」

それが分かつてゐる以上、こちらだけ義務を放棄するわけにはいかないもの」

「……。不本意では、ありませんか」

搾り出したようなケンの声に、苦笑する。

「大丈夫よ。私は10年前ほど弱くは無いから。ね？」

安心しなさい、とそう言うことが出来た自分に内心驚いた。なるほど、少しは強くなつたらしい。

「明日陛下がいらつしやるから、詳しい話はその時だけねど。多分王宮に移ることになるわね。貴方はどうする？」

本音を言えば、一緒に来てほしい。でも、彼のことを尊重したい。「私は姫様とご一緒にします!!」

いつの間にか目を覚ましていたアオが叫んだ。

「私も一緒にします。お一人には、いたしません」

不覚にも、二人の言葉に声が詰まる。

ありがとう、と言ってしまうそうになるがとどめることが出来た。言ってしまうえば、二人を頼っていることが分かってしまう。いつかオースキュリテに帰る二人の足かせになることはしたくない。

「では…、そのように」

そう言ってお茶を一口流し込む。一緒に高ぶった感情も、冷たいお茶が冷ましてくれた。

「姫様、街に出ましょう!」

アオが顔をほころばせて提案する。

「だって王宮に行くことになるかも知れないのでしょうか?そしたら気楽に外になんか出れませんよ!ね?」

「お前はまた…っ!シヨウコ様をダシにするな、自分が遊びたいだけではないかっ!」

「ええ〜!ケンはいつつもそうやって怒ってばかり。行きましょう、姫様。きっと楽しいですよ」

二人の会話につい笑みがこぼれる。

アオの意図は明らかだ。励まそうとしてくれている。

ケンも分かっているから、行くなとは言わない。

「そうね、行きましょうか!いいでしょう、ケン」

それでもまたしても押し負けたという思いが強いのだろう。その呟きはどこか疲れている。

「…。お供いたします…。」
心なしか下がったたくましい肩を、ポンと叩いた。

街はいつもの活気に包まれていた。シヨウコがこの国にきて驚いたことに一つが、これである。

この国は、王族が崩御したとしても、たとえそれが皇帝であったとしても経済が止まることはない。いつも通りの取引が行われ、市場が活気を失うことはない。

国民にとって皇帝がどのような存在であるのか未だにシヨウコは掴み切れないでいるが、オースキュリテとは違った捉えられ方をしていることは間違いない。

シヨウコやアオの風貌は、この国の人を持たない色だ。黒い髪に黒い瞳は雑踏の中でもはっきりと目立つらしく、声をかけてくる人は少なくない。

「姫さん、美味しい果物だよ！」

「焼きたてのパン、持っていきな！」

「シヨウコ様、俺を助けると思っで、コレ買っでくれよ」

いつの間にか顔なじみの人がたくさん出来た。果物屋の若旦那、いつも焼きたてをくれるパン屋の奥さん。

彼らはシヨウコをオースキュリテ出身の姫と知って、声をかけてくれる。

最初は不思議で仕方が無かった。少し前まで直接戦争こそしていなかったが、覇権を巡る対立をし幾度と無く代理戦争をしていた国の皇族など、どうして迎えてくれるのか。

もちろんそうでない人もいたけれど、それほど多くはなかった。

傷つくこともあったが、それ以上に温かった。

「姫さんの国と貿易やって、あたしたちの生活はずっとよくなったんだよ。それはこの国に来た姫さんと、姫さんの国に行った王子様のおかげだろ。感謝してるんだよ」

そう言って焼きたてのパンを渡してくれた。あの子のときのことをきくと生涯忘れない。

あのまま故国にいれば、宮の奥深く御簾に遮られた世界の中で生きていただろう。生涯外の風を見ることなく、安全で傷つかないけれど変化の無い中で生きていたはず。

街の中を歩くことなど考えられなかった。

おそらく自分が存在している意味など考えることも無く、ただ存在していたに違いない。

リュミシャルに来て失ったものもある。しかし得たものもある。

ドーブの街の人たちの笑顔もその一つ。

自分が海を渡ってきた意味は、確かにここにあったのだと教えられた。

砂漠の蛹（後書き）

お姫様、登場です。皇帝との対面はもう少し後になる予定です。助走段階のお話ですが、感想などいただけるととても嬉しく喜びます。

蛹のオアシス

「姫様、どこに行きましょう？ちなみに私は、新しく出来たお菓子屋さんに行きたいです！美味しい揚げ菓子があるって聞いたんですよ！！」

「それも素敵だけど、まずは広場に行きましょう」

「あう。広場にお菓子を持っていくってというのはどうですか？」

「アオ、シヨウコ様に従え」

「お菓子屋さんが先でもいいわよ。但し、アオが全員分買ってくれるのよね？」

「はうあっ！姫様の意地悪！」

「アオッ！！」

ドーブは帝都から半日の、オアシスに栄えた街だ。決して大きな規模の街ではないが、首都に入る前に旅商人が休む街であり活気に溢れている。

この街の生命線であるオアシスは商業地区からは少し離れた場所にある。水が貴重なこの国では、オアシスを汚すことがないように多少の不便を我慢しているのだ。

これは「水の国」と言われるオースキュリテからきたシヨウコには、意外な感覚だった。オースキュリテではしばしば水は家を流し田畑の実りを脅かす脅威だった。雨を降らせる雲は、植物の成長を阻害した。

シヨウコはこの国に来て初めて、水は本当の意味で生命の源泉であると感じたのだ。

「あ、お姫様だ！」

「アオちゃんさんもいる」

「こんにちわ！！」

広場ではいつも子どもたちが遊んでいる。彼らといつも本気でや

りあうアオは、いつのまにか『アオちゃんさん』と年上扱いされているのかされていないのか判別つかない呼び方をされるようになってた。ケンはその口数の少なさと武人の体格からか、いささか子どもたちからは敬遠されている。

「こんにちわ、今日も暑いわね」

「ね、お姫様、いつもの弾いて！」

「あゝ。ごめんなさい、今日は忘れてきちゃった」

シヨウコはここに来るときに、よく豎琴を持ってきていた。どちらかと言うと宮廷付きの詩人が使うような楽器なので、子どもたちには珍しかったらしく、弾いて弾いてとねだられたのだ。

シヨウコもこの街に来てから初めて扱った楽器だが、「琴が縦になったと思えばいい」という妙な理屈と共に、教則本と格闘しながら独学で練習を始めたものだ。いつの間にかそれなりの腕前になっていた。

不満を口にする子どもたちをケンが軽く見ると、とたんに静かになった。ケンにとっては軽く見たでも子どもたちにしたら睨まれたに分類される。

「じゃあ、お話して。水の国のお話」

「王子様とお姫様のお話にしてね。王子様がお城を追い出されて、遠いところに着いた続き」

「違うよ、強い人が剣で草を切って切って切りまくって火事を食い止めた話だよ！」

他の子どもも参入して、今度は話の内容を巡って喧嘩が始まった。喧嘩と言っても微笑ましい物だ。ケンはシヨウコが巻き込まれない限り静観している。

「じゃあ！」

パンツとアオが大きく手をたたく。

「私がオースキュリテの怖いお話を、してあげよう！」
びくつと子どもたちが固まる。

『アオの怖い話』それは子どもたちに一番人気かつ最も評判の悪い

伝家の宝刀である。

さんと降り注ぐ太陽の下でも背筋が凍るのだから、夜に聞いたらおして知るべし。シヨウコもかつて散々泣かされた経験がある。「うそつきなお人形の話でいいかしら？」

こくこくと頷く様子が可愛らしい。きつともうすぐ会えなくなるけれど、遠くにいてもこの存在のために出来ることがあるだ。

きつと、今よりもたくさん。

子どもたちと別れ、商業区画に戻ってきた。

「姫様、今度こそお菓子屋さんに行きましょう！」

「アオはお菓子屋さんに行つて頂戴。ついでに飲み物も買つて、先に戻つていてくれる？」

「何ですか？一緒に行きましょう？」

「お金は私が出すから。私はいつものお店に行つて来るわ。アオは興味ないでしょう？」

分かりましたと軽い足取りでアオは雑踏に消えていった。あれではアオのほうか帰りが遅いかもれない。本人に自覚は無くても、あの底抜けの明るさには幾度と無く救われて来た。

「ケン是用事が無かつたら私に付き合つてほしいのだけれど？」

「お供いたします、シヨウコ様」

二人は並んで歩き出す。三人でいるときとは違い、二人でいるときケンが立つ位置はほんの前になってシヨウコに並ぶ。もしかしたら気のせいかと思うくらいではあるけれど。

「こんにちは、ご店主。お久しぶりです」

シヨウコが訪ねたのは、この街で一番豊富な品揃えの書店だ。と
いっても娯楽本は殆ど無く、大部分は読む人が限定される学術書の
類だ。並んだ背表紙は独特の威圧感を放っている。

「また来たのかい、お姫さん。何度も言うがあんたが読むような本
は置いとらんよ」

店主のいつもの台詞に苦笑する。ちなみにケンは初めてこの店を
訪ねたときに店主と喧嘩して以来、奥に入ろうとはしなくなった。
今も中を窺うことが出来る位置で鋭い眼光を放っている。

「まったく、あんたが法律だの経済だの。拳句政治だ。そんなもの
一体どこで使う必要があるんだか分からんよ」

ぶつぶつ言いながらどんどん本を積み上げていく。

シヨウコが読むべき本など無いといいながらも、この店主はいつ
も目ぼしい本を紹介し、希望すれば希少価値の高いものも探してき
てくれた。

「他の本も読んでいますよ。前は子どもたちに物語の読み聞かせを
したんですから」

「あなたの言う『他の本』は宗教だの地理学だのそんなものだ。ど
うせその読み聞かせとやらも、小難しい話で評判悪かったじゃろ」
その通りなので何も言えないのが辛いところだ。

「今回はこんなもんじゃな。後は勝手に選べ」

「いえ、全部いただきます。あと、いままで保留にしていた本も全
て」

店主は片眉を上げてシヨウコをみた。

「へえ、そりゃあまた。わしは国外に貴重な書物が大量に流出する
心配をするべきかの？」

「今度はいつ来られるか分からないので。とりあえず、持てる分だ
け持って行きます。後は今日中に取りに来ますから」

「……。帝都に、行くんじゃろ？」

否定も肯定もしない。曖昧に笑うにとどめておく。

この店主は皮肉屋でとても鋭いから、下手に言い訳をすべきでは

ない。

代金を渡して軽く頭を下げる。店を出ようとすると後ろから不機嫌な声がかかった。

「後でわしが届けてやるよ。途中でちよるまかされてこっちに責任転嫁されちゃたまらんからな」

「じゃあ、よろしくお願いします」

それだけ言っただけで店を出た。

なんて分かりにくい餞別だろう。でも、最上級の餞だ。

「ねえ、ケン」

「はい」

「私は、幸せね」

町の人に受け入れられて、子どもたちはなついてくれた。別れを惜しんでくれる人がいる。

「シヨウコ様」

「何かしら？」

「今回の件、拒否は出来ませんか？」

「しないわ」

出来る出来ないではなく、しない。

まっすぐにケンを見上げる。ケンは珍しく、何か迷っているような瞳をしていた。

「私は自分で選ぶのよ。押し付けられるのではなく、自分で選ぶの」

無理やりにも、笑ってみせる。ケンは何故だか泣きそうな顔をしてた。

屋敷に戻るとやっぱりアオはまだ帰っていないかった。予想通りとケンがつぶやき、それを聞いたシヨウコは随分の間笑っていた。

しばらくして帰ってきたアオと、お茶を飲んでお菓子をつまむ。とてつもなく大量に買ってきたお菓子は皆に配った。人の財布を使うアオは、とんでもなく気前がいい。

本を運んでくれた店主に渡そうと思ったら、もう帰った後だった。素直じゃないなあとひとしきり皆で笑い合った。

そんなことをして過ごした一日。

深夜、シヨウコは窓から広がる砂漠を見た。こっちへおいでと誘われているようで、夜の砂漠は何度見ても気分がざわめく。

「10年ぶりか……」

状況は変わった。

自分は変わっただろうか。

相手は変わったのだろうか。

小さなつぶやきは砂漠の砂に飲み込まれていった。

蛹のオアシス（後書き）

次あたり、10年ぶりの再会の予定です。甘いものには・・・なり
ません。

ご感想などいただけると励みになります。

物語の胎動

『砂漠の真珠』

そう異名を取るほど、ドープは美しい街だ。

オアシスに栄えた街なのだが、街の外からはそれをうかがい知ることが出来ない。街全体が白い壁で囲われている。

貴族や裕福な商人が良く訪れるので街に入るための検問が厳しく、治安の良さは帝都以上と言われている。高級住宅街は更に高い塀で囲まれており、立ち入りには厳格な身分審査が必要とされる。

しかし吟遊詩人が謳うこの街は、決して美しいだけの街ではない。帝都から程近い砂漠の街の白壁は、変事になれば『貴婦人のベール』と呼ばれる美しい塀を強固な砦に変え、要塞の役割を担うのだ。

幸いにして時の皇帝が街に塀を築いて以来、その本来機能が使われたことは無く、多くの人はそのことを知らずに暮らしている。

そんなドープの高級住宅街の中でも群を抜いた一等地に建つドープの離宮は、この街を象徴する美しい城だ。『真珠』と呼ばれる所には、街の外から見たときにこの城の塔の屋根が描く優雅な曲線にある。

貴人が暮らす館の朝は早い。

主人が起きる前に使用人は全員起床、全ての準備を整えて快適な一日の始まりを提供する。

今は第二皇妃が暮らす館で働く人間の数は、決して多くはない。

定期的に訪れる庭師などを除いて、この館に使える者は両の指で足

りるほどだ。

今日もアオはいつものように、階段の上り口を守る衛兵に挨拶し主人の目覚めを促すべく塔の最上部へと続く階段を上る。

「おはようございます、姫様。お目覚めのお時間ですよ。」

窓を開けると、商業区の一画でも朝の競りが始まったらしく賑やかさを僅かに伝えてくる。風と同時に窓から流れ込んでくるのは朝独特の人々の生活の活気だ。

「……。…うん」

蚊帳の中の寝台で、もぞもぞと動く気配がする。

「今日もいいお天気ですよ。」

「……」

シヨウコは朝が苦手だ。もっとも本人は隠しきれているつもりでいるので、アオはそれを指摘するつもりはまったく無い。

寝台の中でシヨウコがゆっくりと身体を起こし、腕や背中、首を伸ばしていく。その仕草はまるで眠りから起きた猫のようだ。

その様子を観察するのは、アオの密かな楽しみだ。

この国に来てから、自分の主人は「隙が無い」ことを自分に課している。親しみやすい一面は、そう作り出したもの。

何が変わったと断言できるわけではないが、何かが変わったことは明らかだ。そんな中でも流石に朝は別物らしく、この時間のシヨウコは限りなく素に近いと思う。

ゆっくりと髪をかき上げれば、覚醒完了だ。

「おはよう、アオ」

かすれた声を聞くことが出来るのは今のところアオだけの特権だ。

「おはようございます、姫様。お召しものです」

寝台から出てきたシヨウコが、服に手を伸ばしかけた手を止めた。

「今日は、こちらではないわ」

「？」

「今日は陛下がいらっしやるもの。オースキュリテの服では失礼よ。リュミシャルのものを着なければ」

「…忘れてました。ですがリュミシャルの礼服ですと…」
アオが言いかけたことを察知して、思わずシヨウコも顔をしかめた。

「とりあえず…、こちらの衣装に着替えるのは陛下がいらっしゃる直前にしましょうか…」

そうつぶやいていつものように着替えをはじめたシヨウコに、アオはこくこくと頷いた。

「おはようございます、皇妃さま」

「おはようございます」

居間に行くときも今日も食事の準備が整っていた。

「おはよう、少し寝坊してしまっただわね」

いえいえ、とこの城の一切を取り仕切る恵比寿顔（といっても彼には通じないだろうが）の老人がシヨウコを席に促した。彼はもともと王宮の内務に携わっていたが、引退してドープで暇をもてあましていたときにシヨウコの世話を引き受けることになった。それから10年の付き合いだ。

「あのね、デデ」

シヨウコは努めてにっこりと微笑みかけた。

「はい、なんででしょうか」

「驚かないで聞いてくれるかしら。皆も」

その言葉に仕事をしていた者も手を止めた。その様子をいぶかしんで料理人までも顔をのぞかせる。結局殆どの者が揃ったところで、シヨウコは爆弾を投下した。

「今日、ここに、陛下が、いらっしゃるの」

シヨウコはしつこいほどに言葉を文節で区切った。

アオとケン以外の者が、言葉を消化するまで数秒。

その短い間にアオは耳をふさぎ、ケンも顔を顔を背けて目を閉じた。

「……はああああっ?!」「」

「皇妃様?」

「ご冗談を!」

「……!」「」

ついに着火した喧騒の中、いち早く自分を取り戻したのは恵比寿顔のデデだった。

「皇妃様、それは……」

「本当よ」

「いつ、ご連絡を受けられました?」

「昨日のお昼ごろかしら」

周りから、何故もつと早くなどの叫び声上がる。あまりの驚きに、礼儀が少しばかり吹き飛んでいるようだ。

「何故、そのときに教えてくださらなかったのですか」

「昨日でも今日でも、出来るおもてなしに変わりは無いもの。事前に騒がせたくなかったのよ。特別なことをする必要は無いわ。館は綺麗だしお料理はいつも美味しいもの」

その言葉に女官と料理係りが落ち着きを取り戻した。

「することは陛下のお部屋を整えるくらいよ。陛下の書状にも気を使うなと書いてあったし」

書いてあったのは、「大げさな迎えは不要」だったが、このくらいは解釈の範囲内だ。

「お越しは今日の午後ですって。そのつもりで動いて頂戴」

その言葉にめいめいが仕事に戻った。残ったのはデデだけだ。

「皇妃様」

「……あなたにだけは、申し訳ないわね」

「いいのです。昨日分かっていれば私も含めて皆が慌てるだけだったでしょう。ここまで差し迫っていれば肝も据わろうというものです」

やっぱり少しは怒っているらしい。シヨウコは苦笑するしかない。「デデ、門番に伝えてもらえるかしら。軍隊用の大門を開けないと」「陛下は軍隊など連れていらっしやいませんよ」「何故？皇帝陛下の御幸でしょう」「多くて5人ですよ。私は幼い頃の陛下を知っていますが、そういうお方です。料理の者にもその人数を伝えます」「やけに自信ありげなデデの様子に、シヨウコは首を傾げるばかりだった。

デデの予想は的中していた。皇帝の共は4名、皇帝本人を含めてたった5名の皇帝の御幸にしては異常な人数だった。

ドーブまでの道は巨額の予算を投じて前皇帝が整備したものだ。そのおかげで大分移動が楽になったことは事実だ。

「レイ、このさきの集落で馬を変えるよ」

「わかった」

「しつつかし、何でわざわざ馬。ラクダでいいでしょうに」

「時間の無駄だ。あれ行くなら私は宮殿で政務でもしていたほうがましだな」

「わがままなことを。レイが行かなきゃお姫様に失礼でしょうが」シンの口調はかなり砕けたものになっている。なんだかんだいっつてもシンとしてもラクダは遠慮したいところなのだろう。慣れてしまえば馬は意思の疎通が容易だし、手練になればそれなりの速度でも会話くらいは出来る。

「離宮はきつと昨日から大騒ぎだよ。いきなり皇帝が来るーだもんね。何でもっと早く伝えなかつたんだよ」

「……逃げる時間を与えろ?」

「逃げたりなんかしないと。そこまで愚かなら10年も大人しくしていない」

「どうだかな……」

オースキュリテの姫がどう動くのかは分からないが、可能性が低くても面倒は避けたい。それだけなのだが、どうやらシンは気に食わないらしい。

「愚かだろうがそうでなかつが、選択肢を与えるつもりは無い。今回のことは決定事項だからな」

馬の脇を締めるとすつと速度が上がった。

風で舞い上がる砂埃を割って駆け抜けた。

二人の再会まであと少し。

物語が、動き出す。

流れ者の帰還

ドーブの街に、皇帝の御幸が告げられたのは市場の朝の忙しさがひと段落着いた頃合だった。

皇妃の紋章がついた籠を持った者が、街中で内容を読み上げながら通達書の写しを配布していく。比較的富裕層が多く識字率が高いこの街では有用で、正しい情報が伝わるようにと用いられてきたシステムだが、以前は公文書を騙った偽の情報も少なくなかった。陽動や一部の商人の利益のために悪用され、信頼性が失われ始めていたのは事実だ。

その状況を見て、紋章を用いるように言ったのはシヨウコだ。紋章の管理は徹底しなければならぬが、複雑で精緻な紋章を偽造することは容易くはない。

もちろん初めの頃は紋章の使用を躊躇う者や軽率だと非難する者もいたが、頑として譲らない少女に結局は押し切られる形になり、現在に至る。

初めてシヨウコに会ったのは、彼女がこの街に来た10年前。まだたった11歳の皇太子妃だった。街の執行官長の父に連れられて対面した彼女は、11歳という年齢以上に幼く小さな少女だった。リュミシャル風のもものは全て拒絶し、時に激しい拒否反応を示していた。

当時は自分も幼かったために、それがシヨウコに出来た唯一の護身だと気付けなかった。今考えればなんて痛々しい姿だろうか。

その彼女が離宮の外へ目を向け、自分から手を伸ばし始めたのはいつからだっただろうか。

「こんにちは、シヨウコちゃん」

女官に促されて久しぶりに入ったその部屋は、いつもと同じ白檀の香りがする。

窓辺の彼女がゆっくりと振り返る。そこにいるのは21歳の臍たけた女性だ。

「相変わらず、元気そうで何より。久しぶりね、ロイ」
内気だった少女は、何とも艶やかに微笑むようになった。

「街の人は、混乱していませんよね？」

質問ではなく確認を向けられてロイは苦笑するばかりだ。

確かに市井の人々に混乱はない。街の人々にとっては皇帝の御幸も貴族が別荘を訪れるのと大差ないのだ。その上シヨウコが気楽に街に出てくるおかげで、この街の人々は皇族や貴族に慣れているような気がする。

「街の人々はいつもどおりだと思つよ、シヨウコちゃん。まあ久々に帰ってきたからわけだから、断言は出来ないけどね。でも庁舎は上へ下への大騒動だったな。デデ様がいらっしやらなかったら文官が何人倒れたか分からない」

「それは見物だったわね」

「皇妃様は冷たいなあ。急務に対応した執務官に労いの言葉をいただけませんか？」

「あなたが来るまでに、この街の優秀な執務官たちが5人私のところにきたの。内容は判で押したように同じ」皇妃様の行動は軽率が過ぎるように思われるという意見がございます」よ

疲労感をごまかすように、努めて拗ねたような声で言う。

「私だつて『いかがいたしましょう』の話なら聞くわ。でも普段は何もしない人たちが、こんなときに私への不満を言いに来るのよ。しかも自分ではなく他の誰かが言っていたという形で。他にすることがないのかしら」

「……それは…、酷いね」

「でしよう？酷いのよ。この街は人手不足なのに、優秀な執務官候

補は数年前から街を出て好き勝手にしているの」

「耳が痛いね。でも僕は優秀なんかじゃない。遊び歩いてるだけの出来ない次男坊だ」

「謙遜も過ぎると見苦しいわよ。でも私はあなたの生き方に容喩出来る立場じゃないわね」

彼女に対して本音を吐露してしまうことは出来ない。

だからだろうか。いつの間にか笑って誤魔化すことが多くなり、彼女はそれを許すようになった。

「シヨウコちゃんはレイに会うのいつ以来になる？」

「…レイ？」

「……。」

シヨウコの視線はふらふらと宙をさまよっていたが、ようやく思いたったらしい。

「皇帝陛下ね！お会いするのは10年ぶりよ」

「……一度も、会っていないの？どうして……」

シヨウコはそれには答えず、ふわりと笑って首を傾げた。

一拍遅れて、ぬばたまの黒がさらりと流れた。

その表情と仕草はそれ以上の問を重ねることを阻む力を持っていた。

「ロイは陛下とは親しいのね」

「まあね。僕とシンはレイの側近候補として一緒に育てられた時期があったからね」

僕はそこから落ちこぼれたんだよ、と続けた。

「シン…、とはどなたかしら」

「あゝ、あいつはね。うん、会えば分かるよ。きっと今日もレイについて来るから」

「意味深な言い方ね。女性に嫌われそう」

「いえいえ、僕になびかない女の子はシヨウコちゃんくらいだよ。それはそうとさ、シヨウコちゃん」

「何かしら？」

「僕も対面に同席させてよ」

ロイが退席した部屋で、シヨウコはゆっくりと息を吐き出した。

「姫様、お疲れですか？」

「大丈夫。ロイと久々に話が出来て楽しかったわ」

「皇帝陛下のお迎えの準備は整いました。庁舎のほうは…」

「大丈夫よ、ロイがいるもの。私もそろそろ準備を」

軽く叩かれた手の音に反応して、リュミシャルの女官が部屋に入ってきた。

そうしてシヨウコは、華燭の日以来初めてオースキュリテの服を脱ぎリュミシャルの正装に袖を通した。

肌の露出が殆ど無いオースキュリテの服とは異なり、リュミシャルの正装は胸元や腕が露になってしまふ。加えてその長いドレスは柔らかな生地で作られていて、動くたびに身体の線が強調されるような気がして落ち着かない。

加普段は殆どつけない装飾品を首や腕、足首に付けて髪も複雑な形に結い上げる。仕上げにいつもより濃く化粧を施して、皇妃の冠を載せて手には権威を示す杖を持つ。

長い時間をかけて仕度が済んだとき、街の入り口で皇帝の到着を

知らせる華やかな音色が鳴り響いた。

様々な思惑絡んだ世界で、物語は産声を上げる。

一旦世に出てしまえば、それは人に褒められ貶されていくうちに
いつしか姿を変えるだろう。それを止める術は無い。

作り手は創造主。

作り手は傍観者。

演じ手にはなりえない。

流れ者の帰還（後書き）

策略に揺れる

シヨウコは離宮の謁見室で、皇帝の訪れを待っていた。離宮で働く人間の多くとロイもその場に控えている。

意識過剰だとは分かっているが、普段は隠されてさらすことの無い首筋や腕に、視線が突き刺さるようであったまれない。

オースキュリテでは高貴な女性が家族や極親しい人以外に顔を見せることさえ、はしたないことだと考えられている。普段は幾重にも重ねた服の下に隠された肌が晒されることなど、無いに等しい。

流石に10年で顔を隠す癖は消えた。隠しても隠さなくてもシヨウコの外見はこの国では目立ち過ぎるのだ。

しかし国にいることの比べて遥かに軽装になったとはいえ、肌が晒されることにはいまだ強い抵抗がある。

奇妙な沈黙が支配するその空間の中で、シヨウコは久々の息苦しさを感じて、細く息を吐き出した。

「失礼します」

部屋にいる者全てが、後ろを振り返った。

開いた扉は、皇帝が入ってくるはずの上座ではなく、下座のもの。入室した人物は皆の視線にたじろいだ様子だったが、シヨウコに礼をとり口上を述べた。

「皇妃様にはご機嫌麗しゅうございます。私は今回陛下の御幸に随行させていただく者です。陛下からのご伝言をお預かりして参りました」

場の空気が張り詰める。皇帝は先ほど街に入り、ここに来るはずではなかったのか？

「……。ご苦勞。して、用件は？」

「はっ。陛下におかれましては、ドープの執務官方の歓待を受けられております。こちらへいらっしゃるのはその後となる旨、ご伝達

に参った次第です」

「……っ！」

「冗談だろ、そんなこと！」
皆が驚きに目を見張る中、ロイが非難の声を上げた。それに反応するようには、ざわめきが広がっていく。

頭を殴られたような衝撃。けれど、あのころに比べれば些細なものだ。

あの生き地獄に比べれば。

片手を上げて静寂を促し、改めて使者に向き直った。

「……わかりました。下がちなさい」

その声がかすかに震えたことが、ひどく情けなかった。

使者が退室した後の謁見室は、重い沈黙に包まれた。

それにしてもこれほどに、軽んじられるとは思わなかった。

特別な扱いをされたいと望むわけではない。だが自分の存在は皇帝の中で、執務官よりも後回しにされる程度のものだと突きつけられた。

このような形で突きつけられ、皆の前で蔑まれるとは。

誰もがその沈黙を破ることをためらい、部屋の中にいる主人に目を向ける。

何かを言わなければいけないのは分かっている。

それなのに言葉を紡ごうとした唇が、凍ったように動かない。

この10年で強くなったつもりだったが、思いのほか優しい日常に慣れていたのか。

「シヨウコ様、お部屋にお戻りください」

思わずすすがるように声の主を見る。ケンがゆっくりと近づき、シヨウコの手を取って退室を促した。指先が白くなるほど力が込められた手を、ゆっくりと包む。

「アオ、シヨウコ様をお部屋にお連れしろ」

その声に反応してアオが歩み寄り、むき出しにされたシヨウコの肩にシヨールをかけた。

案ずる視線に励まされ、何とか気持ちを落ち着けることに成功した。目を閉じて、ゆっくりと言葉を紡ぐ。その声はもう震えてはいなかった。

「部屋に戻ります。皆も下がりなさい」

「皇妃様！」

部屋を出る直前に、後ろから声がかけられた。

「陛下は決して、あのようなお方では……！」

「……デデ、分かっているわ」

何が分かっているのか、本当はそれが分からない。ただそう言わなければならないと思っただけだ。

「きつとなにか事情があるのです！どうぞご理解を！」

「……。陛下がいらっしゃったら、知らせて頂戴」

そのまま振り返らずに部屋を出た。

デデが悪いわけではない。彼は皇帝と皇妃の仲を案じてくれているだけだ。

しかしシヨウコにも、譲れない一線はあるのだ。

皆が散った謁見室に残ったのは、ケンとロイの二人だけだった。

「……やってくれましたね」

「何のことかな？ケン」

「ふざけないでください。庁舎に歓待の指示を出したのは貴方ですよ。」

ケンの言葉に、ロイがやれやれと息を吐いて本来皇帝のために用意された椅子に腰掛けた。

「君は少し聡すぎるね」

「貴方が何をやってても、それは俺には関係ない。但し、シヨウコ様を傷つけることは許せない！」

武人としてのケンは非常に優秀だ。そのケンが発する殺気を、ロイは正面から受けて歪んだ笑みを浮かべる。

「頼もしいね。けど君に何が出来る？君の言うとおり、僕はシヨウコちゃんに傷付けてもらいたいんだ。傷ついて、レイを憎んで、嫌悪してほしい。…決して愛など持たないように、ね」

「シヨウコ様の、不幸を望むと？」

「まさか！幸せを望むよ。誰よりもね」

この男がシヨウコに向けるのは、好意に他ならない。だからこそシヨウコはその歪みに気が付けない。この狡猾な男は、決してシヨウコに悟らせないだろう。

「貴方の思いは歪んでいます」

唾棄すべき思いを抱えて、この男はその歪みさえも肯定する。

「知ってるさ。でもどうせレイはシヨウコちゃんを愛さない。ならば僕が彼女を思うことを、どうしてためらう必要がある？それに」

歪んだ笑みが深くなり、残忍な色を帯びていく。

「君にだけは、言われたくないね」

口調は全く変わらないのに、その一言は深く突き刺さった。

その日、皇帝と皇妃が10年ぶりの再会を果たしたのは夜も深まった時刻だった。

当初予定していた歓待も無く、穏やかな空気もそこには無く。その場を支配するのは、絶対的な静寂ばかり。

シヨウコがふと微笑んだ。

それは名工が手がけた宝石細工のような、触れることを躊躇う微笑み。人から賞賛される為だけにある、決して手に入らない孤高の至宝。

「お久しゅうございます、皇帝陛下」
完璧な作法で礼をとる。

砂漠の夜のような黒髪が、オースキュリテの衣装から流れて揺れた。

それぞれの思い

「皇帝陛下がお呼びです。ご足労願えますか？」

皇帝は街に到着した日、離宮に入る前に庁舎の歓待を受け、晩餐の時刻になっても離宮へは来なかった。

あちらにも様々事情があるのかもしれないが、せめて到着時刻を知られるくらいの心遣いがあればとシヨウコは内心憤慨した。皇帝のために腕を振るって食事を用意した者たちの悲しそうな残念そうな顔を見るのは辛い。自分を軽んじるのは仕方が無いが、それで周りの者たちまで軽く扱うことが許されるだろうか。

そんなわけでシヨウコは皇帝の到着を出迎えなかった。

こちらに礼を尽くさぬ相手に、礼を尽くすつもりは無い。今シヨウコがかの人物を重んじるとすれば、皇帝という立場だけだ。

皇帝の伝言が伝えられたのは、夜も深まりそろそろ休もうかとしていた時だった。シヨウコよりいくつか年上である使者は、オースキュリテの人間が珍しいのか随分不躰にシヨウコを観察する。

「姫様はもうお休みになります。それに今からご対面の準備は出来ません。明日ということにしてくださいませんか？」

アオは使者に向かって、抗議とも取れる返答をした。

「謁見の準備は不要です。皇帝陛下は私室に皇妃様をお呼びです」
「……！」

隣でアオが息を呑むのがわかった。夜に男が女を部屋に呼ぶというところが、どういふことか分からないほど子どもではない。

仮に他意はなかったとしても、誤解されても文句は言えないだろ

う。

「10年前に結婚をしておいて今更かもしれないが、その10年の内実を考えればあまりに無礼ではなかるうか。」

「分かりました。陛下にお会いします」

「但し、と続ける。」

「謁見室でお待ちいたします。そうお伝えしてください」

「そう言いきったシヨウウコに使者は少々驚きを隠せない表情で、しかしニヤリと笑って退室していった。」

「一体なんなんでしょうか、今の男！あれが皇帝付きの人間なんでしょうか？」

「アオは憤懣やるかたないといった様子だ。」

「それにこんな時刻！こんな時刻に私室に來いだなんて！！いくら皇帝陛下でも、いえ皇帝陛下だからこそ憤むべきですよ」

「姫様も突っぱねてやればいいのにー！と叫びながら、アオはシヨウウコの服を調べていく。」

「シヨウウコ様、相手に非がありますよ。こんな時にリュミシャルの服を着て敬意を示す必要なんてありません。それに、確かにあの男は『準備の必要は無い』って言いました！」

「アオのあまりの迫力に少々気圧されたが、」

「あのね、アオ」

「はい、姫様」

「私も同じことを考えていたわ」

「いたずらを企む子どものように笑いあった。」

「簡単に仕度を済ませて、最後に手に檜扇ひようせんを持つ。」

「ご一緒いたしますか？」

「いいえ、一人でお会いするわ」

「そうですか、では」

「にやりと笑い、アオが珍しく正式な礼をとる。」

「御武運を、姫様」

「シヨウコ様、どちらに行かれますか？」

部屋を出ると、警備のために控えていたケンが心配そうに訪ねてくる。

「謁見室に」

お送りしますと横を歩き出したケンの顔には、こんな時間に何故という疑問が浮かんでいる。

「対決よ」

「は？」

「負けないから、大丈夫」

微笑むシヨウコに、ケンは訳が分からないながらも御武運をと返して、謁見室に入る背中を見送った。

「なかなか面白いお姫様だったよ」

使者としてシヨウコの部屋に赴いたシンレットは、たいそう愉快だと言うように笑う。

本来なら大臣職にある彼の仕事ではないが、本人たつての希望の裏には相手の観察という思惑があったようだ。

「それで、オースキュリテの姫は応じたのか？」

非常識な時間ではあるが、面倒ごとを明日にまで持ち越すのは避けたい。こちらとしても短くは無い距離の移動と突然の官舎での歓

待て疲れていないわけではない。出来れば後顧の憂い無くゆつくりと今日は休みたかった。

それに異国の姫を試したいという思いがあったことも確かだ。

「応じるには応じたけど、この部屋には来ない。『謁見室でお待ちいたします』だってさ」

初めてレイヴスが関心を示した。

「皇帝に、注文をつけてきたか」

意識して口元に笑みを浮かべる。

不快ではなく、かといって愉快でもない。それは相手に対する純粹な興味。

「まあなんか怒ってるみたいだったしね。一筋縄ではいかない、かな？」

「それは会って確かめる。……いずれにせよ、こちらの要求を受け入れさせることに変わりは無いが」

グラスの酒を飲み干し、席を立つ。

「僕も一緒に行くべきかな？」

「いらん。そんな暇があったら溜まった仕事を片付けろ」

それが嫌なんだよなーと言いながらも書類に向き合うシンレットを尻目に、部屋を出た。

付いてこようとする衛兵を身振りで制し、一人歩き出す。

10年前の印象など、ひどくおぼろげだ。覚えているのはオースキュリテの民特有の黒い髪と黒い瞳。青白い顔と震える矮躯に拙い言葉。

「さて、どう変わったものか」

扱いやすい人形なら問題は無い。着飾ることだけが楽しみめの女でもない。どんなに愚かであっても、こちらに齒向かうことさえしなければ。

しかしシンは『面白い』と表現した。一筋縄ではいかない、とも。その真意はどこにあるのか。

かくして二人は対面を果たした。

当初予定していた歓待も無く、穏やかな空気もそこには無く。他に誰もいない中、深夜の謁見室で赤と紅の瞳と、漆黒の瞳が向き合う。

その場を支配するのは、絶対的な静寂ばかり。

シヨウコがふと微笑む。

それは名工が手がけた宝石細工のような、触れることを躊躇う微笑み。人から賞賛される為だけにある、決して手に入らない孤高の至宝。

「お久しゅうございます、皇帝陛下」

皇帝という立場に最大級の敬意を、個人としての振る舞いに静かな侮蔑をこめて、シヨウコは完璧な作法で礼をとる。

砂漠の夜のような黒髪が、オースキュリテの衣装から流れて揺れた。

それぞれの思い（後書き）

『ごういう経緯でシヨウコさんは不機嫌なものでした』の話でした。お互いに自分の事情を抱えていると、理解しあうのは難しいですね。しかも第三者の思惑まで絡んできたら、なにかきっかけがないと収拾するのは困難です。

次回、シヨウコさんいわく「対決」開始です。次回更新は6月28日くらいを予定しています。時間が空いてしまつてごめんなさい。ご意見・ご感想が励みになります。よろしければ一言お願いします。

相容れず、相反す

「…面を、上げられよ。オースキュリテの姫」

「皇后陛下のご逝去、謹んでお悔やみ申し上げます」

10年前には拙かった言葉は、今は完璧な発音と文法を身に付けたようだった。

「参列させていただくことは叶いませんでしたが、聞けば荘厳なご葬儀であったと。これも皇后陛下への深きご寵愛故のものと、皆が涙して……」

「やめろ。儀礼的な挨拶などいらん」

この上なく形式的な言葉に、自分でも意外なほど苛立ちを覚えた。

どうやら形式的に尊重されることに喜びを感じるほど、愚かな権力者ではないらしい。

先代が急逝してから5年、若干20歳の皇帝が国を率いてきた期間この国は確実に成長してきた。周りの力が大きかったとしても、そこまで暗愚であるはずが無い。

「ここに来た目的は、ありきたりな弔辞を聞かされるためではない。書状は読んだか？」

「拝見いたしました」

「では、単刀直入に」

突如強制的で暴力的なまでの力を帯びて、瞳が向けられた。

二色の瞳は齒向かうことを許さない支配する者の色。

「オースキュリテの姫、この国の皇后になっただけだいたい」

言葉だけを捉えれば、シヨウコには拒否が許されるのかもしれない。

しかしこの言葉はただ一つの答えを引き出すためだけに紡がれたもの。選択の余地を与えない、絶対の命令に他ならない。

「…陛下に、お願いがございます」

他者が自分に従うことを信じて疑わない、こんな人間が世の中に二人もいるなんてとシヨウコは苦々しい思いでわずかに眉をひそめながら言った。

皇帝は無言で先を促す。

「従者を二人ほど同伴する許可をいただけませんか？」

「…その者たちの名は？」

「アオ・リユイにケン・シヨウト。私の女官と武官です」

「オースキュリテの者か…。一応の身辺調査はすることになるだろうが、問題が無ければ許可する。他は？」

「この城で働いている者たちが次の仕事を見つけるまで、生活の保障を。なにぶん急な話でしたので、戸惑う者もおりましょう」

皇帝の視線がわずかにゆるんだが、シヨウコにはそれが何を意味するのかわからない。

「それ相応の手当ては当然に支給される。その点は心配ない」

「では私からは他に何もございません」

「最後に、一つ」

皇帝が立ち上がり、シヨウコとの距離を縮めてくる。反射的に引きたくなる脚を、何とかとどめることに成功した。

シンが面白いと表現したのは何だったのか。

10年前と変わったのは姿かたちばかりの、どこにでもいる凡庸な女だ。

しかしこれなら扱いに困ることもないだろう。最低限皇后の役目を果たしてもらえればそれでいい。

立ち上がり、距離を詰める。今もなんとかその場にとどまるしかない、その程度の間人。

「後宮で何をしても構わない。しかし他の男との間に子だけは作るな」

何を言われているのか、一瞬理解できなかった。

皇帝の中のシヨウコという人間は、随分と墮落した人間らしい。

理解した瞬間に、頭が沸騰した。10年も交流が無く今日はじめ顔をあわせたような相手に、ここまで愚弄される謂れはない。

自分が皇帝を叩いたのだと気が付いたのは、派手な音が鳴ってからだった。

右手が振り上げられたことには気が付いていた。しかしそれが自分に向けられるとは。

この部屋にいるのは自分と相手だけなのだから、普通に考えれば対象は自分しかない。避けようと思えば避けることが出来たのにそれをしなかったのは、奇妙な非現実感と単純な興味だ。

派手な音の割りに痛みは少ない。

僅かに揺れた首を戻せば、たった今暴拳におよんだ相手の顔は驚いているようではあったが謝ろうとしている様子や言い訳をしようとしている様子は無い。

「……随分と、興味深い」

「冷やすものを、お持ちいたしますか？」

言外に、謝る気はないと伝えてくる。その瞳の強さは虚勢ではない本物だ。

「いや、結構」

おとが頭をつかみ、上を向かせて強制的に視線を合わせる。

意志の強い瞳が、まっすぐに睨み返してきた。

「言い方を変えよう、最低限の義務を履行しろ。それ以外に何をしても私は何も言うつもりは無い」

「…そのようなこと、陛下に言われるまでもありません。私とてその程度のことは心得ているつもりです」

「……それは重畳。以上だ、下がれ」

そう言っ手て手を離れた。しかし相手はその場を動こうとしなかった。

「私は、陛下に同情いたします。さぞやご不快でしょうが」

「……何？」

「陛下と同じような方を、一人だけ知っています。その人も、悲しいお方でした」

「下がれ…！」

「何に怯え、て…っ！」

淡々と紡がれる言葉をこれ以上聞きたくない。

抵抗する身体を押さえつけ、噛み付くようにその唇を塞いだ。

相容れず、相反す（後書き）

その意味を（前書き）

R15指定がしてありますので大丈夫だとは思いますが、一応ご注意ください。

その意味を

「……っ……っ！」

剣術も体術の鍛錬も、怠ってきたつもりは無かった。

守られるだけの人間ではいたくなくて、いることは出来なくて、努力を積み重ねてきた。

しかしそんなものは何の役にも立たない。必死の抵抗さえやすやすと封じ込められて、不本意な唇を甘受するしかないなんて。二人の間に距離をとろうと、わずかにしか動かない身体をよじる。

見開いた目から、涙がこぼれた。

息が苦しくて、頭に酸素が回らない。それなのに拘束は少しも緩むことが無くて、出来ることといえば硬く唇を閉じていることだけ。

こんな屈辱を受ける謂れは無い。

それなのに拒否することが出来ないなんて。

もう立っていることが出来ない、そう感じた瞬間に硬い拘束がわずかに緩み唇が開放された。

反射的に空気を求めて口を開くと、目の前に端正な顔立ちが飛び込んできた。一連の行為の真意を質そうと瞳を覗き込んだ瞬間に、再度唇が塞がれる。

「ん　　っ……っ！」

先ほどの口づけとは明らかに違う。更に深く口腔内を犯される。

差し込まれた舌を押し返そうと反射的に差し出した舌が絡めとられ、蹂躪される。

経験のない感覚に、本能的な恐れを感じた。

怖い。怖い。

これは、何

？

角度を変えて、何度も、深く深く。

いつしか拘束は緩くなり抱きしめるようなものにならなくなったが、もはやそれに気付く余裕はなかった。気付いたとしても、抵抗する力は残されていなかっただろう。

終わりは突然。

解放された直後に、強く肩を押された。後ろに突き飛ばされ、こらえきれずに飾り棚に倒れこんだ。派手な音を立てて、飾られていた壺や置物が崩れ落ちた。

「間違うな」

低い声が、静かに響く。

「変わるのは対外的な立ち位置だけだ」

「……へい、か……」

肩や背中が痛む。けれど何か言わなければいけないと思った。

顔を上げると、乱れた髪の間から何の感情も伺うことの出来ない二色の瞳が冷徹に見下ろしてきた。

この口づけはただの制裁と牽制。

立場の違いを認めさせるためだけの行為。

何よりも能弁に、その瞳が告げている。

「私は貴女に干渉するつもりは無い。そちらにも無用な干渉は控えてもらおうか」

立ち上がって対等な目線で話をしなければならぬ。このままずれ違ってはいけないと思う。しかし身体の痛みがそれを許さないのが歯がゆい。

「陛下…！」

「失礼します！いかなされました、シヨウコ様?!」

先ほどの物音を聞いて耐え切れずに入ってきたらしい。ケンが座り込んだシヨウコを見て駆け寄ってきた。

その様子を皇帝が無感情に眺める。

「お前が、ケン・シヨートか？」

「失礼ですが、陛下！シヨウコ様に何を！」

「……なるほど」

皇帝の顔に笑みが刻まれる。それは間違いなく、軽蔑が混ざった嘲笑。

「オースキュリテの姫、貴女が何をしようと私には関係の無いことだ。この者との関係も一切詮索するつもりは無い。但し」

皇帝はシヨウコに背を向けて、歩き出した。

「そちらの行動しないで、対応が変わることを十分にご理解いただく」

動くことが出来ず、去っていく皇帝の背中を見守った。その姿が見えなくなると同時に、強い疲労感と自責の念が襲ってきた。

「いかなされたのですか、シヨウコ様……！」

「私が悪いのよ。何とも無いわ」

「何をおつしやいますか！ 医師を呼びますのでお部屋にお連れします。皇帝陛下にもお聞きしなければならぬことがあります」
立ち上がるうとするケンを押すとどめて、ゆるく首を振る。

「大事にしないで、私のことを思うのなら。今から本格的に両国の友好を築こうとしているこの時期に、こんな些細なことで台無しにしたくない」

「オースキュリテという国の威信はどうなりますか。このような扱いを受けて、何もしないなど！」

「お願いよ、ケン。貴方さえ黙っていてくれれば分からない。お願い……！」

意識が遠のき始める。でもこれだけは我俣を押し通さなければならぬ。痛み of せいではなく、緊張の糸が切れたせいだどこか冷静な頭で分析した。

「シヨウコ様……。分かりました、大事にはいたしません。ですが医師の診察は受けてください。堅く口止めいたします」

それに頷くと、シヨウコは意識を手放した。

あんなにも感情的になるなんて、自分でも思っていなかった。大抵のことには感情を押し隠して対応する自信があった。

しかし淡々と紡がれる言葉に、静かな瞳に、感情を乱された。

それでもまだまだ冷静だったはずだ、あの涙を見るまでは。

ただの牽制なのだから、あの時解放すればよかったのだ。好きでもない男の口づけを受け入れなければいけないというだけで、十分屈辱的なことだろう。変に拗ねられても厄介だ。

しかし、ただ呆然と見上げてきた漆黒の瞳と流れる涙に、制御しきれない感情が渦巻いた。

それはきつと、本能的な支配欲。
折れそうなほどに華奢な身体。理性的な思考のわりに、幼い感情
表現。

それらに一瞬でも感情が揺さぶられたからこそ、感情をあらわに
姫を心配し自分に詰め寄ってきた男との様子に荒立ったのだ。自分
を立て直そうとしていたときだからこそ、余計に。
ひどい言葉を投げつけた自覚はある。

制御しきれない感情は危険だ。長年の経験で嫌というほど分かっ
ている。

だからこれは、一時の気の迷い。
感情が制御できないのなら、切り捨てるまで。

その意味を（後書き）

拙い文章ですが、楽しんでいただければ幸いです。

読んでくださった方に感謝を。

感想などいただけると嬉しいです。よろしければお願いします。

想いは埋もれて

翌朝、昨日の夜には何も無かったかのように二人は朝食に顔を揃えた。

「おはようございます、陛下」

「ああ」

「昨晩は遅いご到着でしたが、お疲れではございませんか？」

「大事無い。姫を遅くに騒がせてしまったな」

傍目には和やかな会話を交わしながら食事を摂る。

使用人たちは二人が昨晩話しをしたことを既に知っているので、険悪な雰囲気や打ち解けない様子を見せるわけにはいかない。

王族の不和ほど、国にとって他に知られて不都合なものはない。国内情勢が不安定になり、国外には隙を見せることになりかねないからだ。ここにいる人間を信用していないわけではないが、悪意が無いものであっても不穏な噂が流れる可能性は出来る限り潰しておかなければならない。

それゆえ表面上は和やかに、当人たちにとっては白々しく、朝の時間が流れていく。

食後のお茶が出される時に、デデが皆が聞きたくても聞くことが出来なかった質問をした。

「して、陛下はこのたびはどのようなご用向きでこちらにいらっしやったのですか？」

この言葉に、ショウコの手が一瞬止まった。それはショウコを余程注意深く見ていた者にしか分からないかすかな動揺であったが、その様子をレイヴスは視界に捉えていた。

「そのことだが」

言葉を切つて様子を確認すると、既に落ち着いた様子で瞳を伏せている。

可愛げのないことだ、とつまらなく思う一方で感心する。昨晩は感情の制御がきかなかつたようだが、一晩で立て直したらしい。

「街の皆に知らせがある。午後に席を用意するように」

「庁舎のほうに用意いたしますか？」

「いや、急なことだ。騒がせるのは本意ではない。この城の塔にはせり出しのバルコニーが付いていたな？」

「はあ、ですがあの塔は……」

言いよどむデデの言葉に重なるように、シヨウコが口を開いた。

「私が私室として使っていますので、謁見室のバルコニーではいかがでしょうか」

そう提案した瞳が曇っていたのを、見逃してしまえばよかった。

「話には聞いていたが、事実とはな」

食後に二人で庭を歩きながら、前を歩くレイヴスが呟いた。

人工的に作られた小さな水路の周りに木々や草花が生い茂る、砂漠の街にあつては極めて贅沢な造りだ。所々にオースキュリテ風の装飾が見られるのは、シヨウコに対する先代皇帝の気遣いか押し付けか。

「……先代皇帝陛下の、ご命令ですから」

先代はシヨウコが逃げ出すのではないかと、常に警戒していた。

ドーブに來た当初は何をするにも数十人態勢の監視が付けられ、オースキュリテから付いてきた侍女や近衛兵はその殆どが国に送り

返された。残ったのは当時幼かったアオとケンのみ。

「先代、か」

レイヴスの父である先代皇帝は異国の姫に豪華な庭を与えてもてなす一方で、昼は厳重な監視をし、夜は高い塔に閉じ込めていた。通常であれば貴人がそのような扱いを受けることなどありえない。いくら造りが美しいとはいえ、不便な塔で寝起きするなど囚人のような扱いだ。

「陛下が即位なさった五年前から、護衛の者が減って自由に動けるようになりました。ありがたく思います」

「不要だと思ったから減らしたまでだ。四方を砂漠に囲まれた街から簡単に逃げ出すことは出来ない」

その言葉は事実なのだろう。別にこちらを慮ってくれたわけではない。しかし。

「存じております。それでも、ありがとうございます」

感謝すべきところは感謝する。そうでなければ借りを作るようでは気分が悪い。

「護衛が減ったときに、意を汲み取って部屋を移すことは考えなかったのか」

「危ない橋を…渡るわけにはまいりません」

そんな些細なことでも国の関係は変わらない。

そう一笑出来ればよかった。

そうでないことを知っているからこそ、迂闊な行動一つが命取りになると分かっているからこそ、今日まで折れることなくやってこられた。

前を歩くレイヴスがふと足を止めると、わずかに眉根を寄せてシヨウコに手を差し出した。

反射的に手を重ねて歩き出したが、行動がまったく読めない。

「陛下？」

「東屋に行く」

「何故？」

「デデがこちらを伺っている。振り返るな」

苦々しげに、しかし怒っているわけではなく返された言葉に、シヨウコは思わず小さく笑った。

主二人が去った食堂は、皇帝が言った「皆への知らせ」のことでざわついていた。

オースキュリテの要人が来るためシヨウコが一時的に呼び戻されるのではないか、という見方が多いようだ。

逝去した皇后は名門貴族の娘だったが、身分としては大国の皇女であるシヨウコに劣る。シヨウコが輿入れした際に正妃をどちらにするかで論議になったらしいが、最終的にはシヨウコの父親の先代オースキュリテ国王が「娘に重い責務を果たすことはできない」と言ったことにより、第二皇妃という地位に落ち着いた。

そういった過程もあって、いかにシヨウコが第二皇妃であってもその出自からして立后するとは考え難いようで、そういった予想は今のところ無い。

精々都合よく解釈してくれ、とケンは一瞬視線を庭に投げた。

庭を散策する二人を視界の端に捕らえながら、ケンは忸怩たる思いを抱えていた。

昨晚受けた医師の診察では、背中のかすり傷以外は何も無いということであつた。しかし怪我が無いから良いというものではない。

二人の間にとどのようなやり取りがあつたにせよ、自分にとって大切なのはシヨウコが害されたという事実だ。

それがある以上皇帝に気を許すことは出来ないし、極力シヨウコから遠ざけるべきだと判断した。しかし。

「仲睦まじいご様子ですなあ」

「デデ殿……」

窓に張り付いて二人の様子を伺う老人にしてやられた。内心の罵倒をかみ殺して平素と変わらない声を出した心算だが、僅かに尖っていることは隠しきれない。

食後にデデが半ば強引に二人を庭にやったのは、完全に計算外だつた。護衛として同行しようとしたが、デデと侍女たちに止められたのは更に計算外だつた。

「デデ殿は、皇帝陛下と面識があるのですか？」

「陛下が13になられるまでは、王宮で働いておりました」

二人から目を離さずに答える。その様子は子どもを心配する親のようだ。

「陛下とシヨウコ様は昨晚再会されたばかりです。お互いに気疲れをなさるだけではないでしょうか？」

暗に、余計なこととはするなと牽制する。

いくら過去の皇帝を知っていても、デデは昨晚の暴挙を知らないのだから。デデが王宮を去ってから12年。人間が変わるには十分な時間だ。

ケンのとげのある言葉に、デデは小さく呟いた。

「……皇妃様に、……賭けているのですよ」

その声は何とか耳に届いたが、あまりに切実な響きを持っていたために聞き返すことが出来なかつた。

想いは埋もれて(後書き)

前回から時間が空いてしまって申し訳ありませんでした。

手繰るその先

「珍しいね、君が僕を訪ねてくるなんて」

「出来ることなら避けて通りたかったのですがね」

面白がるような声音に、ケンは苦笑しげに言い捨てた。

平生は気ままな旅に出ているため家にいることは稀で忘れがちだが、ロイは有力貴族の跡取りである。シヨウコが暮らす離宮からは少々離れた場所にあるが、高級住宅地の一角に彼は自分の館を構えている。

「せっかく訪ねてきてくれたんだし、お茶でも飲む？」

デデと会話をした後、ケンはすぐにここを訪ねた。

訪問には早すぎる非常識な時間であることは承知しているが、この男に飄々とした態度で嫌味を言われると、何故だか申し訳ないという気持ちさえ海を越えて遙か彼方に消え失せる。

「結構です。貴方と馴れ合いたいわけではありませんので」

「ふーん。僕は一向に構わないんだけどね、君はつれない」

この男のこの態度は如何なものだろうか。

シヨウコの身体的安全と精神衛生を秤にかけて、とりあえずは差し迫った身体的安全を優先したが、その判断はともかく手段の選択は間違っていたかもしれない。

「シヨウコ様のことで、貴方に利する話を持ってきたつもりでしたが」

気が変わりましたと言って背を向けてしまいたいが、それも出来ないで相手の出方を伺う。

その変化は如実だった。この男が興味を示すものは極めて少ないが、その反面一度関心を示すと滅多なことでは揺るがない。

と言ってもケンはロイがシヨウコの他に何に興味を持っているか知らないし、知りたいとも思わない。

「君が、僕に利する話？新手的罫か何か？」

軽い口調は先程までと変わらないが、視線の強さがまるで別物だ。これほど分かりやすく変化するならば、少なくとも現状の打破のために踊って貰おう。

「昨晚皇帝陛下とシヨウコ様が歓談のお時間を持たれました」

「昨晚？レイが離宮に入ったのは大分遅かったはずだけど」

意外に行動が早いなとつぶやきながら、ロイは瞳を眇める。

「読みが外れたな。昨日は対面しないと思ったから放っておいたんだけど」

「読みが甘いと言うよりは、詰めが甘かったのでは？どうせ陛下を足止めするなら、確実に一晩足止めすべきだった」

「僕の記憶が確かなら、君は昨日そのことで僕を責めなかったか？」

「……状況が、変わりましたから」

ケンが昨晚の顛末を説明する間、ロイは余計な口を挟むことなく話を聞いていた。

こういった場合、相手に話の先を促したり結論を急がせるのは良策ではない。結局は筋を見失って余計に時間を浪費することに繋がることの方が多いのだ。

「といわけで、俺としてはシヨウコ様と陛下を近づけるべきではないと考えています」

「君は僕がシヨウコちゃんに近づくのも不快なんだろう？」

「比較の問題としか言えませんね。少なくとも貴方は直接の危害は加えないでしょう」

「辛口の評価だなあ」

まあいいよ、と立ち上がりながらつぶやく。

「僕としてもシヨウコちゃんとレイを一緒にさせておくのは反対だ

から。君の提案に乗ってあげよう」

ケンは無言で軽く頭を下げて、退室しようとして歩き出した。

「君と一緒に行くのはまずいだろうか？若干ずらしてそっちに向かうよ。でさあ……」

珍しく歯切れの悪い言葉に振り返ると、心底嫌そうな顔をしている。

「シン、一緒に来てるの？」

「……は？」

「シンレット・トリスバール。くすんだ銀の髪の毛」

ますます嫌そうな顔をして、視線をそらす。

「その方がどうかは分かりませんが、昨晚シヨウコ様に言伝に来た方はそのような髪の色でしたね」

ロイは既にこちらに背を向けているのでその表情を窺い知ることが出来ない。

どちらにせよ、ケンには関係の無いことだ。扉の前で背を向ける相手に形だけの礼をとり、帰りを急いだ。

ケンが去り一人残された部屋に、小さくため息がこぼれた。

「……相変わらずか」

なあ、シン。お前は疲れないのか？

圧倒的な存在に阻まれて、光はお前に届かないというのに。

東屋の二人には、昨晚のことが嘘のような穏やかな空気が流れていた。

もちろんそれは表面的なものに過ぎず、遠くでも見えるところに

人の目があるという状況によるものではあるが。

そうであったとしても、互いに踏み込むことをしなければ、会話が成立するというのは双方にとつて重要なことであった。不必要なまでに険悪にあることを望んでいるわけではない。

「昨日官舎で聞いたところによると、ドープの情報網は姫が立て直したと？」

「そのような大層なことはしておりません。ただ……向こう見ずであつただけでしょう」

謙遜ではなく事実として恥じ入るシヨウコに、レイヴスは低く笑う。

「確かに、否定は出来ない。皇妃の紋章も安くなったものだど騒ぐ輩も多からう」

「デデはその筆頭でしたわ。『皇妃様の御威光をなんと心得ますか！』と」

「らしいな。まあアレは宮廷の内向きの仕事に就いていたから、そういうことを重んじる」

皮肉を口にしながらも、懐かしむ様子にシヨウコは先程からの疑問を口にした。

「陛下は…、デデをよくご存知なのですね」

「私が知っていると言うよりも、アレが私を知っている。12年前までは毎日のように顔を合わせていたからな」

その言葉にシヨウコは釈然としないものを感じた。先程の様子からすると、もつと親しみを持った間柄であるように感じたのだ。皇太子と臣下として顔を合わせていただけで、あのような態度になるだろうか。

その疑問をシヨウコが口にしようとしたとき、人の気配にレイヴスが視線を向けた。

「失礼します、陛下ならびに皇妃様。お目通りを願う者が」

余計なことを口にしないで良かった、とタイミングの良い来訪者

に目を向けると、そこにいたのは昨晚皇帝の伝言を持ってシヨウコの部屋を訪れた青年だった。

「貴方は……」

「昨日は夜分遅くに失礼を致しました。シンレット・トリスバールと申します。以後お見知りおきを」

銀の髪をさらりと揺らして、シンレットは優雅にシヨウコに礼をとった。

トリスバールといえば、間違いなく五指に入る名門貴族だ。何故そのようなものが昨晩は小姓の真似事などしていたのか。

シヨウコが一瞬浮かべた不審そうな表情を捉えたレイヴスが、面白そうに付け足した。

「我が国が誇る最年少の大臣だ。外務全般を司っている」

「説明不足なんじゃない？」

場の空気にそぐわぬ飄々とした声が響く。

「そいつは蛇みたいに狡猾だからね、信用しちゃいけないよ。シヨウコちゃん」

シンレットが憎々しげに振り返った先にいる人物を見て、レイヴスが軽く目を見開いた。

手繰るその先（後書き）

更新が遅くなって申し訳ございませんでした。その上これから二週間程度、忙しくなりそうので更新が滞るかもしれません。出来れば7月中にもう1回か2回更新したいとは考えています。

更に無謀なことに、この「砂漠の蝶」と裏表の物語（あらすじを読まれた方は想像できると思います）をアップしたいと画策しております。我ながら厭きれかえります、この性格。

ご感想をいただけると、忙しいなりにやる気アップです。よろしければ一言お願いします。

掴めぬもの

「ロイ……か？」

「久しぶりだね、レイ」

皇帝に相對しているとは思えない気安さで、ロイはひらひらと手を振った。

そんな様子を皇帝の側近が許すはずもなく、シンレットの厳しい声がかかる。

「陛下に対してその態度は、不敬罪と捉えるが？礼を尽くすことも出来なくなつたか？」

「シンは相変わらず融通きかないね。ここにはそんなこと気にする奴いないでしょ。せつかくの再会に水を差さない」

「戻ってきていたとはな。何年ぶりだ？」

「レイ、君も少しは奢めるとかしたらどうなんだ？」

「瑣末は気にするな。面倒だ」

「瑣末？！鷹揚と大雑把は違うんだけどね」

「シンは本当に変わらないね。そんなんだと若いうちに禿げるよ？」

どんどん気安いものになっていく三人の会話を、シヨウコはあっけに取られて聞いていた。

貴族社会の中になっても、このような友情を育むことが出来るのか。互いの心の内を探りあい、有利にことを進めるために腐心する。そんなものだと思っていたが。

いままで表面的な付き合いで、波風を立てないことばかりを気にしてきた自分がかとても情けないような気がする。

姉様。

姉様ならば、この異国の地でも私などより器用に立ち振る舞うことが出来ますか？

ああ、違つ。

姉様はそんなことは考えない。自然に人を惹き付ける、生まれ付いての華。

「シヨウコちゃん、約束破つたね？」

思考に沈んでいたらしい意識が、浮上する。

「え？」

「昨日、謁見に同席させてって頼んだでしょ？」

ロイの言葉に、二人もシヨウコを注視する。

「ごめんなさい、いろいろ…あつたものだから」

何と答えたらよいものか、逡巡して皇帝に視線を走らせたが、全く気にかけて様子も無い。

何だかひどく疲れてしまった。自分だけが空回りしていて、徒労感だけが残る。

「昨日ロイから伺いましたが、お三方は古くからのお知り合いですのね。積もるお話もございましょう。私は席をはずしますわ」

立ち上がり、略式の礼をとった。

「お連れいたします」

そう言い、シンレットはシヨウコに手を差し出した。

本音を言えば一人になりたい。庭の中なのだから大丈夫だと突っぱねたい。

しかし拒否されるとは露ほども考えていない相手をあえて不快にさせることは出来ず、礼を言つて手を重ね東屋を出た。

東屋の出口の段差や隆々とした木の根に注意を払い、完璧なエスコートを着た彼は、きつと紳士なんだろう。少なくとも表面的にはだとすると昨晚の態度は何だったのか。ああ、そういえばロイも何か言っていた気がする。

そんなとりとめのないことを考えながら歩いていると、突如相手

が立ち止まった。

ちょうど館と東屋の中間あたりの、どちらからも隠れた場所だ。とは言っても、何かあれば人を呼べる近さだ。

多少警戒しながらも、いぶかしんで声をかける。日差しが強いので眩暈でも起こしたのだろうか。……この人いかにも文官っぽいし。「シンレット殿、いかがなさいました？」

「皇妃様は、ロイとは親しくしていらつしやるのですか？」

突然の質問にシヨウコは目を瞬か^{しはた}せたが、相手は無言で答えを要求してくる。

「ええ。私がドープに来た頃からの付き合いですが」

それがいかがい었습니다か、と訊ねるシヨウコには答えず、言葉を重ねる。

「では10年以上ということになりますね。昨日も会って話をされた」と

意図の読めない言葉に、シヨウコは答える術を持たない。

自分だけが不利益を被るのなら致し方ないが、ロイを巻き込むわけにはいかない。不用意な一言がどれほど周囲に影響を及ぼすのか、分からないほど子どもではない。

これ以上ここで立ち止まるべきではない。

そう判断して一人歩き出したシヨウコの背中に、更に言葉がかけられる。

「皇妃様、いま一つお聞きしたきことがございます」

その言葉に立ち止まりはしたが、振り返ることはしない。表情さえ見られなければ、いくらでも誤魔化しは効く。

「なんでしよう」

「ロイに、御名を呼ぶ許可を、与えられたのですか？」

あまりに予想外の質問に、思わず振り返りそうになった。

この国には何か名前に関するしきたりでもあったのだろうか。

「そういつて覚えはございませんが、問題がありましたでしょうか。」

何分幼き頃からの付きあいですので、自然とそうなったのだと思いますけれど」

「お時間を頂き、ありがとうございます」

そう言っておそらく礼をとっているだろう相手に、内心毒づいて歩き出した。

何がお時間を頂き、なのか。

意図は読めないが、東屋を出たときから計算づくだったでしょうに。

かの若き大臣は、紳士でもなければロイの言う蛇でもない。

おそらくは純粹なまでの政治家なのだ。

一本と押した筋を守るために、欺瞞も矛盾も是も非も無く、欺瞞も矛盾も是も非も内包する。

つかみきれない存在であるし、理解は出来ない。しかし今後短くはない付き合いになるであろうことを考えると、受け入れる努力が必要だろう。

「癖のある人ばかり……」

シヨウコはこっそりため息をついた。

凜とした背中を見送りながら、シンレットは先程までの会話を反芻した。

皇帝と皇妃の間に、10年という隔たりがあるのは今更どうしようもないことだ。

昨晚からシヨウコの為人ひつじなつを注視してきたが、なかなかの器の持ち主だと思う。

皇后として最低限必要な矜持は持ち合わせていて、咄嗟の対応もなかなか板についている。なによりも、異国の地での10年が彼女の内面を磨き上げたのだろう。分かりやすい華こそないが、目を惹

きつける人だ。

出来ることなら人目に付かぬ場所で、ただ一人のためだけに存在
して欲しかった。

漠然とした不安が胸をよぎるのは何故なのか。

めぐり合わせは皮肉で、思うようには動かない。

しかし思い定めたものために、力を尽くすことは出来るのだ。

例えそれで、大切な者の一方を切り捨てることになったとしても。

掴めぬもの（後書き）

シヨウコも十分曲者ですけどね（笑）

なんだか今回いつも以上にまとまりが無いです。そのうち改稿するので、今はとりあえず話を進めたいと思います。すみません。

ご感想・コメントなどいただけると励みになります。

思い起こせば

東屋に戻ると、二人はすっかりくつろいだ様子で話に興じていた。「戻ったか。お前も座れ。今ロイから地方の様子を聞いていたところだ。なかなか興味深い」

「それは僕も興味あるな。どこぞの風来坊と違って滅多に王都から動けない多忙の身なものでね」

「それは君たちの情性だろ。休日返上してでも地方視察に出掛けたら？上がるよ、好感度」

「生憎政府高官にまとまった休みなんてものは存在しないんでね。そのためにお前みたい根無し草と関わりを持っている」

「おい、話がそれている。オースキュリテとの外交の影響は、どこまで地方に出ている？」

「もう10年だからね、大分浸透してるよ。沿岸部には移住してきてる人もいるし」

「へえ。報告はあったけど、半信半疑だったな。いやあ、凄いエネルギーだね」

「こつちからも集団で移住した人間がいるしな。国策でもあるが、どちらが根を張るのが早いか見ものだな」

テンポ良く流れていく会話の中で、脳は無意識に必要な情報とそうでないものを区別し取り込んでいく。これは常に大量の情報に晒されるレイヴスやシンレットの癖でもあるし、最低限必要な能力でもある。しかし友人との会話であってもそれを止められない自分は間違いなく仕事中毒だなと自嘲せざるを得ない。

「ところでシヨウコちゃんだけど」

今最大の懸案事項。正確には彼女個人ではなく、その周囲であるが。

「王妃様がどうかしたか？」

暗に気安く名前を呼ぶな、という牽制をするが、受ける相手はどこ吹く風だ。

「とぼけるね。王都に連れて行くんでしょ？」

「……何故？」

面白そうな表情で問いかけるのはレイヴスだ。昔から、他人の思考過程や推察力を測るのが趣味のようなところがある。

因みにその推理や解答に答えを与えたことは一度も無い。正直言つてかなりの悪趣味だ。

「皇后死んだでしょ。そしたら誰かを立后させなきゃいけない。忘れてる人もつていうか本人も忘れてたみたいけど、シヨウコちゃんは第二皇妃だからねえ。……そうそう、言い忘れてた。レイ、ごしゅーしよーさま」

欠片も気持ちのこもらないお悔やみに、やれやれと笑いながらレイヴスは呟いた。

「忘れていた、か。アレも10年の間に随分と面白くなったものだな」

「10年前のシヨウコちゃんを覚えてるんだ？」

思い出すのはベールの奥の怯えをにじませた瞳と震えた手。それでも凜とした風情の小さな身体。

「……覚えている、な」

震える様子を見て、式的最中にでも倒れられたら厄介だと思っただおそらくは表情にも出ていただろう、幼い少女の心情も考えず。

今思えば怯えて当然だった。初めての土地や聞き取れぬ言葉、好奇の視線に晒される恐怖をただ一人で耐えなければならなかったのだから。

しかもその小さな背が背負うものは、大国間の不和の解消。婚姻は即効性のある外交手段だとしても、背負う者には重過ぎる使命だ。

「レイ？」

「……考えても、みなかつたな」

どれほど不安だったか。どれほど心細かったか。

それなのに、侍女の手が離れた瞬間に手足の震えを押さえ込み表情を切り替えた強さを覚えている。

至近距離で観察していたレイヴスからすれば一挙一動が酷く緩慢でぎこちないものに見えて苛立ったが、もしかしたらそれは遠目で見ると人間からすると丁度良い速さだったのかもしれない。突然異文化の中枢に放り込まれて、ぎこちないのは当たり前だ。

「レイ？どうかした？」

「なあ、シン。レイシアは息災なのか？」

突然すぎる話題の転換に、二人は思わず目を見張る。

レイヴスの口からその名前が出てきたのはいつ以来だろうか。両国の条約によって、いわばショウコと交換で海を渡った弟。常に気にかけているのは分かっていたが、その様子を尋ねられたことはなかった。

「あ、あ。報告では、特に変わった様子はないみたいだけ、ど？」

「レイ？君大丈夫？疲れておかしくなった？」

「いや、…今思えば八つ当たりだったな、と」

10年前少女に対する態度は、八つ当たり以外の何物でもなかったと今なら反省できる。

弟がオースキュリテに行くこと決まっただけからの母の情緒不安定や、弟の責める視線、父の隠された歓喜。そういったものの元凶を、少女に仕立て上げた。

頼る者のいない異国の地で、伴侶となるべき相手に冷たい視線を向けられて。

彼女自身に非があるわけではないのに。

それでも泣き喚くことも無く大きな失敗も無く、少女は己の義務を全うしたのだ。

迎えたレイヴスよりも迎えられたショウコのほうが、年齢を乗り越えて当時の両国の関係を的確に把握していたということだろう。

「ますます、訳わかんないけど…」

「レイ、分かるように説明してくれない？」

不可解なものでも見るかのような二人に、どうしたものかと思案をめぐらせていると侍女が東屋に近づいてきた。

「失礼いたします、皇帝陛下。冷たいものなどお持ちいたしました」
そう言つててきばきとテーブルの上に持つてきた茶や菓子、果実酒を広げていく。

「…シン、お前か？」

問われたシンレットは首を振る。

「皇妃様がお持ちするように、と。いらしたばかりの方もいらつしやるので、無駄にはならないからと仰せで」

そう言つて侍女は微笑んだ。主を誇るような、そんな笑い方だ。

一礼して去つていった侍女を見送つて、シンレットはからからと笑つた。

「いや、良く出来た女性だね」

本来ならば、すぐにこういったものが用意されないのは使用人の手落ちだ。仮に食後すぐで主が望んでいないとしても、用意すべきものはしなければならぬ。

しかしシヨウコはお茶を出す理由を『外を歩いてきた人がいるから、のどが渴いているはず』と切り替えた。だから中で仕事をしていた使用人たちには知る由のないことだと。だから手落ちではないと。

「シヨウコちゃんはこれくらい…」

そうつぶやくロイの声に若干の苦味が込められていると、シンレットは気付いたが思案に沈む皇帝は気付いた様子はない。

疑惑は近いうちに確信に変わるだろうか。

ロイの言葉が何を意味しているのか、はっきりとはわからない。

おそらくロイも意識して特別な意味を言葉に乗せているわけではないだろう。

しかしだからこそ、不意にもれる無意識の言葉はより真実に近いはずだ。

もし、疑惑が真実ならば。

自分はロイを切り捨てる。ロイの万の幸せの可能性よりも、レイの一にも満たない幸福の可能性に賭けて。

それはあの日、自分で誓ったことだから。

三人がそれぞれに考え込んでいたとき、汗をかいたグラスのお茶を一息に飲み干してレイヴスが立ち上がった。

そのまま東屋を出て行く背中を追いかけてようと呼び止める。

「レイ？どこに…」

首だけで振り返り返された言葉は、可能性を一に押し上げるもの。「皇妃に話がある。お前たちはそこで喧嘩でも思い出話でもしている」

曰く、ついて来るな。

その言葉を喜ぶ一方で、ロイの顔が一瞬凍りついたのを視界の端に捉えた。

それは、疑惑が確信に変わった瞬間。

最初の歯車が軋みながら、回り始めた合図。

全ての歯車が回るまで、舞台は決して動かない。

全ての歯車が止まるまで、舞台は決して止まらない。

止まる術を知らない歯車が壊れるまで、舞台はひたすらに動き続ける。

舞台の終わりを知らない役者は、終わりのない人生を。

思い起こせば（後書き）

7月中になんとか更新できました！やった。

前々からチラツと告知していた、砂漠と裏表のお話を、小説家になろうサイト様にアップしました。シヨウコのお姉さんと、今回名前が出てきたレイの弟レイシアのお話です。題名は「雪待ちの花」です。

ご意見・ご感想をお待ちしています。よろしければ一言お願いします。

拙い文章を読んでくださった方に、最大級の感謝を。

行方知れず

「失礼する」

断りではなく宣言して部屋に足を踏み入れた人物を見てアオの思考は停止し、荷造りに勤んでいた手からは荷物を取りこぼした。

昨日の昼間に姫様にあれほど無礼な振る舞いをしただけでは飽き足らず、夜遅くに呼び出した。何があったのかは分からないし姫様は自分が悪いの一点張りだが、いくらなんでも野蠻すぎる。アオはそう認識していた。

何といっても滅多なことでは負の感情を表に出さないシヨウコが、屈辱に震えたのである。

今朝の薄ら寒い団欒といい、許可なく部屋に立ち入る振る舞いといい、関係が急変するようなことが短い散歩の間に一体何が起こったのか。

皇妃の部屋を訪ねたのは、昨晚アオが『敵』と認定した男。
皇帝その人であった。

「オースキュリテの姫は、ここにいと聞いたが？」

冷やかなレイヴスの声に、アオは精一杯冷やかに言い返す。

「はい、いらっしゃいますか？」

「……。そのようには見えないが？」

「上のご寢室にいらっしゃいます」

もちろんアオとて、相手の意図は察している。本来侍女が取るべき行動も分かっている。

しかし昨日のことがある以上、出来る限り人目のないところでシヨウコとレイヴスを会わせたくないのだ。本当は今朝の散歩も、侍女仲間止められなければお供したかった。デデを相手に怒りをかみ殺していたケンの気持ちがよく分かる。

「ではそちらに行く」

「いくら皇帝陛下とはいえ、主の寝室に許可もなくお通しするわけには参りません」

さりげなくレイヴスと塔へ続く扉の間に立つ。もし無理にでも通ろうとするのであれば何の役にも立たない行為だが、おそらくそれはない。

伝わればいいのだ。

アオが従う主はシヨウコであると。

最優先はシヨウコであると。

そのためには皇帝にさえ歯向かうと言う、その覚悟を。

「アオ・リユウイ、か？」

「は？」

「違うのか？」

「いえ、そうですが。えっと……」

「ああ、女人にだけ名乗らせるのは無作法だな。私はレイヴス・シヤルディア・リユミシャル。この国の皇帝だ」

白々しく名乗るレイヴスの目は完全にアオをからかっている。

「存じております！先程から陛下と御呼びしているではありませんか！」

すっかり地が出ているが、本人はそれどころではない。

「知っていたか。それは重畳。先程からどうにも軽んじられているような気がしてな」

すべてを分かりきった上での嫌味に、身分上噛み付くことが出来ないアオはぎりぎり歯噛みした。

「……それは失礼をいたしました。……じゃなくて、どうして名前

！

舌戦を制して満足したらしいレイヴスは、悠然と笑んだ。

「話をするなら、座りたいものだが？許可いただけるか？」

会話の主導権を握られ、易々と相手を己の陣地に立ち入らせてしまったことにアオは気が付かない。

「どうぞこちらにつ！」

アオは荒々しく場を整え、乱暴にお茶を差し出し自らも一息に流し込んだ。ここまでできて体裁に構っていられるほどアオは達観していないし、今のところする心算つもりもない。

気持ちを落ち着けて、もはや敵かつ不審者となった相手を見据えた。

随分と分かりやすい娘だ。

自分に向ける敵意も、その後の狼狽も。

感情がすぐに表に出るし、そもそも隠そうという気がないらしい。

交渉術もなっていないし簡単に主導権を譲ってしまう迂闊さは幼稚といってもいい。

部屋に入ったとき、これが昨晩王宮に連れて行きたいと言った侍女だろうと分かった。この離宮で働くオースキュリテの者はアオ・リユーイとケン・ショートしかいない。

そんな分かりきったことを言っただけであるから、その後の反応の良さに思わず笑った。こういった究極の直情型は周りには少ない人間だ。

レイヴスと同じく究極の理論型であろうオースキュリテの姫が、彼女をそばに置く理由も察しがつく。

先程取り落とした荷物もそのままに、のどを潤す侍女なんて滅多に

いない。

自分にはない個性に惹かれるという心理は理解できないでもない。

「これは……」

何気なく眺めた荷物に目を剥いた。

法律に政治学、宗教に民俗学。一体誰がこんなものを。

「姫様の持ち物の一部です。何か？」

「一部？」

「はい。残りはまだあちらの本棚に入っただまま。荷造りの途中だったんですから」

不満そうな侍女を尻目に、本棚の前に立ち愕然とした。

理論派の学術書から実用書まで、中には相当古いものまである。

「これを……読んでいるのか？全てを？」

「私にはよくわからないんですけど、そこに残っているのは特にお気に入りのものでかみたいです。一度お読みになったものはほとんど学校に寄贈されていますよ」

過去に自分も精読した一冊を取り出してみると、中の余白には大量の走り書きがされている。それを読めばこの文章一つ一つにどれほどの理解があるのか、明白に示された。大家の言葉を盲目的に信じているのではなく、多少の偏りはあるにせよ自分なりの分析が加えられている。

相当なものだと認めないわけにはいかない。

その気になれば何冊かの本にすることも出来るだろう。

「この本は粗雑に扱っな」

「わかってますよ、それくらい。私だっていつもいつも落としたりしているわけではないですから」

「いや、分かっている。これ一冊がどれほど価値があるか。物によつてはお前の10年分の手当てでも買えないものだ」

本を眺めつつ答えれば、後ろで派手に物が倒れる音がした。

「そんなに！？ど、どうしよう今までの分……」

これまでも何度かあるのか。そう呆れながら振り返るとテーブルの上にお茶がこぼれていた。

「言ってるそばから。その頭は飾りか？」

「突然で驚いたんです。心臓に悪いことをおっしゃる陛下が悪いんですよ！」

「心臓に悪いのはお前のこれまでの行いだろう。私に文句を言う暇があつたらさつさと片付ける。足元の本が濡れる」

その言葉に部屋を飛び出し掃除道具を取りに走る侍女にため息をついた。

見ている分には面白いが、30分以上相手をすれば理性が崩壊するかもしれない。

再度本に視線を戻すと、かすかな衣擦れの音とともに塔の上へと続く扉が軋んだ。

石の塔を通るかすかに冷たい風と、慣れない清浄な香りが流れ込む。

「アオ？何か音がしたけど、大丈夫？」

決して高くはない、しかしよく響く声にゆっくりと振り返る。

「陛下？」

「あの侍女は先程飛び出して行った。なかなか面白いな」

シヨウコはすばやく部屋を見渡し、テーブルの上で合点がいったと、いうように頷いた。あっさりとした状況を理解できるほど、あの侍女の粗相はよくあることなのか。

「あの、それで陛下は何かご用でしょうか？そうであれば私のほうで出向きましたものを……」

その問には答えず、ゆつくりと本を閉じる。

「皇帝機関説をどう考える？」

「……は？」

「思うままに言ってみる。罰したりはしない」

そうではなく質問の意味を問いかけたのだが、答えを要求する無言の圧力に屈する。

「恐れながら私は賛成です。この国の最高法規に皇帝陛下についての規定がないのは、その存在を前提として国家が成立しているからでしょう。しかし法の運営を適正にするためにはその地位を明確にせねばなりません。……。」

明快な理論は、それが自分のものになっている証明。これほどとは思わなかった。

「読んだのだな、全て。何の為だ？」

「強いて言うなら、批判するためでしょうか」

「批判？」

「はい。今の政治を、社会の不条理を。知らずして文句を言うことは出来ません」

「それで、何を得た？」

緩く笑って、吐き出された言葉は意外なものだった。

「何も得ませんでした。これまでの私の手はせいぜいこのドープにしか届きません。この完成された豊かな街で、私が出来ることなど殆どない」

それは嘘だと知っている。情報網の整備などで皇妃が果たした役割は小さくなかったと昨日庁舎で聞かされた。そのときは裏で手を引く者がいると思っただけ。

「ですが、これからは違う。私の手はもっと遠くへ伸ばすことが出来ます。それが第二皇妃と皇后の違いでしょう」

「……国の政治に興味が？」

「シヨウコ様、アオはどうしたのですか？」
開いたままになっていた扉から顔を覗かせた男に、意識せず眉を
ひそめた。

望むもの

寝室に続く扉の奥から現れた男に、僅かに目を眇めた。

昨日の今日である以上、相手も自分を快く思っているはずはない。主のために皇帝にさえ歯向かうその忠誠心は買いたいが、その行動が忠誠心だけから行われているものではないことも明白だ。

その上で、寝室に二人でいたという事実をどのように解釈するべきか。

勿論それがすなわち、先程まで二人が不貞行為をしていたと示すものではないことは分かっている。しかし皇妃の部屋に男が出入りしていると言う事実は、誤解を生みやすいことは間違いない。誤解ならばいい。しかし真実であれば面倒なことだ。

「姫、その者を下がらせてもらおうか」

「は？」

男の顔が凍りつくが、そんなことに構うつもりはない。

「その者は姫の武官であろう。私に従う者ではない」

戸惑いながらも示された退室を促すシヨウコの仕草に、扉の外で控えますと言いつつ出て行った。

さぞや不満だろうが、あの男は主の言うことを基本的に全て肯定する。そうである以上間接的な支配が可能であり、危機感を覚える必要はなさそうだ。

本当に面倒なのは、先程の侍女といい今の武官といい、人に全面的な信頼を寄せられているこの姫かもしれない。

「あの、陛下？」

若干の戸惑いを含んだ声がかげられた。

「あの、陛下？」

声をかけながらも、先の台詞は用意していない。ただ、何かを言わなければと思ったただけだ。もつと言うなら、相手が何か口にするのを期待した。わざわざ部屋を訪ねてくるほどの用事があったのではないのか。

しかしそれに対する返答は、全く予想外のものだった。

「感心しないな」

「は？」

僅かに、けれど明白に色の異なる二色の瞳が向けられる。

「誤解を招くような行動は謹んでもらおうか」

「……、それはっ」

一瞬何のことを言っているのか、理解できなかった。そして、理解した瞬間自分を呪う。昨晚あれほどの失態を演じておいて、誤解を招きかねない行動をしたのは間違いなく自分の落ち度だ。

「昨晚も言ったが、それ自体を咎めるつもりはない。しかしせめて立後の儀までは控えてもらおう」

釈明もできない。今の自分の言葉には、欠片ほどの説得力もないだろう。

どうしてこの人を前にすると、いろいろなことが上手くいかないのだろう。国を背負ってここに来たのに、何一つ祖国のためになっていない。

「申し訳……、あり」

「謝るな」

さえぎるように重ねられた言葉は、予想外のものだった。

思わず下がりかけた視線を戻すと、思いのほか真剣な瞳にぶつかった。

「容易に謝罪を口にするな、オースキュリテの姫。解決策として己の非を認めることが許されるのは責任のない者たちだけだ。相手の理解が謝っているならばそれを正せばいい」

淡々と紡がれる、しかし確かな力を持った言葉に圧倒される。

「…陛下、下？」

「一国の姫であり、この国の皇后となる者に許される行いではない。私たちは個人として生きているわけではない。それはお分かりか？言葉が重いのは、それが実を伴っているから。この世に生を受けた瞬間から、この人が大きすぎるものを背負い続けてきた証明なのだろう。」

自分のような後付の責任感ではなく、呼吸をするように当然のこととして受け入れてきたのだと分かる。

「鋭意、理解に努めます」

この返答に、皇帝の口の端が面白そうに、しかし満足げに上がる。

「それでいい。全てを受け入れる必要はない。自分が納得できないものは取り入れる必要はないが、熟慮は忘れるな」

開け放たれた窓から風が舞い込む。

開かれたままになっていた本の間から、細々と書き込みがされた紙が舞い上がり床に落ちた。

皇帝はその一枚をゆっくりと拾い上げた。

「私は、リュミシャルとオースキュリテの間の平和が続くことを願っている。今のところ二国が争う益はない。」

「勿論そのための努力は惜しまないし、使える駒は全て使う」

「一体急に何を、そう思った瞬間にまっすぐな視線が向けられた。」

「姫と弟は、最上級の駒だ」

そんなこと。

そんなことは。

「言われるまでもなく、理解しております！ですから私はここにいます」

いつの間にか距離が詰められ、頤が捉えられた。

息がかかるほど近い距離でにらみ合う。

「それだけか？」

「は？」

「ここにいますだけで、何かを為したつもりか？」

容赦ない言葉がかけられる。

「知識を溜め込むだけで満足か？頭の中で批判して自分ならもつと上手く出来ると、そう他者を嘲笑うための努力ならば辞めてしまえ。

ここにいますだけで何かが出来ると思うような人間に、出来ることなど一つもない」

「そのようなことは分かっています。私にも理想はある、そのために立后も受け入れたのです」

「分かっている、か。分かっているだけではどうにもならん。

皇后となって何をなす？理想があるのならば行動しろ。これからその力を得るのだからな」

「陛下のおっしゃることの意味が、わかりません」

呆然とつぶやく。

だってまさか、これでは。

そのままの意味で解釈すれば。

「政治をさせてやる」

頤にかけられた手が外されたことにも気付かず、呆然と見上げた。

「無論、無益と知れば切り捨てる。せいぜい足掻け」

「……どうして、ですか」

出会ってから10年、しかし他人以上に薄い関係性を築いてきたと言うのに、その上昨晩はこの先が不安になるほどの事態に陥ったというのに。

薄い笑みを浮かべた顔に、重ねて問う。

「女が政治に関わるなど、聞いたことがございません。いえ、それ以上に……」

「私の真意が読めない、か？」

言いよどんだ言葉の先を的確に言い当てられ、居心地の悪さを感じずにはいられない。しかも相手がそれを面白がっているのだから、尚更だ。

「女人の政治参加については、これまでに例がある。詳しくは自分で調べるんだな。」

もう一つ。私の真意だが、姫を優遇すればわが弟のあなたの国での立場が良くなること、最近移民が増えているのはご存知だろうが、彼らの不満を抑えるためだ。」

「私がお聞きしたいのは、そのような表面的な理由ではありません。そんなことは他にいくらでも手の打ちようがありません。」

「私がそこまで手の内を明かすとも？」

「思いません。」

ですが、私の納得できる理由を提示して頂かなくては、お引き受けすることは出来ません」

シヨウコの言葉に、それまで愉快そうに浮かんでいた笑みが消えた。

「いつそ命令だとも言えばよかったか？他人の心理を推測して、何か結果が変わるのか？」

面倒だとも言うように、ため息とともに吐き出された言葉は、ほんの少しの真実を含んでいたのか。

「姫は非常に興味深い」

終わらない役を演じる者は、果たして己が役者であると気付くのか。
終わらない役を演じる者は、果たして役者と言えるのか。

個人の思いを飲み込んで、次の舞台の幕が開く。

王都に舞う

堅牢な王宮の表との調和が取れているにもかかわらず、この建物がどこか女性的であるのは、やはりその目的ゆえだろうか。政治のための空間を抜け、国寶のための居室が設けられた一角を抜け、さらに皇帝の私的な一角を抜けた先にある後宮。

ただ一人のためにこの場所では数多の花が咲き、そして多くは実を結ぶこともなく枯れていく。

国家予算の多くをつぎ込み、女たちを着飾らせて寵を競わせる。そこには多くの陰謀や思惑が交錯するが、究極の目的は世継ぎを設けることただ一つ。ただそのためだけに、末端の者まで含めれば1000を越す女たちがここで暮らしている。

その異質な空間に立ち向かうべく、シヨウコは一步を踏み出す。国の政治に関わる以前に、シヨウコはこの後宮を治めなければならぬ。顔の見える相手も御せないのならば、不特定多数を治めることなどできはしない。

だからこれは、前哨戦。

軽く息を吸い込み、顔を上げる。

そして重々しい音を立てて、近衛兵士が両脇を守る扉が開いた。

風に艶やかな香が舞う。

「本当に任せてよかったの？」

「何が」

「皇妃様に後宮を任せて。君が一言言えばそれで済んだ話だったのに、わざわざ揉め事を大きくする必要性なんてないはずだ」

王宮の廊下に二人の靴音が響く。両端により道をあける人々に目もくれず、二人は執務室へと急ぐ。

事の起こりは昨日の昼。

ドーブの離宮に王宮から緊急の要件を知らせる鷹がよこされた。その脚に括り付けられた文書を見て、予定の変更を余儀なくされ急ぎ王都に戻ってくることになった。

その内容を要約すれば、『第三皇妃以下その親族等が、異国の姫の立后を認めずに騒いでいる』というものだった。

レイヴスにしてみれば不愉快かつ不可解極まりない騒動でしかない。皇后の選定は順序に則ったものであるし、そもそも皇帝が行うものである以上第三皇妃であるのが貴族であるのが、容喙するべき問題ではない。

当然今の後宮はシヨウコにとって居心地のよいものではない。四面楚歌ともいえる場所に放り込んだレイヴスの行動が分からなかった。このような状況では立后をドーブの街の者に知らせることも出来なかった。

予定されていた謁見なども全て取りやめ、勿論街の者への挨拶もなしで皇妃は10年間暮らした街を後にした。一言の不満を漏らすこともなく、ただ分かりましたと言った顔は無理をしているようには見えなかった。

皇帝の執務室にたどり着くと、レイヴスは憎々しげに書類を机の上に叩きつけた。シヨウコの立后に反対する貴族たちからの建白書である。

「馬鹿の相手ほど面倒なものはないな」

生産性がない、とレイヴスはつぶやいた。

「独裁者だね、皇帝陛下。皆サン必死なんですよ」

擲諭するようなシンレットの声音が、同意見であることを告げている。

「知ったことか。こいつらは自分の血統がオースキュリテ皇室に勝るとでも思っているのか？あるいはオースキュリテとの和平などどうでもいいと？」

苛々とつぶやく様子は、本気でこの問題に嫌気が差しているようだ。「僕に聞いても仕方ないでしょ。その建白書にその答えが書いてあるんじゃないの？」

どうにかなだめようとしたがその試みも虚しく、書類の束が投げつけられた。

「……。捨てるの？」

「要約しろ」

「はあ?!」

「要約しろ。いちいち読んでいられるか。一つ聞けば十分だ」

どうせ結論は変わらないとぼやくレイヴスに、シンレットはひそかにため息をついた。

確かに今回の騒動は、一部の利己的過ぎる貴族が起こしたもので、煩わされることは本意ではない。

むしろ今までシヨウコの扱いが低いことを心配していた者たちは、これでオースキュリテとの関係も良くなると安心しているほどだ。現状、今の世界にとってこの二国間の和平ほど重要なものはない。

リュミシャルとオースキュリテが全面戦争でもすることになれば、互いの国土が焦土化することは間違いない。失うものは計り知れず、仮に戦に勝ったとしても得るものなど殆どないだろう。

だからその和平の証として送られてきたシヨウウコがこの国の重要な地位に就くことは、こちらの好意を示す絶好の機会であり歓迎すべきものである。交渉の材料としてもこれ以上はない。

しかしそれは、国益や長期的な展望を持つ者の考えである。

目先の利益しか考えられない者、国政に参与しているにも関わらず極めて利己的な者はそうは考えない。

後宮に暮らす者にとって『皇后』という地位はたまらなく魅力的だ。例え皇帝の寵愛がなかるうとも、先の皇后がそうだったように様々な特権を享受することが出来る。

また、皇后の親族ともなれば箔が付くし、政治での発言力も増す。また自分の息がかかった者が首尾よく皇后になれば、皇帝に対しても何らかの影響を与えることが可能かもしれない。

しかし、だからと言って。

「要約しろ、はひどいんじゃない？これは一読すべきだと思っよ」依然として苛々とした様子も隠さず、コツコツと机を指で叩き続けるレイヴスに、シンレットはポツリとつぶやいた。

「……。そんなに気になるのなら、様子を見に行けばいいのに」「治めることが出来ると思うか？」

シンレットの提言を華麗に無視して、レイヴスは問いかけた。

「人間としての器はオースキュリテのお姫様に分があるんじゃないかな。でも相手は土地の利を持つてるからね」

日々自身を着飾ることに執念し甘やかされて育った人間に、正論で二国間の和平や国益を説くことは無意味だ。その重要性を理解していないのだから。その身に纏う絹がオースキュリテからの品であることさえ知らないだろう。

おそらくこれからシヨウウコが相對する人間は、彼女とは對極にいる。「でも、後宮くらいは治めてもらわないとね」

「…分かっている」
後宮も治められない人間に、政治をさせるわけにはいかない。
「出来ると思ったから、政治に参加させようと思ったんでしょ。君にしては随分思い切った判断だけどね」

これまでも先例があるとはいえ、シヨウコを政治に関わらせるために周囲を説得するのは骨が折れる作業だろうと予測していた。先例は特例でもあった。

それから言えば今回の騒動は渡りに舟とも言える。流石に現段階で反対する貴族たちの説得に当たらせるわけにはいかないが、せめて後宮だけでも見事に治めれば中立を保つ者たちがシヨウコを見る目が変わるだろう。

「嫌な言い方だけど、信じるしかないね。これからお姫様はオースキュリテと何かあれば矢面に立たされることになる。そうでなくとも一部からの風当たりはずっと強いだろうし」

僅かに眉間にしわを寄せるレイヴスに、シンレットは建白書の束を投げ返した。

「つまりはね。一、^{つひ}第二皇妃殿下が異国の生まれであること。一、我が国の文化に造詣がないこと。一、依然かの国とは恒久的な平和を築くに至っていないこと。一、かの国の皇帝は代替わりしており、第二皇妃はもはや皇帝の娘ではなく皇妹^{こうまい}であること。一、それゆえ第二皇妃の政治的重要性は下がっていること。こんな感じだね」

「予想通りだな、何のひねりもない」
書類を捨てようとして、レイヴスはふと思いとどまった。

「？」
「これを姫に届けておけ」

「……。そんな、わざわざ神経逆撫でするようなこと……」
「どんな反応を示すやら。楽しみだ」

人の悪い笑みを浮かべるレイヴスに、シンレットはため息をついた。

「ねえ、レイ。君はお姫様を使って何を企んでいる？」

蝶の戦場

敵の侵入に備えて複雑な造りをしている表に比べて、後宮は比較的単純な造りをしている。厳重な扉を隔てて最も皇帝の居室に近い位置に皇后の部屋、そこから更に中庭を隔てて皇后の居室と向かい合う形で皇妃の部屋がある。その奥は側室の部屋やそれらに仕える者の部屋が並んでいる。

その他に共有空間として広間があり、何かあるときはここに集まることになる。

後宮に足を踏み入れたシヨウコがまず通されたのも、その広間であった。

その光景は少々異様ではあったが。

「これ、は……」

横に控えるアオが声をなくすのに対して、シヨウコはまあこんなものだろうと醒めた思考を廻らせる。

第三皇妃以下がシヨウコの立后に反対している。

その事実しか知らされていなかったが、それだけで十分でもあった。それさえ知っていれば説明がつくし困惑もしない。

第二皇妃の帰還のために設けられた席を、皇妃として正式な地位を持つ者全てが欠席した。

これだけ露骨なことをされれば、逆に覚悟も出来るというものだ。

「シヨウコ様、いかがいたしましたしょう？」

暗に皇帝に告げるかと訊ねるアオを制して、シヨウコは側室達がひ

れ伏す前まで進んだ。後宮はその性質上規律が乱れやすい。それをどうにか抑えているのが厳然たる地位による区分だ。今回も皇妃の席と側室の席の間には広く隙間が設けられていた。

「どうぞ、顔を上げてください」

どこまでも柔らかく声をかける。

一応この場に出席している者たちでさえ、決して自分を認めている訳ではない。

大方の視線が自分に向いたことを確認して、ふわりと微笑み礼をとる。流れる髪の一房の動きにまで注意を払い、最大限の効力を。

「お初にお目にかかります。シヨウコ・リーデル・オースキュリテでございます」

空気が僅かに変化したことを肌で感じる。

側室たちもそれに従う女官たちも、まさか第二皇妃が自分たちに礼をとるなど考えもしなかつたのだらう。あっけに取られたような顔が並ぶ。

言葉の通じない異国で、人々の仕草や視線、僅かな表情の変化から空気を読み取ることは幼い頃の処世術だった。

「長きに渡り留守にしておりましたが、今回皇帝陛下とともにこちらに戻ってまいりました。皆様、どうぞお見知りおきくださいませ」
態度は柔らかく友好的に。しかしただ単に下手に出るのではなく、オースキュリテ内親王という血統と皇帝に認められた存在だということを相対する者の意識に植えつける。

制度は人を飼いならず。

ならばこの後宮の制度は、地位と血統。そして皇帝。

使えるものは使って、何が悪い。

言外に示されたものによって、向けられる視線に若干の変化が生じたことを確認して、シヨウコは一応の手ごたえを感じた。

「女官長、部屋へ案内していただけますか？」

流石に移動で疲れたと続けると、この言葉にはじかれるように年配

の女性が前に進み出てきた。

「至りませんで申し訳ございません。私が女官長を勤めさせていた
だいております、ダフレと申します」

平伏して謝罪を口にする女官長に対して、シヨウコは内心苦笑する。
身体を清めてとりあえず休みたいのだが、その意図を汲み取っても
らえないのだろうか。

長々と続く謝罪に疲れも相俟っていい加減苛々してきたとき、側室
たちの列の最後尾にいた女性が立ち上がった。

「女官長様、皇妃様はお疲れのご様子。いまは取りあえずお部屋に
ご案内してはいかが？」

妖艶な微笑を浮かべた黒衣の美女が、豊満な胸を持ち上げるように
腕を組んで立っている。匂い立つ様な美しさは毒と知りつつも口に
含んでしまいたくなる蜜のようだ。

その姿を認めた女官長の顔が嫌悪に歪むのを、シヨウコは見逃さな
かった。こちらへ、と歩き始めた女官長に頷きながら、黒衣の女の
口が「またね」と動くのを視界の隅に捉えた。

案内されたのは、第二皇妃の居室だった。

ここは様子を見るべきか、それとも仕掛けるべきか。逡巡して、遠
くからこちらを伺う気配に態度を固めた。

「どうしてこちらのお部屋なの？」

「…と、申しますと？」

「確かに今の私は第二皇妃ですけど。近日中に立后の儀があるこ
とは決まっておりますもの。何度も引越しをするのは面倒ですから、
あちらのお部屋に入りたいわ」

あくまでも無邪気を装って、シヨウコは皇后の居室を指した。

「それは…、あちらはまだ調度品が整っておりませぬゆえ」

「細かいものはいらぬわ。近く届く手はずになっているの。大まかなものさえあれば十分よ」

そう言つてシヨウコはアオを引き連れて歩き出した。

明らかに慌てた様子の女官長に、心の中で謝罪する。ここで弱腰の態度を見せるわけにはいかない。

「皇妃様、お待ちください！」

「それにね、女官長」

にっこりと笑つて、振り返る。通路の奥で耳を敬てる人間にもよく聞こえるように意識した、明朗な声で。

「第三皇妃様方も、はやく引越しなさいたいんじゃないかしら？」

私がかちらに入れば、すぐに引越しが可能でしょう？第二皇妃の部屋に。そう言外に言い含める。

アオが諦めたように横でわざとらしくため息をついた。あとで美味しいお茶でも淹れてあげよう。これから先迷惑をかける分の前払いとして。

「姫様がご所望です。こちらの扉を開けてください」

一歩前に進み出たアオが毅然と言い放つた言葉に、女官長はのろのろと従つた。

一歩踏み込んだ室内を見て、流石にこれは予想以上だとシヨウコは啞然とした。それはアオも同じだったらしく、横で小さく「浅ましい」と母国語でつぶやいたのが耳に入った。

「これは、凄いわね…」

部屋の中には何もなかった。

小さな家具は言うまでもなく、備え付けのものまで。

取り外せるものは全て外し、そうでないものは壊した形跡がある。

説明を求めるようにアオが振り返ったが、女官長は縮こまるばかりで何も話そうとはしなかった。

背後から聞こえる忍び笑いから、大方の展開は予想できる。おそらくは亡くなった正妃に仕えていた者たちが、形見としてあるいは報酬として小さなものを持ち去ったのだろう。そして大きなものは、悪意を持って壊されたとしか思えなかった。国の財産であるはずのものを、自分の主張を通すためにあるいは個人に対する嫌がらせで破壊する。それほどシヨウコの立后に反対しているのだという示威行為だ。そんなことが後宮ではまかり通る。

徐々に大きくなるくすくすという笑い声に、こみ上げる不快感をやり過ぎそうとしていたとき、ここ数日で聞きなれた声かけられた。

「ああ、撤収は終わりましたか？」

「シンレット殿」

後宮に何故、という疑問が顔に出ていたのだろうか。ひらひらと一枚の紙を手渡された。

「許可証？」

「ええ。この国の後宮は完全に閉鎖されたものではありません。皇帝陛下の許しがあれば昼間ならば男が中に入ることも可能です」

さて、とシンレットは室内を見渡した。

「他の部屋も撤収は済んでいますか？」

「……。おそらくは。まだこの部屋しか見ておりませんが」

そうですが、と満足げに微笑むとシンレットは明らかに聞かせる目的で声を大きくして礼をとった。

「皇帝陛下から皇后陛下に、お祝いの品として調度品一切が送られました。運び入れてよろしいでしょうか？」

加えてニヤリと人の悪い笑みを浮かべ、シンレットは振り返って言い放つ。

「後宮の皆様におかれましては、皇后陛下の歓迎のために撤収作業に自発的にご協力いただき、陛下も大変お喜びでございました」
たつぷりと毒が塗り込められた言葉が響く。

その言葉に何人かがばつの悪そうな顔をして去っていった。その中には女官長も含まれていて、それについては呆れてものも言えなかった。

そうこうしている間に、室内は清められて調度品が次々と運び込まれてくる。どれもこれも一目で最高級品だと分かるものばかりだ。野次馬がいなくなったところで、シンレットが小さく謝罪を口にした。

「何がでしょう？」

「調度品一切というのは嘘なんですよ。大まかなものしか間に合いませんでした。それでさえ間に合わせものもですから、事態が収束したら職人をお呼びいたしますのでご自由になさってください」

「ということはやはり、皇帝陛下からというのも偽りですね？」

「……我がトリスバル家からのご帰還祝いということで、収めていただければと」

その気遣いはとても嬉しい。特に今は相手に付け入る隙を与えたくはなかったから。

しかし。

「どうしました？」

「とてもありがたく思っています。家具も、作り直す必要などありません。すべて使わせていただきます」

「では…？」

「このようなことをお尋ねするのは、シンレット殿に失礼かもしれませんが……」

罰せられはしませんか？先程シンレット殿は皇帝の名を騙られました。もし、少しでも危険があるのでしたら、私は構いませんので

訂正をなさってください」

突然真剣な顔をして何を言い出すのかと思えば、そんなことを
込みあがってくる笑いを押し留めなければ。そう思うのに。

だめだ。面白い。なんだこの女。

「…っ。はは、はははははははは。」

蝶の戦場（後書き）

舞台は後宮に移りました。どうなることやら手探りです。

ご感想・コメントが私の原動力です。よろしければ一言お願いします。

また、目次ページにあるランキングサイト様への投票も、よろしければお願いいたします。

読んでくださった方々に、最大級の感謝を。

「なっ！何故笑われなければならぬのですか！」

笑い転げるシンレットに最初はただ目を丸くしていたが、あまりそれが続けば流石に気分が悪い。

「ははは、は……。あゝ、痛い、笑いすぎて腹筋が。くくっ」

「失礼にも程があります！シンレット殿」

「うん。いや、はい申し訳ありません皇后陛下。せつかくのご心配を……」

「そうではありません。心配など、したいから勝手にするのです。それに感謝していただけないから怒るなんて、筋違いと言うものです。」

いえ、そうではなく！」

「確かにこれらが皇帝陛下からというのは偽りですが、許可証は本物ですよ。ですから陛下も私が何をやる気かはお分かりでしょう。それに」

言葉を区切っていたずらっぽく微笑むシンレットが続けた言葉は、少なくともシヨウコにとっては予想外のものだった。

「男に一度出したものを引き下げるとは。そちらのほうは余程残酷なお言葉ですよ、皇后陛下」

一瞬虚を突かれたような顔をして、それから花がほころぶようにふわりと笑った。

「皇后陛下、貴女は本当に不思議な方だ」

「そういったご感想を頂くのは、初めてです」

どこがでしょう、とでも言いたげにぬばたまの黒がさらりと流れる。

「陛下はやんごとなきお生まれで、人に傳かすかれて生活なさるのが当

然のお方です。この国にいらした後も、不自由な生活は送っていらつしやらなかつたはず。

それなのにどうして他の姫君とは違うのでしょうか。これらの調度品だって、いやそれ以前に後宮での待遇からして耐えられるものではないでしょう。

そのご気性は、陛下が異国に嫁がれたということにより獲得なされたものでしょうか」

穏やかなだけではないし、優しいだけでもない。聡いことは確かだが、そうだと思えば先程のようなことを真顔で聞いてくる。

精神の釣り合いが取れていないような、何か核となる部分が揺らいでいるような。それが魅力的でもあり、危うくも恐ろしくもある。

「……。」

「申し訳ありません、お気を悪くされたのなら……」

慌てたように首を振る。そのたびに結われていない髪がさらさらと音を立てた。

「そうではないのです。……あの、シンレット殿。お時間はございますか？」

「皇后陛下？」

「その呼び方、変えていただけませんか？勿論、私の立后に反対している方々への牽制というのは承知しておりますが、この場ではあまりに堅苦しいわ」

困ったように微笑むシヨウコが話をそらしたことは分かっていたが、あえて追求できるほど親しいわけでもない。

「陛下が私のことを呼び捨てになさると言うのなら、私も考えましよう」

そうでなければ釣り合いが取れませんかと続けると、それは無理と即答された。

「でもお茶くらいは一緒に一緒にいたただきたいわ。よろしいでしょう？」

真新しい椅子を勧めるシヨウコに、シンレットは頭の中で予定の

組みなおしをしながら頷いた。

もう少しだけ、この妙な人間と話をしてもいいかもしれない。

シンレットが去った執務室で、レイヴスは一人まとまらない思考をもてあましていた。

第二皇妃であるあの姫を正妃にし、立后させることは政治的決定事項だ。大局をみればそこから得られる利益は莫大であり、瑣末な反対があろうとも変更するつもりはない。

しかしその他は避けようと思えば避けられる事項だと分かっている。

面倒な貴族の対応までして何もあの姫を国政に参与させる必要などないが、それに踏み切れないのは少しでも興味があるからだ。

しかしその興味が具体的に何であるのか、将来的にどう変化するのか。それは全く見えない。この件に関してはシンレットの立場も不明確だ。

自分の苛立ちの原因も分からないまま、レイヴスはくしゃりと髪をかきあげた。

「失礼します、陛下」

「…入れ」

静かに入室してきた近衛兵の手には、大きな箱があった。

「こちらの鷹ですが、いかがでしたでしょうか。外傷が大きく剥製にすることも難しいと言っていますが……」

「……開けてくれ」

「しかし、不浄のものですので……」

躊躇う様子に構わないと仕草で告げた。

死が不浄というのならば生こそ不浄だ。そこに向かっての旅路で

しかないのだから。

兵士が恐る恐る机においた箱を覗き込むと、そこには既に事切れ見事な羽を血で染められた鷹が横たわっていた。

その胸には恐ろしいほどの確に、一本の矢が深々と突き刺さっている。無残な姿に意識せずに眉根が寄った。

この鷹が従ったのはただ一人。それは自分ではない。

力なく横たわるその姿に、何故か過去の面影がだぶる。

「……捨てておけ」

そうでなければ、囚われる。

面影が実像を結ぶ前に、見えないところへ。

「しかし……。よろしいのですか？」

「構わない。犬の餌にするなり竈にくべるなり、好きにしる」

「お言葉ですが陛下、この鷹は」

「くだい！」

投げやりな皇帝の様子に食い下がった兵も、流石に言葉を失って退室していった。

再び一人になった部屋で、レイヴスは倒れるように椅子に腰を下ろした。久しく感じなかった頭を締め付けるような痛みが、唐突に襲ってきた。

「父上……、貴方は……」

やがてその言葉は広い部屋に滲み、そして消えた。

「皇后陛下は、弓はいつから習われたのですか？」

家具が揃ったばかりの応接間には、華やかな茶の香りが舞う。その湯気の向こうで手ずから侍女の空の器に茶を注ぐシヨウゴに、シンレットは比較的当たり障りのない話題を振った。

正直、いろいろと聞きたいことはある。例えばどうして大臣と皇后（現在は皇妃であるが）が着いている席に、当たり前のように侍女が座っているのか。例えばどうして主であるはずの皇后が甲斐甲斐しく侍女にお茶を注いでいるのか。更には何故二人ともそれを当然のようにしているのかなど。しかしあまりに泰然とした侍女の様子に、何も聞くことが出来ないのだ。

「弓ですか？あれは…国にいた頃に少々」

「あちらでは女性も弓や剣を扱われるのですか？」

暗に、そういったことは聞いていないという声にシヨウコは苦笑した。

「いえ、弓は神事に使われることが多いので。私が斎宮様…国で神事を司る方のお傍にいたときに」

「では実践向けではないのですね」

少しがっかりしたような声に、それまで黙っていたアオが牙を剥いた。

「当然です！姫様に何をさせるおつもりですか?!」

子犬が飛び掛ってくるような様子に、シンレットは降参とでもいうように両手を軽く挙げた。人を馬鹿にしたようなその態度にアオが声にならないうなり声を上げるが、それは二人いよって無いものとして扱われた。

「滅相もない。ですが、よくそれで迷いもなく射ることが出来ましたね」

感嘆とも呆れとも取れるシンレットの言葉をシヨウコは笑っていなした。

シンレットの言葉にいちいち反応しては、頭がいくつあっても足りない。どうやら本人もすべてに答えを求めているわけではないらしいということは、話をしていて分かってきた。

「見事な鷹でした。どうして急に暴走したのか……」

「それについて詳しいことは分からないのですが、ドープに知らせを持ってきたときは普段と変わらない様子だったと言うことです。」

特に年をとって耄碌としていたわけでもありませんし……」

「では、ドーブで何者かが遅効性の毒でも仕込んだのでしょうかね」

あえて言葉を濁したシンレットだったが、その濁した部分をアオはあっさりと口にした。

「……そこまで物騒な話だとは思いたくはありませんが。」

先代皇帝陛下が可愛がっていた鷹ですから、皇族に対する反逆とも取れませんし、事によっては皇帝陛下や皇后陛下に害が及んでいたかも知れません。はっきりとするまでは陛下も身边には十分ご注意くださいとしますように」

分かりましたと頷こうとしたシヨウコを制して、アオが再び牙を剥く。

「でしたらケンを姫様の警護につけてください。気をつけろといわれても限界があります」

「……ここは後宮なのですが……」

「そうですね。でもその後宮に貴方は今いらっしやるじゃないですか」

「ケン・シヨート殿は今のところ兵士として所属が決まっています。そういった者を後宮の警護につけるには、それ相応の有事でないと難しい」

「後宮の警護ではなく、姫様をお守りするためです。彼は姫様の騎士です」

シヨウコが口を挟む間もなく、会話はどんどん進んでいく。

「それに、私からすればこれは十分に有事です！立后を控えた方にこんなくだらない仕打ちをするなんて、何かあってからでは遅いのですから。」

こんなことでは、リュミシャルという国の格が知れるというものです！

「アオ！」

鋭い声に流石にアオも押し黙る。

シヨウコはシンレットに向き直ると、非礼を詫びて頭を下げた。

「行き届かず申し訳ありません。私の不徳です」

「お気になさらず。陛下を思つてのことでしょうから」

「お恥ずかしい限りです。ご厚情にお頼みして、聞いていただきたいことがあるのですが」

「何なりと。ご意向に沿えるかは確約いたしかねますが」

「ケン・シヨートは武術に優れた者です。お役立ちになることもございましょう。よろしくお引き立てください」

「我が国の兵も刺激を受けるでしょうし、本人の希望も聞いて所属を決めましょう。ご心配には及びません」

ほっとした様子のシヨウコに、シンレットは紙の束を差し出した。

「これは？」

「お読みいただければお分かりになることです。お伝えいたしますが……。陛下の立后に異を唱えているものは少なくありません。これはそういったものたちからの皇帝陛下に当てた陳情書です。これらの者を納得させるのは、容易くはないかもしれませんが、後宮には手

もちろん出来ることはすべてお助けいたしますが、後宮には手の届かない場所も多い。十分にお気をつけ下さい」

一応信頼できる女兵士を部屋の外に待機させておきます。そう言い残してシンレットは表へと戻っていった。

蝶の戦場 2 (後書き)

すこし前回から間が開いてしまいました。申し訳ありません。

よろしければコメントなど一言お願いします。

戦場のその裏

砂漠は一日の寒暖の差がとても激しい。昼は肌を焼くようだった太陽も風も、夜には驚くほど冷え込む。

ドーブの町を出たのは太陽の昇り始めた時刻だった。

とても皇帝と皇妃の出立とは思えないほど、静かな、そして小さな隊列が用意されていた。シヨウコ様は白い息を吐きながら外套の前を掻き合せて、しかし毅然と用意されていた輿に乗ることを断った。

「陛下が馬で行かれるのに、どうして私が輿になど乗ることが出来ましよう」

「ならばどうする。歩くだけでも言うつもりか？そのほうが余程こちららは面倒だ」

呆れたようにシヨウコ様を見下ろす皇帝を、一瞬おかしく思った。権力者は時に傲慢で無知だ。あるいは自分に都合の悪いことは消去する頭が出来ているのか。馬に乗る技術はもともと我が祖国オースキュリテで発達したものだ。馬術でリュミシャルに後れを取るはずが無い。

シヨウコ様も考えは近かったらしく、苦笑しながら愛馬の「時雨」に鞍を付けるよう兵士に命じられた。

「最近あまり乗っていないのですが、おそらく身体は覚えているでしょう。ご迷惑はおかけいたしません」

「……勝手にしろ。足場が悪い。無様に落ちるなよ」

「ご心配頂いて、恐縮ですわ。陛下」

そう言ってシヨウコ様はひらりと馬にまたがった。様子を確認めるように数回時雨の首を叩き、久々に主を乗せたことを喜ぶ馬を静められる。

「皇妃様が馬を操られるとは、意外ですね。これならば荷物はともかく我々は予定よりもずっと早く王都に戻れるでしょう」

そう言ったのはおそらく銀の髪の大臣だっただろうか。興味の範囲外のことなので不確かだ。

「行くぞ」

そう言っただけで黒毛の馬首を返して皇帝が駆け出した。それを大臣とシヨウコ様が追いつき、その周りを少数の兵士が囲むように走り出す。私も後ろにアオを乗せてシヨウコ様の横を走った。

異常が現れたのは、少し走ってからだった。

突然、昨日王都からの文を運んできた鷹が暴れだし、鷹匠の制止も聞かずに脚に巻かれた紐を切って飛び立った。

鷹匠が叫ぶ声に皆が止まり空を見上げると、鷹は時折苦しげに羽をばたつかせながら比較的低い空を旋回していた。

「見て！おつきい鳥だよ！」

その無邪気な声に反応したのは、人だけではなかった。空を旋回する鷹もまた、その小さな存在に気付いたのだ。

普段ならば訓練された鷹は人を襲うことは無い。

しかし暴走した鷹であれば。凶暴な猛禽類の野生が目覚めているとすれば。そうであれば子どもなど簡単に鋭い爪とくちばしの餌食になる。

「厄介な……っ！」

小さく毒づき皇帝が子どもたちのもとへ馬を駆った。数人の従者がそれに習う。

しかしその間に鷹は空を滑り降り、狙いを定めていた。皇帝が速度を上げるが、足場が悪く急な加速は難しい。

「ケン！落として！！」

シヨウコ様が叫ばれるまでも無く、私は弓に矢を番え狙いを定めていた。

確実に仕留められる距離まで、もう少しというときに、残ってい

た従者が私を羽交い絞めにした。

「何を！」

「あの鷹は先代皇帝陛下が飼われていたもの！弓など当たったらいかがるっ！！！」

「……愚かなっ！」

もみ合いの邀撃に耐え切れず、後ろに乗っていたアオが落馬する。

「どきなさいっ！」

その声に振り向くと、シヨウコ様が弓を構えていらっしやった。

腕の力が劣る分狙いは地面近く、子どもたちの頭上。

放物線の間には、皇帝。

「皇妃様っ！！！」

弓が放たれた。

「ああ、ここにいたんだ」

逆光を浴びて馬小屋に入ってきた人物に目を細める。

「シンレット…様でしたか」

「ああ、『様』はいらないよ。君はどうせ皇后陛下以外に仕える気なんか無いんだろ？皇后陛下の飼い犬に手を出すほど馬鹿じゃないからね、安心していいよ」

聞いているのかいないのか黙々と時雨の世話を続けるケンに構うことなく、シンレットは話を続けた。

「皇后陛下には驚いたよ。あの場で弓を射るなんて、まっとうな精神じゃない。もし皇帝に当たったら間違いない戦争になる」

刹那

ケンが腰に佩いていた細身の刀が、狙いをたがわずシンレットの喉元に突きつけられた。

「……白銀の刀身に僅かな反り。オースキュリテの刀だね」

「異常な精神はそちらでしょう、砂の国の大臣。この国では子どもの命よりも鷹が優先されるのか？貧民街の人間は数にも入らないと？」

淡々としてはいるが蔑みと敵意が込められた声音は、よけいに空恐ろしいものがある。

「……君がどんな人間か、少しは分かった気がするよ。」

刀を納めてくれないかい？生憎僕は文官でね、そっちは全く駄目なんだ」

「……試しましたか、私を」

刀を鞘に収め改めてシンレットを見るが、その顔はやはり飄々としていて掴み所が無い。

「悪かったね。まあ仕事でもあるんだよ、君は皇后陛下の護衛候補だからね」

「シヨウコ様は後宮に入られたはず。護衛の必要など……」

言いながらケンは鼓動が早くなるのを感じた。

もし、自分の手の届かないところで何かあつたら。守るべきときに傍にすることが出来なかつたら。

「そんなに差し迫つたのもじゃない、安心していいよ。でもね、後宮はある意味表の何倍も恐ろしい。籠が外れればどうなるか予想もつかない」

「……後宮へ入る方法は？あるのでしょうか？」

「一時的なら簡単だよ、皇帝の許可があればいい。急迫した事態なら僕でも許可は出せる。でも常に皇后陛下の護衛につくならそれじゃ足りないね。」

皇族の専属護衛になるには、騎士長クラスに実力を認められなければならぬはずだ。しかも場所は限定されてる」

面白がるような様子に内心で毒づき、仕草で先を促す。

「御前試合だよ」

「では可能な限り迅速に、用意をしてください」

そんなことか、といった思いが強い。そんなことである場所に戻れるなら拍子抜けするほど容易いことだ。

「君ねえ、簡単に言ってくれよ……」

「貴方も高貴な方の犬に噛まれたくはないでしょう」

呆れた様子のシンレットにそう言って、ケンはずんずん馬小屋の外へ歩き出した。刀の手入れなど、準備は整えておかなければならない。

「あ、そうだ」

のんびりとした声が追ってくる。何のことはない、世間話でもする風を装って。

「まだ何か？」

「あの鷹だけどね、おそらく遅効性で強力な興奮剤を飲まされてい
たって話だけど」

「……」

「君は、何か知っているんじゃないのかな？」

「お役に立つことは、出来ないようですね」

物語の終着を知らない役者たちは、ただ己の役をこなすだけ。しかしその刹那の間、些細な動きが複雑に絡み影響しあう。

既に端緒は開かれた。

しかしそれを知る者は、まだいない。

戦場のその裏（後書き）

10月24日「砂漠の蝶」に「皐月のけやき」を投稿するというミスを犯してしまいました。せっかく読んでくださった方にご不快な思いをさせてしまったことをお詫びいたします。また、このミスを知られてくださった方、本当にありがとうございます。今後はこのようなことの無いよう、きちんとした管理を行っていきたいと思います。

身体を清めて少し休むつもりが、思ったよりも長く眠っていたらしい。目が覚めたのは夕方になってからだった。大きく切り取られた窓から、茜色の夕日が覗く。

ぼんやりとする頭でこれからの予定を立ててみるが、所詮寝起きの頭はまともな働きをしてくれない。それにここはドープとは違い、行動は大きく制限されざるを得ない。

「姫様、お目覚めですか？」

「たった今ね。……寝すぎたみたい」

「いろいろと急なことでしたから、お疲れが出たんですよ。お体の具合はいかがですか？」

アオが差し出した水を飲むと、その冷たさに頭が幾分覚醒してきた。

「大丈夫、心配ないわ」

「ご無理はなさらないで下さいね。それで、ご来客なんですけどどうしましょう？」

暗に断るべきだと告げるアオにも一理ある。

シンレットの機転で事なきを得たが、後宮はシヨウコを認めていない。あんなことの後だけに不穏なものを感じずにはいられないのも仕方が無いことだろう。

しかし、こちらに害意を持つ者がわざわざ敵の陣地に来るだろうか。

「……お会いするわ。どなた？」

「陛下のご側室、シュー様とおっしゃる方です」

ため息とともに、アオが答えた。

「突然ごめんなさいね。でも挨拶がしたくって」

シヨウコが身支度を整えて居間に入ると、妖艶な女性はそう言っ
て笑んだ。

「貴女は…先程の……」

シヨウコを訪ねてきた人物は、挨拶の場で発言した黒衣の女性だ
った。

「陛下の側室のシユーよ。よろしくね、お姫様」

椅子に腰掛けたままの相手にどう反応するべきか。先程の感謝の
意は伝えなければならぬが。

何の気なしに壁際に視線を走らせると、後宮付きの居並ぶ侍女た
ちが一樣に渋い顔をしていることに気が付いた。

「少し庭に出ない？私このお部屋に入るの初めてなの」

確かに皇后の居室には専用の小さな庭が付いているが、所詮は壁
に囲まれた小さなものだ。それほど手入れがされていたわけでもな
いらしく改めて見るほどの価値は感じないが、ここには居心地が悪
いということなのだろう。

頷いて小さな庭へ歩き出すと、すぐに横に並ばれた。

「お姫様は小さいのね。私とも顔半分以上違うもの。陛下と並んだ
ら顔一つ、いえもつとね。陛下は背が高くていらつしやるから」

「私も国ではそれほど小柄なほうではないと思うのですが、リュミ
シャルの方々とは体のつくりが違うのでしょうかね」

食生活や生活習慣も大きく異なりますから。

庭の椅子に腰掛けながらそう言ったが、返された言葉はひどくあ
つさりしたもので拍子抜けした。

「そんな難しい話に興味は無いわ」

「……。ご用件を伺いましょう」

「あら、そんなに怒らないですよ。挨拶しに来ただけよ？

そういえばさつきは凄かったわねえ。いきなり大臣がやってくる
んですもの、皆大騒ぎ。それである荷物でしょうか？貴女に嫌がらせ
してやるうとしてた人たち、悔しがってたわよ。『シンレット様に

取り入るなんて、手が早い！』って」

一方的に展開される話には所々看過できない箇所があったが、相手にはそれをさせないだけの押しの強さがあった。

「あれ、陛下がって大臣は言ってたけど、嘘よね。陛下は女に気を使うような方じゃないもの。あの方そういったことには関心が無いのよ。あ、そうは言っても国のこと以外に何に関心があるのかはわからないけど。ひどい方よねえ」

皇帝に向かって随分な言い様だ。しかしその中に何か親しみが込められているのを感じたので、シヨウコはあえて何も言わないことにした。

ここで不敬だと言う自分は相当無粋だろう。

「陛下に何か期待しちゃ駄目よ」

その言葉はこれまでの話の流れからはそれほどかけ離れたものではないが、声音は大分違っていった。

「それ、は……」

「今までもいろいろな女が陛下に切り捨てられてきたから。結構いるのよね、自分なら陛下のお心をつて女。亡くなった皇后だって始めは自信満々だったもの」

シヨウコは何を言えばいいのか分からなかった。自分はここで皇帝を弁護できるほど、かの人を知っているわけではない。そもそもそれが必要であるのかも判断できない。

「貴女は身分が飛びぬけてるし、勿論国益のことがあるら表面上は大事にされるかも。でもそれ以上を求めたら傷つくだけよ」

「それは…、私が判断することです。ですがシュー様のご忠告は確かに受け取りました」

何とかかそう言つと、知らず知らずに握り締めていた手が包まれた。「ごめんなさいね、こんなこと言つて。でも陛下のご寵愛が特定の誰かに向くことは無いわ。……それはあの方がこれまで歩いていらつしゃた道を考えれば仕方が無いのよ」

包まれた手の暖かさに心がほぐれる。

ああ、そうか。

「シユー様は、私の姉様に似ていらっしやいます」

唐突なシヨウコの言葉にシユーは目を丸くしながらも、微笑んだ。

「そう？どのあたりかしら？年齢って言ったら怒るわよ」

「どこが、と言われると困るのですが。そう、姉様はよく私の手を握って……」

『大丈夫よ、シヨウコ。私がいるわ』

「じゃあ、私たちはお友達になれるわね」

現実に引き戻したのは、弾んだ声だった。

「貴女のお姉様はお一人だけだから無理だけど、お友達にはなれるわ。素敵ね、この後宮でお友達ができるなんて」

そういつてにつこりと微笑み、シユーは部屋を出て行った。後には華やかな薔薇の香りを残して。

遅れて部屋に戻ると、いつの間にか女官長が来ていた。

「女官長、何か？」

この女官長もシンレットが言うところの撤収に協力していたことが分かり、シヨウコとしては警戒せざるを得ない。

「第二皇妃様のお耳に、是が非でもお入れしたいことが」

「……聞きましょう」

強い意志を持ったその様子に、シヨウコは改めて向き直る。

「あの女は…、シユーはまともな人間ではありません。街の娼婦上りの卑しい女です。どうか皇妃様の身边からは遠ざけてくださいますように」

「生まれがどうであろうと育ちが卑しかろうとも、陛下が選ばれた

女性です。私やそなたがどうこう言うような問題ではないでしょう」
内心、盗みや破壊に関わる人間は卑しくは無いのかと呆れるが、
わざわざ更に深い溝を作る必要も無い。シンレットにあそこまで当
てこすりをされれば反省もしているだろう。

「第二皇妃様は、この後宮について何もご存じない。私は皇妃様の
ためを思つてこそ、進言しているのです」

しかし女官長にシヨウコの手加減は通じなかったらしい。10年
間皇妃としての勤めを何一つしてこなかったことは言い訳の仕様も
無いが、流石にこの嫌味を聞き流せるほど今の精神に余裕は無かつ
た。

「女官長の考えは分かりました。私とてほぼ初対面の人間を完璧に
信頼しているわけではありません。…貴女を信頼しきれないのと同
様に」

冷たい視線と声に凍りついた女官長に背を向け、今日からシヨウ
コ付きとなった侍女たちを呼び寄せた。

おそらく今のことで女官長は敵に回してしまっただろう。せめて
生活を共にする侍女たちとは円滑な人間関係を構築したい。

そう決めて次の間に移動し静かに深呼吸をして振り返る。

意識した表情、意識した声音。計算された仕草に態度。それが嫌
味にならない絶妙な匙加減で仕事を頼む。

仕事はシヨウコが休んでいる間に贈られてきた、第二皇妃の帰還
祝いの品々の整理だ。大げさにならないように気をつけても、流石
に王都に住む貴族は耳聡い。豪華な布や宝石は見ているだけでも楽
しいらしく、箱を開けるたびに歓声が上がる。

「皇妃様、こちらはとても大粒ですわ」

「この生地、なんて刺繍が細やかなんでしょう。きつと素敵なお召
し物が仕上がりますわ」

宝石や衣装に大した興味は無いが、主が自分の言葉に合わせて微
笑めば悪い気はしないものだ。加えて気前がいいとなれば、それだ

けで酷い評価はされなくなる。

「この生地はとても素敵ね。でも衣装には派手かしら。皆で小物でも作っては？」

「素敵ですわ、皇妃様。揃いの髪飾りなどいかがでしょうか？」

「飾り紐にしても良いのでは？」

華やかな声に押されるように、シヨウコは苦笑して立ち上がった。「私はこちらの服装のことは分からないから、皆で決めて頂戴。でも完成したら見せてね。お礼状に書きたいの」

その言葉に特に若い侍女たちが色めき立った。どこから縁談がまとまるか分からない。こういった些細なことが意外な結果を生むこともままあるのだ。

あれでもないこれでもない盛り上がる侍女たちを残して居間に戻ると、女官長は退去した後だった。

「……とりあえず、つかみは成功？」

シヨウコが小さな声でもらした疲れは、暗くなり始めた空に溶けた。

蝶の戦場 3 (後書き)

もう11月になりました。列島の割と北のほうに住んでいるので、冬の足跡を感じます。前回の更新からこんなに時間がたったのか！と急いで真夜中にアップしました。

よろしければコメント・ご感想などいただけると励みになります。よろしく願います。

読んでくださる方に最大級の感謝を。

その羽を休めるもの

ばらばらと軽く目を通すつもりが、内容が内容だけに途中で引っ込みがつかなくなってしまう。もっともそのことに気が付いたのは、見るに見かねたアオに「眉間のしわが取れなくなりますよ」と半ば強引に元凶を取り上げられてからのことだったが。

しかしアオの言葉で自分が以外に疲れていることに気付き、用意してもらったお湯を使ってお茶の用意を始めた。

「なんですか、これ。お夕飯の後からずっと難しい顔でお読みになってましたけど……」

リユミシャルの言語を読むことが出来ないアオは首をひねった。

「いえ、文章自体は難しくもないの。ただ内容がね……」

一言で言えば、酷いものだ。

特にこれが皇帝への建白書だと言うのだから涙が出てくる。しかし建白書という手段を使うくらいなら、その理論の出来不出来は別として相手は理論武装してシヨウゴを攻める用意があるのだろう。ならばまだやりやすい。一つつつあるいは一息に切り崩せばいいだけだ。

「内容は分からないですけど、この文字なんですか？私見たこと無いんですけど」

書類を縦に横にしながらなじみの形を探すアオは、なんとも正直すぎる感想を漏らした。

「なんだかミミズが這ったような。そうでなければ絡まった髪の毛みたいな感じですね」

「……あんまりな感想だけど、否定は出来ないわ。あちらで言う草書体みたいなものだけど、それに加えて所々に旧書体も混ざってる。

こんなもので教養をひけらかすべきではないのにな」

「全くだ。それが公式文書なら読む以前にそいつの職を解くのだが」

建白書では微妙なところだ、と扉に寄りかかる人物は続けた。

「陛下！」

その後ろでは侍女たちがおろおろと中の様子を伺っている。それだけでシヨウコは事態のおよそを理解した。事前の連絡も無く、かといってこちらの準備が整うのも待たずに部屋に入ってきていたらしい。

「いらつしやるとご連絡いただければ、こちらでも用意がありましたものを」

「…お前は馬鹿か」

「は？」

その言い草はなんだ、と気色ばむ。一言あれば侍女たちもこれほど気まずい思いをせずに済んだものを。

「何故夜に自分の後宮に来るのに、いちいち断りを入れる必要がある」

「……………」

「何か反論はあるか？」

「……………」

ここは後宮で常に皇帝はすぐ近くに居るのだということに、まだ慣れることが出来ない。しかもここは後宮で、夜毎皇帝が訪れるのは何の違和感もないことだと頭では理解しているが、正直実感が全く伴わないのだ。

ああ、これは。正直相当恥ずかしい。

皇后になることや後宮に入ることは考えても、それに伴う夫婦として生活には全く頭が回らなかった。だって十年も離れていて今更とかそもそもこの人は自分をそういう対象にはしてないような気がするとか、いろいろと言いつつ訳はあるがつまりは怒涛の展開に頭がそこまで回らなかった。考えがそこまで行き着いていたら、二の足を踏んだような気がする。

「会話の相手を放置して思考に沈むのはやめてもらおうか」

「え？あ、はい。いえ、そんなことは」

明らかかな狼狽を示すシヨウウコの頤を捉えて、皇帝は意味深に微笑んだ。

「随分な対応だな、オースキュリテの姫。何も知らぬわけでもあるまい？それらしくしてみたらどうだ？」

続いて耳朶に吹きかけられた言葉と変貌著しい態度にシヨウウコは対応できなくなった。

なに。これ。こういうの、耐性ないのに。

「随分な対応はどっちですか！姫様から離れる！じゃ無くて離れやがれ！」

手近な陶器の置き物を振りかぶって攻撃態勢に入ったアオを、先程までうるたえていたはずの侍女たちが羽交い絞めにした。

「まあ、アオ様！いけませんわ野暮ですわ」

「私たちと一緒に参りましょう？」

「陛下、どうぞごゆっくり」

貴方たちのどこにそんな行動力が。

呆然と見守るシヨウウコを尻目に、侍女たちとそれに連行されたアオは扉の外へ消えていった。

「相変わらず、面白いものを飼っているな」

進められる前に椅子にかけた皇帝は、キャンキャンとわめく仔犬でも見たかのようにこぼした。

「…それはあまりにアオが不憫なおっしやりようです」

「ほう？飼っていることは否定しないのか？」

「それは言葉の彩と……」

そこまで会話してまじまじとシヨウウコは皇帝を見上げた。

「何だ？まあいい。これで皇帝と皇妃が10年間不仲であったという噂は消えるな。あの手合いは反応が読みやすくて助かる」

つまり、芝居だったと。

そうであったなら他にやりようというものがあっただろうに。

「陛下……」

「何だ、先程から」

「私が思いますに、貴方は少なからず最低ですわ」

「……意味がわからんな」

心の底かららしい言葉に、説明する気も起きない。ただ深々とわざとらしいため息をつくに留めておいた。

「そちらの物言いに裏づけを与えてやったつもりだが？ 昼間は随分と好き勝手なことをしたらしいな」

そこを突かれると非常に痛い。確かに皇帝の名前をちらつかせて威圧のような真似をした事是否定しがたい。

「……え？」

小さな呟きからシヨウコの疑問を正確に読み取ったらしく、その答えはあっさりと与えられた。

「『耳』も『目』もそれなりに優秀な者たちだ。妙な考えは起こすなよ」

つまり後宮内部の一見皇帝の目が届かない場所にも変わりに目を光らせ、委細を報告している者たちがいる。

「では、ご存知なのですね」

第三皇妃以下が出迎えなかったことも、皇后の部屋が破壊されていたことも。

しかし今日ここについたばかりの自分には、何も言う資格はない。言おうとした言葉を飲み込んで、違う言葉を吐き出した。

「陛下、御酒でもいかがですか？」

立ち上がってグラスを用意するが、返ってきたのは気のない返事だった。

「いや、構うな」

「ではこちらを。お口に合うか分かりませんが」

嫌がるものを無理に勧める趣味は無いが、皇帝を前にして自分だけと言うわけにはいかない。先程用意していた茶を差し出した。

独特の小さな茶器で入れた茶は少々冷めてしまったが、あまり気

にしないことにした。

「……錦上添花か」

「ご存知でしたか。こちらではあまり飲まれていないものとばかり一見すると茶葉の塊にしか見えないが、お湯を注いでしばらくすると小さな花が三つ茶器の中に咲く。数ある工芸茶の中でも最も美しいものの一つだ。

「…母上がお好きでな。よく飲んでおられた」

「皇太后様が…。初めて伺いました」

もしよろしければ珍しい茶葉などを差し上げたい。そう言いたかったが、皇太后のことを過去形で語る皇帝には言い出しにくく、結局口を閉ざすことにした。

「陛下にお願いがございます」

「欲しいものがあるのなら好きにしる。皇后と皇妃には国の財政から支出が……」

どうやらその手の「お願い」に慣れている様子の皇帝に苦笑しつつ、首を振って否定する。頼みたいのはそんなことではない。

「第三皇妃様方をお招きして、私の帰還を祝う席を設けていただきたいのです」

「ほう？」

「いえ、皆様にお集まりいただければどのような席でも結構です。ご歓談の席と、そうですねお耳汚しですが楽器や歌などを楽しむよ
うな」

できれば表の方々も一緒に。そう言うとシヨウコの意図を察して眉をひそめた。

この方は今日後宮で何があつたのかすべて御存知だ。シヨウコの挑発的な態度も皇后位を譲る心算の無いことも。

この方の本心は分からないけれど、それはきつとお互い様。ただ

現状で分かっている目的が同じなら、そのことについて協力は惜しまないだろう。

根拠は無いがそう信じられる。この方は私の邪魔にはならない。多分その先に全く別の目的があるから。

「…容易ではないぞ、あいつらにしても己の利益が絡んでいる。正攻法で攻めきれるか」

「あら」

極上の微笑に、ほんの少し共犯者の色を落として。

「負け戦はしない主義ですの。どうせやるなら完膚なきまでに、と教わりましたから」

「はっ」

皇帝は呆れたように息を吐き出す。しかしその瞳にはどこか面白がるような色が浮かんでいた。

「……誰に教わった。そんなものを。まさかデデではないだろうな？ロイか？あいつならあり得るか……」。

まあいい。誤った教育方針であるが、その心意気を買ってやろう。ついでにその席に花も添えてやる」

「花、ですか？」

「ケン・シヨートが騎士団長達に喧嘩を売ったらしい。いつでもいいから勝負しろ、と。」

随分甘く見られたものだ、鼻息を荒くしていたな」

それは事実とは若干異なるのだが、間に事態を面白がる人間を挟むと事実が歪曲されて伝わるのは仕方が無い。

「いえ、あの、ケンはですね。確かに気の短いところもありますが、基本的にはいろいろなことに無関心というか、達観したところがあるのでそうだったことは今まで無かったはず…なのですが」

いまいちフォローになっていないシヨウウコの言葉を聞きながら、レイヴスは確信を持ってその言葉は間違っていると思った。

あの男が『基本的に無関心』？極めて限られた分野において洞察

力が無いにも程がある。

あの男の関心は一点に注がれているだけだ。

しかしそんなことを指摘してもどうにもならない。気付くときは勝手に気付くだろう。

「落ち着け、気を悪くしたわけではない。むしろ荒事を好む連中だ、面白がっているさ。」

そういうわけで説明は省くが、シンレットが御前試合を企画しろと言ってきた。前と後、どちらが都合がいい？」

そんな物騒なことを面白がられては困る。出来れば説明も言葉も省かないで欲しいのだが、細かい事情はともかく省かれた言葉は推測できるのでとりあえずはよしとする。

「御前試合を、後にしてください」

迷い無くそう言いきったシヨウウコに、皇帝の方眉が器用に上がる。これは完全に面白がられているな、と思うが仕方が無い。

「結果次第ではさぞかし白けた試合になるか？」

「負けませんから。私も、ケンも。陛下には極上の余興をお約束いたしますわ」

ここまで言い切つてふと思う。

皇帝にとつて第三皇妃はどういった存在なのだろうか。愛情を持って接している女性であるのなら、その人の鼻を明かすような行為に加担させていいのだろうか。

あの方に愛情を期待するな。

皇帝の瞳に特別な感情は伺えない。

シユーが言っていたのはこういうことだろうか。この方は後宮に暮らす殆どの女性に、何ら特別な感情を抱いていない？

「明日からこれを極力目立つように身につけておけ」

そう言つて皇帝は自分の指から大粒の紅玉ルビの指輪を外した。それは大きさもさることながら、質も申し分ないと一目で分かるものだ。「困ります、こんな…」

「ああ、そうか」

何かに勝手に納得した皇帝はシヨウコの手を取ると、外したばかりの指輪をシヨウコの指に嵌めた。

「やはり大きいな。これでは親指にもつけられないか。明日加工の職人をよこすから、好きに台座を作りかえるといい」

確かに金の台座はシヨウコの指には大きすぎた。それ以前に紅玉自体がシヨウコの指より大きい。

問題はそこではないのに。どうしてこの方はご自分の都合を押し付けるのが上手いのかしら。

「陛下、このような過分なものは…」

しかし相手は既に扉の外へ消えつつあった。

追いかけようと立ち上がったが、その拍子に指を滑り落ちていく感覚に慌てて手を押さえた。

「いいか、落ち着くまではそれをつけるのを忘れるなよ」

念を押されてようやくシヨウコは皇帝の意図に気が付いた。

なんて分かりにくい。

でもそれは確かに届いた。

「はい。お氣遣いに感謝いたします」

部屋の外まで見送ったが、皇帝が表へ戻っていくのをみてつい声をかけてしまった。

「これから、まだご政務がおりますか？」

「…生憎、いろいろと面倒が絶えないからな」

間違いなく面倒ごとの一翼を担っている自覚はある。しかもつい先程面倒ごとをまた増やしてしまった。しかしつい顔を曇らせたシヨウコにかけられた言葉は意外なものだった。

「責任はこちらにある。これからも何の憂いも無くとはいかないだろう。面倒をかけることになるな」

「……いいえ、陛下。私は感謝こそいたしますが、そのようなことはあまりご無理を為されませぬよう、お願い申し上げます」

皇帝は何故か意外とも不快ともいえないような、何とも表現しがたい顔をした。それに対して思わずシヨウゴが怪訝そうな顔を返すと、ぽつりと上から言葉が落ちた。

「久しぶりに飲んだが、なかなか良いものだな」

懐かしかった。礼を言う。

決して大きくはない声であるが、確かに聞こえた言葉が自分でも意外なほど心に沁みる。

既に背を向けている歩き始めている相手に、ふわりと笑って礼をとった。

その羽を休めるもの（後書き）

この二人を長々書くのは初めてでした。あれ、主役でしたよね？お二方。そんなことに改めて気付き、愕然。∴反省します。

ご感想・コメントなど、よろしければお願いします。私の唯一貴重な原動力です。

拙い文章ではありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

千箇に乱れて

本格的に始まった後宮暮らしは、思っていた以上に悲惨極まるものだった。

第三皇妃をはじめとするこの国の貴族の令嬢方は、はつきりと対立する態度を表していた。大きく分けてその派閥に属する者が、全体の半分。残りの半分のうち更に半分は静観を決め込んでいて、残りはシヨウウコにいくらか好意的な態度を取る者たちだ。

最も敵愾心を露にするのは、古くからの家柄だが今は力衰えてオースキュリテとの貿易などで殆ど利益を出していない人間だ。まさに第三皇妃はこれに当たり、あちらがシヨウウコを「視界に入れるのも汚らわしい」とばかりに避け続けるので、いまだにシヨウウコはかの御仁をまともに見ていない。

聞かせる目的での罵詈雑言は当たり前前。

冷たい視線と嘲りの笑いなら可愛いもの。

どんどん部屋から物がなくなるので、戸締りと貴重品の管理には異様なほど気を使うようになった。

それでも直接身体的な暴力にまで事が進行しないのは、シヨウウコの首に光る指輪の効果なのだろう。

皇帝から紅玉の指輪を渡された次の朝、皇帝の言葉どおり宝石の加工の職人が訪ねてきた。しかし石も台座の細工も職人が手を入れるのを躊躇うほどすばらしいもので、シヨウウコもあまり手を入れたくないということ意見が一致し、結局は指輪に合う鎖を見繕ってそれに通している。

果たしてその効果は絶大だった。

この指輪は後宮に住む者なら常に皇帝が身につけていたものとすぐに分かるらしく、その皇帝の威光を恐れてか直接的な物理攻撃は今のところ無い。

手さすびに大きすぎる環に指を通して、滑らせる。引っかかるこ

となく滑り落ち鎖で揺れる指輪は、決定的に越えられない壁を見せ付けられるようで癪だった。

「気になるんですか？」

「全然。悔しいだけよ」

苦々しく問いかけてくるアオに、心情そのまま言葉を返した。風がはらはらと頁を捲るが、集中は既に途切れてしまったので

何故かアオは極端に皇帝を敵視している。悲しいのはそれが全く相手に堪えず、むしろからかわれ遊ばれいなされていることだ。

「悔しい？ 姫様は陛下と対等にやりあつてるじゃないですか」

この指輪を渡された夜から、気まぐれに皇帝はシヨウコの部屋を訪れるようになった。多くは夜寝る前の時間に、少し話をしていく。そのあとは表に戻ったり他の女性の部屋で夜を過ごしたり。

「どうかしらね……」

確かに会話自体は同等なものかもしれない。身分も地位もシヨウコが極端に自分を卑下する必要は無いのだから。

しかし、シヨウコの部屋をかの人を訪ねてくるということ自体が守られている証だ。後宮に来るときは必ず立ち寄り、他の女性に用が無くても顔を出す。これによってシヨウコが他の女性とは違う『特別』であると印象付けているのだ。手を出せばただでは済まない、と。

とは言っても自分と皇帝の間には、よく言って『共犯者』程度の繋がりがりしかないと思っている。

国益の代表者。

牽制と人質。

その距離感を誤れば、多大な不利益が双方に降りかかる。自分たちだけでなく、それを取り巻くすべてに対して。

よりその関係を安定させるために、皇后になる。これは双方の利益が一致した結果だ。その皇后の位を賭けた勝負は一週間後。負け戦は絶対にしないが、確実に勝つためのもう一手は間に合うかどうかそれ自体が賭けだ。

未確定要素を心配しても仕方が無い。

そう切り替えてシヨウコは組んだ脚の上に本を戻した。

「姫様、少々お行儀が…」

「……重い本を読むときは楽なのよ」

とはいえ、着物の前が割れて脚が見えるのは確かに如何なものかと自分でも分かっているの、裾を捌いて衣服を直した。

「シユー様とご交流を持たれてから、そういうことに無頓着になられましたか？」

「私はあそこまではいつていないわよ？あれは見ているこつちが詰まりだわ」

「でも後宮は暑すぎますよ。風とか全然通らないし。だからちよつと気持ちにはわかるんですよ」

シユーは日に一回はシヨウコの元を訪れるようになっていた。女官長はじめ侍女たちは彼女のことを悪し様に罵ることはしなくなつたが、それでもシヨウコに向けるもの以上に冷たい視線を投げかけていることに変わりはない。

ただ高級娼婦上がりというだけであの扱いということに、シヨウコは引つ掛かりを覚えている。むしろシヨウコのような身分がないのだから、権力闘争の敵にはなりえないはず。だとすれば彼女は『安全な人間』とみなされてもよさそうなものだが。

「姫様、なんだか外騒がしくないですか？」

「また、何かあつたのかしら……」

少なからずげんなりした調子が出てしまったのは仕方が無い。シヨウコが後宮に入ってから、小さなものも含めれば争いが起こらなかった日は一日とてない。

「……ドープの静寂が懐かしい」

数枚の扉をも突き抜けて響く争いの声に、どこか静かな場所は無いのかと頭が痛くなつた。

「私、様子を見てきます」

シヨウウコはここにいるのだから、原因は他にある。だとすれば冷静に状況を判断できる第三者が必要だ。

「アオ。…からかつては、駄目よ？」

不安げな言葉に、どーでしょーねえと鼻歌を歌いながらアオは出て行った。

最近の後宮での争いの原因は、どう考えても自分が一番多い。

それに対応すること自体は、シヨウウコにとって何ら問題ではない。しかしそれにより快適な生活空間が阻害されることは不愉快極まりないことだった。

この現状を打破するため一週間後に席を設けてもらったが、シヨウウコとしてはその前に片をつけるのが最上の方法と考えている。こちらが負けられない以上、負けを喫するのはあちらだ。

公の場で恥をかかせたいわけではなく、出来ることなら今後友好的な関係を築きたい。そのために第三皇妃との話し合いの場をと機会を伺ってきたが、あちらに徹底的に避けられている以上それは困難を極めた。

時間はもうあまり無い。

とにかく一度、話だけでも出来ないものか。

「皇妃様、よろしいですか？」

「ええ、何か？」

「アオさんが、皇妃様をお呼びするようにと。広間でお待ちですが…」

アオは調停役を務めに行ったはず。理由は分からないながらも、シヨウウコは立ち上がった。

広間に着けば、理由はすぐに判明した。

争いの当事者は第三皇妃とシユウだった。二人はシヨウウコが来た

ことにも気付かず、口論を続けている。それはそれで好都合なので、シヨウコに気付いて礼をとろうとした者達を仕草で制する。

「姫様、お呼びたてしてすみません」

「構わないわ。むしろいい判断よ。やっと第三皇妃様とお話が出来そう。」

「どういう状況なの？」

周囲がざわついているので二人の口論の内容は聞き取れないが、見たところ第三皇妃のほうに食って掛かっているようだ。第三皇妃の侍女たちは主人の怒気におろおろとするばかりで、まったく事態の収集の役には立ちそうに無い。

「それが全然分からないんですよ。シユー様はあれだけ責められているのに、全然堪えていないみたいだし。むしろ第三皇妃様が興奮してて……」

ならばこれ以上聴衆でいてもどうしようもない。これ以上の騒ぎはいくら後宮が閉鎖された空間とはいえ、見苦しい。

「一体何の騒ぎですか？争いの声を聞くと頭痛がするわ」

「シヨウコじゃない。貴女まで出てくるなんて、よっぽど皇妃様のお声は大きかったのね」

事態を楽しむように笑うシユーに、第三皇妃は更に牙を剥いた。

「お黙りなさい、この売女！お前のようなものがここにいることを許されているのは間違えよ！」

「まあ、お育ちが疑われること。それがお上品なお貴族様の言うこと？」

「お前のようなものがあると、帝国の後宮の品位が損なわれるわ！本来ならば私たちを会話することさえ許される身分ではないというのに……！……！」

「私がここにいるのは、陛下のご意志よ？勝手に入ってきたような言い方はやめてくださいな」

この会話には何ら生産性が無い。想像以上に低俗な会話だ。

「このような醜い争いが帝国はもちろん陛下の威信を傷つけると、

お二人にはご理解いただけますか？最低限の分別をお持ちであるならば、即刻不愉快な罵りあいを辞めていただきたいものね」

ため息とともにシヨウコが発言すると、第三皇妃は初めてシヨウコの顔を見据えた。

「お前ごときがしゃしゃり出てくる場ではないわ！敵国の人間に指図を受けるほど、私は堕ちてはいないの」

この言葉に、周囲のざわめきが大きくなった。

オースキュリテは敵国である。未だにそう考える人間は少なくないが、これは決して出してはいけない言葉だ。多くの犠牲を払って築いた和平が、決して恒久的なものではないということは誰もが知っている。

「……不用意なお言葉は、慎まれたほうがよろしいかと。二国間の和平を築くためどれほどの犠牲が払われたか、全くご存じないわけではないでしょう」

この言葉は決定的に間違っていた。シヨウコがそう知ったのは、第三皇妃の目に涙が溜まって、その決壊とともに叫ぶように向けられた言葉を聴いてからだだった。

「犠牲？犠牲ですって？！私がそれを知らないでも？

お前にそれを言われるまでも無い！偉そうな口を聞く前に、お兄様を返しなさいよ！お兄様を失って、それで得た和平なんていらないわ。その和平の結果がお前なら、私はお前を否定するし、それを選ばれた陛下の判断も否定するわよ！！」

「……………っ！」

「お兄様を殺したくせに……………！」

「私はっ、その犠牲を無駄にしないためにここに……………！」
搾り出した正論は、自分でも滑稽なほど虚ろなものだった。

そんなものは何の役にも立たないと知っていても、私はそれに依拠するしかない。存在意義を否定するわけにはいかない。

シヨウコの言葉に反論することなく、第三皇妃は背を向けて走り去っていった。

「……皆、仕事に戻りなさい。今後このような騒ぎのないように」
その言葉に気まずげに視線を逸らしながら人々が散っていく中で、
シユーがその場に留まり声をかけてきた。

「シヨウコ、貴女大丈夫？」

「……何がかしら。全く問題ないわ。騒ぎが静まって何より。」

シユー、貴女も無用な騒ぎを起こさないで」

「私じゃないわ。いつもあちらが突っかかってくるのよ。陛下の寵愛が向かないからって、それは私のせいじゃないわ。選ぶのは陛下ですもの」

「貴女が挑発しなければ、ここまでの騒ぎにはならないはずよ。どうして相手を煽るようなことばかり……」

「だって下手に出るのも癪じゃない。あの人も私も、陛下の女という意味では同等。」

「……私の話はいいじゃない。いつものことだもの」

「この騒ぎがいつものことでは困るわ。この話以上に今しなければならぬ話はないけれど？」

全く視線を合わせようとしないシヨウコに、シユーはため息をついた。

「強がりね、お姫様。それともそれが皇族の矜持ってやつかしら？」
無視して通り過ぎようとした背中に、更に言葉が投げられる。

暴力的なまでの強さをもって。

「あの人の『お兄様』は、あなたの国との戦争で亡くなったの。初陣だったそうよ。帰ってきた遺体は何とか顔の判別がつくくらい、酷く傷ついていたらしいわ。傾いたお家を建て直すためには武勲が必要で、貴族で碌な戦闘経験もなくせに最前線を志願したらしいの。武勲は無理だったけどその忠誠が認められて、あの人は後宮に入れたのね。」

「……貴女は涼しい顔してここにいるけど、そういう人って多いのよ。貴女はそれを、本当に分かっているのかしら？」

「シユー様。それ以上の発言は姫様及びオースキュリテに対する侮

辱ととりますが」

「あら、そんな心算じゃないのよ？ごめんなさいね、アオ」

アオには謝罪してもシヨウゴにはしない。それは自分の発言の正当性を信じているからだろう。

これ以上ここにはいられそうになくて、部屋に戻るためにいつもより少し早足で歩き出した。

「だんまりなのね。所詮貴女の知識は本の中だけで、現実なんて全然知らないのよ。だから私に反論も出来ない。怒ってるくせにね。」

陛下だって貴女と交換に、唯一の弟君を人質にしたわ。憎しみしかない関係なのに、どうして陛下が貴女を皇后にしたいのか分からない。でもそれ以上に、どうして貴女が陛下の横で笑っていられるのが分からないわ」

怒ってはいない。

怒りの感情からここを立ち去るわけではない。

しかし、ここにいて背中を伸ばし続けていられる自信はなかった。

千箇に乱れて（後書き）

個々人によって「正しさ」は違って当然です。絶対悪なんて、そう
そうありません。

コメント・感想よろしくお願いします。「最近あの人が出てない
ぞ、出せ！」とかでもOKです（笑）

引かず靡かず

どうしてだろう。今夜訪ねてくることは分かっていた。

この方を待っていたのかもしれない。だから人払いをして一人部屋にいるのかもしれない。

「派手な喧嘩があつたそうだな？」

灯りをともししていない部屋の中に、隣の部屋の照明が映し出す影が伸びる。

扉を叩いて入室の許可を求めないのはいつものことで、それにもすっかり慣れてしまった。でも開け放つた扉にもたれたままそれ以上足を進めようとしなないのは、この方なりの優しさなのかもしれない。

「いつものことだと言われました。今後は目に余るようでない限り無視します」

背を向けたまま、言葉を返した。喧嘩をしたそうだな、ではなく、あつたそうだなと直接シヨウコのことを聞かない気遣いが痛い。この方がそこまで気を回すくらい、自分の状況は酷く見えるのだろうか。

本当に問いたいのはシユーと第三皇妃の喧嘩などではないだろうに。それを分かっているもシヨウウコは答えをはぐらかした。

その気配を察したらしい皇帝は、徒勞の滲んだため息をついた。

「私に話すことは、何も無いか……」

「……「ごさいません」

何を言えというのだろうか。

戦争の責任は私にはないと？彼女の兄を殺したのは私ではないと？それとも、守って欲しいとでも？

何一つ口には出来ないことばかりだ。戦争の責任はその国を統べ

るものにあるのだから、シヨウコとて幼かったとはいえ皇族として生きていた。そして皇族として戦後の後処理のためにこの国にいるのだから。

「もう一度聞く。私に言いたいことは何も無いのか？」

再度問いかけられた意味がわからない。

わからないながらも必死で別の答えを探すと、出てきたのは一つだけ。

「第三皇妃様の元へ、お渡りください。さぞお悲しみが深いことでしょう」

「……それがお前の望みか？」

躊躇うようにつけられた言葉が意外だった。

おかしいものだ。他の女の部屋へ行けという皇妃なんて、自分くらいではないだろうか。

「はい」

でもそれ以外に言える言葉がなくて。

これ以上話をしていたら、何か言ってはならないことを口にしてしまいそうで。

「……わかった」

その声は酷く疲れていて、もしかしたら忙しい合間を縫ってわざわざ来てくれたのかもしれないと思い振り返った時には、既にその姿は無かった。

「……！」

その時初めて、自分が一度も振り返らなかったことに気付いた。一度も顔を見ていないしみせていないと。

一体何を思っただ部屋を訪ねてきたのだろうか。

何かのついでだったのか、それとも本当に心配して？
分からなかった。自分の気持ちも、相手の思いも。

今部屋を飛び出して廊下に行けば、その姿を見ることが出来るの

かもしれない。きちんと話をする事が出来るのかもしれない。

しかし足は動かなかった。否、動かさなかった。

昼間のことで傷つく資格なんて自分には無い。

第三皇妃に言ったことは嘘ではない。国を背負いここにいる者として果たすべき義務を負うものとして、あの言葉で痛手を受けることは赦されない。

「……立派な理屈ね……」

自分の虚ろな正論を思い返し自嘲する。

自分がオースキュリテの皇族だと名乗ることを不快に思う人間は、おそらく故国にはたくさんいるだろう。

最後の最後になって、切り捨てるために娘と認めた父。

傍にいても触れ合うことが出来ず、この存在で苦しめ続けた母。

鏡を覗けば、今の自分はある頃の母にどんどん似てくる。

『苦しかったら、死になさい』

本当に母を思つなら、なるべく早く命を絶てばよかった。でもそれ出来ず生きながらえて、今は今は顔を見ることも叶わない異国で暮らしている。

そうすることで母は救われただろうか。そうであって欲しいと願うことしかできないけれど。

国に帰ればわからないが、ここでは確かに自分はオースキュリテの直系皇族。

依拠するものは、それしかなくても。

暗闇の中で振り返る気配の無い背中が痛ましかった。

決して弱音を吐こうとしないその強さがかえって庇護欲をそそることに、おそらくは気付いてしまい。

「私に話すことは、何も無いか」

罵ればいい。その権利があるのだから。

国と国の決定に従っている以上、そのこと自体を国の心臓部とも言える王城で否定される謂れは無いと。

「…ごさいません」

しかし返された言葉は、何よりの拒絶だった。無意識にこぶしを強く握り締める。

干渉するなと言いたいのだろうか。時には息苦しくなるほど強く向けられる漆黒の視線は、あまり豊かでない表情を補うように意志の強さを伝えていた。

しかし今はそれが無い。こちらを振り返ろうとしない態度が、酷く気に障った。

「もう一度聞く。私に言いたいことは何も無いのか？」

一言でも罵倒の言葉を聴くことが出来たならば、それで切り捨てられる。

どこか他の女と毛色が違い、こんな短い期間で何故か気にかかる存在となってしまうたが、ただの気の迷いだつたと断じることができ。

「第三皇妃様の元へ、お渡りください」

一瞬、耳を疑った。

「…さぞお悲しみが深いことでしょう」

そんなことが理由になるのか。

今夜第三皇妃の元へ行けば、あちらではこの女がどれほどの悪人

かを言葉を尽くして説得にかかるだろう。虚構も真実も織り交ぜて、どうにかして立后を思いとどまらせようとするだろう。

それはこの女にとって不利益でしかないはずだ。それなのに吹けば飛ぶような理由だけで、その不利益を甘んじて受けようとしている。

「……それがお前の望みか？」

「はい」

常のような覇気は無いが、それでも返事は聞き取ることが出来た。それだけで十分だった。

「……わかった」

これからすべきことがはっきりした。

希望を聞いたのはこちらだが、生憎それに従うことは出来ない。

僅かに乱れた黒い髪が流れる背は動くことは無かったが、その顔を見ずとも既に心は固まった。

「シン、日程の調整は出来ているな？」

あれから足早に後宮を出て、帰り支度をしていたシンレットを無理やり引きずって執務室に舞い戻った。

当然、第三皇妃の顔など見ていない。機嫌をとる気はさらさらないし、報告を聞く限りでは喧嘩ではなく第三皇妃が一方的にまくし立てたようなので大事にしないほうがあちらにも都合がいいだろう。

「僕を誰だと思ってる？主だった貴族の出席も取り付けたし、軍部も演習日程ずらして隊長級は試合準備を整えてるよ」

「よくやった。何日後だ？」

「何もなければ三日後」

「なら三日で片付けることが山ほどある。すべての作業に優先しろ」
こちらの事情を全く考慮しない発言に、シンレットは呻いた。

「何する気？裏工作？それとも買収？」

「そんなつまらないことをお前に頼むか。それにアレは根回しなしで皇后になれるだろう。騎士のほうは知らんがな」

あっさりと言う、資料の束に目を通し始める。

言われた方としては全く急な展開についていけないはずが無い。

「何、その信頼。君ちよつと前まで…うわっ」

言葉の途中で薄い冊子が投げられた。反射的に受け取るが、付けられた題字には見覚えが無い。

「…『林檎についての中間報告書』？」

激しくふざけた内容だ。この王都に林檎栽培など出来る場所があるはずが無い。また、地方の農作物の中間報告に皇帝自ら目を通している暇など無い。

訝しげな視線に気付いたレイヴスは、しかし資料から視線を外すことなく怒涛の勢いで指示を出した。

「それを熟読して法に触れない範囲で厳罰を下せ。出来る限り林檎園の人員は減らしたい。それにロイが中央官吏任用試験に合格したのは何年前だ？たしか10年はたっていないと思うが、一応確認して、もし10年経過していたら無理やりでも来月の試験にねじ込め奴なら一ヶ月あれば首位で合格するだろう。いいな？ついでにケンといったか…騎士任用試験に合格することを前提に所属を決めておけ。騎士団には内密にしる。自尊心を傷つけられたと大騒ぎするに違いない。まあその分気のいい連中でもあるから、ケンとやらが出す結果次第では歓迎するだろう。良くも悪くも実力主義だ。もつとも、奴が出す結果次第ではこの件は徒労に終わるだろうがな…そのときは奴を恨むんだな。四日後に出発できるよう、船の用意を。妥当かつ実直で賢すぎない勅使の用意も。それに持たせる文は用意し

ておく。一応手土産も必要か…急ぎだからな、適度に相手が満足しそうな珍しいものを国庫から適当に選んでいい。質問はあるか？」

息もつかずに流れるように出された指示を一度頭の中で復唱し、質問すべき点を洗い出す。

「船の行き先は？」

「決まっているだろう。オースキュリテだ」

「文の内容はお姫様のことだろ？今更あっちの意見でも聞く気になった？」

「まさか」

シンレットの疑問を一刀両断切り捨てて、レイヴスは鼻で笑った。その顔は一国の皇帝とは思えないほど捻じ曲がった性格に見える。シンレットは嫌な予感に血の気が引き、変わりに夜の冷えのせいでは決して無い震えが足元から上がってきた。

「親書の内容は、アレの立后だ。オースキュリテに勅使が着く前に正式に立後の儀を済ませる」

「最低…」

思わず漏れてしまった呟きだが、シンレットには撤回する意思は無かった。

つまり、勅使が国を出た段階ではあちらの意見を求めるものだが、いざ親書を渡す段になればショウウコは既に正式な皇后となっており、どのように文句を付けられても変更はもはや不可能になっているということだ。

しかしそれは、裏を返せばそこまでしてもショウウコを確実に皇后にしたいということ。

それに気付いたシンレットは、よく知った幼馴染の顔を注視した。

「レイ…君、なんかあった？」

その言葉にようやくレイヴスは顔を上げ、まっすぐにシンレットを見返した。

「お前は、アレをどう思う？」

「…この国の皇后も十分に勤まる。君の横に並び立つ資格さえあるかもしれない」

これまではどちらかと言えばレイヴスがシヨウコを認めていない節があった。だからこそシンレットもはつきりと意見を口にするとは無かったのだが、今夜はどこか様子が違う。

「同感だな」

シンレットの言葉をあっさりと肯定して、レイヴスは立ち上がり窓の外に視線を転じた。

細い、細い、糸のような月が夜空に漂っている。

「アレは己の義務を十分すぎるほど心得ている。そしてそれ以上のことをやってのけるだろう」

今夜部屋を訪ねていったのは、泣き顔が見られるのではないかと思ったからだ。

泣けばいいと思った。あの誇り高い女が泣き崩れる様を見たいと思った。

しかしどこまでも思い通りにならない。

今にも崩れ落ちそうな華奢な背を支えているのは、やはりその誇りと自戒心だった。

自分の思い通りにならない、異色の存在だと思っていた。

しかしそれは当然のことだ。

最初から自分と対等だった。表層を取り繕うことはあっても、決して靡かなかった。

この世に生れ落ちた瞬間からいずれは皇統を継ぐものとして育てられた者と幼いながら万民の命を背負って異国に嫁した者。

「10年間、飼育殺したかもしれないな」

「それは違うね」

はつきりとした否定に振り返れば、シンレットが二つの杯に酒を注いでいた。初物として届いたばかりの献上酒。

「この国での10年が、お姫様を育てた」
差し出された杯を受け取り、軽く持ち上げた。

「未来の皇后陛下に、乾杯」

引かず靡かず（後書き）

久しぶりすぎる更新です。長々お待たせして申し訳ありませんでした。

そして火蓋は

第二皇妃の帰還を祝う宴の日。その後、に予定されている御前試合も相俟って後宮は静かな熱気に満ちていた。

今日の席を字面通りに受け取るものなど一人もいない。今日の席で次に皇后の席に座るものが決まるのだ。つまりそれは後宮の女主人となる者が決まるということ。

ここに暮らす者の中で誰一人として無関心な者などいるはずもなかった。

「やはりこちらのお衣装がお似合いでしょうか」「でも皇妃様は肌が象牙色でいらっしやるもの、薄い色も映えるのではなくて?」「だからこそ濃い色が肌の白さを引き立てるのよ」「でも御髪の色も考えなければね」

賑々しい会話の中で、その対象であるシヨウコは既に疲れきっていた。

自分にとってはこれから本番だというのに、衣装合わせにそれほど体力を使って、今日一日もつのだらうか。一抹の不安が頭をよぎる。

「さ、皇妃様こちらにお着替えください。お色を見ますわ」

当然のように差し出された新しい衣装に、シヨウコの顔は凍りついた。

「…もう、どれでもいいのではなくて?」

「まあ!」

控えめな主張に返されたのは、この世のすべてを嘆くような声と表情だった。

「そのようなことではいけません!美しさは女性の武器ですよ?」

使わないでどうします」

「私ごときでは使いようがないわ。どうでもいいのよ、本当に」

げんなりと呟くシヨウコに対して、侍女たちは顔を見合わせた。

「皇妃様は…何か勘違いをなさっておいでです」

「勘違い、とは？」

「皇妃様はとても美しいですわ。きめの細かな象牙の肌も、神秘的な瞳と御髪も。どうして卑下なさるのですか」

「……ありがとう、うれしいわ」

淡々と紡がれた言葉に、侍女はかくりと首を折った。

「信じていただけませんか…。鏡に見えるままをお伝えしているのですが」

そうは言われても、シヨウコはそれを素直に受け取ることが出来るほど自惚れているわけではない。

自分の身体はリュミシャルの人間のものと比べて小さい。国ではそれほど小柄なほうではないだろうが、そもそも骨格からして違うのだから話にならない。

二国間では美醜の基準さえ違うのだ。こちらでいう女性の美しさが自分に当てはまらないことはよくわかつている。

「さあ、出来ましたわ。皇妃様、お立ちいただけますか」

促されて立ち上がると、この国独特の薄い生地が身体の線に沿って流れた。むき出しになった背中や腕はやはり違和感を伝えてくる。

「お美しいですわ、皇妃様。あちらに決して引けを取りませんわよ」

「……胸元、もう少し上げられない？」

「いけません。鎖骨からお胸元の線を隠すなんて、もったいない」

最後の悪あがきも一蹴され、シヨウコは諦めのため息と共に内掛けを羽織った。

せめて部屋を出るまでは問題ないだろう。

「……。あら？」「まあ」「これは……」「意外ですわ……」
ぼつぽつと咳かれた言葉に顔を上げ、とてつもなく後悔した。
何故世の女性はここまで服や貴金属、化粧に拘ることが出来るのか。

「皇妃様……！」

がしりと肩を掴まれて、反射的に一歩引く。

「私ども迂闊でございました。これほどあちらのお衣装との相性がいいとは夢にも思いませんでしたの……！」

「アオ様、皇妃様のお召し物を出してくださいな」

「腰紐も取りましょう。あちらのお衣装を羽織るなら、帯……だったかしら？そちらのほうが素敵だわ」

「では中の色も薄いものに変えましょう。まあ、この刺繍と染めは見事ですわね。なんて鮮やかな」

「金糸と銀糸の艶やかなこと……。まあ、迷ってしまいますわね」

思わぬ発見に盛り上がる侍女たちにああでもないこうでもないと思わずに散々に弄り回されて、シヨウコの仕度が終わったのはぎりぎりの時間だった。

「姫様、そろそろお席に着かなければ……」

「アオ……つよくも見捨ててくれたわね……」

非難をさらりと受け流され、いつになく乱暴な所作で歩き出す。

「だいたいなんでこんな格好！混ぜればいってものでもないですよ……！」

苛立たしげではあるが、それでもシヨウコは歩き出した。

「姫様、お召し替えなさいますか？」

「……いい」

僅かな逡巡の後、それを拒否する。

遊ばれていた感は否めないが、それでも仕度を手伝ってくれた労

を労うのなら着替えをするのは憚られる。

それに結局のところ服装なんて最低限の基準を満たしていればどうでもいい。

こういう主人の関心のなさがより侍女たちの執念に火をつけるのだが、それには気付かないほうが双方にとって幸せだろう。

「宝石の細工師はあと少しで来るそうですが、お時間の都合で待つことは出来ません。あとでお席にお届けします」

「そう…急な依頼だったもの。何とか間に合ったと言っていていいでしょうね」

淡々と言葉を紡ぐ主人を見て、アオはゆっくりと礼をとった。

10年前に共にこの国に来てから、常にシヨウコはアオの期待に応え続けた。おそらく本人もそうとは自覚しないまま、当然のこととして。

「御武運を、姫様。アオはここでお待ちしております」

また新たな場所へ歩き出す主人に向けて、全幅の信頼と絶対の忠誠を。

シヨウコは軽く顎を引いてそれを受けると、ゆっくりと歩き出した。

10年前のシヨウコを覚えている人間は殆どいなかった。

その人質としての価値は認識されていても、個人としては忘れられたも同然の存在であったと言える。

しかし少女が10年の時を経て、再び舞い戻った姿を目にした者は思わず息をのんだ。

この国にあつては異質な容貌は、決して俯くことなく並み居る貴族たちを睥睨する。

緩くまとめた髪を揺らす風さえ、すべて計算された芸術品を作るためのよう。

そこにはかつて怯え震えていた少女の面影はなく、しなやかさの中にも強さを秘めた静謐の瞳が場を支配する。

数多の視線を集めながらゆっくりと皇帝の前に進み出た。

差し出された大きな手にするりと白い手を重ねて、皇帝に向けて舞の一部を切り取ったかのような優雅な礼をとる。

「本日は」

高くはない、落ち着いた声音が耳に心地よく流れ込む。異質な容姿の人間が紡ぐとは思えないほど、くせのない発音。

「このような席を設けていただき、大変嬉しく思います」

「オースキュリテの姫君。よくこの皇宮に戻ってきた。あなたの英断に感謝しよう。」

これから共に国を治める者として貴女を得たことは私の治世においてこの上ない財産となるだろう」

「ご期待に沿えますよう、鋭意努力いたします。御世の支え、両国の友好の礎となることを御誓い致します」

そして皇帝に促されゆっくりと顔を上げると、手を引かれるままに異国の姫は段に足をかけた。

すなわち、皇帝と同じ高さに。

その僅かな高さの差が何を意味するのか、わからない者はここには一人もいない。

先程の会話とあわせて考えれば、わかるのは皇帝がこの姫を強く望んでいるということ。

リュミシャルは専制国家ではない。基本的には皇帝と元老院の大臣たちが議論で以って国政を担っている。

しかし普段はあまり積極的に行使されることがないので忘れがち

ではあるが、皇帝には大臣の罷免と皇后の選定に関して強い権限が与えられている。それはすなわち、人事に関して殆どすべての権限を持っているということ。すべては皇帝の気分しだいで、盤石と思われていた地位さえ簡単に覆る。

権利を行使しないということは、有していないことと同義ではないのだ。

「皇帝陛下に、敬礼っ！！！」

低い声が響き、鎧が発する硬質な音が重なる。

警護に当たっていた軍が一齐に礼をとったのだ。

武勇を尊ぶ国民の中から選びぬかれた兵士たちを掌握しているのは、かつて共に戦場に立った皇帝。

共に苦難を味わい理解した者として、軍が皇帝に寄せる信頼は計り知れない。

オースキュリテとの戦争に参加した者の中にはわだかまりの大きい者もいるだろうが、皇帝に対する軍の忠誠はそれらを超越している。

一人、また一人と居並ぶ貴族たちが顔色を無くしていく。

これまで若輩と侮っていた皇帝がどれほどの存在かを思い出して

敬礼の姿勢のまま微動だにしない軍部と、青ざめて震える貴族たち。

息苦しいほどの沈黙を破ったのは、激昂した女の声だった。

「ぶざけないでー！！！」

周囲が呆然と見守る中、第三皇妃は血走った目を二人に向けた。本来ならばシヨウコと皇后位を争う場で、皇帝が次の皇后を断定してしまったのだからその怒りはもっともだ。

「陛下もどうかしておいでだわ！この女は敵国の者ではありませんか！本来ならば後宮に入ることさえ叶わないというのに、挙句立后など…！」

どうしてもこの女を皇后にとおっしやるならば、私は後宮を辞す覚悟でございます！」

それは思わず耳を塞ぎたくなるような悲痛な叫びだった。

第三皇妃が自分を嫌っていたのは権力闘争などではなくて、もっと個人的なものだったんだろう。それを自分に向けることが間違いであるということはおそらく彼女も気付いている。その上でどうしようもないのだ。

「馬鹿が…」

シヨウコにしか聞き取れないくらいの小さな声で、皇帝が呟いた。「何がですか」

同じく小さな声で返す。

声音は限りなく冷ややかであるが、傍目には睦みあっているようにしか見えないだろう。

「お前がだ。まさかあの程度で終わると思っていたのではあるまいな？」

「まさか。流石にそこまで楽観的ではありません」

ただ、強いて言うなら周りが第三皇妃を止めてくれることを期待しただけだ。しかしそれもはや期待できないだろう。一度発してしまった言葉は消えてなくなることはない。

「ならば事態を收拾しろ。どうせいずれはやらなければいけないことだ」

軽く背を押され、第三皇妃と向き合う。

周圀は恐ろしく静かだ。第三皇妃の生家はうるたえるばかりで娘を止めることなどできはしない。

ただ一人、皇帝だけが座に直り獲物を検分するように目を細めた。「第三皇妃、アルグリア様ですね？」

苦手だな、と思った。まっすぐ過ぎる怒りは受け止められることを拒むから。

「先程陛下がおっしゃったとおり、私の立后は陛下のご意思です。それに歯向かわれるというのは、お仕えする者として思い違いをなさっているではありませんか？」

また、私自身にご不満があるというのであれば、御気の済むまでお相手いたします。もっともこれは……」

一旦言葉を切り、居並ぶ貴族たちを睥睨する。何を言われるのか察して視線を逸らした者が数名いるのを確認して、目を細めた。

「陛下に建白書をしたためた方々にも、同じことを申し上げましよう。あなた方にご憂慮いただくような存在ではないと、証明すればよろしいかしら？」

私の立后に様々な意見が出ていることは承知しています。意見がある者はこの場で聞きましょう」

言えばいい。
自分の見解に自身と確信があるのなら、怯むことなく口にすればいいのだ。

己を傷つかぬ高みにおいて、傍観者を気取るような真似が通じると思っているのか。その意味では第三皇妃は己が傷を負うことを覚悟の上で声を上げている分、好ましいとさえ思っ。

安全圏から人を見下し遊戯の駒を進めるように人を貶める人間は

多い。

そんな真似を許すものか。

匿名の建白書なんて手段を用いなければ、己の意見を表明することもできないくせに。

「仮面を被ったままで、いられるとでも思っていたらした？」

しっかりと相手を見据えたまま、シヨウコは嫣然と微笑んだ。

「狸共、顔面蒼白。いい気味だね、レイ。

お姫様もよくやるねえ。お人形じゃない証明には十分だ」

いつの間にか一段下で横に控えていたシンレットが喜色満面で呟いた。

確かに面白い。

所詮は異国の姫と侮っていた連中が、揺れる様は面白いとしか言いようがない。

しかしそれ以上に興味深いのは、もともとシヨウコの立后に賛成していた者たちだ。嬉しい誤算、とでも言うところだろうか。笑みを深くした者もあれば、驚きを表す者もいる。

「確かに面白い…だが」

そして誰よりも事態を楽しんでいるのは自分だ。

退屈な日々の中に降って湧いた興味の対象。

助ける心算はない。甘やかす心算も。

アレが己の力で咲き誇るのを見たいだけ。

「……これからだ」

そして火蓋は（後書き）

やっと更新できました。なにやら用事が立て込んでいまして、遅れてしまったことをお詫びいたします。

よろしければご感想など、いただけると励みになります。

燻り焼ける（前書き）

今回ちょっと長いです。

燻り焼ける

「貴女、さっきから何を言っているの！」

その言葉にシヨウコが第三皇妃に向き直ったことで、あからさまに安心したものが何人かいた。それを視界の端に捉えつつも、この声を無視することは出来ない。

「何を…とおっしゃいまして。言葉どおりです。」

私は貴女の口を借りることでしか己の意見を表明できない者が不愉快でならない。彼らが貴女にどのような理屈を話したのかは私の関知することではありません。

ですが貴女のおっしゃることは矛盾に満ちている」

一息に言い切って、一歩進む。

反射的に第三皇妃は縮められた距離を退いた。

「後宮という場に価値を見出しながら、簡単に捨ててしまおうとするのは何故ですか。お兄様のことを大切に思うのなら、家の再興というご遺志をどうして簡単に捨てられるのですか。」

そして…」
どうして陛下を愛していらっしやるのに、政治の駒に成り下がるの。

飲み込んだ言葉が相手に正しく伝わったかはわからない。どちらにしてもそこはシヨウコが立ち入るべき問題ではないだろう。

「家のために立ち回るのは構いません。少なからず必要なことでもありますよ。」

ですが私がお見受けする限りにおいて、貴女は感じることはしていても思考を放棄していらっしやる。ご自分が抱える矛盾を放置して向き合おうともなさらない」

「そんな…ことっ」

「否定なさいますか？何を根拠に？」

弾かれたように第三皇妃が顔を上げた。後宮の女にしては比較的平凡な顔が、困惑と躊躇に歪んでいる。

「貴女が操られていることを理解しているなら、それもよいと思いましたが。でも違った。貴女はご自分が傀儡となっていることさえ、今まで気付いていなかったのでしょうか？」

流星にざわりと周囲がどよめく。

ざわめきが徐々に伝播する中で、その声は不思議と明瞭に耳に届いた。

「思考を放棄した貴女は皇后位に就くに値しない」

すとん、と第三皇妃は腰が抜けたようにしゃがみこんだ。

呆然とシヨウコを見上げる様子を、眉一つ動かさずに見据える。

そこには相手をやりこめという達成感も満足感もつかうことは出来ない。

ただ当たり前の事象を見るように、静謐の瞳があるだけ。

ぱちりと手にしていた扇を閉じる。

その小さな音に反応して、第三皇妃は平伏した。

「貴女に聞きます」

それは既に疑問の体を取っていても、ただ一つの答えしか用意されていないことは明白だ。

しかしそれでも相手に尋ねるのは、己の過ちを認識させるためにほかならない。

「私と貴女で、皇后位に相応しいのはどちらですか？」

さあ、終わりにしましょう。

この茶番劇も、見世物小屋も。

その幕を下ろすのは、始めた貴女であるべきだから。

「……甘い」

ポツリ零された断言に、苦笑する以外に何が出来るだろう。

「その発言だけで、常日頃君がどれほど厳しいのかがわかるねえ」

「甘いという以外に何と言う。どう考えてもあんなものは温情措置だ」

呆れたように、しかしどこか満足げに息を吐く。

「まあ、確かに。ちよつと意外…だったかな」

もつと苛烈な女性かと思っていた。

少なくとも先代皇帝の鷹を射抜いたときの彼女は理性よりも感情で動く印象を与えた。また、後宮で部屋が荒らされていたときの怒りを考えれば、この場で再起不能なまでに追い込むのかと少々楽しみにもしていたのだが。

「わかんないお姫様だねえ」

しかしだからこそ面白い。

ただ単に頭が回らなかつたと言うのであれば納得もするが、おそらくそうではないだろう。

「散々追い詰められて醜態を晒すよりも、自分から非を認めた人間ははるかに高く評価される。ここでアルグリアが謝罪すれば上等な負け方だと言えるだろうな。」

相手に現時点での最良の策を提示したか……。何の意味がある「さあね。僕らにはわかんないけど、彼女にとっては意味があるんだろう」

「どちらにせよ、甘いな」

「確かに。でも嫌いじゃない、だろ？」

それには答えず、満足げに目を細めた。

視線の先では、平伏した第三皇妃が小さくだがはつきりと負けを

認めた。

「私が…間違っております」

生家の人間が青くなつて口を開閉しているが、目に入つてはいないだろう。無論、入っていたとしてももはや負けを認めるしか道は残されていないが。

もうひと悶着ありそうだが、相手の屈服を顔色一つ変えずに受け止める女の方が貴族連中よりもよっぽど恐ろしいではないか。

「第二皇妃様のご立后に賛同の意を表するとともに、両陛下にお詫びと謝罪をいたします」

その言葉を受けた女の表情にはやはり変化がない。

それでは足りない、とでも言うように無言で先を促す。

まったく、とんでもない。のべつ幕無しにあの容赦なさが政務で発揮されたら、何人の官吏が悲鳴を上げるだろうか。間違いなく、閉塞感漂う政に強い風を吹き込むことになるだろう。

第三皇妃も明言しないことには許されないと悟つたのだろう。

疲れたように言葉を紡いだ。

「……私が皇后に、など思い違いも甚だしゅうございました。そもそも私や生家の者が容喙するまでもなく、これは陛下の専権事項でございましたものを…。」

第二皇妃様を推挙なされた陛下のご炯眼に感服いたしました。私など競う資格もございませんでした。愚かな者の行いを、どうかお許しくださいませ」

思ったよりも賢明だな、と思った。

いや、違う。

賢明になつた、のだ。一連のやり取りの中で影響をうけたのだろう。

己の意思だけでなく生家の意思までも口にすることで、今後の影響を最小限に止めようとしている。

「…赦す」

そつけないほど簡潔な一言。

それは一連の出来事が瑣末に過ぎなかったのだという強烈な印象を見るものに与えた。

「さて」

このあたりが潮時だろう。場を収集すべく立ち上げる。

「妃の言つとおり、私も異論があるのならはこの場で聞こう。どうだ？」

あたりを見渡すが、手を上げるものなどいるはずもない。

今まで貴族たちは賛成派も反対派も中立の立場を取るものも含めて、異国の姫を侮っていたのだ。少し前までの自分と同じように。それは10年前までの敵国の皇族を認めるわけにはいかないという無意識の矜持もあつただろう。

しかしこの姫はそんなことを許しはしない。

オースキュリテ皇族という肩書きだけで見ることも、それをなくして見られることも受け入れない。ある意味猛々しいまでの矜持の高さ。

水を打ったように静まり返る場。

かつて暴力的なまでの強さで以って常にこの状況を作り出してきた男がいた。ああはなるまいと思ってきたが、結局は自分も同じ穴の貉か。

「姫、こちらへ」

差し出した手に華奢な白い手が自然に重ねられた。重さを預けるのではなく、触れるだけの強さで。

それがどうにも腹立たしく、強く腰を引き寄せる。

非難めいた視線が送られてきたが、それすら小気味いい。どこの世界に皇帝に抱き寄せられて眉間に皺を寄せる皇妃がいるというのか。

「貴女の教養や母国での立場を確かめる必要はなさそうだ」

建白書の内容に対する当てこすりに、唇が「嫌味…」と動く。

それがどうした。これほど青くなった連中の顔を見るのは久しぶりだ。多少からかったところで問題はない。

「では…」

近衛隊長に向かって軽く手を上げる。

それを合図に、一斉に軍が鞘に納まったままの剣を石の床に突き立てた。突如鳴り響く硬質な音に、腕の中で小さな身体がびくりと一瞬硬くなる。

しかしそれは本当に一瞬で、後は目の前の光景を静かに見据えていた。

貴族たちが一斉に正式な礼をとる。

それは手順も厳格に定められている、皇帝と皇后意外に向けることは許されないもの。

「早急に日程を定めて立後の儀を執り行うとともに、以降内々には第二皇妃を皇后として遇する。これを皇帝の名において発する命とする」

「我々一同、光抱きたる皇国の皇帝陛下の御名において下されましたこと確かに拜命し、皇国の繁栄の約されたこと皇統の系譜の確かなることを刻み、両陛下にお仕え申し上げますことをお誓いいたします」

答えたのはしわがれた声。

その内容は本来はこの場ではなく立後の儀において返されるべきものだ。

いぶかしんで目を向ければ、にやりと笑う老いた顔と目が合った。

狸めが。

「あの、陛下っ」

第二皇妃の帰還を祝うという名目で行われた茶番劇も終わり、一旦午後の御前試合に向けての準備に取り掛かるために奥に入った。同時に下がってきたにも関わらず歩幅という如何ともしがたい現実せいでシヨウコは皇帝からかなり遅れてしまった。まさか廊下を走るわけにもいかないの、頭二つ背丈の違う人間と並ぶことが出来ないのはこちらの非ではないはずだ。

まあそれ自体は何の問題もない。並んで歩いたところで話なんて何もない。

しかし問題は呼び止められて振り返った顔の不機嫌さだろう。

「……何だ」

答える声もまた低い。

どことなく理不尽さを感じずにはいられないが、それを押し込め歩み寄る。何かを察したらしく自然に距離をとる女官は流石皇宮勤めと言ったところか。

「……。先程の返答は、本来あの場で行われるべきものではないのでしょうか？よろしいのですか」

「……。気にすべきことが他にあるのでは？」

「は？」

あからさまに話を逸らされ、訝しく思わない者がいるだろうか。

しかしレイヴスとしても、内々には皇后として扱うと宣言したとしても政治に未だ足を踏み込んでいない相手に明かせない事情というものはある。結果話を逸らす、というよりは答ええないという手段

に出るところがらしいと言えはらしいが、相手にしてみれば馬鹿にした対応に見えるだろう。

「午後に醜態を晒せば、先程得たものなど簡単に吹き飛ばう。何といても基本的には荒っぽい集団だからな。せいぜい番犬を励ましておけ」

加えてレイヴスは今非常に機嫌が悪い。爽快な気分はどこへやら、最後に見たくもない顔を見てしまったことは後悔してもしきれない。しかしそんな一方の事情はよほど親しい間柄でもない限り、言葉にしない限り伝わることはない。そして現状の二人ではそれは望むべくもない。

「……。そうですか」

よって響くのはこの上なく冷え切った声音だ。

「わかりました。余計なことを申し上げたようです。お忘れください。」

……陛下も…皇国の近衛軍があまりに無残なことになるのは軍の統率者として気がかりでございましょう？私からケンによく伝えておきます。

では、失礼致します。皇帝陛下？」

そして場違いなほど仰々しい礼をとって歩き出した背中を、レイヴスは何とも形容し難い表情で見送った。

自分の態度が悪かったことは自覚しているが、あの態度も如何なものか。

しかし今自分が歩き出せば程なくあの背中に追いついてしまうことは明白なので、意味もなく窓の外を眺めて時間を潰し、長い廊下を曲がって姿が確認できなくなったところに歩き出した。

「一体何なの?!あの態度はっ」

後宮に与えられた部屋に戻り、アオ以外の女官を下がらせた後でシヨウコは力の限り叫んだ。

「傲慢厚顔横柄にも程があるわよ人を動物に例えるなんて品格を疑われても仕方がないのでは?そもそも今回が初めてではないことがまた不愉快極まりないわね。思い返してみればドーブで再会したときから態度は決していいものではなかったけれど……」

延々と呪詛を吐き続けるシヨウコに、アオは顔に笑みが浮かんでくるのを抑えられない。

「よかったですねえ、姫様」

「何が?!」

力いっぱい聞き返してくるシヨウコに、アオは本当に良かったと思う。

「山は越したんですよ?安心したからそんなことに気分が逆立つのでは?」

勿論アオはシヨウコの負けなど想定していなかった。しかし事態が急であったことと背後の様々な関係もあり知らず知らずに気を張り詰めていた部分はあったと思う。

思い当たる節があるのか、頬に手を当ててポツリと呟く。

「アオ、私余裕なかったかしら」

「いえ、表面上は余裕綽々でしたよ?でも、お心の中は姫様でも把握しきれないですから」

「……」

俯いたシヨウコはそのままアオの手を包み込む。

「アオ、今回はいろいろ迷惑をかけてしまっでごめんなさい。多分、これからも……ね。」

あらん限りの力でそれに報いることが出来るよう……。ありがとう」

小さな音で繰り返された謝罪と感謝に、アオは手を振り解いてシヨウコに抱きついた。

「アオ?!」

「えへへへへ」

「な、何?」

「今、お仕える方が姫様でよかったなあって思いました!」

えへへへへ、と笑い続けるアオに、シヨウコは意味がわからないながらもとても安心した。周りがどんなに変化しても、アオはこのままでいてくれるかもしれない。

「そういえば、先程細工師が品物を届けに来ました。結局間に合わなかったですねえ、どうしましょう?」

「なくても平気だったし、渡さなくても…。」

ん、やっぱり折を見てお渡しするわ」

細工師の仕事は確かで、十分に満足できる出来栄だ。もとより皇宮お抱えの細工師の仕事が半端なものであるはずがないが、複雑な図面と細かい指定もすべて反映されている。

「失礼致します」

聞きなれない声に反応すれば、入り口に後宮付きでない女官の姿があった。

「どなたですか?」

「表付きの者でございます。皇后陛下にお取次ぎを」

姿が見えている相手への取次ぎというのも妙な習慣ではあるが、アオの誰何への答えは淀みない。先程発せられたばかりの命は既に浸透しているらしいことが呼称の変化でわかった。

「皇后陛下、御前試合で御馬をお飾りする武具を御貸しいただけますでしょうか」

「そう、ね…」

この国が武を尊ぶという一端が現れている文化だろう。

皇帝・皇后が観覧する試合ではそれぞれを象徴する武具で馬を飾

る。馬の見事さは勿論、武具も実用性を兼ね備えながらも美しいものが多い。

「歴代の皇后様は、楯などでした。もし御所望でしたら、私どもでご用意いたしますが…」

シヨウコのためらいを別の方向に解釈したらしい女官の言葉に嫌味はないが、嘲りは隠しきれていない。

「いいえ。アオ、『干将』を」

「……よろしいのですか？」

「ええ、構わないわ」

一旦寢室に入ったアオは躊躇いがちに鞘に納まったままの剣を携え戻ってきた。

「騒がしい？」

「わかりません…どうでしょうか」

剣を受け取り手になじませるように何度か握る。輿入れの際に持たされた古代の名刀。そのうちの一本が陽を属性とするこの干将だ。「これを。唯一つ、これは絶対に抜かないで」

その注意をどれほど女官が本気で受け取ったかはわからないが、あれ以外に選択肢はあり得ない。

「よろしかったのですか？姫様…」

常になく不安そうなアオに苦笑するしかない。

「『時雨』が乗り手無しで落ち着いて携えていられるのは干将しかないもの。仕方ないわ。抜刀さえしなければ問題ないわよ。」

それと、『莫邪』も出して」

干将が陽なら莫邪は陰。全く独立した剣でありながら、長い歴史の中で持ち主が別であったためにはない。

これ以上一体何を、と顔に大書しているアオに言い訳するように呟く。

「だって、退屈にならない試合を陛下が御所望なのよ？莫邪はケンに使うてもらおうわ」

燻り焼ける（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
ご感想をいただけると励みになります。

風に舞う

御前試合は単なる王侯貴族の暇つぶしではない。

武勇を尊ぶこの国においては、そこで戦うことは最高の榮譽であるとともに、そこで質の高い試合を行うことは国の威信でもある。貴人の目にとまれば、一代で財を成すことも位を得ることも不可能ではない。

これまで幾人もの夢を叶え夢を打ち砕いてきたその場所は、戦う者を堅牢な石造りの塀で囲っている。その上に位置する、戦う者を見下ろすように作られた観覧席は、下で行われていることが血なまぐさいことだとは思わせない程豪華な設えになっている。

しかし石塀に滲みこんだ赤黒く変色した跡が、この場で行われていることが現実だと告げている。

この世の対極に位置する二つの場所を繋ぐのは、勝者に榮譽を授けるために作られた階段が一つだけ。

そこは当然に近衛兵が固めている。彼らが守るのは、皇帝の権威だ。

観覧席の高さは人2人から3人分ほどはあるだろう。

居並ぶ貴族に礼をもって迎えられたシヨウコは、皇帝の席の横に用意された皇后の席に腰を下ろした。

闘技場の端には、一人静謐な空気を纏うケンがいる。それが纏う空気は静謐で、異質なざわめきの中でも乱れることはない。

遠巻きに彼を囲む対戦相手たちさえ、今は背景でしかないだろう。おそらくシヨウコの視線さえ、数多向けられる好奇の視線と同様、何ら影響を与えることはないはずだ。

ケンの腕には絶大な信頼を置いている。彼が故国を離れてからも

腐ることなく驕ることなく重ねてきた訓練を、誰よりも間近で見
きた。

更に視線を走らせれば、慣れないリユミシャルの馬具に落ち着
かず、時雨が足元の砂を蹴り上げている。時雨の横に並ぶのは、お
そらく皇帝の馬の頭だろう。どちらもよく鍛えられた名馬である
が、単純に体格のみを競うならば、シヨウコが故国から連れてきた
馬の子である時雨に軍配が上がるだろうか。荷物を運ばせるための
馬を、より早く走らせるための馬として改良した歴史は、必要性に
迫られていたオースキュリテのほうがはるかに長い。

10年前はこの差はもつと顕著であったはず。オースキュリテ本
国では更に改良も進んでいるだろうが、このまま両国の交流が続く
のであれば、追いつかれる可能性は高いだろう。

戦いにおいて馬の差はそのまま機動力の差だ。

遙かに勝っていたはずの10年前でさえ、オースキュリテはこの
武勇の国に何度も追い詰められている。今戦うことがあれば結果は
どう転ぶかわからない。

「何をお考えですか？皇后陛下」

僅かに険しくなっていた目を自然に緩めて、シヨウコはシンレッ
トに向き直った。

「いいえ？文化の違いを感じていたまでです」

「それは興味深い。是非お聞かせ願えますか」

「あちらでは真剣試合を皇族が観覧する習慣はありませんでした。
剣や弓が用いられることはあっても、それはあくまでも演舞。決め
られた型を美しく行うことを競うものです」

柔らかな会話の中でも、一瞬たりとも気を抜くことはできない。
気を抜けば簡単に足元を掬われる。

「蛮習と思われませんか？」

「いいえ、私は文化の違いをお話ししたまで。シンレット殿に詰まらない文化を持っていると思われはしないかと、そう思いました」
「まさか。互いを理解するためには、異なる部分を知らなければなりませんからね」

「ええ。理解のためには必要でしょう」

「はい。皇后陛下は全く聡明な方だ。陛下は両国の架け橋として後世に名を残されることでしょう」

「平和的な相互理解のためならば、いくらでも協力いたしましょう。ですが私がもたらす情報が一体何に使われることやら」

「あくまで、平和的、にありたいものですね」

「ええ、まったくもってその通り」

周囲が顔を引きつらせるほど寒々しい会話に終止符を打ったのは、心の底から呆れた声だった。

「白々しい笑顔で腹の探り合いはそのくらいにしておけ。もっと生産的なことに頭を使ったらどうだ？」

強い日の光をきらきらと纏う髪を煩わしげに掻き揚げて席に着く。

「文化の話をしてきたまでですよ、陛下」

同意を求められたシヨウコも笑顔で軽く顎を引く。別段先程の会話は何か特別な意味を含んでいたわけではなく、皇帝が気にするよくなことではない。

その様子に更に呆れたため息をつく、何を思ったかレイヴスはシヨウコの顔に目を止めた。

「……………」

「……………？」

「……………」

互いに無言で相手を見据えることしばし。穴が開きそうなほど凝視され、シヨウコは流石に気まづくなった。

外されない視線に戸惑い、もしや対象は自分ではなくその後ろにある何かではないかと確認のため顔を後ろに向けると、今度は顎を

捉えられ至近距離でじっくりと検分される。

「陛下？」

「…レイ？」

振り払うことも叶わず、その上、左右に顔を振られシヨウコは益々戸惑った。首の骨が小さく嫌な音を立てたことも、今は全く気にならない。多分後でふつふつと乱暴な扱いに対する怒りは湧くだろうが、とりあえず今は気にならない。

周囲も何事かと固唾を呑んで見守るなか、レイヴスが僅かに眉根を寄せて発したのは意外な一言だった。

「痛まないのか？」

「……は？」

「僅かだが、赤くなっている。日が強いのだろうか？」

そう言って、午前から日の下に晒された肌を指でなぞる。

確かにシヨウコの肌はこの国のものとは全く異なる。日の光に弱いことも事実。

手入れを怠れば簡単に赤くなり、じくじくとした痛みが続く。シヨウコが極力肌を日に晒さないのは慣習の違いもあるが、単に自衛の手段でもあるからだ。

「……っ、問題ありませんっ」

だが、何故それを問うのがこの場なのか。しかも問うまでの過程が絶対的にいただけでない。場の空気を察しろ。わきまえると行って聞かせる大人はこの人のそばにはいなかったのか。

もともと、皇帝と皇后など、その場にいれば視線を集めるのは必定。だからいちいち人の視線を気にしては、王族など勤まるはずもない。しかし貴族たちの興味津々の視線を全く気にすることもなく、相手に迷惑を掛けてやりたい放題というのはどうだろうか。

「問題ない？あるだろう」

「何故っ！」

ここまでくればシヨウコも意地だ。シミになろうが荒れようが知ったことか。

輪郭をなぞる指に動揺しながらも、必死に頭を回転させる。たとえその指が思わせぶりに唇を撫でようとも、頭の回転を止めてはいけない。

そもそも何なんだ、これは。

以前侍女相手に演じた『仲の良さ』を今度は貴族に対して行おうとでもいうのか。

あ のとき、暗に今後こういったことはやめろと言った効果はなかったのだろうか。

「折角の美しい象牙色の肌だ。失くすのは惜しい」

自明の断りでも説くかのように、躊躇いや羞恥を一切見せずに淡々と紡がれた率直な賛辞に、シヨウコは自分の顔が赤くなるのを感じた。

「……、ありがとうございます……ます」

赤く染まった顔と動揺に潤む瞳を堪能し、一人満足げに目を細める。

未だ顎を捉えたままのレイヴスは、日差しを遮るための天蓋の用意を命じた。

「しかし、不思議なものだな。肌の色は我々よりも薄いが、髪の色素はずつと濃い。しかも国では殆どの者が同じ色を持つらしいな？」

……お前を含めて」

最後の言葉はシヨウコに向けられたものではない。皇帝が愉快でたまらないといった表情で視線を向けたその先には、肩で息をしたケンが立っていた。

先程までは下にいたはず。そう思って視線を向けようとすると、視界を紅が覆った。

「？」

紅に控えめに金糸で細やかな刺繍が施された布は、王族のみに許された金色。ということは持ち主は皇帝なのだろう。

視界を確保すべく布を手繰っていくと、その手をやんわりと制された。

「天蓋が出来るまで、被っている。その肌をそれ以上痛めつけることは許さん」

許さないって、別に貴方のものじゃない…。そう心の中で呟くシヨウコを知ってか知らずか、横で事の推移を見守っていたシンレットが、失礼しますと断りを入れて薄い布の裾を整えた。

布の重なりがなくなれば、シヨウコはいささか不明瞭ではあるが視界を確保することが出来た。しかしケンの表情までは窺い知ることが出来ない。

「血気盛んなことだな。それほどこれが大切か」

「……お戯れが過ぎるのではございませんか？」

「その言葉そのままお前に返そう。別段これの身に危険が迫っていたわけでもあるまい。それなのにお前が上ることを許されない階に登り、あまつさえ近衛兵を殴り倒すなど、どういった見だ？」

殴り倒した？ケンが？

まさかと思つて目を凝らすと、確かに階段下を守っていたはずの兵士が倒れている。

国際問題にだけはなつてくれるな、と胸中で祈らずにはいられない。

「2人がかりでも私を止めることが出来なかったのですから、そちらの鍛錬不足が露呈されたではありませんか？よろしければ体力づくりからご教授いたしましょう。」

先日的一件と併せて考えますと、シヨウコ様に危険がと判断いたしました。主を守ることが私の為すべき事です」

「…ケンっ」

皇帝を守るべき近衛軍はレイブス本人が事を楽しんでいることが

わかつているため、ケンを止める様子はない。

これ以上は看過できないと暴言とも言える言葉に思わず制するために立ち上がると、浮きかけた腰を皇帝に強く引かれた。

「っ……！」

体勢を立て直すことが出来ず、そのまま腕の中に倒れこむ。

しかし予想していたような衝撃はなく、額を肩口に埋めるように頭を抱え込まれた。

髪を梳く手に、もうどうにでもなれと思考を放棄する。どうせレイヴスの考えることは、シヨウコには理解できない。

「本当に…お戯れが過ぎますね」

「問題あるまい、合意の上だ」

激しく誤解だ。

これは合意ではなく、単に一時的に抵抗を諦めたに過ぎない。

「仮に合意でないとしても…」

シヨウコの心情を見透かしたように、笑いを含んだ声が耳朵を擦る。

「私たち以上に公に認められた男と女が他にいるか？」

レイヴスに身動きを封じられていたシヨウコには与り知らぬことだが、そのとき照りつける太陽の熱をもともせず、ケンが目を眇めて冷え切った視線を投げつけた。

しかし受ける相手は口元に刷いた笑みでどこまでもそれを受け流す。

「哀れだな、今のお前ではそれ以上距離を詰めることさえ叶わない。悔しければせいぜい足掻くがいい。」

機会はこれから与えられるのだからな？」

安易な挑発に乗るほど愚かではない。

しかし嘲笑を耐え忍ぶほど低い矜持ではない。

「言われるまでもありません」

2人の男の視線が真正面からぶつかり合うが、求めるものはまる

で異なる。

一人はただ主の側にある権利を。

一人は己が求まるものの正体を掴めぬまま、掴めぬからこそ状況を煽る。

「それは重畳。楽しませてもらう」

断ち切られた会話に疑問符を投げかける暇もなく、シヨウコは身体全体に浮遊感を感じた。思わず不安定さにしがみつく、至近距離で布越しに瞳がぶつかる。

その瞳は諸々の事情を映し出していて何を考えているのか断定は出来ないが、ただ一つ、事態を楽しんでいる事だけは見て取れた。

下賜されたベールが風に舞い上がる。

その紅の下、染まることないぬばたまの黒が風に流れる。

黄金の鞘から両刃の剣が抜かれ、陽光と風を切り裂いて光を集め撒き散らす。

その剣を掲げて、レイヴスは高らかに宣言した。

「宴の開始を皆に告げる。

勝者には栄誉と褒章を。

国のため己が欲のため、存分に競い戦うがいい！」

掲げられていた剣が石の床に突き立てられる。硬質な音とともにうねるような興奮を連れて、場の空気が一変する。

方膝をつけ、握り締めた拳を地に。

己が持てる力を皇帝に差し出す、武人特有の礼。

「これより御前試合を開始する！」

近衛軍隊長の声が響いた。

風に舞う（後書き）

三月中に一度更新できて本当に良かったです。励ましのメッセージを送ってくださった方々、本当にありがとうございます。

次の更新は4月中に1から2話かなと思っています。
亀速度ですが、これからもよろしく願います。

風に舞う 2

「……っそれまでっ!!」

審判の手が上がり、同時に歓声上がる。

勝敗は絶対的優性に持ち込むか、相手の身体に任意に巻かれた禪に剣が触れた時点で決まる。基本的には怪我を負わせることは認められないが、攻防の中で故意と認められないものは反則にならない。但し命に関わる怪我を負わせた場合には、負わせた側も力量不足であると認定され反則負けとなり、更に故意が認定されれば処罰の対象になる。

かちりと小さな音を立てて刀が鞘に納まる。

果たしてケンが何をしたか正確に理解できている者はここにどれだけいるだろうか。予想通りの展開とはいえ、シヨウコは愉快的気分になった。

「あれは…何の技だ？」

しかしシヨウコ以上に楽しんでいるのは横に座るレイヴスだ。自国の兵士が次々に倒されているというのに全く気にする様子も無い。読めない人だ。心の底からそう思う。

結局あの後、急に格式に合った大きな天幕を用意することは出来ず、皇帝の席を覆うものが用意された。それならば仕方が無いとそもそもそれほど日焼けを気にしないシヨウコが席に掛けようとする、それでは何の意味がある、陛下と同じ段にいることなどできません、それでは用意のために払われた労力は全く無駄であったな？等々一悶着があり、結局はシヨウコが折れて皇帝の席に上がることになった。

居並ぶ貴族たちのぎよつとした顔や皇妃たちの呪い殺されそうな視線に耐えつつ、シヨウコは無駄に豪華な王族席を恨む。そもそもどうして皇帝一人が腰掛けるのに大人五人は余裕で座ることの出来

る長椅子が必要なのか、全く理解に苦しむところだ。

「…私に話しかけられて上の空とは……、どういう了見だ？」

顎を捉えると容赦ない力で目を合わせることを強制させられた。

意味はないとわかっていても何となく反抗してしまう自分が嫌だとは思いつつも、何故だかこの人の言葉には歯向かいたくなる。

「どういう了見も何も…、ただ試合に熱中してただけですわ」

「どちらが勝つかわかっていている試合にか？勝者は無表情で喜びを表しさえしないのに、何を熱中する必要がある。それとも敗者の呆然とした顔を見るのが楽しいか？」

「…気配は感じてましたが、陛下は性格がひねくれていらっしやいますね」

「ほう？」

至近距離で小声で会話する姿は遠目には仲睦まじい姿に見えるだろう。

しかし2人の間の空気は決して甘いものではない。

「疑問でも推測でもなく断定か。なかなか出来ることではないな」

「推測を重ねた結果です。確信度はかなり高い」

レイヴスは顎を捉えた指で唇をなぞり、シヨウコはレイヴスの手首に渾身の力を込めて解放を試みる。

二人が不毛な争いを続けている間にも、次の試合は始まった。

レイヴスもあくまでシヨウコの顎は捉えたまま、視線を向ける。

両者が動かず、開始早々膠着状態が続く。息を吸うことも憚られないような緊張感。

この場において先手必勝というのは存在しない。

何故なら先程までケンと戦ったものすべてが、その定石でもって敗れているからだ。過剰な意識は悪影響と分かっている、正体不明の技はやはり意識せざるを得ない。

そもそもケンは抜刀していない。少なくともそう見える。

それなのに気付くと切られ、負けている。

相対するものにとって不可思議な状況だろう。

僅かに腰を落とし、刀に手を掛けはしているが一向に抜く気配の無いケンに、ついに若い兵士が耐え切れなくなり切りかかる。

先程の試合の再現のような光景。この時点では誰もがケンの負けを確信するだろう。避ける様子もなく、完全に立ち遅れているように見える。

しかしそれは間違いだ。

一瞬ケンの周りに鋭い光が走ったかと思えば、風圧を感じて後ろに跳び退った相手の兵士の襷が地に落ちて決着となる。

沸き起こるのは歓声とどよめき。

数度同じ技を見せられているのにも関わらず対応が出来ないというのは、武を尊ぶこの国にあっては滅多に無いことなのだろう。

近衛軍の兵士の力が劣っているわけではない。むしろ精鋭中の精鋭であるからこそ試合が成立しているのだ。

「まさか東洋の秘術などとは言わないだろうな。抜刀しているのは間違いない。…鞘から刀を抜く動作と切る動作が不可分なのか？とすれば納める動作までが一連の流れであるか？とすれば一撃で仕留められなかった場合の危険が大きすぎるが…一連の流れを切り離して行うことは出来ないのか、出来るとすれば何故しない…？」

話しかけているのではなく考えをまとめるための言葉であると分かっているから、シヨウコは言葉を返さずに未だ無意味に顎を捉える手を引き剥がした。

正直言つて何度か見ただけの技をここまで分析されるとは思っていなかった。それが近衛軍隊長ならいざ知らず、普段は執務室にこもっている皇帝にまで見破られるとすれば、これ以上披露するのも考え物だ。

「シンレット殿、試合は後何度予定されていますか？」

「意味が無いとは思いますが……9、8、7番隊の代表は敗れていますからあと6人の代表者と近衛隊長の7名です。過半数を倒すか

引き分けとすれば特例により即日皇后陛下付きとなることになっています」

後ろに控えるシンレットは理路整然とした説明をしたが、気になるの一点。

「…意味が無い、とはどういう意味でしょう」

「それは……」

面白がるような視線の先には皇帝。

「じきに分かりますよ」

シンレットが人の悪い微笑を向けると、レイヴスが悔しげに呟いた。

「駄目だ。いくら考えても答えは出ないな」

「じゃあ、行く？」

「といきたいところだが方刃の剣など今すぐには用意できないだろう。面白くないな」

「ああ、それはね」

シヨウコが止める間もなくシンレットは傍らに置いてあった刀を取った。

「皇后陛下がお持ちだよ」

「駄目です！」

二人の会話の内容を理解して、今まさにレイヴスに渡ろうとしていた刀を取り上げた。やったあとで皇后の振る舞いではないなと思っただが、いついかなる時も後悔先に立たず。二人のきよとんとした顔に赤面しながらも刀を抱え込んだ。

「この刀はお貸しすることが出来ません。そもそも慣れない武器を本番で使いこなせるはずが無いではありませんか。大事なお身体に怪我でもなさったらいか致します？」

「見ても分からぬものは、実際に受けてみるしかないだろう？」

「……頭沸いてるんじゃないありませんかっ!？」

シンレットが堪えきれないというように吹き出した。

自然二人に注目が集まる。

「随分な言い様だな。そこまで言うか？」

「言わないで理解いただけると嬉しゅうございますわ、陛下。

数度見ただけの技を興味本位で受けてみるだなんて、国を預かる者の態度でしょうか？アレは加減の難しい技だと、見ていれば気付くはずでしょう？」

「ほう？私が加減が必要なほど弱いというのか？」

「そうではなく！話を逸らさないで下さいませ」

「シヨウコ様、私は構いません」

言い争う二人の会話の間隙を突くように、静かな声が響く。多くの視線が下の格闘場にいるケンに注がれた。

「加減の仕方も多少は心得ている心算ですし…陛下がお望みとあらば、お相手致しますよう」

啞然とするシヨウコを尻目に、レイヴスはシヨウコの腕から刀を引き抜くと、にやりと笑った。

「そこなくてはな？ケン・シヨート。」

私に勝てばその時点で皇后付きを認めよう。手間が省けていいだろう？」

ケンはその言葉を聞き流したのか、黙々と準備に戻った。レイヴスはその様子を楽しげに眺めながら動きを阻む可能性のある装飾品を外していく。

挑発的なレイヴスに対して、ケンの意図は全く読めない。皇帝を相手にするなど面倒でしかないはずだ。もし加減を誤ってしまったらと考えれば、その後の処理を考えれば残り最大7人と戦ったほうが遥かに楽だとケンは分かっているはず。

しかしケンとレイヴスは既に邪魔をするな、と無言で告げている。その上周囲がこの騒ぎを楽しんでいることは容易に察せられた。

「しかし……」

普段持つ剣とは明らかに異質な刀を手に馴染ませながら、レイヴスはくつくつと笑った。

「随分鳴るな。これはなかなか厄介な武器だ」

「分かっているなら何故……！」

莫耶・干将は名刀である以上に妖刀であると言われている。持ち主には栄誉や富を授ける一方で必ずそれ以上の不幸が降りかかるとされてきた。真実を確認することは出来ないが、シヨウコが保有する理由も一時期斎宮としての教育を受けたため耐性があると判断された以上に処分することさえ叶わない厄介品を国外に持ち出したかったという思惑がある。

鳴る、という状態を形容することは難しい。あえて言えば刀が持ち主を認めていない状態、あるいは試している状況だろうか。二刀を操ることが出来るのはよほどの達人、あるいは代々皇族であった。しかしそれを聞いたレイブスはあっさりと言いつつ。

「達人あるいは皇族のみが使える刀だと？馬鹿馬鹿しい。」

皇族が所有する刀に触れる機会があるのが、そういった人間と言っただけの話だろう。刀これ自体は鉄の塊だ。持ち主を識別する力などあるはず無い」

「…先程、鳴るとおっしゃったのは？」

「はっ！扱いにくいという以上の意味があるか？生憎私は超自然的な力と言うようなものを否定する。この目に見えるものだけでも手に余るというのに、それ以上を考える気は欠片も無い。そういう意味では私は神さえ否定する。そちらのお国柄である地ち霊れい精せい霊れい魘い魅み魘も魘つり魘りの類は言うに及ばず…だな」

滔々と語りきったレイヴスの顔はとても落ち着いていて、特別なことを言っているという意識はないようだ。

しかしシヨウコにとっては全く新しい価値観との出会いだっただ。考えてみれば10年間この国にいて、表面的には気を使われていたせいも、価値観の違いによる衝突と言うものは殆ど無かったといつていい。しかしそれは決して不愉快なものではなく、例えるならば長年閉め切っていた扉を開けて部屋に風を通すような、そういういたささやかな興奮と開放感に包まれている。

「なんでしょう…そこまで正面切っておっしゃるならば、どうぞ自由という気分になってまいりました」

「どうしましょう？と首を傾げると、レイヴスはそれでいいと笑った。

「そうか。この方は私とぶつかることを恐れないのだ。徒単に對等であるということは、こんなにも面白いのか。」

「下の準備が整ったらしく、歩き出したレイヴスは数歩で振り返った。

「この勝負の褒美はどうする心算だ？」

「褒美、ですか？」

「アレはお前のために戦っているのだろう？まさか皇后付きという役職だけでは面白くない」

「何でも構いません。私に用意できるものならば」

「あっさりと言いきったシヨウウコにレイヴスが訝しげな視線をよこす。その意味は随分大きく出たな、か。あるいは無責任なことを言うな、か。」

それに対してふふんと笑い返す。

「褒章のことを考えるなんて、陛下は負ける心算でいらっしゃるのね。ケンはあまり無茶なことは言いませんから、望むものを渡します」

僅かに眉間に皺を寄せて、低く返す。

「…その喧嘩、買おう」

「短気は損気と言いますわ」

「沈黙は金とも言うな」

「それに関しては時代や地域で用法に大きな幅がありましたよ」

「言葉通りに受け取ってもらって構わないか？」

「それでは張り合いに欠けるでしょう」

「テンポ良く繰り返される会話に満足し、レイヴスは下に下りていった。」

先程から横で爆笑中のシンレットは既に目に涙を浮かべている。

「……シンレット殿、あんまりでしょう」

「いやあ、すいませつ……くくっ腹筋が……！」

「シンレット殿！」

それきり黙り込みシヨウコは前を見据えた。と言っても仮にも皇帝が使う場所となれば格式を整えるのにも安全を確認するのにも時間がかかるので、試合会場は雑然としていて見るべきものは無い。

「申し訳ありませんでした、皇后陛下。お許しください」

何とか笑いを納めたシンレットが今更ながら居住まいを正して謝罪する。まさか怒り続けるのも子どもに対応だろう。

「……以前から思っていました、ツボにはまると尾を引くようですね」

「以後、気をつけましょう。それで……こちらはお渡ししなくてもよろしかったのですか？」

なんでもない風を装ってシンレットが手にしているものを見て、シヨウコはため息をついた。

だからこの人は苦手だ。

「……いつの間に？」

「先程、ベールの裾をお直したときに。ご無礼かとも思いましたが、お二人の安全を確認するのが臣下の勤めですから」

「返してください」

勿論、そう言ってシヨウコの手に渡ってきたのは懐剣。

一見すればそれほど豪華なつくりではないが、じつくりと眺めればはっとするほど手の込んだものと気付くだろう。白木に粹を極めた彫りの技術の上に、繊細な金と銀の細工が施してある。その楚々嫋々《そそじょうじょう》とした美しさが誰を彷彿とさせるのか

は、口にするまでもない。

オースキュリテとリュミシャルの技術の融合。まさに二人を象徴するに相応しい品。

「素晴らしいものです。あの刀とともにお渡しすれば喜ばれましたよ」

別に刀は皇帝に渡すために持つてきたんじゃない。言葉を飲み込んで苦虫を噛み潰したような顔で呟く。

「こちらにも予定と言うものがありまして。それよりよろしいのですか？私が容喙することではありませんが、皇帝陛下が一兵卒と剣を合わせるなど」

「いいんですよ」

あっさりと言い放つシンレットに、シヨウコは首を傾げる。

「レイにだって息抜きは必要でしょう。久しくレイと対等の相手はいなかった。しかも見たことの無い技まで付いてきた。多分今すぐごく嬉しいんじゃないかな」

表情には出ないですけど、と笑って付け加えた。

「陛下は…お強いのでしょうか？」

「今更ですね、皇后陛下」。

……強いですよ。それがあからこそ歴代の皇帝の誰よりも軍部を取りまとめているんです。もっともレイの望みはそれを使わないことですが」

下の整備が終わったらしく、レイブスが刀と剣を携えて姿をみせる。

シンレットはすっと手を差し出してシヨウコを導いた。

「さあ、前へどうぞ。皇后陛下」。

この試合の褒章は、まぎれもなく貴女なんですから」

禁色のベールを纏ったまま、導かれるままに歩を進める。

会場を包むのは無邪気なまでの興奮。

それに対して向かい合った当事者たちはどこまでも静かで、息が詰まる。

「
始めっ！！」

風に舞う 2 (後書き)

誤字脱字はご連絡ください。
ご感想もお待ちしております。

痴れ者

「始めっ！」

その合図とともに会場は恐ろしいほど静まり返る。

当然ケンには動かない。ここにきて戦法を変えるほど無粋ではないし自信もあるのだろう。

となればまず動くのは皇帝か。「受けてみなければわからない」と言った以上、そうするより他は無いが、ただ受けるだけならば刀ではなく使い慣れた剣で十分なはず。

二人は開始と同じ位置のまま動かない。

ケンは一見無防備な構えをみせているが、それは先程までの試合と同じこと。レイヴスといえば武器の形状が今まで親しんだ型には嵌らないのだろう、一応の構えはしているがそれに違和感を感じていることは明らかだった。

誰もが固唾を呑んで見守る中で、その始まりは唐突だった。

何がきっかけであったのかはわからない。

動いた、と思った時にはレイヴスはケンの間合いに近づいていた。ためのない動作の痕跡は僅かにたった砂埃のみ。

思わずシヨウコは手すりを掴んで身を乗り出す。

後一步。

このまま間合いに入れば斬られる。

「……………っ！」

知らず知らずに手に力が入ったそのとき、金属と金属がぶつかり合う硬質な音が響いた。

一瞬の後、二人の距離は開始と同じになっている。

「……………防いだ……………」

呆然と呟く己の声が今起こったことを伝えていた。

一瞬の静寂の後、怒号のような歓声が上がる。それに比べて当事者二人は一見するとどこまでも静かだ。戦いの緊張感の中にあるのであれば、それも当然だろうか。

「…今、何が起きたんですか」

一歩後ろからシンレットが遠慮がちに声を掛けてくる。

ここにいる者の殆どがそうであるように、認識できているのは結果だけで、経過が導き出せないのだろう。シヨウゴだって居合道を知らなければ目で追いつけることは出来なかったに違いない。

「私もすべてを理解したわけではありませんが…」

特に分からないのは皇帝の足運びだ。あれは自分の中の武道の常識には無い動きだった。

「分かるところだけで結構ですから、ご教唆いただけませんか。恥ずかしながら実際に武器を握ったことが殆どないので…」

この国の有力貴族としてはそれはかなり珍しい経歴だろう。それが表情に出ていたのかシンレットは、笑ってください、と言って自分で笑った。

「これでも幼い頃は鍛錬をしたんですが、あるときレイに無駄だと言われまして。それっきり、今は何とか馬は乗りこなせる程度です」

「無駄……ですか」

「はい。誰もが武器を持つ必要はない、と。剣を握ることだけが戦いではないといわれました」

「陛下らしいお言葉ですね」

思ったままを口にする、シンレットは意外だ、とでも言うように方眉を上げた。

言葉を付け加えるべきだろうかと考えた瞬間、下からぴりりとした緊張を感じて視線を走らせた。

二人の距離が一瞬で詰まり、硬質な音が鼓膜を刺激した。

そこから数度、刀がぶつかり合う音が繰り返された。

「　っ！！」

「…皇后陛下？」

シヨウコは思わず言葉を失い、シンレットの問いかけに答えることも忘れていた。

ケンの型が、崩されている。

それは10年間ケンの鍛錬を見て、あるいは訓練を付けられて初めての見える光景だった。

居合は技の終了とともに刀が鞘に納まるのが常態だ。

それが出来ずに打ち合いがなされるといっことはつまり、技を完遂出来ていないということ。当然レイヴスの動きは慣れていないためどこか雑さが目立つが、それでも一度目に比べれば一連の動作がずっと滑らかになっている。

すごいな、と素直に感服した。

シヨウコが訓練用のケンの型を僅かでも崩せるようになるまで8年掛かった。それを僅か、たった二回の打ち合いで真剣勝負の型を崩して反撃まで加えるなんて。

それは男女の差と言ってしまえばそれまでなのかもしれない。

あるいは如何ともしがたい個人の資質の差か。

いずれにしろ自分とは出来が違うらしいと分かれば、シヨウコにとってもこの試合は自分の物差しでは計れないもの　つまり、管轄外ということになる。

「シンレット殿」

「はい」

「この戦いを分析することは私には出来ません。遥かに私の容量を超えています」

シヨウコは諦めとともに晴れ晴れと笑った。

「陛下はそれでよろしいのですか？」

「ええ」

ここまで圧倒的な差を見せ付けられれば、負け惜しみさえ出てこ

ない。

「私に分かるのは、これまでケンが私を相手にするとき相当手加減していたことと、想像以上に陛下の腕がいいことだけです。それ以上は分からないわ」

貴族席を見れば、あちらでは既にどちらが勝つかと賭けが始まっている。行き過ぎていているような気もするが、突き詰めればこれは娯楽だ。それでもいいと思う。

シンレットも諦めとともにため息をつき、にやりとショウウコに笑いかける。

「では陛下はどちらに分があるとお考えですか？」

「意地悪な質問だわ」

「承知の上で、お伺いしているのです」

「本当に、意地の悪い……」

ショウウコはわざとらしくため息をついた。ベールのおかげで表情が隠れるので、外では檜扇よりも便利かもしれない。

「そうですね………?」

下に目を凝らす。

歓声にまぎれて聞き取ることは出来ないが、二人の口が動いているように見えた。どちらも言葉で動揺させられるような使い手ではない。また、この試合の趣旨からしても相手の動揺を誘うような真似はするはずが無い。

となれば一体どんな会話をしているのか。

「シンレット殿、読唇術の心得は？」

「…皇后陛下は私を何だと思っていらっしやるのか。一度じっくりとお話したほうがよろしいでしょうね」

呆れたように返された返事に、本気でこの人なら出来そうだと思うことは黙っていようと心に決める。

「一体、何を話しているのかしら」

「……さあ」

仮にケンにその気があったとしても、レイブスが教えを請う姿な

ど想像できない。

シヨウコとシンレットが揃って頭をひねっても答えは出なかったが、解は行動によって晒された。

湧いていた会場が先程までとは違うざわめきに取って代わる。

「うわ…レイ、無茶苦茶だよ」

思わずシンレットが呻いたのも仕方が無い。

レイブスは刀を鞘に戻し、居合の構えを取ったのだ。

「受けてみるとおっしゃったのでは？」

シヨウコは思わず手近にいたシンレットに詰め寄った。

居合は受けるよりも行うほうが遥かに無防備だ。

抜いていない状態で至近距離まで迫られるのだから、よほどの熟練者でなければ実践で使おうとは思わないし、思ってはいけない。

それを数度打ち合っただけでなど、無謀にも程がある。

「お、落ち着いてください！レイだって多分死ぬ気はないですし、ほら、あの騎士だって手加減は心得ていると言っていたじゃないですか」

「手加減を陛下がお許しになると?!」

シンレットに罪の無いことは分かっているが、抑えきれず服の襟元を掴みがくがくと揺する。

ケンやレイヴスと比べるまでも無く身体を鍛えるということをしていないシンレットは、抵抗することなくうつろたえるシヨウコを宥める。

「レイが大怪我をしない限り、両国の関係には問題ありませんよ…多分」

「多分、ですか」

がつくり力が抜けたようにシヨウコがうな垂れる。

「レイを止めるのは無理ですし。あ、彼は陛下のご命令なら従うのでは?」

「無理。ケンはああ見えて直情型なの。それに私の言葉なんて陛下

に取り消されてそれで終わりよ」

「意外にレイのこと知ってるんですね」

「……それは嫌味？」

「いえいえ滅相も無い。両陛下の仲が良いことは臣下としては嬉しい限りです」

「……もう、黙って……」

結局はシンレットもこの事態を楽しんでいる。止めに入ることは無いだろう。

シヨウコは踵を返し下で向き合う二人に背を向けた。

「皇后陛下？」

「日に当たりすぎたようですから、影に戻ります」

鈍い頭痛の原因は陽光ではない。しかしこんな興味本位のチャンバラごっこを自分が頭を抱えて観戦する意味も無いだろう。

貴族たちだけでなくレイヴスの側妾たちまで瞳を輝かせている様子を見ると、文化の違い、国柄の違いを感じずにはいられない。

チカリとベールを通り越して目に陽光が突き刺さる。こんな下でよくああも動けるものだ。

思わず目じりを押さえようと手を上げて、ふと違和感を感じた。

太陽はずっと照っていた。

何故、一瞬の光を感じた？

視界を覆うベールを持ち上げて、それを確認した後は身体が意識を置いて勝手に動いていた。

「……っ！」

届け。願ったのはそれだけ。

シヨウコの手から鞘に納まったままの懐剣が、鋭い放物線を描いて飛ぶ。激しい動きにベールが腕に絡まり、そして風に飛ぶ。

「一体何をっ！」

叫ぶシンレットの声が遠い。

届いて。

気配に敏感になつているときに、突如割り込んだ存在にレイブスが反射的に一步退いて刀を振るつたと同時に、先程まで立っていた場所に矢が突き刺さつた。

刀が懐剣を弾く音の派手さが、明らかな殺意を持つて放たれた矢の音に比べて何と不自然なものか。

突然の事態に多くのものが混乱する中、シヨウウコはすばやく視線をめぐらす。

上から皇帝を狙える位置。

それは、どこ？

人々のざわめきが煩わしい。

呼ぶ声が邪魔だ。

そして近衛の見張り塔から小さな影が去っていくことを確認した。

あの裏は　王族管轄の庭園。

「　時雨っ」

走つて追いつける距離ではない。

まだまだあやふやな王宮の地図を頭に描き、そう結論付ける。

「落ち着けっ！…うわあっ！！」

主の呼ぶ声に時雨が手綱を握る兵を乱暴に振り切る。

それを確認してシヨウウコは躊躇い無く手摺を乗り越えた。

「陛下っ！？」

一瞬の浮遊感の後、変わらず時雨の背に跨る。

決して衝撃は小さくないが、そんなことに構っている暇は無い。

「道をあけてっ！」

叫び声や怒号が交わされる中を駆ける。

警護のため今まさに閉じられようとしていた門をくぐり、シヨウ

コは会場を後にした。

「　、　　！！」

騒ぎの中、自分を呼ぶ声が聞こえたような気がした。

時雨を全速力で走らせながら、シヨウコは頭の中に王宮の地図を描く。

あのまま逃走するならば、庭園に出るはず。しかし見晴らしの良い場所を突っ切るとは思えない。見つかる確立を下げるのならば、王宮の外に出るために少し遠回りになっても多くの建物が立ち並ぶ貴人館区域を抜けるはず。

使用人のための小さな道が入り組んだ貴人館区域に逃げ込まれたら厄介だ。当然既に街に続く門は閉ざされているだろうが、そうなれば発見するまで城の中に暗殺者を囲い込むことになる。

最善策は貴人館区域に入り込む前に抑えてしまうこと。

次善策は貴人館区域に包囲網を敷くこと。

現在近衛軍がどのように動いているのかは分からない。となれば今シヨウコに出来ることは限られてくる。

時雨を飾っていた刀を握り締める。

弓を持つ相手に対して、シヨウコが持っているのはこれ一本。もうじき貴人館区域に到達する。そのなかでどうやって接近戦に持ち込むか。

「……っあ！」

思考に沈んだ一瞬の隙を突いて、頬をかすめるように矢が走った。続けて数本、時雨の行く手を阻むかのように地面に次々と突き刺

さる。

「追ってくるな！貴女に危害は加えない！！」

声の主は簡単に見つかった。区域の入り口で弓を構える青年は、どこかまだ幼さを残した声をしていた。

追いつける。

そう判断してシヨウコは時雨に鞭を入れた。

「来るなあー！！！」

再び放たれる矢を回避するために蛇行している間に、青年は姿を消していた。おそらくは区域内に入ったのだろう。

この先の細い道は馬では身動きが取れなくなる。

そう判断してシヨウコは刀を握って時雨から降りて走り出した。

長い裾が脚にからまり、思わず舌打ちをする。風に乱れる髪が視界を悪くした。

追うなど言われて、従えるはずも無い。

シヨウコに危害を加えないと言った声が幼く聞こえれば尚更。

それは年若いからではない。発音にどこかくせがあり、舌足らずな印象を与えるから。

シヨウコ自身必死でその癖を矯正したから分かってしまった。

あの者は、オースキュリテの言葉を母国語にするものだ、と。

貴人館区域の細く入り組んだ裏道を駆ける。

行き止まりにぶつからないように方向を確認しながら逃げる者と、道が交わるたびに姿を探す追う者はどちらが有利なのだろう。

細い道で弓を引かれれば逃げる場所は無い。確実にシヨウコを殺

すことが出来る。それなのに実行しないところを見ると、あの者には本当にシヨウコを害する意図はないらしい。しかし道の脇に積み上げてある樽の中身で進路を塞ぐ様子などを見ると捕まる気もないようだ。

これだけの時間が過ぎれば、近衛軍は間違いなく徐々に範囲を狭めながらこの付近を搜索しているはず。とすればあの者と話が出るのは今しかない。

これは賭けだと自覚しながらも、シヨウコは裏道から抜け一際大きな屋敷の前の広場に出た。

このあたりの貴人は先程まで行われていた御前試合を観覧しているはずだ。話を聞かれて困る人間はここにはいない。

「出てきなさい！」

空気を吸い込み、何年かぶりに祖国の言葉を口にした。

建物に反響しながらシヨウコの声が響く。

返る声は無いが、聞こえてはいるはず。

「私は貴方と話をしなければなりません！」

ぎりぎりの状況になってもシヨウコに弓を向けることが出来ないならば、相手はオースキュリテ皇族のために動く者なのだろう。その命を無視することは出来ないはずだ。

「…内親王殿下」

僅かな躊躇いの後に返された声には、戸惑いと不安、そして歓喜が織り交ざっている。故国では皇族が人前に姿を見せることは滅多に無く、声を聞くのは極近い者だけだ。皇族のために強国の皇帝の暗殺まで請け負う者が、その誉れを無視できるはずが無い。それがシヨウコの勝算だった。

「何故、あのようなことを。誰の差し金ですか」

「…殿下の恩為を思えばこそ」

何も語る気はないらしい。それは予想通りだ。

「私のために、貴方が動いていると？」

「……すべては故国の為、皇族方のため」

「その言葉、信じてもよいのですね？」

この者は末端だ。

シヨウコを皇族の一員とみなしていることが、その何よりの証明もともと語るべき情報も持っていないのだろう。

しかし逃がすわけにはいかない。

情報を持っていないと知りつつ会話を続ける理由は一つ。

僅かに反響する音の出所をさぐる。

「この身のすべてに誓って」

「……そこっ！」

「……ぐうあっ」

振り向きざまにシヨウコは檜扇を投げつけた。

その見かけからは想像できない低く重い音が響き、耐え切れずに膝を付いた。

ゆっくりと歩み寄ると、投げつけた扇を手に取り先程まで会話をしていた人物の首筋に刀を当てる。

「生憎、貴方のような手合いには事欠かない身の上なの。特注品だから、それなりに攻撃力あるわよね」

中に金属を仕込んだ扇を帯に差し直して見下ろした顔は、当然ながら見覚えの無いものだった。

「リュミシャル皇帝陛下暗殺未遂について、釈明があるのならば聞きましょう」

「……内親王、殿下」

言葉が続く前に、大勢が近づいてくる足音と金属が擦れ合う音が聞こえた。時期にここにたどり着くだろう。

「貴方が行くべき場所は法廷です。貴方が知るすべてを話しなさい。我が国とこの国は和平を結んだのですから、貴方の行為は詳らかにされなければなりません」

言いながらもシヨウコはこの者に用意された道は処刑以外ありえ

ないことを知っていた。また、法廷で裁かれることになればオースキュリテが一方的に不利であるということも分かっている。

オースキュリテ皇族としてはこの場でこの者を殺すべきだ。

「殿下。それは…殿下が取るべき行いではございません」

暗にこの場で自分を殺せと言ふ言葉に、シヨウコは首を横に振った。

オースキュリテ皇族として動くか、リュミシャルの皇后として動くか。それらが現在両立しない。どちらとも決めかねるから、決断を先延ばしにしようとしている。

「私は…卑怯なのよ」

足音がどんどん近づいてくる。

もう決断までの時間はない。

ふと青年が微笑んだ。

それはこれから待つ事態を考えれば、恐ろしく不似合いな表情で。

「一点の後悔もございません」

何を、と問い返す時間は無かった。

「いたぞ！」「捉えろ！」「皇后陛下！…ご無事でっ！！」「回り込めっ！」「陛下…！！」

近衛兵たちが近寄る中、青年はシヨウコに向かって弓を引く。

その動きに反応したのは長年の習慣と反射だった。

喧騒の中生暖かい鮮血を浴びながら、シヨウコは青年の首が転がるのを無感動に眺めた。

痴れ者（後書き）

更新が亀速度で申し訳ありません。
もつしばらくの間こんな感じになると思います。

痴れ者 2

長い袖を風に翻して、鮮やかな色彩を撒き散らして。

蝶が舞い降りたのか、と。

オースキュリテの姫に再会してからというもの、退屈を感じる「
とが無い。

以前は慢性化した病のようにレイヴスに付きまとっていたものが、
すつと消え失せた。

信じられないほどの気分の高揚。

物珍しさからでも側に置くのも悪くは無いついていたのに。

あの時心底肝が冷えた。

躊躇い無く手摺を越えて、空中に身を躍らせた姿に。

何故、お前が動く。

ぎりりと奥歯を噛みしめた。

危機を知らせた。それだけで十分なのに。

何故、この場で最も守られるべきお前が動く。

走り去る馬の背に叫んだのは、驚くほど余裕の無い声だった。

「　　っシヨウコ！！」

慌しくしかし迅速に周囲に人の壁が作られていく。

それが必要なことだとは分かっているが、身動きの取れない状態
に思わずレイヴスは顔を歪ませた。

次々に指示を飛ばして近衛軍を動かしながら、レイヴスが感じたのは抑えきれない苛立ち。

それは後先を考えずに飛び出していった愚か者に対してなのか。

それとも即座に動くことが出来ない不自由な身の上に対してなのか。「考えられる場所はすべて押さえろ！皇后の安全を最優先し、痴れ者の生死は考えなくていい！」

細かな采配は部隊長に任せ、馬に飛び乗る。

「シンレット！！」

喧騒の中にも関わらず、検問の警備指示をしていたシンレットが振り返る。

「この場の指揮を任せる！動きがあれば狼煙で知らせろ！」

「御意っ！！」

普通であれば圧倒的に足りない言葉も通じる間柄というのは心地よい。次に相手が何をするのか手に取るように分かるから、全体の予測も出来る。

しかしそこに不確定分子が一つ加われれば。

ふざけるなどと思う。

予定調和を乱して楽しんでいるのか。

しかしそれ以上に。

無事でいろ、と切実に願った。

願いは届いたのか、それとも届かなかったのか。

レイヴスは、頭の無い身体から吹き出る鮮血を浴びて立つシヨウコの姿を形容する言葉を持たない。

哀れ、でもなく。

強くも無く。

惨い、とも言えない。

ただ己の命を守るために当然の行為の結果を受け止めているだけ。そう見えた。

ふとシヨウコが歩き出した。

一部の者は倒れるのではないかと案じて歩み寄ろうとしたが、その足取りは確かでその雰囲気は近寄ることを許さない。

しかし次の行動には多くのものが息を呑んだ。

転がった首のすぐ横に膝をつく、何か小さく呟き、首を切り落とした手と同じ手で優しく見開かれたままの臉を下ろす。

それは間違いようも無く、死者の冥福を祈る行為。

はじめは小さかったざわめきが水面に広がる波紋のように、徐々に大きくなっていく。

象牙色の肌は赤く染まり、緑なす黒髪が地に付くことも厭わず。その姿は敬虔であり残酷だ。

次第に温かさを失っていく首に何を思うのか。

「皇帝陛下のお命を狙った痴れ者に……」「皇后陛下は一体何を」「まさか……」「あちらの差し金なのか?」「いやしかし……」「首を取ったのは陛下ご自身だぞ」

だんだんと大きくなっていくざわめきに、レイヴスはため息を吐いてから声を上げた。

「道をあける！」

弾かれたように人並みが割れる。それを機にまた周囲は静寂に包まれた。

歩み寄るレイブスにシヨウコは顔を上げると、すつと略式の礼をとる。

「申し訳ありません。生かしたまま捕らえることが出来ませんでした」

「構わない。どちらにせよ自白するような甘い訓練は受けていないだろう。」

それにしても…随分派手な顔になったな」

言葉も震えていない気丈な様子に苦笑して手を伸ばすが、それはシヨウコに拒まれた。

「……。いけません。御手が穢れます」

それが言い訳に過ぎないことは分かっていたが、レイヴスはそれ以上問い詰めることをせず、骸に向き直った。

「何か言っていたか？」

「いいえ」

早すぎる否定はそれ以上踏み込むな、と暗に告げている。

「ならばいい…。皇后に聞くことはもう何も無い」

「分かりました。何かありましたらご報告いたします」

そう言ってシヨウコは踵を返す。

髪に付いた血が固まると厄介だ。早く洗い流さなければ。

歩き出した背中に明らかに時を狙った声が掛かった。

「もう一つ。この者はどうする？」

「……っ」

震える心を押し殺す。

ここで崩れるわけにはいかないのだから。

「この者は国家に対する反逆者です。死んだからといってその罪が

赦されましようか？」

血に染まった顔を上げて、周囲を見渡す。

お前たちは君主に対する反逆を赦すことが出来るのか、と視線で兵士たちに問いかける。

そのあまりの迫力に一瞬言葉を失った輪の中から、ポツリと一言漏れ聞こえた。

「……晒せ」

それはきつかけに過ぎないものだったのだろう。しかし多くの者にとつては自らの代弁者のように映ったに違いない。

「そつだ！晒せ！」「晒せ！」「反逆者を赦すな」「その罪を思い知れ！！」

怒号のように響く声にシヨウコは一度強く目を瞑り、そしてレイヴスに向き直った。

「私も皆と同じ考えです」

「ごめんなさい。」

「反逆者にはそれに相応しい死に様を」

私では何一つ貴方の思いに応えられない。

「その骸は城外に晒し、…腐乱し崩れ落ちるまで、太陽が焼き尽くすまで、その罪を購い続けるべきです」

シヨウコを後押しするかのように、一段と声は大きくなる。

レイヴスが軽いため息とともに了承の意を伝えると、表現しがたい歓声に場が沸いた。

謝る資格さえ、持ち合わせていない。

「あの時の皇后陛下を見たか!? 迷い無く片刃の剣を振り下ろし、そりゃー見事に首を落とした!!」

「あの冷静なこと強いこと! 皇帝陛下に危機を知らせてただけでなく、御自ら馬に乗り敵を追い詰めた! なかなか出来ることじゃねえ!!」
体臭と安い酒、そして味よりも量を重視した食事のにおいが立ち込める近衛軍の食堂のそこかしこで話されるのは、どこも同じ話題ばかりだ。

上官は酒どころではなく警備の甘さや情報の漏洩を話し合っている最中だが、それが末端に降りてくるのはもうしばらく後の話。今は皆が今日見たことを興奮気味に話し、どんどん広がっていく。
「皇帝陛下に進言するお姿の凛々しいこと! まさに俺が考えていたことを口にしてくださいった!!」

「…でもよお、なんか骸に祈ってたともいうじゃねえか」

「そんな話聞いてねえよ。それにしてもすげえお方だ!」

小さな疑惑の芽は摘み取られ、話はどんどん膨らんでいく。

「あの陛下の横に立つにはああいうお人でないとなあ! これから面白くなりそうだぜ」

「そっぴゃ、皇后陛下付きの護衛はどうなるんだ? 志願してみるか?!!」

わっと場が沸く。

王族付きとなれば大出世だ。普通皇后付きといわれれば、外出時だけの仕事となる閑職だが、今回ばかりは話が違つ。

「御前試合は不成立だろ。もしかしたらあり得るぜ!」

「あいつを負かせばいいんだろ? よし、俺はやるぜ! で、ゆくゆくは王族付きだ!!」

「……それならこの場で相手になるが？」

酒の回った席に不似合いな冷静な声が響く。

壁にもたれたまま送る一瞥は呆れと冷たさと苛立ちが緋い交ぜになっっている。

「お、お前!!」

「…相手になる、と言っている。剣を抜くか？」

言われた兵士はがたと大きな音を立てて椅子から立ち上がり、大股でケンに歩み寄る。

ケンはそのままの姿勢で持っていた杯を机に置くと、腰に差した刀に手をかけた。

しかし兵士はケンの肩をがしりと掴むと、再び机に向かって歩き出す。

「…っおい!!」

「いやー、いるなら声掛けるよ。飲め!!」

「はあっ!?!」

「あの技妙だよな。なんて名前だ?今度教えるよ」

「おうっこつち座れ!!」

あつという間に輪の中に入れられ、次々と声を掛けられる。

「これ美味いぞ。食べよ」

「酒ねえなあ。追加すつか」

親しげに交わされる会話にケンは面食らった。

「……………」

「何だ?不機嫌だな」

「あ、あれだろ。さっきのはもうなしだ!!」

「…どういうことだ」

「だっってお前がここにいてるって事は、近衛軍に入隊決まったんだろ?んじゃ仲間じゃねーか」

あっけらかんと言う一人に、他が同調する。

近衛軍がそんなに気楽でいいのだろうか。

「まああれだけ見せ付けられたら認めないわけにはいかなーよ。

というわけで食べ！飲んで飲め！あとで宿舎案内してやるよ」

目の前にこれでもかと並べられた料理と酒にケンは思わず苦笑した。

歓迎の仕方としては何とも分かりやすく豪胆だ。

自国では有力貴族出身で、こちらに来てからもこういった団体生活とは縁遠い暮らしをしていたが、これから属する場所としては悪くないかもしれない。

「ケン・ショートだ。これからよろしく頼む」

そう言って杯を掲げる。

躊躇い無く同調する面々はこれまで接してきた人間とは人種が違うが、それもそれで悪くないように思った。

落ち着きのない喧騒の中での食事も、慣れれば気の置けないものになるだろう。

数時間後、飲みつぶれた面々を介抱するケンの姿が食堂にあった。

その顔はこれ以上ないほど不機嫌であり、明日からの立ち位置が見えた瞬間でもあったらしい。

痴れ者 2 (後書き)

予告より二日遅れのアップです。ごめんなさい。

誤字脱字ありましたらご報告をお願いします。

故に重なる

「…疲れているようね？」

朝の挨拶も早々に、シヨウコはケンの顔を見てそう呟かずにはいられなかった。

ケンは少なくともシヨウコが覚えている限り前日の疲れを残すようないし、それを悟らせることもない。しかし今朝はやつれていると表現するのが正しいような憔悴ぶりだ。

「……申し訳、ありません、ん」

歯切れの悪い言葉も珍しい。

相手はケンだとわかっていてもついつい心配になってしまう。

「もし体調が悪いのなら、今日は休んでいてもいいわよ？」

深くは考えず熱を測ろうとして伸ばした腕を、ケンはあからさまに拒絶した。

「……ケン？」

「……申し訳ありません。少しばかり距離をあけていただきたいのです」

「……。」

シヨウコの機嫌が降下したことを察して、ケンが慌てて付け加える。

「シヨウコ様に、ご不快な思いをさせてしまいますから」

どついつことだと訪ねようとしたとき、弱い風が吹いた。

その風に混ざる匂いはあまり得意なものではない。

「……お酒？」

ケンが昨晚の顛末を簡単に話すと、シヨウコはふわりと微笑んだ。

「友人が出来たことは喜ばしいわ」

「いいえ!!」

あまりに早い否定に目を白黒させていると、ケンが小さくしかし怒涛の勢いで話し出した。

「あれらを私の友人と呼ぶことはおやめください。私の品格の問題であると同時にシヨウコ様のご安全のためでもあります。そもそも今日が非番だからといって記憶を失うほど酔うあの墮落した精神を私はまったく認める気にはなれませんむしろ全面的に否定しましょう。己の酒量もわきまえずにあるものがあるだけ口に入れるとは、人間ではなくむしろ獣の行動ではないでしょうか。いやこれは獣に悪いですね。野生の獣は蓄えるということも知っていますから。兎にも角にもあれらが友人などといった高尚な存在ではないことはご理解いただきたく存じます」

「…『嫌いだ』と言っても側にいてくれる友人は大切にしなければならぬわね」

にっこりと微笑み、それ以上反論を許さない。

ケンとは年代で同性の友人と言うものをこの国で持たなかった。今更青臭い青春を楽しめと言ったところで無理はあるだろうが、手に出来なかったからといってこれからも諦める必要はないだろう。これから様々変化はあるだろうが、王都に出てきたことはケンにとっても正解だったのかもしれない。

うんうんと頷くシヨウコにため息をつき、ケンは仕事に取り掛かった。

「シヨウコ様、本日のご予定は？」

その言葉にさっとシヨウコの顔に陰りができた。

「…陛下から呼ばれているの。…昨日の件で」

昨日のシヨウコの行動はケンから見ても若干無謀と言わざるを得ない。しかしそれが結果的に国内で強力な力を持つ軍部を味方につけることに繋がったのだから、目をつぶろうと考えていた。

「報告はお済ではなかったのですか？」

「済んでるわ。皇后としては。今日は…個人として伺うの」

シヨウコとて今日の話が明るいものでないことは察しがついている。

女官たちからの報告でも昨日今日のレイヴスの機嫌が芳しくないとは聞いていた。

「シヨウコ様……」

口を開いたケンを制して、シヨウコは耳を塞いだ。

「わかっている。分かっているから言わないで。これからたつぷり陛下の正論とシンレット殿の皮肉に耐えなきゃならないんだもの。ケンくらい私を甘やかして頂戴」

「生憎ですが、それはアオの役割です」

その言葉にシヨウコは力尽きたように机に突っ伏した。続ける声にもいつもの張りが無い。

「アオが……昨日一番怖かったわ」

昨日部屋に戻ってからのあれこれを思い出して遠い目をするシヨウコに、ケンは何も言えなかった。何があったのかは勿論聞いていないが、過去の事例を参照すればシヨウコの言い分も分かるような気がした。

アオを怒らせると怖い。これはシヨウコとケンの共通見解だった。

「そういえば、昨日有耶無耶になったけど、結局ケンの立場はどうなったのかしら。何か聞いている？」

「いえ、何も。そこもはっきりさせておかねばなりませんね」

会話をしながらシヨウコはさらさらとペンを走らせる。

「あと確認すべきことは、後宮関係がいくつか……。これまでの短い期間だけど、あの場所は問題が多すぎるわよ。やっぱり多少異性の目というのは必要なのかも知れないわね。考えが偏るといっつか滞るといっつか……。叩けばいくらでもほこりがでそう」

シヨウコが書き散らかした書類をざっと眺め、ケンはあからさまに難色を示した。

「これを、お一人で行うのは無理です」

「……やる前から断言しないで……」

「無理です。反発が大きいことは十分にお分かりでしょう。」

後宮はおそらく最も旧弊が残っている場所です。他から手をつけるわけにはいきませんか？」

その言葉にシヨウコは天を仰いで目を瞑った。

「今私の手が届く場所は、後宮そごしかないの」

思わずケンは言葉を失ったが、シヨウコは向き直ると快活に笑ってみせた。

「これから手を伸ばすの。とっても楽しみ。もともと何も持っていなかったんだもの。楽でいいわね」

「……シヨウコ様は変わられましたね」

「そう…かもね。アオにも言われたわ。今の私のことを嫌いではないわ」

その変化を促したのは誰なのか、何なのかと尋ねる権利はケンにはない。

立ち上がったシヨウコに付き従い、その背中を見つめるしか術はなかった。

「昨日は随分もまれたようだな？」

開口一番レイヴスはくつくつと笑いながらそう言った。

「軍人って酒飲み多いですからね。給金の何割が酒代に消えるのか調べましょうか」

呆れたように言うのはシンレットだ。

「やめておけ。お前に言わせれば無駄金だ。給金を下げたくなくなるだけだぞ」

「……ええ。ああいう場で最後まで素面でいるのは損だと理解しました」

「潰したのか？酒豪だな」

「それはなかなかだね。そういえばオースキュリテの酒というものも乙だな。取り寄せようか」

感心したように言うレイヴスたちに、シヨウコは頭に疑問符が浮かんだ。

「……そういうお酒の飲み方って、楽しいの？」

「皇后陛下は飲酒はなさらないのですか？」

「滅多に口にしないかしら。すぐに酔いが回ってしまつから。たまに飲むにしても和を作るため……ケンのように競って飲むようなどとはないわ」

後ろに控えていたケンが居心地悪そうに身じろぎする。

殆ど酒を飲むことがないシヨウコにしてみれば単純な疑問だったのだが、今回は相手と状況が悪かった。

「そうだな」

レイヴスが一見無邪気な表情の中にたつぷりと毒を塗りこんで微笑む。

「二階席から飛び降りたり単身敵を追いかけるよりは数段楽しいな」
ひくりとシヨウコの頬が引きつった。

やっぱり昨日で終わりのはずがなかった。諸事情を勘案すれば相当腸が煮えくり返っているに違いない。間違いなく藪蛇だった。

ちらりと後方を確認すると、ケンは我関せずといったようにシヨウコと目を合わせようとしない。シンレットが助けにならないのは自明の理だ。

「…陛下、下？」

誤魔化すようにシヨウコが微笑むと、それ以上ににこやかな表情で着座を促された。それはすなわちこれから始まる苦行が短時間では終わらないことを意味している。

「私はドープで言ったはずだな？」最低限の義務を履行しろ』と。

まさかその優秀な頭だ。忘れたわけではあるまい？」

顔を引きつらせたままこくこくと頷くと、レイヴスの貼り付けた微笑はさっと消えた。

「それは重畳。」

では自分の価値を理解していながらあの行動を取ったとすれば、それは両国の関係に不穏な分子であると認識しているな？私は確かに政治をやらせてやると言った。しかしそれはその身があつてこそ話。安全を確保できないようならその資格はないと理解しているだろうな」

反論などはじめから許す心算もないという言い方。まさか台本でもあるのではないかと疑いたくなるような淀みのなさだ。

ここは素直に謝るしかないかと頭を下げるが、鼻で笑われ撃沈した。曰く、簡単に謝罪するのは責任のない者のすることだ、と。

レイヴスは机の上に積みあがつた書類を裁きはじめた。解放されるのかという淡い期待も虚しく、レイヴスは複雑な案件を処分しながらシヨウウコを責めるという何とも無駄な才能を發揮したのだった。

そろそろ昼食という時間になつて、滔々と文句を言い続けていたレイヴスが顔を上げた。これまでの時間執務室を尋ねてきた貴族たちからは哀れみの視線を向けられ、書類を抱えてきた官吏たちからは珍獣でも見るかのような視線を向けられ、精神的には非常に辛い時間を過ごした。

「結論だ。」

予想に反してとんだじゃじゃ馬を野放しにしておくことは出来ない。今後は監視をつけることにした」

じゃじゃ馬と人生で初めて評されたことに反応すればいいのか、それともこれまで長々続いた一連の話に反応すればいいのか、あるいは監視という仰々しさに反応すればいいのかからず、とりあえずシヨウコはぐったりと頷いた。今の自分に必要なのは監視役でも手綱でもなく緊張を解きほぐす一杯の茶だ。

「四季春高山茶をご所望かな？それともプーアールとメイクイをご一緒に？」

「：プーアールに菊花を」

ぐったりと肘掛に肘を置いて額に手を当てる。自業自得とはいえ、割りに合わないような気がする。

「まあ今回は仕方がないよ。僕も昨日の話を聞いたときは肝が冷えた。大立ち回りだったらしいね、シヨウコちゃん」

ここにもまた一人いたのかと思って頭を抱えそうになり、ふと気付く。

自分をちゃん付けなんて似つかわしくない呼称で呼ぶ人は一人しかいない。

「ロイ！」

椅子をがたんと揺らし立ち上がって後ろを向くと、そこにはやはり見慣れた顔があった。

「急に出発したって聞いたから驚いたよ。何も言わずに出発するほどシヨウコちゃんは薄情じゃないと思っていたのに」

その責めるような口調に思わずシヨウコは一步引いた。

「色々、あったから」

「うん。聞いている。」

くだらない話だ。さっさと片付けてしまおうね」

主体性のあるような言い方に首を傾げる。

そういえばどうしてロイがここにいるのだろうか。

「もしかしてシヨウコちゃん聞いてないの？あ、レイが言うはずないか」

にやりと笑うとロイは服の裾を払ってシヨウコの前に膝をついた。
「本日付で皇后陛下の筆頭補佐官に任命されました。ロイ・ガードナーと申します。」

……官吏になるのは吐き気がするほど嫌だったけどね…まったくどうなるか分かったもんじやない。何はともあれ、僕がシヨウコちゃんの手足になるよ」

途中からがらりと口調を変えて、ロイはシヨウコの服の裾に口づけた。

「これで体制は整ったな」

レイヴスの声が静かに響く。

それだけで先程までの落ち着かない空気は一掃され、場は一筋の緊張が走った。

「リュミシャル皇帝の名においてロイ・ガードナーを皇后付き筆頭補佐官に、ケン・シヨートを皇后付き筆頭護衛官に任ずる。各々その職責を全うするように」

レイヴスが目配せすると静かに横に控えていたシンレットがシヨウコに一抱えの書類を差し出した。

さっと目を通した表紙には『林檎園に関する覚書』。

「……これは？」

シンレットはシヨウコの問題に答えることなく再びレイヴスの後ろに控える。

必然的にシヨウコはレイヴスと向かい合う。

「下調べは済んでいる。後顧の憂いはなくしておくに限るだろう。すぐにかかれ」

余計な言葉など何一つない。

読んで分かること、調べれば分かることには一切答えない。

仕事を行ううえで身分、性別、諸般の事情は一切廃し、そこには掲げた大儀があるばかり。

渡された書類を握る手に力を込め、シヨウコはすつと頭を下げた。

「御意」

誰のためでもなく、自分のために。

この国で生きていくために、やるべきことをやるために。

「確かに、承りました」

ゆっくりと顔を上げると、伶俐な顔がまっすぐに見つめ返していた。

新たな役者を舞台に迎え、所狭しと役者は踊る。

客席からは見えぬよう、その調和を乱すことがないように。

されどその場は無限ではなく。

ましてそのときは光の如く。

奈落が口をあけて待っている。

故に重なる（後書き）

コメント・ご感想大歓迎です。
誤字脱字の報告もお願いします。

故に重なる 2

王宮で『表』^{おぼて}と言われる政治が行われる区画の一室を陣取って、シヨウコは渡された書類に目を通していった。

一人でやるうと思えば何日掛かるか分からないが、ロイはシヨウコが思っていた以上に優秀な官吏だった。端的に言ってしまうと、それは情報の取捨選択が巧であるということになる。関連するであろう事項すべてを網羅している膨大な書類から、判断の決め手となるべき情報を抽出する。それを信頼しすぎることは極めて危険であるということを意識していれば、ロイは恐ろしく優秀な官吏であると言えるだろう。

「ロイ、これ抜け番？」

「いや、それは皇室典範との関係が薄いから別枠で処理できる」

「そんな時間はないはずよ？同じ枠で処理して、処罰だけ変更するのは法的に問題がある？」

「法的な問題はないけど、前例がない。踏み倒す？」

「言わずもがな、よ」

殆ど顔を見ることなく手を動かし続けながら飛びかう会話に、シレットから手伝いを申し付けられた新米の官吏たちは青くなった。自分たちにも同じ能力が求められるとすれば、まず勤まる職場ではない。

極めつけはシヨウコの横に気配を消して控えるケンだろう。勿論気配を消してというのは対シヨウコであって、他の人間に向けては警戒心をむき出しにした冷たい視線が投げかけられている。それはあたかも仕事が出来ないのなら出て行けといわれているようで居心地が悪いことこの上ない。

かなり大きな目の机を用意したはずが、その上は既に法令と書類の山が築かれていた。長身のロイはともかく、座ったままの小柄なシヨウコは時折腕や頭が除く程度という惨状だ。

「~~~~っ！陛下はご側室が多すぎるわよ！後何人いらっしやるの？！」

言葉だけ聞くんらば皇后の愛妾に対する嫉妬とも取れなくはないが、この場にいる全員がそれは違つと理解していた。そんな甘さはどこにもない。

「シヨウコちゃん、これ分かる？」

「…話をしたことはないと思う」

問題は資料だけでは裁けない人間が意外なほど多いことだ。

時間がないので万全を期するというわけにはいかないが、少なくとも間違いはあつてはならない。

しかしシヨウコはつい最近までドープに引きこもっていたし、ロイは大貴族出身というわけではなく、二人とも社交には疎い。シヨウコが数日で詰め込んだ知識も繊細な問題に応用できるようなものではないということ、本人が一番分かっていた。

「家系図のようなものってどこかにあるのかしら」

「公式のものなら資料室にあるけどねえ…庶子だったり家同士の繋がりまで網羅してるやつは……」

ロイは言葉を濁したが、そんなもの存在するはずがない。

貴族の繋がりや高度に政治的な思惑が絡み合っている。それは公の場に出てくるものから裏で繋がっているものまで様々で、しかも簡単に移ろつ性質のものだ。それを完璧に中央政府が管理できているはずがない。

「あのっ……！！」

突如上がった声にシヨウコとロイは弾かれたように顔を向けた。

もつともシヨウコの場合積み上げた本が視界を遮っていたので、正確には声の発せられるほうにあたりをつけたに過ぎなかったが。

「因みにどこのご息女でしょう！？」

「……アンタ誰？」

何でここに居るんだと言外に伝えるロイの冷たい声にたじろぎながらも、緊張して張り付く喉を叱咤する。

「はっ！シンレット様からお手伝いするようにと言われて参りました。」

先程件、私がお役に立てるのではないかと思ひまして」

今求められているのは個人名ではなく身元が確かだと証明すること。そう考えての返答にロイは満足して目を細めた。

しかし次の言葉は容赦ないものだ。

「じゃあこつち来て。説明を。」

……因みに、君の家の利害とか考えて悪意で間違ったこと言ったら、それなり以上の処罰を用意するよ？くれぐれも注意してね？」

寒風吹き荒ぶ言葉に色を失くす新米の官吏に、シヨウコは淡々と付け足した。

「曖昧なところはそう言えばいいし、分からないところはそう言ってもらえればそれでいいわ。それを判断するのは私の仕事だから」
励ますでも脅すでもない言葉に、官吏の顔が引き締まる。

それを見てロイはやれやれとため息を付きつつ資料を広げた。

「じゃあまずはこちらから。」

第三皇妃様付きの女官は7人いる。ここの関係を分かる範囲で」

「……こちらの3名は内務大臣家との繋がりがあある家です。内務大臣家はその中が2つの勢力に分かれていて……」

混沌が舞い降りた部屋の中で、シヨウコは最後の書類を書き終えた。これがはじめて皇后として発する公式文書というのは、皮肉な

のか何なのか。後世には間違った伝聞が伝わりそうだなとため息をつく。

「終わりだね？」

「ええ」

ロイの顔にも若干の疲れが見えるが、どこか晴れ晴れとしている。しかしシヨウコはこれからのことを考えると笑ってはかりはいられなかった。

正直に言えば、仕事をしている間も本当にこれでいいのかという思いは尽きなかった。

法を遵守すること、秩序を回復すること。

それが重要であることは勿論認識している。

しかしその理念だけでは解消しきれない、情があることもまた事実だ。特に、毎日意識はせずとも顔を合わせている相手を裁くとなれば尚更。

そんなシヨウコの迷いを断ち切らせるように、扉を叩く音が聞こえた。

シヨウコが答えるよりも早くケンが扉にむかい誰何する。

「皇帝陛下より皇后陛下にお届けものです」

「…入りなさい」

やってきた年高の官吏は入るなり部屋の惨状に目を丸くし、しかしすぐに冷静な仮面を貼り付け、シヨウコに深々と頭を下げる。

「……………！」

「こちらを、お納めください」

差し出された小さな箱と文を受け取り、取り合えずシヨウコは文を開いた。

「~~~~っ！」

思わず口元を押さえて俯く。鏡があれば自分の顔が赤く染まっていることが分かるだろう。

「シヨウコちゃん？」

「シヨウコ様？」

「皇后陛下？」

周囲の怪訝そうな声にますますシヨウコは顔を伏せた。

これは嫌味か。

それとも昨日の無謀な行いに対する怒りがまだ解けていなかったのか。

どちらにせよ効果的であったことは肯定するしかない。

「シヨウコちゃん、レイが何か？」

「駄目っ」

ロイが文に向けて伸ばした手をシヨウコはあからさまに拒絶した。

こんなものを読まれたら憤死する。

しばし気の重い沈黙が流れたが、使者としてやってきた官吏がわざとらしい咳払いをしたのちにんまりと笑って言った。

「皇帝陛下から皇后陛下にお言葉をお預かりしております。そのま
まお伝えするようにと言われておりますので、ご無礼お許しください
いますでしょうか？」

「ええ。どうぞ」

この空気を変えてくれるのならは何でもいい。

しかし、では、と前置きして続けられた言葉にシヨウコは思わず
拳を握り締めた。

「立後の儀を明日の午後執り行うことが閣議決定した。よってそ
の案件の引き延ばしは不可

」

「な……っ！」

あまりのことの呆然とするシヨウコを尻目に、官吏は一呼吸置いて
やけに力を入れて次の言葉を口にした。おそらくは忠実に再現し
たのだろう。

「『鋭意努力しろ』。とのことではございませぬ」

そしてサイド深々と頭を下げると、静々と退室していった。

「ロイ……」

通常より僅かに低い声で呟く。

「後処理を頼むわね？ 私は鋭意努力してくるから」

ね？と微笑むシヨウコに思わずロイはたじろいだ。これほど感情をはつきりさせるシヨウコを知らない。

「……わかった。じゃあ、これに押印すれば公式文書としての効力が生じるから」

差し出された文書に首に下げていた判を手にして、シヨウコの手がふと止まる。

「シヨウコちゃん？」

「この判はこれまで使っていた第二皇妃の判なのだけれど……」

それを転用していいのだろうか。しかもこの判の意匠は皇妃たち間でその序列に依じて変化をつけたものだと言ったことがある。

考え込んでいるところを見るとロイにも判別付かない事柄なのだろう。気は進まないがシレットかレイヴスに確認を取るしかないだろう。

「陛下のご予定を確認して参りましょうか？」

官吏の一人の申し出に頷き、贈られた小箱を手を取った。

会つのならば確認しなければならぬだろう。

良く見ると箱自体にも細やかな細工がしてある極上品だ。金属の細工は明らかにオースキュリテよりもリュミシャルのほうが上回っている。

かちりと蝶番を外し、中身を確認したとたん、身体に入っていた力が抜けた。

敵わないなと笑うしかない。

「陛下のご予定は確認しなくてもいいわ。解決したから」

「は？」

「お見通し、なのかしら。ねえロイ、陛下は不思議な方ね」

苦笑して箱の中身を取り出す。

そこに入っていたのは真新しい判。

それを見てロイも僅かに瞠目する。

シヨウコは判を洋墨につけると、初めて皇后として公式文書に押印した。

その意匠は繊細な羽を持った蝶。

細やかな彫りで複製が難しいことは容易に察せられる。これまでの判に通していた鎖を外し、持ち手に空いた小さな穴に鎖を通した。しゃらりと涼やかな音が鳴り、レイヴスから貰った紅玉の指輪に重なった。

今まで使っていた判を軽く一度握り締めると、ケンに渡す。

「…よろしいのですか？」

「ええ」

一抹の寂しさをかみ締めながら。

周囲が何をするのかと見守る中でシヨウコとケンはい互いに軽く頷いた。

「……では」

そうとうとケンは小太刀を取り出し、手にした判を砕いた。

周囲が啞然とする中で、ケンは屈んで砕いた欠片を集め手に残った判の柄とともに小さな布に包んだ。

「お手元に留め置きください」

「ケン」

「否定したくなるような使われ方はなさらなかったはずです」

そのはつきりした口調に思わずシヨウコは差し出された包みを受け取る。

悪用されるわけにはいかなかった。だから壊した。それが間違っているとは思わない。

しかしそこに思い出が詰まっていることも確かだ。

10年間過ごした街。そこで出会った人々。そこでケンとアオと過ごした時間。

帰ることはできないが、思い出すことは出来る。

「そうね…。ケン、ありがとう」

思い出は抱えたまま、次へと進むことが出来るから。

「じゃあ、ロイ、後はよろしくね？」

シヨウコは出来上がったばかりの文書を掴んで立ち上がった。

「シヨウコちゃん、やっぱり…僕も」

「駄目」

はつきりとした口調でシヨウコは申し出を拒否する。

理由は明白。

「後宮に陛下以外の男性が許可なく立ち入ることは大罪。今回はわざわざ許可を頂くような事案じゃないわ」

「でもさ…一応」

「問題ないわ」

「そうは言っても…。君も護衛官ならさ」

後半はケンに向けられた台詞だが、ケンはあっさりと切り捨てた。

「シヨウコ様であれば、問題はないかと」

勿論いざと言うときに備えて扉の外には控えるというケンを、ロイは信じられないといった様子で凝視した。

「身の危険を感じたら実力行使も厭わないわ。そんなにお人好しじゃないもの」

ロイは残務処理をお願いと言い残して、シヨウコはケンと連れ立って出て行った。

二人が出て行ったあとの執務室で、ロイは異様な空気を発しながら残務処理に勤しんでいた。

不快といえはいいのか、不満といえはいいのか。自分の感情を御しきれないのは久しぶりだ。

「あの…よろしいですか？」

「……………何」

極寒の風が流れるのにもめげず、新米の官吏は話しかける。

「先程いらつしゃった方は……………」

「流石にあの方は僕でも知ってる」

手を止めて背もたれに身体を預ける。ぎしりと僅かに椅子が軋んだ。

「王族中心派の筆頭。ガスバール様だろう。シヨウコちゃんは気付いていなかったみたいだけど……………」

官吏の真似事なんて似合わない真似までして、あの古狸何を考えているんだか」

暴言に慄く官吏たちを尻目に、ロイはゆっくり目をつぶった。どうせシヨウコの作業は午後一杯かかるだろう。ゆっくり片付けてもこちらは時間内に終わる。

単純にシヨウコの顔を見に来たとは考え難い。レイヴスはそれを命じるとも考え難い。

狸の思考を読むならば、狸の考え方をしなければならぬ。

「面倒だな……………」

思惑が幾重にも交錯する。

これが王宮。

レイヴスが生まれてこの方生きてきた場所。

シンレットが選んだ場所。

シヨウコが飛び込んだ場所。

そして自分が迷い込んだ場所。

新風踊る

「はい、報告書」

そう言ってロイは仕事中のレイヴスの机の上に紙の束を投げ出した。

数刻前。

ロイたちが仕事を続ける部屋を出たシヨウウコは後宮とは全く逆に歩き始めた。

背後のケンは一躡躑いつつも何も言わずに後ろを歩く。しかしどんな華やかな区画を抜け、建物の造りが無骨になっていくに従い、嫌な予感が頭をよぎる。

「シヨウウコ様：向かわれている先は……」

「ん？」

くるりと後ろを振り向きにこりと微笑む。それは間違いなくケンの反応を予測していた顔で。

「近衛軍舎よ？」

「……………」

ケンを決して駄目とは言わない。シヨウウコが望んだことは最大限叶えるのが役目だと考えている節がある。

しかしそれは決して抗議をしないというわけではなく、現在も無言の抗議がシヨウウコに突き刺さる。ただ、最終的に折れてくれるというだけで、そこにケンの意思がないというわけでは決してないのだ。

片や貼り付けた笑顔で、片や生来の無表情で見詰め合うこと暫し。ため息とともに折れたのはやはりケンだった。

「…わかりました。しかしシヨウウコ様」

「何かしら？」

「御覚悟ください」

意味深な発言を投げかけ、ケンは今度はシヨウウコに並んで歩き出した。

先程のケンの言葉の意味はすぐにシヨウウコも知ることになった。

近衛兵にすれ違ったびに理解しがたいざわめきとともに弾かれたような敬礼を贈られるのは一体どういうことなのか。これから面倒を頼みに行く立場としてはやりにくいことこの上ない。

しかし貼り付けた笑顔のままでもその場を切り抜け、近衛軍隊長の部屋の扉を叩く頃には理解できないまま寄せられる好意に疲れきっていた。

「シヨウウコ様、大丈夫ですか？」

「…問題ないわ」

軽く咳払いをして扉を叩く。先触れのない訪れなので不在の可能性も考えたが、誰何する声があるということは在室しているのだろう。

「皇后陛下のおなりです」

誰何の声にケンが答えると中から何かガタガタと大きく動く音がして、乱暴に扉が開けられた。

「……っ」

中から飛び出してきた存在に、シヨウウコは思わず僅かにたじろいだ。

率直な印象は、熊。

勿論見苦しくない程度に身なりは整えられているし、着ているものは間違いなく近衛軍隊長の制服なのだが、どこか大型の動物のような雰囲気がある。シヨウウコがこの国では小柄だというのもあるが、

それ以上に目の前の男が大きい。身体の殆どがシヨウコの三倍以上ありそうだ。

「よくぞこのようなむさくるしい場所へおいでくださいました！ さっどうぞ部屋の中へ」

そう言っつてシヨウコを促しながら、ケンに目を留めるとにやっつと笑う。

「お前か」

直接会うのは初めてだが、昨日あれだけのことをやったのだから一方的に顔を知られていてもおかしくはない。ケンは無言で礼をとった。

「入れ。陛下の護衛官だろう」

シヨウコに対するものよりも数段低い声で言い背を向ける。

どうせ拒否されても護衛官の権限を振りかざす心算だったが、思いのほか話の分かる人間だとケンは内心評価した。

部屋の中は意外なことに清潔に保たれていて、次々にお茶やお茶請けを運んでくる兵士さえいなければ概ね快適な空間だった。シヨウコの前に茶が五つ並んだ時点で隊長の雷が落ち、ようやく話が出る体制が整う。

「近衛軍隊長、ダイ・ゲイゼ殿ですね？」

「いかにも。以後お見知りおきください」

「少々、お力添えいただきたいがございます」

「お受けしましょう」

内容を聞く前から二つ返事で了承され、シヨウコは面食らった。それでいいのか、近衛軍。

あっけに取られたシヨウコを見て、隊長が豪快に笑い飛ばす。

「昨日の一件で近衛軍は皇后陛下に忠誠を誓つと決まりました」

「昨日の…一件」

ひくりとシヨウコの頬が引きつる。

今日はどこまでもこの話題が付きまとうらしい。

そんなシヨウコを気にすることなく、怒涛の勢いで動き出した口は止まらない。

「皇帝陛下の危機に際したあの判断！全く鳥肌が立ちました。それだけではなく馬を駆るお姿の美しさはおみ足の美しさもさることながら全く惚れ惚れ致しましたぞ！」

その後も全くあの反逆者を恐れぬ勇猛果敢なお姿は我々も多く感じ入るものがありました。今や近衛軍に陛下のための一個中隊を作るといふ話まで出ていますぞ！」

途中何だか関係のない賛美が入っていたような気がするが、都合のいい耳で聞き流す。

レイヴスには責められここでは褒められ、身の処し方に困ってしまう。

「しかし…少しばかりお転婆が過ぎましたなあ」

「反省しています」

一人の武官としてはともかく、やはり王族の安全を重視する立場から見れば好ましいばかりの行動でもなかっただろう。シヨウコは素直に頭を下げた。

それを一つの区切りと見取ったのか、一口茶を含み本題を切り出す。

「それで、我々は何をすればよろしいでしょうか？」

「10数名ほど、人員を貸してくださいませ」

「…それはお安い御用ですが…はて何をするのでしょうか？」

「引越しの手伝いをしていただきます」

「ふむ。日数は？」

「今日と明日」

「場所はどこですか？」

シヨウコはすっと一枚の紙を差し出して言った。

「後宮です」

差し出した内容は、後宮への立ち入り許可証。

そのときの近衛軍隊長の顔は、長く近衛軍に籍を置くものでも見たことがなかったものだったらしい。

一瞬作業が強制的に中断させられたことに不快感を示したレイヴスだったが、無理を言ってドーブから引っ張り出した借りがあるため、僅かな沈黙を抗議に変えた。

書類は勿論今日の大捕り物に関するものだ。ぱらぱらと捲りながら視線を走らせ、処罰の対象者とその処遇を確認する。

下調べは済んでいるし物証があるのだからそれほど大きな間違いはないと思っていたが、どうしても気になる項目に印を付けていく。「ロイ」

書類を突き出して詰問する。一部に甘い処遇があると思えない。

シヨウコがああ状況で後宮の女たちと連帯感や親近感を持つとは思えなかったので任せた仕事だったが、間違っていたのだろうか。本来どれほど親しい人間が対象でも私情を交えずに行うのが正しいのだと知らないはずはない。

「その項目について説明しろ。すべてだ」

「あゝこれね。うん、気付かない？」

「何がだ」

「この人たちの共通点」

呆れたように言うロイの顔に、何か欠落があったのかと考え直すが思い当たる節はない。家のつながりも商業的な関係性も見出せない。

いいし、この女たちが後宮内で力を持っていたかと言われても全員が当てはまるわけではない。

そのレイヴスの思考を読み取って、ロイが助け舟を出す。

「完全に私的な事情だよ」

「……その完全に私的な事情とやらを、判断の基準にしたのか？」

暗にそれを責める様子に、ロイはやれやれとわざとらしくため息をついた。

「シヨウコちゃんはしたんだよ。因みに僕はレイは絶対に気にしないって言ったけどね」

「私が？それこそ思い当たる節がないな」

「そうだろうね。これは性別の違いかな」

「……降参だ。正解は？」

ややもつたいぶって、しかしレイヴスのさっさとしろという視線に急かされてロイは口を開いた。

それはレイヴスにとっては完全に予想外の言葉で。

「この女性たちは全員君のお手つき」

「……………は？」

「理解できないかな？言い方を変えようか。」

全員が君と夜をともにしたお相手たる？もつと端的にいうなら

「もついいわかった。その言葉自体は理解した」

問題はそれが判断にどんな影響を与えたのか、そしてこんな情報をどうやって調べ上げたのかだ。シンレットの報告書にはこんな事項は記載していない。

「どうするの？」

完全に茶化したロイにも腹は立つが、そういう場合でもないだろう。

「はじき出した結論は唯一つ。」

「後宮が一区切りついたら、皇后を呼べ」

隊長の鶴の一声でもって精鋭ぞろいの近衛軍のなかでも特に品行方正を自称する10数名が集められた。隊長からの指示は非常に単純で「皇后陛下にすべて従え。自分を見失った者は鉄拳制裁」だった。一瞬にして未知の領域である後宮に入るといふ浮かれた顔が青くなり引き締まったのを見て、シヨウコは胸を撫で下ろす。

近衛兵を引き連れて王宮内を横切るのは非常に何ともいえない気分であつた。特にシンレットとすれ違ったときの憐憫を込めた眼差しは相当痛かつたが兎にも角にもそれにも耐えた。

やはり横にケンがいるという安心感は大い。結局頼っているなと自嘲しつつも、シヨウコは表と裏を仕切る重厚な扉の前に立つ。

「ではここで待機して。その段になったら呼びます」

何も言わずに了承の意味を込めて一斉に贈られた敬礼を背に、シヨウコは後宮に入った。

後宮内の広間に集められた女たちを見ながら、シヨウコは何の感情も込めることなく次々に名前を読み上げていく。その中に見知つた名前があろうと不安な目を見ようと、それは勘案すべき事柄ではない。

「、以上の者は」

一旦言葉を切り場を見渡す。

これから自分が発する言葉の重さから逃げないように。
「国有財産略奪の罪で処罰します」

一瞬の静寂の後、理解できないといったざわめきが満ちる。ましてや処罰の対象が平民出身者だけでなく貴族出身の皇妃にまで及んでいるのだから、皆人事ではない。

その中でシヨウコはそのざわめきと非難を一身に受け止めた。控えた女官に目配せし、一人一人に罪名と処遇を記した紙を渡していく。

それを見て青くなるものがいれば不満を示すものがある。当然だろう。すべて予測の範囲内だ。

「そこに記されていることに間違いがある者は申し出なさい。あなた方にはその権利があります」

おそらく多くの者はそれほど自分が大それたことをしたという罪の意識はないのだろう。後宮という閉鎖された空間で当たり前のように行われてきたことなのかもしれない。しかしそれを表の基準で図るならば、それは裁くべき罪に他ならない。たとえそこに記されている条文が分からなくても、それがどういった法律構成をとるのかわからなくても、知らなかったで済まされる問題ではないのだから。

「こんなの…納得できるはずないっ!」

二列目に座っていた女がシヨウコに詰め寄る。握り締めた紙には後宮を退くという処分が記されていた。

「……側室リーナ・カルデ。罪状は前皇后に支給されていた国有財産の私物化及び換金。三位に叙せられる家格を用いれば、手にした金員の三倍に相当する価額を支払うことにより免罪が可能です」

「…そんなこと聞いてるんじゃないわよっ!」

感情のままに振り上げられた腕がシヨウコに届くことはなかった。ただ風圧で少しばかり黒髪が揺れただけだった。

側室よりも遥かに小さな身体が二人の間に割り込みその腕をひね

り上げたから。

「きゃあああつ痛いつ放して！」

「…ありがとう、アオ」

「いえ、当然のことですから」

「腕、放していいわ」

その言葉にアオが無感動に力を緩めると、側室は力なくうずくまり腕を押さえた。

その様子を呆然と眺めていた者たちに、諦めの色が浮かぶ。三位の貴族が容赦ない処分を受けるというのに、逃れられる可能性はきわめて低い。

「貴女…一体何の権限でこんな真似っ」

涙交じりの非難をシヨウコは正面から受け止め、そして笑った。

「私は、この国の皇后です」

誇るでもなく、淡々と。

「そして貴女がたつた今行おうとした行為は、皇后に対する傷害未遂。それだけでも犯罪を構成することが出来るとご存知かしら」

軽く首をかしげると、異国の血を示す黒い髪が己の存在を誇示するようにさらさらと揺れた。

「他に、異論のある者は？」

いるはずがない。

書かれていることはシンレットが調べ上げた真実で、それを裁くのはこの国で正当な力を持つ権力者。皇后が政治に携わることで始めて後宮は表の風に晒され、長い間の澱みを余すことなく暴かれる。この国の慣習に縛られることないシヨウコだからこそ出来た荒業。おそらく他の誰がやっても何某かの圧力が働いただろうが、シヨウコには圧力をかけるべき繋がりさえ何もなかった。

「結構」

しんと静まり返った場に満足げに微笑み、シヨウコは軽く手を叩く。

それに呼応して近衛兵が整然と場に並んだ。

「退去することが決まった方々には、今日中に後宮を辞していただきます。」

「ご心配なく。すべての荷物は国庫への返済分を徴収した後にご実家へ送らせましょう。取り敢えずは本当に必要なものだけをお持ちください。また三倍の価額の金員を支払い免罪を希望される方はその旨お知らせください。こちらで精算を致しましょう。」

あまりの急展開に呆然とする場に、シヨウコはにっこりと微笑んだ。

「今回の処分に関わりのなかった方々はどうぞお部屋にお戻りください。今日一日騒がしいでしょうがご容赦くださいませ。」

…… 今後はこのようなことが無いよう、私も祈っております。」

今回無罪となった者の中には物証が取れなかったため処罰できなかった者もいる。それを野放しにしておくわけではないと釘を刺しておく必要があった。

何人かは顔を青くして足早にこの場を去っていく。

「では準備を始めていただきますよう。とはいえ重いものは皆様の細腕には余るでしょうから、その場合は彼らを。」

そう言つて促すと近衛兵が各部屋の入り口についた。いうなれば彼らはこれ以上の国の財産の流出を避けるための監視だ。流石に屈強な兵士相手に挑む者は少ないだろう。

重い足取りながらも多くのものが部屋に戻り始めた中に、何名かその場に残った者がいる。

力のあつた皇妃や側室のについていた者たちだが、それは不自然なほど均等に各部屋につき一人。そしてどの部屋にも属さずに国が雇っていた者が数名。

彼女たちの役回りには心当たりがある。

「…あなた方が、後宮における陛下の目と耳ですね。」

以前レイヴスが優秀だと言っていた者たち。今回シンレットから渡された書類には後宮の中になければ分からないようなことまで

書いてあった。彼女たちの協力なくしてはありえない。

「これまでお側に在れなかつたことをお許しください」

一斉に頭を下げるが、その動きは後宮女官のものではない。もはや正体を隠す必要がないと分かればその動きは明らかに特別の訓練を受けた者のそれだった。

「いいのよ。これまででは私自身も監視の対象だったのでしょう？陛下ならそれくらい当然にするわ」

益々恐縮して彼女たちは頭を下げるが、どちらに非がある話でもない。

そしておそらく今回姿をあらわさなかつた目や耳がまだいるのだろう。シヨウコならそう指示を出す。ということはおそらくレイヴスも同じはず。

「後宮もこれから大きく様変わりします。この場所にも風を通さねば成りません。私の力になってくれますか？」

「仰せのままに。皇后陛下」

当然に返される返事からは、彼女たちが自分をどう評価しているのか本当のところは分からない。しかしこれから本物にしていけばいい。

「皇后陛下。皇帝陛下が呼びです」

「陛下が？」

どうせ報告はしなければならぬと思っていたが、呼び出されるとは予想外だ。

シヨウコは少し悩んだ後、頷いた。

「分かりました。伺います。」

「…この場を任せていいかしら？」

「御意」

「ありがとう。それと…」

シヨウコは目線でアオを呼び、目と耳の前に促す。

「私の腹心のアオ・リユイ。互いにこれからは仲良くね？」

その紹介に先程から受け答えをしていた代表らしき女が顔を上げる。

「…先程は見事な身のこなしましたね？」

「偶然ですよ。姫様の危機にぱっと反応しただけですから」

「そうでしょうか？」

「これからよろしくお願ひしますね」

両者がつかみ所のない笑顔で笑うのを見て、シヨウコは踵を返して後宮を後にした。

新風踊る（後書き）

誤字脱字ありましたら（あると思います。アップを急いだので・・・）ご報告をお願いいたします。ご感想もお待ちしています。

依拠すべきもの

「陛下が摘み取った花でしょう」

言葉をなくす男三人を前にしてシヨウコは当然と言わんばかりに胸を反らせた。

「野に帰れぬのならば、温室で育てるより他にありませんか？」

行為を揶揄するような言葉に、三人は言葉とともに顔色もなくな

シヨウコはやれやれとため息をついて許しもなく椅子に腰掛ける。こんな要件だと知っていれば応じなかつたものを。

「皇后、陛下？」

ひくりと顔を引きつらせながら、シンレットが声を掛ける。その先に行く言葉はなく、ただ何とか場を持たせようという直向きな努力だ。

しかしその努力を蹴散らしてシヨウコは滔々と持論を述べる。

「この国でも女性に強い貞操観念を求めている文化がありますね？女性にのみそれを求めることは是非を論じれば夜が明けますから、取り敢えず置いておきますが。」

とすれば性的な行為を経験したことがある女性は次の縁談がまともにくいという社会の実情もあります。そもそもその後どうする当てもなく戯れに花を手折ったのは陛下ではございませんか。後宮という場において彼女たちにそれを拒絶する自由があったとは考え難い。ならば陛下はその責任を取られるべきでしょう」

言葉が丁寧な分誤魔化されているが、端的に言えば「やったなら男らしく責任取れ」と。

しかしそれを言っているのが皇后、いくなれば正妃。そしてそれを受けるのが皇帝。どこかこの構図は間違っているのではないかとシンレットは頭を抱えた。

ロイは初めて見るシヨウコの一面に目を白黒させている。

そんな様子を見ながらシヨウコは極めて優雅に冷茶を口に運んだ。この暑さでは一度にたくさんしゃべると喉が渴いて仕方がない。

そんな三者三様の行動を見ながら、レイヴスは顎に手を当てて少し考え込み、そして口を開いた。

「その判断は理解した。しかしその情報はどこから得た？」

シンレットがまとめた報告書には記載されているはずがない。ちらりとロイに視線を向けると、知らない、というように首を横に振った。

極めて私的な情報であり、しかも公文書として閲覧可能になっているものでもない。シヨウコが後宮に入ってからレイヴスはそこで夜を過ごしたことはないし、情報は皇太子時代にまで遡っている。それはレイヴスが記憶していないようなもので、正確に。

状況だけ考えれば奇妙だった。

レイヴスが訝しがるのも当然である。

しかしレイヴスの横でシンレットは全く別のことで頭を抱えなくなった。レイヴスは気にしないのかもしれないが、つまりこれは過去の女性歴をどんな方法かは分からないがシヨウコがすべて調べ上げたということだ。

シヨウコは初日のこともあってあまり後宮にいい印象を持っていない。そこで行われていたことが露骨に知られれば、二人の關係にどう影響するのかシンレットは考えたくも無かった。

今すぐここから脱出したい。そう切実に願った。

しかしシヨウコはシンレットが危惧したような嫌悪感を示すことなく呆れたように、否、実際に呆れてそれを隠そうともせずと言った。

「本当に…陛下は何もご存知ないのですね」

「……一体何を」

「そう聞くところ、でしょうか」

「ぶざけるな」

「ふざけてなどいません。呆れているだけです」

「話にならないな」

「全くです。これではうかばれませんわね」

シヨウコはため息をつく、困ったように笑った。

「シンレット殿、外していただけますか？」

「お望みとあらば、勿論」

内心、大歓迎と叫びたい。皮肉の言い合いならば慣れているが、この微妙な温度の会話は居心地が悪くて仕方がない。

「ありがとう。ロイも外して」

シンレットとは対照的に不満の色を示しながらもしぶしぶ頷く。

扉が完全に閉まったのを確認して、シヨウコは立ち上がると手にしてきた革張りの薄い帳面をレイヴスに差し出した。

「……？」

取り敢えず受け取り中を開きはらばらと捲っていくうちに、レイヴスの表情が険しくなる。「お分かりですか？」

残りもレイヴスの机の上に並べ、その表紙を撫でる。その歳月を慰めるように、その思いを昇華させるように。

「これは、前皇后陛下の日記です」

午前中にシヨウコが作業していた机の上に山と積み上げられていたものの一部だ。

「こんなもの……どこから」

「皇后の居室です。私が入ったとき、多くのものがなくなっていました。これは金銭的な価値がないからでしょうね。寝室の隅に、粗末な箱に入って置いてありました」

中に記されているものは、日記と表現することは似つかわしくないかもしれない。

多くても三行程度。多くは一行でその日その日の出来事が書いてあるだけだ。そこに皇后自身の思いや考えは何一つ書かれていない。

不規則な生活と単調な毎日が続く中で、必ず記されているのが皇帝の訪れ。自分の下に来なかった日も、相手の名前とともにその事実は書かれていた。その記録と知りうる限りの情報を照合し、シヨウコはそれが事実であるとの確信を得た。

どんな気持ちで書いたのか、シヨウコには想像することしか出来ない。それが合っている確信もない。ただその事実のみを受け止めるばかりだ。

「確かに：私は無知だったな」

瞳を閉じて額を押さえながらも、レイヴス自身何を思っただけの言葉なのかは分からない。

ただ互いに最初から歩み寄ろうとさえしなかった、その必要性を感じもしなかった関係は、思い返すにはあまりに希薄で頼りない。

しかしそれをレイヴスの中で消化したことで始めて一人の女性の死を完結できた。

区切りをつけるように大きく息を吸ってレイヴスは立ち上がり、机の上に並べられた帳面をすべて腕に抱えた。

「陛下？」

「少し私に付き合わないか？」

吹っ切れたようなさばさばとした表情は悪くない。

そんなことをぼんやりと考えながらシヨウコはレイヴスを見返した。

「どちらへ」

「証拠隠滅兼：弔いだ」

冗談めかした言葉と真実が織り交ざる。レイヴスの言葉はいつだってそうで、気をつけて耳を傾けていなければその真実を見失ってしまう。

「お供しましょう。私もお礼と謝罪をしなければなりませんから」

部屋を出て夕日に染まり始めた廊下をシヨウコが急ぐことのない速度で歩き出す。レイヴスにとってはいつもよりもゆっくりと。それを極当たり前のこととして。

「私文書だからな。それほど重罰でもなかるう」

「法的には。でも個人の心にはこれ以上ない侵略でしょう」

「…日記の公開か……。確かに勘弁願いたいな」

「あら。つけていらっしやるんですか？是非見せてください」

「…見てどうする」

すれ違つ者が二人に道を空けながら常にないレイヴスの表情に目を見張り、そして横を歩くシヨウウコに目を留める。

「勿論、陛下の弱みでも探します。おそらくシンレット殿とロイも手伝つてくれますから」

「そうだろうな。碌でもない」

「それで、日記つけてるんですか？」

「そういう輩がいるのに、そんなことをしていると思つのか？」

誰も並び立つことが許されない皇帝の横に、当然のように異国の姫が存在する。

「やっぱり。残念です」

「……お前の気持ちは良く分かつた。覚えておこつ」

それは何かが変わり始める表象として目に映る。よどみを吹き散らすように踊る風。

「しつこい殿方は嫌われる、というのが故国での通説でしたわ」

「男に二言はない、もそうだろう？」

「引き際は肝心だとは思いませんか？」

「互いにな」

新風が踊り、時を動かしていく。

新鮮な野菜が並べられ、下処理を終えた食材が並ぶ。

その横では大きな鍋に白い湯気がもうもうと立ち上り、これから一日のうちで最も忙しい時間を迎える王宮の調理場。

料理人や手伝いの女官たちから遠巻きに見られながら、シヨウコとレイヴスはかまどの前に立っていた。

「よりによつて、ここですか……」

前皇后の日記を処分するという意図は分かる。埋めるでもなく捨てるでもなく燃やすというのも、秘密の保持のためには理解できる。しかしそれがなぜ調理場なのか。

恋文は庭の片隅でこっそりと秘めやかに燃やすもの。断じてこんな衆人環視の場で行われることではない。

恋文でないにしてももつと風情とかそういうものはないのだろうか。

しかし相手はレイヴスである。徹底した合理主義を貫く彼には、自分の興味がないことあったとしても手間隙と比較して秤がふれないことには情緒と言うものの存在を認めない。

「問題があるか？ここなら火の管理も適切だ。下手に外で火を起して飛び火でもしたらどうする。この乾燥した季節は燃え広がるのはあつという間だ」

至極正論を述べている心算の顔にシヨウコは僅かに憐憫の情を覚えた。

「……。そうですね。それで陛下がよろしいのでしたら」

シヨウコの表情を正確に読み取り僅かに眉間に皺を寄せたレイヴスが無造作に一冊をかまどの中に放り込む。

ちりちりと革張りの表紙が焦げ、独特の臭いが立ち込めた。

それをシヨウコは信じられないといった面持ちで凝視する。

「何だ？」

「これを一冊丸ごと燃やそうとすれば、それなりの時間がかかるとは思いませんか？」

「そうだろうな」

「ならば何故、そういう暴拳に出られるのですか」

「暴拳？」

意味が分からない、といった態度のレイヴスにシヨウウコは言い聞かせる口調で懇々と説いた。

「私たちがこの場にいるというだけで、皆の仕事が中断しているのですよ？出来るだけ早く済ませようと思ったら、こつするのが常道でしょう」

言いながらシヨウウコは数枚破り取るとくしゃりと握りつぶして空気を含ませてからかまどに投げ入れた。それは一瞬で燃え上がり、何の痕跡も残さずに上で煮られている豆のための燃料となった。

「如何ですか？私の言うことは間違っていますか？」

「間違っていないだろうが……」

レイヴスはおとなしくシヨウウコに従いながらため息をつく。

「お前にだけは風情がどうのこつのと文句を言われたくはないな」

その後しばしの間調理場で黙々と作業をする皇帝と皇后の姿が周囲を驚かせた。

「陛下！こちらにいらっしやいましたか！」

調理場を後にしたシヨウウコとレイヴスはほぼ同時に声のする方向へ振り返った。微妙な時差は陛下と呼ばれることへの慣れの差だろう。

しかし呼んだ者は該当者が二人いたことに驚き、驚きながらも膝を突いて礼を取る。

「あなたは…」

後宮で耳あるいは目と呼ばれている女官だ。

「もし私を呼ぶ名にお困りでしたら、どうぞシェーンとお呼び下さい」

「わかりました。シェーン。それで…」

仮の名前なのだろうが、それで不都合はない。用件を尋ねようとすると廊下の奥から声がした。

「シヨウコ様はいらっしゃったか!？」

「ケンまで…何かあったの?」

シヨウコに気が付くとケンは駆け寄り略式の礼を取る。ケンが人前でこういったことをするのは滅多にないことなので、どうやら急いでいるらしい。

ケンとシェーンには後宮のことを任せていた。その二人が揃っているということは何かあったのだろうか。

横にいるレイヴスも傍目には分かりにくいが僅かに表情を曇らせている。

「いえ。後宮は立ち退きも始まっていますし、大きな混乱はありません。ですが陛下に目を通していただきたいものがございまして」

「シヨウコ様」

そう言って差し出された書類や手紙の束を受け取って、シヨウコとレイヴスは怪訝な顔をした。これがそれほど判断に困るものとは思えない。

「ねえシェーン。これ請求書よね?」

「はい。あの…本日付で届いたものなんですけど注文された方々は身分を剥奪されていないうちに買ったものだから受け取る権利があるとおっしゃっておいで…」

「……人としてどうだ、その考えは」

吐き捨てたのはレイヴスだ。シヨウコも思わず天を仰いでから、困惑顔のシェーンに笑いかけた。

「陛下のおっしゃることもごもっともなれど、既得権を奪うことは

出来ません。希望される方には差し上げましょう」

「甘いにも程がある」

「…シヨウコ様！」

「よろしいのですか？」

まさか許可が下りるとは思っていなかったのだらう。疑うような声が掛かる。

「いいのよ。国庫は痛まない。」

陛下の私財を投じるのですから」

「……何？」

「依存はありますまい？」

「何故ないと思える。その頭は正常に動いているのか？」

「シヨウコ様！」

「ケン。ちよつと待ってて。」

陛下はこの請求書の山をご覧になったのでしょうか？これが昨日今日だけのこととお考えですか？毎日毎日陛下の後宮でこれほどの国の財産が浪費されていたのですよ？それを放置していたのは陛下の責任です。最後まで取ってくださらなければ」

勿論法的にはレイヴスに支払う義務がないことはシヨウコも把握しているが、ここは維持と倫理観と押し強さに訴える。

レイヴスにしてみれば今回出て行く女性たちは一度も情をかけたことのない者たちばかり。正当性のある話ではないがそこまで言われてしまえば愚かな自尊心がうずくというものだ。

レイヴスが押し黙ったことにより話は決着し、シヨウコはにこりと微笑んだ。

「ではシェーン。そのように」

「御意」

「それでお話はお済みですか？」

ケンにしては珍しい嫌味がこもった言い方にシヨウコは首をひねった。

「ええ。ごめんなさい。何の用だったのかしら」

「失礼します」

ゆったりとシヨウコにじれたように、ケンはシヨウコの手の中にあった束から一つの手紙を抜き取った。

「どうぞ、お目をお通しください」

差し出された手紙をみて。シヨウコはケンがじれていた理由を了知した。

震える手で手紙を受け取り信じられない思いで開封する。

まさか。

どうして今更。

「……………どうした？」

気遣わしげな声も今は遠い。

こんなことは起こり得ないと諦めたのはもう何年前だっただろうか。

懐かしい、喜ばしいはずの手紙。そのはずだった。

しかしある一文に差し掛かり、その先に進めなくなった。

何度も読み返しその意味を推し量ろうとした。

しかしその簡潔な言葉はそれ以外の解釈をシヨウコに与えない。

そしてそれ以上の事実を伝えようともしない。

混乱はしていても最後には冷静であろうとする頭がその事実を認識したとき、シヨウコは足元が脆くも崩れるのを感じた。

それがシヨウコがリュミシャルにきてから初めて受け取った、
オースキュリテ
故国からの手紙だった。

時の萌芽

足元が崩れる。

否、崩れたのはこれまでシヨウウコが依拠してきたもの。依拠して
いると信じてきたものかもしれない。

何のために。誰のために。

見えていたはずだったのに。分かっていたはずだったのに。
それらはすべて幻想だったのだと突きつけられたようで。

「シヨウウコ！」

がくりと重心を失った身体は床に落ちることなく、腰に回された
腕を支えられた。

その衝撃にシヨウウコは自分が今いる場所を思い出した。ここは誰
が通ってもおかしくない王宮の表だ。こんなところで醜態を晒すわ
けにはいけない。

「申し訳ありません：大事ありません」

そう言って回された腕をやりわりと押し返すが、それはより強い
力によって拒否された。

「大事無い、という顔色ではないな」

シエーンが廊下の端で人払いするのを確認し、レイヴスはシヨウ
コが握り締めたままの手紙に目を落とした。腕も手も震えていると
いうのにしつかりと握り締めたままなのがいとおかしいが、
その気丈さが今は不憫だ。

「私が読んでも問題ないか？」

「……はい」

依然青白い顔を上げることなく、シヨウウコは小さく頷いた。

自分で動かなければならないことは分かっているが、おそらく何
も出来ないだろう。結果的には助力を請うより他にない。

冷静であろうとする頭ではそう考えていた。

しかし誰かに縋りたいと願う心は、甘えたいと考えていることを自覚している。

少し離れた場所でケンが瞠目していることには気付かなかった。ただ一人では立っていられないからそばにいる人に縋ったのか、それともレイヴスに縋りたかったのか。

以前なら間違いなくシヨウウコを支えるのはケンだった。しかし今はシヨウウコの横にはいない。その場所は望む望まないに関わらず、もうレイヴス以外が立つことは非常に困難になっていた。

手紙を一読したレイヴスはそれを元のように折りたたみ、襟元に差し込んだ。

そしてシヨウウコを安心させるように強く抱き寄せると、その仕事とは打って変わって皇帝の声で命令を下す。

「シェーン、ケン・シヨート」
やるべきことは既に頭の中にある。

「お前たちは引き続き後宮の仕事に当たれ。今日中に退去を完了させる。立後の儀は明日だ。日程の変更はありえない」

「御意」

当たり前のようにシェーンは頷くが、ケンにとっては看過できる内容ではない。

「シヨウコ様、一体何が書かれていたのですか」

「あ……」

顔を向けようとしたシヨウウコの行動を阻みレイヴスはシヨウウコの額を肩口に押し付け、シヨウウコに変わって当然の様に口を開いた。

「今お前に話せることは何もない」

「しかしっ」

「わきまえろ」

それ以上は許さないという、人を従えることに慣れた威厳を以ってケンの抗議をねじ伏せる。

「時期がくれば話もあるだろう。今この件についてお前に出来ることは何もない。」

理解できたらやるべきことをやれ」

身分、地位、あるいは権力。

それがすべてを隔てている。ケンには出来ないことがレイヴスには出来る。それは個人の資質の差ではなく、それを比較する以前の問題だ。

「……御意」

それを受けてレイヴスはシヨウウコの背中と膝の裏に腕を回して抱き上げると、その場を離れていった。どこに行くのかと問うことさえ出来ない。

リュミシャルルに来て10年。

守りたいと願うものを守れない己の無力さを。

近くににいるのに側に在れない歯がゆさを。

10年暮らしたドーブがいかに小さな箱庭であったかを。

それらをケンは初めて痛感した。

巨大な王宮でシヨウウコが生きると決めたとき、側にありたいと願ったのは真実だ。

しかしその本当の意味を、今始めて突きつけられた。これまでと同じではいられないと知っていたからこそ、シヨウウコはあの時強制しなかったのだろう。

この国で生きていくための力が欲しいと、初めて願った。

「ケン殿。参りましょう」

「はい。シヨウウコ様の御為に、出来ることを」

突然足が床から離れたときは、ついに倒れたのかと思った。しかしそうでないと感じいたのは一層強まった麝香の香りがあったからだ。

自分は気も確かだし病人でもない。こんな扱いをされるような状態ではないはずだ。

「陛下…下ろしてください。歩けますから……っ」

「断る」

「…皆がっ……おかしく思いましよう」

必死の抵抗にも遅しい腕はびくともしない。それが尚シヨウコを絶望的な気持ちにさせた。

こんなことで弱くなるはずがない。もっと辛いことがこれまでもたくさんあったのだから。

「自意識過剰だ。静かにしている」

どこに向かっているのかもわからないが、いつ人目についてもおかしくない状況だ。そういう場では常に自分を律しているべきで、そうでなければならぬ。

「私は…何ともありませんからっ」

「分かっている」

その言葉が包み込むような優しさに彩られていて、シヨウコは思わず顔を上げた。微妙に色が異なる二色の瞳からは、ドーブで再会したときのような冷たいという印象は受けなかった。

ただ、労りと優しさがあるばかりで、不意に泣きたくなくなった。

「お前はこれしきのことと崩れるほど弱くはない。ただ、今回は昨日からの疲れが重なっただけだ。誰が見ても無理を重ねてきた。少しくらい休んでも何ら落ち度にはならない」

じんわりと心にしみこんで、ゆっくりと温かさを取り戻していく。

口にしてしまえば泣き言になるのは分かっているのに、それでも声に出さずにはいられなかった。

「……オースキュリテを背負ってここにいるのにつ」

「ああ」

「この国の……皇后なのに」

「十分、良く努めている。案ずることは何もない」

「……っ」

今だけ。この時だけ。

そう言い訳をしてレイヴスの首に腕を回した。

レイヴスは比較的人通りの少ない道を選んで私室にやってきた。

驚いた顔の女官に扉を開けさせて、何も言わずに中に入る。シヨウコの外見はどうしてもこの国では特徴的だ。口にせずとも誰なのかはわかるだろう。

今後宮は上へ下への大騒ぎのはずだ。そんな場所でシヨウコがじつとしていとも思えなかったし、そんな場所へ今は帰したくなかった。

部屋に入った後も何枚か扉を開けて一番奥の寝室に入ると、視線だけで女官たちを下がらせる。腕の中のシヨウコは廊下でのやり取り以来ずつと静かだが、気を失っていないことは回された腕の力で知ることが出来た。

身をかがめてゆつくりとシヨウコを寝台に下ろすと、それに従うように滑り落ちた腕が縋るようにレイヴスの服の裾を掴み、そしてすぐに弾かれたように放される。

その何気ない仕草から、これまでもそうしてすべてを飲み込んできたのだろうと察しがついた。それ自体は立派なことだ。だが、一体いつその張り詰めた糸を緩めていたのか。

「…今はここが一番静かだ。片がつくまでここにいろ」

シヨウコは腕を顔に渡して目を隠したまま、小さく頷いた。

今どんな顔をしているのかは分からない。それを心配だからと無

理に暴くことは出来なかった。

「手紙は枕元に置いておく。……この部屋には誰も入らせない」
その言葉にシヨウコの手が僅かにびくりと動いた。

誰にも知られることはない。だから泣いてもいいのだと通じた
らうか。

側にいてやりたいと似合いもしない良心が疼く。しかしそれは独
善的で、おそらくシヨウコが望むものでもない。

そしてきつとシヨウコは一人にならなければ泣けないだろう。

寝台が僅かに軋んだことでレイヴスが立ち上がったことが分かっ
たのだらう。シヨウコが何か言いだけに少し口を開き、結局言葉
は出てこなかった。

女官たちにシヨウコには構うなど言い置いて部屋を出た。ついで
にシヨウコの代わりにロイを後宮に向かわせるよう言付ける。

予定になかった仕事だが優先順位は第一位だ。

早足に廊下を歩きながら、どうしようもない怒りに拳が震えた。

誰が。

何の目的で。

あれほど酷なことをした。

忘らるる姫君と言われ存在していることだけが必要とされていた
10年間に、どうしてあれほど明確な悪意をぶつけたのか。

どんな理由があるにせよ、許せる話ではない。

華やかな区画を抜け、どちらかと言えば質素に作られている区画
に入る。

ここはいわゆる華やかな外交や緻密な権力闘争の舞台裏となっている場所だ。日々の政務の記録を保管する、地味ながらも欠かすことの出来ない役割を担っている。王族の私信の類も一度ここに集められる。シヨウゴに宛てた手紙も王宮を経由していれば必ず一度はここで記録に残っているはずだ。

重い扉を押し開いて、紙の臭いが立ち込める空間に踏み入った。

「陛下！わざわざお越しとは…一体どのような用向きで？」

「至急の用件だ。すぐに全員をこの場に集める」

「全員、でございますか？」

「作業の中断を厭わず、全員だ」

くどいほどの言葉に事の重大さを感じたらしい官吏が足早に動き出す。

官吏が揃うまでの時間レイヴスは久々に立ち入る部屋を見渡した。部屋というよりは王宮の図書館の書庫に近い。床から天井まで棚が固定されており、間の狭い通路に立つと押しつぶされそうな圧迫感がある。ここには歴代の外交の記録や国の財政の情報などが集積し、それが定まった順序によって整然と並んでいる。ただひたすら情報を溜め込み吐き出すことは滅多にない。そもそも重要な情報であれば各担当の大臣がすぐに調べられるよう手近に写しを保存している。

この場所の存在意義はいわば歴史。その目に見えないものを形にするためだけにここはある。

それを無意味だと断じるのは容易い。しかしその重みを知る者にとっては、ともすれば自分自身が押しつぶされそうなほどの強制的な力を感じるだろう。

「……或いは、恨みか辛み、嫉み、妬み」

あまりに自虐的な考えに自嘲し頭を切り替える。やらなければならぬことがあるのだから。

「陛下」

「揃ったか」

「御意」

ずらりと並んだ官吏を見渡して、レイヴスは細くため息をついた。この中に悪意を持ってシヨウゴにあのような仕打ちをした者がいるとは考えたくない。しかしそれをはつきりとさせるためにも、調べ上げるべきことは調べなければならぬ。

「これから全員で、過去10年分の私信の調査に当たってもらおう。対象はオースキュリテより送られて来たもの。それが正しく届けられているのかを調査する。」

絶対の精度を求めるため、一つの資料につき二人で同時に調査を行うように。かつそれを別のものが再度調べ上げる。一切の妥協は許されぬと思え」

あまりに合理的でない命令に一瞬場がざわついた。つまりは四人がかりで一つの資料を調べていけ、と。

それを見越してレイヴスは衣擦れの音さえ威嚇をもって言葉を続ける。

「私はお前たちの働きには信を置いている。しかし10年という長きに渡って書状が行方知れずになっていると言う事実は看過できるものではなく、またお前たちの職務上の信念にも反するものである。」

……徹底的に調べ上げる。これは国の威信の関わる問題だ」

そこまで言われて場が引き締まらないはずがない。

全員が深く頭をたれたのを見て言い放つ。

「これより作業が終了するまで、この部屋への一切の出入りを禁ずる。そして余計な手間は増やさぬよう、決して一人では行動しないよう各人慎重に。」

では… かかれ」

ざっとそれぞれが動き出す。

対象は10年分の膨大な資料の山だ。しかし誰一人としてそれに不平不満を言う者はなかった。

夜の帳

夜も更けた頃、レイヴスは何時間にも及んだ調査の結果を手に廊下を歩いてきた。灯りは殆ど落とされ、月の明るさが廊下を照らす。昼間の喧騒が嘘のように静まり返った王宮はまるでただの容器いれもののようで、そこで動く人間のことなど知らないように存在感さえ消している。

自室の扉の前まで来て、レイヴスはらしくもなく足を止めた。シヨウコに何と云うべきなのか自分の中ではつきりと分からなかったからだ。だがどんなに辛い現実だろうともおそろくシヨウコは事実を望むだろう。ぼやかされた言葉など聞きたくない筈だ。

寝ずの番の女官の前を通り過ぎ、そのまま奥へと足を向ける。慣れた部屋だ。灯りがなくとも不自由はない。

静かに寝室へと続く扉を開け、寝台に歩み寄る。

月明かりに照らされたシヨウコの枕元には、きっかけとなった手紙が無造作に置かれたままだ。泣き腫らしたとはつきりと分かるシヨウコの寝顔を見て扉の前で固めたはずの決心が揺らぎ、窓際で月明かりを頼りにもう一度手紙を開いた。

『また性懲りもなく手紙を書く私を許してね。叶わないとは分かっているけどどうしようもなく貴女に会いたい。』

こちらは厳しい季節になりました。でも今年も庭の寒椿はとても綺麗に咲いているわ。

出来ることなら春の桜も夏の雲も秋の虫の音も貴女とともに感じたいのだけれど……せめてその便りだけは送らせてね。毎回毎回こんな手紙を送ることで、貴女と過ごした時間を思い出しています。

そちらはあまり四季の変化がないというけれど、身体は大丈夫？ 貴女は病弱と言うわけではないけれど、辛いと素直に言えない性格だから、気遣ってくれる人が側にいるか心配だわ。

できればその人の側で貴女が幸せであることを願います。貴女が笑っていてくれることを祈ります。

私にはそんな資格はないけれど、貴女がこんな私を面倒だと思えるくらいに日々が満ち足りていますように。

便りがないのは良い便りだというのに、それでも10年も手紙を送り続ける馬鹿な姉を笑って頂戴。

貴女は今私の手紙を読んで笑っているかしら。それとも怒っているのかしら。

こんな手紙を書くことで許されるとは思っていないわ。でも、もうすぐアヤコ様の…伯母上の10回目のご命日だから、その時にはなんでもいいから言付けをお願いできないかしら。内親王としてはなく娘として、伯母上を悼む言葉を。

この10年、貴女を思わない日はないの。ただ空を見上げるしかできない自分が恨めしい。ただ貴女の犠牲の上に成り立つこの平和を無碍にはしないことだけは、変わらず貴女に誓います。

ユウコ

誰よりも愛しい私の妹へ

□

一度読んだだけでも十分に分かる。

この10年間何度も手紙を送り、返事がないにも関わらず変わらず親愛を示し続けた姿がありありと思い描かれる。

本来であればふれる事が出来た優しさを、シヨウコは10年間奪われ続けていた。

そして知ることが出来たはずの訃報を知らずに、ただ生きていると信じていたのだ。母親のことを。

それはあまりに残酷な仕打ちに思われた。

「…陛下、下？」

「目が覚めたか」

ぼんやりと月明かりに照らされた顔はやはり痛々しい。レイヴスが手にしている手紙を見て

更に痛ましげに顔を歪めた。寝台に広がるぬばたまの黒が、同じ色の瞳に生気がないせいで酷く残酷な色合いに映った。

「手紙は…ドープへ送られていた」

「……そうですか」

つまり手紙が消えたのはドープの町の中かあるいはその道中か。

流石にそこまで調べ上げることが出来なかったが、王宮内にシヨウコにあからさまな悪意を向ける者がいないことは分かっただけでも収穫だ。

しかしそんなことは関係が無いだろう。事実事実として動かないのだから。

レイヴスは窓際から寝台に移動して静かに腰掛けた。顔を背けるようにシヨウコが身じろぎしたが、構わず白い額に掛かった髪を払い除ける。

「保管室にはドープに発送した記録と…ここに来るまでに文字が滲んで届け先が不明になった手紙が一通出てきた。確認のため開封してしまっただが……読むか？」

正直レイヴスには多くの疑問があった。何故シヨウコは自分から手紙を出そうとしなかったのか、何故故国からの使者に会おうとしなかったのか。

しかし今はそれらすべての疑問を飲み込む。

シヨウコは疲れきったように手を伸ばしてその手紙を開封する。

それは姉のユウコからではなくオースキュリテくからシヨウコ内親王に宛てた手紙だった。

『アヤコ様崩御』

簡潔すぎる一文と日付が入った手紙を見て、シヨウコは両手で顔を覆った。

怒りではなく悲しみでもない。ただ悲しむには時を失っていて、

やりきれない感情ばかりがはけ口を求めて渦巻く。

「……シヨウコ」

レイヴスは震える手を除けることなく、ただその髪を撫でる。

それさえ邪魔になっているのかもしれないが、捨て置くことは出来なくて。

「……独り言を…言ってもよろしいでしょうか」

「ああ」

「あの方は…あの方と私は母娘らしい触れ合いなど、もったことがあります。あの方よりも私に近しい者は沢山いました。他人よりも遠い関係で…だから…悲しくなどないはずなのに」

「ああ」

「亡くなって10年もたつのですから…喪に服するにも今更過ぎて私は多分今混乱していて……どうしたらいいものか少し悩んでいるみたい…」

「……思うがままにしてみればいい」

その言葉に顔を覆ったままのシヨウコの手がぴくりと動いた。

思い切り嘆き悲しみたい衝動と、しかしそれはもう10年も前の出来事なのだという理性とが闘ぎ合い感情の捌け口が見つからないのだろう。普通であれば泣き崩れても何らおかしくはないのに、この国で肩肘を張って生きてきた間にそういった感情を殺す術を身につけてしまった。

それがレイヴスからしてみれば哀れだ。つい先日まで王宮から離れ守られていたはずの異国の姫はその実全く心安らかに安穩としていたわけではなかったのだ。

弱さを人に見せることに強い抵抗を感じるのはレイヴスとて同じだ。それは人の上に立つ者として当然のことと言えるだろう。しかし抑圧し続ければ人間らしい感情の発露を忘れてしまう。それは痛いほど自覚のあることだった。

「思うが俣…?」

鸚鵡返しに呟いた後、シヨウコはそんなこと出来ない自嘲した。

そんな自分は目指すべきものではない。

「ご母堂は…どのようなお方だった？」

「わかりません」

唐突な質問にシヨウコは考えることなく即答していた。分からない、と答えるほかになかった。

「本当に母娘らしい接触はなくて…私には何故私を産んだのかも分からない」

「では、この国に来ると決まったとき、ご母堂は何と？」

「それ、は」

辛かったら、死になさい。

異国に嫁する娘に贈る餞の言葉としてはあまりに残酷だ。

故国を出るとき、辛くはなかった。むしろこれまで邪魔者でしかなかった自分が役に立つことが嬉しかった。そして何よりこれで母を苛むことがなくなる。そのはずだったのに。

辛かったら死ぬと言い残して、どうしてそれから解放された筈の母が死ぬのか。

シヨウコが消えたことは何の意味もなかったのか。それほどまでに追い詰めたのか。

「私がいなくなれば…楽になるはずだったのに」

シヨウコは自分が話しすぎているという自覚があった。こんな話をして出生に疑問を持たれたりしたら故国オースケユリテのためにならない。

しかしシヨウコが国を出た一番の理由 母を楽にすることが潰えてしまった今、何のためにここに居るのか分からなくなってしまった。

この国に来て初めて地盤が固まると思っていた矢先に、これまで依拠してきたものがなくなってしまった。

「……楽になる、というくらいだったなら、何かあったのだろう。」

本当になかったのか？ご母堂はお前を娘と認めなかったと？」

何度も繰り返される間に、封じていたはずの思い出が蘇る。愛情

に満ちた環境ではなかったと思う。触れることができない温かさに憧れることはあっても、それが当然で不当だとも思わなかった。

でも、側に置いてもらっていた。

母の力を以ってすれば生まれてすぐに離れることも、或いは殺してしまふことだって出来ただろうに。むしろ周囲はそれを望んでいたはずだ。

それでも母は守ってくれていた。他が手を出せないように、自分の箱庭に囲うことで。母自身がそれを否定することで内親王としての価値を落とすことで。

「嘘……」

思わず漏れてしまった咳きは、取り返すことは出来なかった。それに対する返答はなくても、流れ出した言葉は止まらない。小さなほころびからさらさらと零れ、いつしか中身が空になってしまふまで。

「嘘なの。本当は知っていた。気付いていた。」

ただ…拒否されるのが怖くて」

長じてから母の考えには気が付いた。

でも本当はそれ以前から、共に暮らしていたときから分かっていた。

風邪を引いた晩に、寒い廊下に立って中をうかがう気配に。時折感じる優しい視線に。

母は不器用な人だったのかもしれない。娘を扱いかねていたのかもしれない。しかしそこには形容し難い温かさが確かにあった。

顔を覆ったままのシヨウコの手から涙の筋が零れだす。やがて喉からか細い嗚咽が漏れ出すと、レイヴスは身をかがめてシヨウコの額に口づけを落とした。そのままの動きでシヨウコの手を掴み、手を除ける。

「…いや、あ……」

泣き腫らした顔が露になることを拒否するが、その抵抗を封じて

レイヴスは耳元で囁く。

「ご母堂のために、泣け。その涙がなによりの弔いになる」

「…っああ」

おそらくシヨウコは自分の感情のために泣けと言っても気丈に涙を堪えるだけだろう。

泣くためには自分以外の人間のためという理由が必要だ。

「私はお前の顔を見ない。だが…こういう時に、一人で泣くことは許さない」

そういうとレイヴスは肩口にシヨウコの額を押し付けた。

肩口にじんわりと温かさが広がる。自分でない誰かのために流す涙は、こんなにも優しい。

その夜、二人はただ互いのぬくもりを分け合うように寄り添った。婚姻を結んで10年で初めて共に過ごした夜は、それらしい艶も熱もなくしつとりとした優しさがあるばかりだった。

日の光が目刺さる。

昨日は帳を下ろし忘れたのだろうか。

気だるい空気が揺れ動き、さらさらとシヨウコに覚醒を促す。

もう少し、このままで。

シヨウコは側にあるぬくもりに手を伸ばし、夜の欠片を感じようと深く息を吸った。

「、る」

耳元の低音にいやいやと首を横に振り、ほのかな麝香の香りを堪能する。麝香は普段使っている白檀よりも夜の名残が残っているような気がして、情眠を貪るべく細く息を吐いた。

麝香。麝香？

「朝だ。そろそろ目を覚ましてもいいだろう」

「!？」

直接耳に注ぎ込むような声の近さに、シヨウコは近年類を見ない速さで覚醒した。

急ぎ身を起こし寝台に手をつくが、寝台に手が沈み平衡を失する。

「っ！」

しかし予想したような衝撃はなく、呆れたようなため息が聞こえた。

「まったく……朝から騒がしい」

背中から首まで回された逞しい腕と、それに合わせて抱え込む形になったすべらかな筋肉がついた胸板にシヨウコは余計に混乱した。寝起きの頭をたたき起こし昨日の出来事を回想する。

あのまま寝入ったのか。自分の図太さにあきれ返るばかりだ。

「あ、ありがとうございます。陛下」

とにかく生身の身体を感じてしまうこの体勢から抜け出したくて身を擦る。寝ていたのだから当たり前だが、常よりもずっと簡素な服のせいで自分とは異なる異性の身体を初めて意識した。ケンや口イにも力の差というものは感じていたが、それ以前の生物としての差を感じたのは生まれて初めてだ。

「陛下？」

一向に解放するそぶりのないレイヴスにシヨウコは途方にくれた。いつだか後宮の部屋で演じられたようなあからさまな雰囲気ではない分、余計にどうすればいいのか分からない。

「落ち着いたな」

「……はい」

その確認が先程騒がしいと言っていたのは正反対で、思いがけなく心にすんなりと収まった。情緒不安定が続いているのではないかと案じてくれていたのだと知れば、この体勢も理解できないわけではない。

シヨウコの返答を受けて腕の力が緩み、そつとぬくもりが離れていく。

それを一瞬惜しいと思ったのは、何だったのだろうか。

シヨウコの頬の涙の後をぬぐい、そのまま手を滑らせて顎を掴んで上を向かせる。この仕草にも少し慣れてきた。

「立後の儀は、問題ないな」

それは疑問ではなく、依頼でもなく、ただの確認。

その信頼というには不確かな何かに応えるべく、それをより確かなものにすべくシヨウコはいつそ傲慢とも言える様な微笑を浮かべた。

「はい」

リュミシャル皇帝、レイヴス・シャルディア・リュミシャルの二番目の皇后は、立後の儀を以ってその名をシヨウコ・リーデル・オースキュリティア・リュミシャルと変えた。

帝国史上初の名に二つの国を持つ皇后である。

数多の視線を絡ませながら、第一部の幕が下りる。
薄暗く湿った舞台裏、さざめく歓声を聞きながら、それでも役者
は踊り続ける。

複雑に絡んだ糸は解けない。
自由に動けるはずもない。

それを嘆くか嘆かぬか。
舞台監督はいなくとも、舞台の裏も又舞台。

夜の帳（後書き）

第一部終了です。取り敢えず立后したので、一段落かなと思います。本当は「時の萌芽」と「夜の帳」を一話にまとめたかっただのですが、予想外に長くなったので断念しました（次回手紙の内容公開とか嘘ついて済みませんでした。苦し紛れに二話同時にアップしてみたりして）。

この先「雪待ちの花」を5話くらい更新してから「砂漠」に戻ってくる予定です。

ご感想、誤字脱字のご連絡お願いします。

始まりの風

国の重臣が一堂に会した閣議の席は既に秩序を失っていた。

普段は粛々とした議事のもと、論理的な議論が交わされる場である。しかし今日ばかりは既に発言権など求めない喧騒が飛び交っていた。

場の中心であるべき皇帝であるレイヴスは面白がるような笑みを浮かべて頬杖をついているばかりで、それが一層声を大きくさせる。非難の矢面に立たされているのは、先日立后したばかりのシヨウコだが、こちらは聞いているのかいないのかその表情からは分からない。一緒に仕事をしたロイもその横で無言を貫いている。

糠に釘。暖簾に腕押し。

しかしそれでも言わずにはいられないのが人間の心情だ。そういうわけで不毛な議論はその後も暫く続いた。

「では、そろそろよろしいかしら」

音もなくケンが椅子を引きシヨウコが立ち上がる。

流石に大きな声を聞きすぎて耳が痛い。思わずこめかみを揉んだのをレイヴスに見つかったのは即刻忘れることにした。そもそもあの顔が気に食わない。シヨウコに大掃除を命令したのはレイヴス本人であると言うのに、それを忘れて様な顔をして。それに関しては後で話し合いの必要があるかと心に留め置くことにした。

「今までの議論を総括しますと……」

不必要に言葉を切ってあたりを見渡す。

いくつかの顔がぎくりと強張ったのを見て、一応の報復にすることをにした。

「今回の後宮の人員削減に関して皆の意見は、一つ・皇后わたくしの恪気こくけいからきた暴挙である。二つ・特定の派閥に組するものである。三つ・皇后のリュミシャル文化に対する理解のなさを露呈するものである。

る。以上ですね？」

進行役がいなければ往々にして議論は同じことの繰り返しになる。結局長々主張してきたことも総括すれば非常に短いものだった。

シヨウコとしても非常に虚しい。予想していたとはいえ、やはり貴族にとつては娘を国母にというのは永遠の夢なのか。

そんなシヨウコの内心を読み取ったように、皇帝と皇后の席の後ろに控える近衛軍が顔を引き締めた。軍部が大きな影響力を持つこの国では大貴族と言えども敵に回すのは厄介だ。そして先だって起こった事件で軍部は皇后に親和的になっている。シヨウコは着実に足場を固めつつあった。

シヨウコは自分が既に「逆らうと面倒な相手」であることを認識した上で言葉を続ける。そう認識して貰うことは必要だが、実際に意見が合わないからといってどうこうする心算はないしその権限もない。

「まず皆に見てもらいたい資料があります。ロイ」

ロイが資料を配り始めたのを確認しながらシヨウコは改めてその数字にため息をついた。

何たる無駄。なんたる浪費。改めて数字を洗い出して本当に良かった。今後の戒めにしてもらわなければ。

「これまで後宮の経費は何ら監査もなく、求められるままに拠出されてきました。しかもその名称が様々であったために全体を把握することが困難になっていたことは事実です。それらすべてが無駄とは言いません。国の礎となるべき後継者を生む場所であれば、それ相応の経費は認められます。しかし……」

突きつけられた数字に重臣たちの顔も青くなる。始めはシヨウコもシヨウコだつて驚き目を疑った。シンレットはシヨウコに良くやつたと涙を流さんばかりに感謝したし、レイヴスは一人気まずそうにしていた。

手痛い現実だが気が付かなかったよりはましだと考えるしかない。「後宮に流れていた費用はおおよそ国家予算の四分の一……。過大

であったとしかいえません」

痛いほどの沈黙が流れる。

シヨウコとしても男性が女性の経費についてあれこれ口を出し難かったということは理解できる。しかも一つ一つが小口であれば、日々の慰めにと許可を出したくなる気持ちも分かる。

「後宮には現在300人の女性がいます。その中に皇妃が4人、側妾は3人。彼女たちは……」

「それ以上をこの場で口にすることは許さない」

突然口を開いたレイヴスにシヨウコはふわりと微笑みかけた。

「わかりました。陛下のご都合が悪いようですので、差し控えます」
レイヴスは忌々しげに眉を顰め、下座に座るシンレットは事の推移を思い出したらしく俯いたまま声を殺して小刻みに肩を震わせて笑った。

「シンレット……」

「……っはい……」

「退室するか？」

その瞳は傍目にはかなり真剣に見えて重臣たちは青ざめたが、シンレットは相変わらず笑い続け、シヨウコが何もなかったかのように淡々と進めていくので、多くの者は何もなかったのだと思いつつことに決めた。

「今後は後宮の費用を大幅に削減することが可能になります。残った方々には快くその旨納得していただきました」

快く、の内容を知っているロイヤルシンレットは素直に頷けない部分もあるが、それを知らない者たちからは感嘆の声が上がった。

「よって今年の予算も後宮分は余ることになります。財務大臣？」

つと目を走らせると、後宮の出費に関して一番の責任を負うべき立場を自覚している大臣は蒼い顔を白くして立ち上がった。

「は、ハイ！」

「……座れ」

レイヴスは一瞥すると冷たく言って立ち上がる。それだけで場の

空気が変わった。

悔しいなと思いつながら、シヨウウコは一步後ろに下がる。分かってはいるが、まだまだ敵わない。

「後宮の人員削減は前々から決めていたことだ。今後も増やす予定はないので各人その心算でいる。」

加えて後宮の経費だが、これに関しては誰にもその責を問う心算はない。これは当初から予想されていたものではなく、皇后の単純な興味と執念から生じた結果だ。

浮いた予算は急務である街道の建設に回す。異論は？」

皇后の暴挙ではなく皇帝の意思であること、そして誰も罰しないという条件に誰もが黙るしかない。加えて今後は娘を後宮に入れることは出来なくなるという徹底振りだ。

シンレットが小さく「お見事」と呟いた。

すべての者が国のため一枚岩というわけにはいかない。貫きたいと思えば餌で懐柔することも厭わないとレイヴスは考えている。

「結構。ああ、最後に皆に伝えておくが……」

レイヴスは振り返ってシヨウウコを見た。自然に場の視線が集まる。

「今後皇后を政治に参与させる。詳細はおつて決めるが……」

「陛下！」

無視しようにもそうは出来ないほど、場の空気が張り詰めた。

皇帝の言葉を遮ってまでの抗議にシヨウウコは首を傾げる。突然のことであるのは確かだが、それほど大きな反発はないとシンレットも予想していたはずだが。

そして見渡してみてもどこかに感じる違和感。正体を掴もうと頭をひねった。

「それはあまりに軽率なご判断では！？どうぞご再考を」

「陛下とてお分かりのはずではございませんか！」

「皇后の手腕こゝろに問題があるか？」

それはないとたった今証明して見せたはずだが、と言いつながらレ

イヴスはゆつたりと席に腰掛ける。長くなるのと見込んだのだろう。

「そうではありません！しかし悪しき前例が」

「国を傾けるおつもりですか？」

強い語気にざわめきが大きくなる。

年嵩の経験豊富な重臣が血管を浮き立たせてまでの抗議とは珍しい。受け止めるレイヴスは遮ることなく耳を傾けている。

それにしても国を傾けるとは話が大きくなってきた。

あまりの剣幕にシヨウコは蚊帳の外だ。

「シヨウコちゃん、大丈夫？」

後ろに控えていたロイが心配そうに訊ねるが、その声には苛立ちが滲んでいる。それを宥めるためにもシヨウコは努めて明るく、しかし小声で言った。

「私は何も……。ただ、反対している原因が分からなくて」

シヨウコの出自に拘っているというのなら話は早いが、どうもそれは違うような気がする。そうであるなら前例と言う言葉は甚だ不適當だ。

一人一人の顔を見てふと気が付いた。

反対しているのは年嵩の者だけだ。

「今の言葉は撤回してもらおう」

レイヴスは静かにそう言い、シヨウコを招く。

「私も皇后も国を傾ける心算などさらさらない。すべて国に資すると思えばこそその決断だ」

比較的若い者からは賛同の声があがる。

シヨウコは状況が読めないながらも、すつと握られた手の暖かさは信頼するに足りるなと根拠もなく思った。

「しかし……かつては……」

「言わんとしていることは理解している。しかし私もお前たちも同じ過ちを繰り返すほど愚かではないだろう。」

そして私と皇后が同じ過ちを犯そうとするならば、諫めてくれる者たちだと信じている」

静かに語られた言葉がゆっくりと場を支配していく。

レイヴスは協調性というものをさして尊重していない。

事を進める際に強権を発動してそれで済むのならばそれでよしとする。

決して他者の話を聞かないと言うわけではなく、そちらがより優れていると認めれば当然にそちらを採択する。しかし熟考の上で自分の意見が正しいと思うのならば、たとえそれが万人に反対されても貫くだけだ。

それが悪いとは思わない。上に立つ者には当然に求められる強さだとも考えられる。

故に。

「説得」を試みるという姿勢は非常に有効だった。

「……分かりました。陛下がそこまでおっしゃるのならば。皇后陛下のお力は我々も認めるどころです」

「他は？」

レイヴスが場を見渡すのに合わせて、皆が順々に礼を取った。

満足げに笑み、レイヴスは閉会を告げた。

会議が終わりそれぞれが歓談という名の政治を行ったりする中で、シヨウコは机の上の書類を片付けていた。頼めばやってくれる人間はいるだろうが、出来る限りこういったものは自分で管理したい。

「皇后陛下」

頭の中でこれからの予定を組み立てていたシヨウコに、しわがれた声が掛けられた。

「あ…、たぬ…」

意識するよりも口から言葉が出た。

「たぬ？」

「いいえ？お気になさらず」

口元だけを微笑みの形にして場を誤魔化す。

そうですか？と笑う好々爺然とした男には見覚えがあった。御前試合の前の帰還を祝う宴で、本来述べるべきでない口上を述べた男。戻る道すがらレイヴスが狸と称していた男だ。

その精悍とは言い難いどこか愛敬のある顔立ちに、シヨウコも秀逸な名づけだと感心しそのまま覚えてしまった。

「現在内務総括の任を頂いております、ゲハル・ダービスと申しま
す」

深々とした礼を取るが、その下で一体どんな顔をしているやら。
シヨウコも内心を押し隠しながら礼儀にかなった返答をする。

「それですな……」

一通りの挨拶が終わったところで、ゲハルはずいと顔を寄せてきた。反射的にシヨウコは一步引くが、相手はそれを意に介さない。
なかなか図太い老人だ。

「先程中断されたお話を伺いたく」

思いのほか真剣な様子にシヨウコは面食らった。

ちらりとレイヴスの様子を窺うが、個別の政策についての話をし
ていてこちらに注意を払ってはいない。

ここが先程の意趣返しのだどころか。しばし口元に指を置いて考
える。

一呼吸おいて表情を硬くした。

「ゲハル殿。貴方奥方は何人いらして？」

「はっ?!」

突拍子もない質問に間抜けな声上がる。

「それほど答えにくい質問かしら？」

「いえ…3人ほどおりますが……それが？」

「何故かしら」

重ねた質問に今度は返答の仕方を迷う。いつの間にか質問したはずがこちらが答えに窮することになるうとは。

「国の中枢を担うほどの方なら10や20は平気で養っていけるでしょう？それなのに3名の方々を選んだのは何故？」

楚々とした外見からは想像できない直接的な切り口で質問を重ねる。

ゲハルは遊び半分で声を掛けたことを後悔した。まさか身分が下の自分から話を切るわけにもいかない。

「つまりはそういうことだと思っただけです」

ひとしきりからかって満足したシヨウコはからりと表情を緩めた。宴の席では突然のことにこっちが驚いたのだから、少しくらい許されるだろう。

「100や200の女性がいらしても、きっと大した意味はないのではないかしら。」

そのすべての方と関係を持ちたいと思う男性はおそらく稀でしょう？そういう意味で巨大な後宮は女性にとっても不幸です。大切に育てられた娘が城の片隅で人知れず花を散らすのはあまりに不憫ではないかしら」

先に自分のことに置き換えられていただけに否定も出来ない。

別にシヨウコはこの会話で後宮の人員削減を正当化しようと思っただけではない。むしろ理屈としては男性に理解されがたいものであると思っていた。だからこそ後宮の経費について資料をまとめたきたのだ。

「翻って私自身に置き換えてみても……」

「皇后陛下に、ですか？」

「そう。」
飯に目の前に老いも若きもずらりと100人の男性を並べられても……うん。どんなにそれが推奨されても全員と関係を持ちたいとは思えないわね」

真剣な面持ちでそう呟く皇后に、大臣は絶句するしかなかった。

この場をどう切り抜けたらいいのだろうか。これまでの政の中で弄してきたどんな手練手管を使っても、これほどの難局を切り抜けることはできないかもしれない。背中を嫌な汗が伝っていった。

「何の話をしているかと思えば……少しはおとなしくしていることが出来ないのか」

やれやれといった風情で後ろから声がかかる。ゲハルには天の助けのように思われたが、シヨウコは僅かに顔を歪ませた。

「陛下、そのお言葉の真意を私は図りかねますが？」

「励め。」

……ゲハル、からかう心算が噛み付かれたか？お前がやり込められている姿は痛快だな」

口角を皮肉に上げてレイヴスは笑う。それを受けてゲハルはやりなくそうに毛の薄くなった後頭部を掻いた。

「お前も、これだけ注目を集めていて気が付かないとは、余程だ」「は？」

シヨウコが決して狭くはない室内を見渡すと、殆どの顔がこちらに向けてある。

一体いつからと思うと流石にやりにくい。

「それにさっきの話は何だ？」

「何だ……とおっしゃいますと？」

「どうして自身の話として置き換える必要がある。無意味だろう」

「無意味ではございません」

シヨウコはきっぱりと否定した。このとき皆の視線が集まっているということは頭の片隅に追いやられた。

「異性を多数そういった対象として扱うこと。同感できないからこそまず置き換えてみたのです。結果理解は出来ませんが受け入れることは出来ると判断しました」

いっそ堂々と言いきったシヨウコに場が絶句した。

聞きよつによつては皇后が側妾を容認すると言っているようにも取れる。あまり一般的とはいえない価値観であることは間違いない。「馬鹿が……」

短い会話で疲れきつたようにレイヴスは呟いた。視線を逸らして肩を落とす仕草が何とも人を馬鹿にしている。

「何故ですか」

「それを分らないから、馬鹿だと言っている」

あたりを見渡すと、レイヴスの後ろではシンレットが、少し離れてロイも頷く。入り口近くにいたケンも目を逸らしたところを見ると、シヨウコに非があるらしい。

僅かな葛藤の末、小さく謝罪を搾り出す。

「…今後、鋭意努力します」

そして言い逃げして歩き出す。シヨウコは戦略的撤退だと自分に言い聞かせた。

しかしそこは悲しい歩幅の差が、入り口にたどり着く頃には捕まってしまった。意地になって少しばかり速度を上げるが、レイヴスの歩く様が優雅なくらいゆっくりとして見えたので急に疲れた。

「何故私の言葉に素直に頷けない？」

「ご自分の胸に手を当ててみては？」

「質問に質問で返すな。努力する気などないだろう」

二人の背中を見送って、シンレットは呆然としている一堂を見渡した。

「では僕たちも解散と言うことで」

ロイとケンは既に二人の後を追っている。あの二人も含めて、まったく見ていて飽きが来ない。

「シンレット殿」

「はい？」

扉を見たままだった顔をゆっくりと戻して、ゲハルが呟いた。

「陛下は…変わられましたな」

「ええ」

躊躇なく肯定する。

誰の影響かなど考えるまでもない。何が違つと断言できるわけではないが、以前のレイヴスを知る者たちにしてみれば、それは劇的な変化だ。

何も知らず先入観もないからこそ、思うが俛に風を吹かせて濺みを巻き上げ散らしていく。おそらく本人にはそんな自覚はないのだらう。

「何というか：陛下も人の子であつたか！」

下手をすれば不敬罪にも当たりそうな言葉を呟きながら、ゲハルは面白いものをみたと笑う。

「ゲハル様……」

あんたさっきまで皇后陛下にやりこめられて青くなつてなかつたか？

「む？」

「貴方のその凶太さは僕の憧れですよ」

長年政をしているところなるのか。

それが羨ましいような、出来れば避けて通りたいような。微妙な気分のまま微妙な表情でシンレットはそう呟いた。

始まりの風（後書き）

砂漠の蝶に戻ってきました。（雪待ちの花は微妙な状態で止まったまま……すみません）

今後は一対一くらいの割合で更新していききたいなと思っています。

誤字脱字報告お願いします。

ご感想もお待ちしています。

風休む梢

「靈廟参拝…ですか」

部屋の中にはシヨウウコとレイヴスが腰掛けて、シンレットとロイが近くに控えている。ケンやはり定位置となりつつある入り口近くにいる。

仕方のないことで必要なことだとも分かっているが、長い間身分や慣例が緩いドープで暮らしていたシヨウウコにとっては気安い人間しかない場所でもこういった身分関係を明確にしなければならぬというのはどうにもやりにくい。

長いものには巻かれるとは思わないが、郷に入れば郷に従え。気に病んでも仕方がないかと思ひ直す。

一つ小さく息をついて、皇帝執務室に設えられた応接用の一画で、シヨウウコは茶の香りを楽しんだ。蜜蘭香は香りは甘いが味はしつかりとしていて、ともすれば強すぎる香りを上手くまろやかにしている。このお茶を淹れてくれた女官はなかなかの腕前だ。やはりこれくらいでないかと職人の手がかかった茶葉に申し訳ない。

対するレイヴスは茶器の繊細な造りに感心したようになってくるうと小さな茶器を手の中で弄んでいる。

「そうだ。本来ならば立后に先立って行うものだが…まあいろいろと都合があつてな。三日後に立出してもらおう」

『都合』の内容を知るシンレットは一瞬視線を他にずらした。オースキュリテにシヨウウコが立后する旨の書状を送ってから返事が帰ってくる前にと急いだのはまだいい。しかし三日後となれば。おそらく最速で返事が返ってくるであろう頃合だ。

どうせ遅れてしまったのだから、これほど急に決める必要もないはず。しかしそうした真意はどこにあるのだろうか。

しかしレイヴスの横顔からはなんの表情も読み取ることが出来ない。

「三日後…急ですね。と、言いますよりも…あの……確か、歴代皇帝陛下の靈廟は……」

珍しくシヨウコの言葉の歯切れが悪い。言いくいことをどうにかして伝えるという最低限の役割はそれでも十分だが。

「ああ。壊された」

あつさりと後を繋いだレイヴスに、シヨウコは硬い表情のままそうですよ、と呟いた。

初めてこのことを知ったとき、靈廟が破壊されるってどんな国なんだと思った。しかし調べてみれば古今東西靈廟に眠る財宝を求めの墓荒らしというのは比較的多い。

しかしリユミシャルの場合あまりにも事情が特別だった。

「先代皇帝が完膚なきまでに壊しに壊した。もうあれは執念だったな。まあそれでも一応棺はまとめて一つの靈廟に保管したわけだが…」。旧皇帝墓群には今何があつたかな」

「王都に近い場所では娯楽性の高い一画になっていますね。確か色を売る店が多かつたかと」

「…即答ですか」

通いなれているんですねと仄めかしたシヨウコの言葉を受け流し、シンレットはたまたまですよと笑う。

墓が娯館。普通なら何となく開発しにくそうなものだが、流石商人は割りきりがいい。

「まあ大抵が見晴らしの良い場所にあつたからな。死人には分不相応だ」

「ではどこに参ればよろしいでしょう」

いくら政治が形式主義とはいえ、まさか女性とねんごろになってこいとは言つまい。

そうは思いつつもしもの時に備えて理論武装を固める。

「旧王都に向かつてもらう。工程は七日間を予定している。それより早くも遅くも帰ってくるな」

「わかりました」

あつさりと首肯したシヨウコにレイヴスは意外なものでも見るかのように片眉を上げた。

「要は歴代皇帝にご挨拶という目的が達せれば良いのでしょうか。旧王都。非常に合理的です。少なくとも会ったこともない方々の棺に向かい合うよりは、よほど得るものもありましょう」

何より一箇所で済む。長くもない距離をだらだら移動するのが御免被る。

レイヴスに言葉が足りないのはもう慣れた。話が結論から結論に移動するので道筋が見えなくなるときは多々あるが、諸事情を考慮すればそこは自然と繋がってくる。ただ、あまり優しい話し方でないことは確かだが。

そんなシヨウコをシンレットはこっそりと感心したように眺めていた。そして、その後ろのどこか面白くなさそうな顔も。

「同行はシンレットに申し付けた」

「は……」「はい!?!」

了承の意味で頷こうとしたシヨウコと、聞き返す意味で口を開いたシンレットの声が重なる。

「聞いておりませんが?」

「今言った」

「三日後ですよ?」

いくらなんでも無茶だ。三日後までに向こう七日分の仕事を片付けるとは。

「あら?」

シヨウコが作り物めいた微笑を浮かべる。間違いなく良くない兆候だ。

「私も同じですわ。まさか極めて優秀な最年少大臣閣下が、そんなことを不可能とはおっしゃいませんわよね?」

こんなの八つ当たりじゃないかとシンレットは歯噛みした。あつさりを受け入れたその内心で、シヨウコも急な予定に苛立っていたらしい。

どこかに断る道はないかと模索していたとき、それまで黙っていたロイが口を開いた。

「無理だ」

ぱたんと手にした予定表を閉じてレイヴスに向き直る。

「シヨウコちゃんの予定は向こう10日間は動かせない。仕事はじめで忙しいことくらい分かってるだろう？シンレットだって忙しいみたいだし、あと5日待つてくれたら僕が同行できるように予定を組みなおすから」

黙って額に手を当てて聞いていたレイヴスは、ゆっくりと顔を上げると目を眇めた。

「ロイ。それをどうにかするのがお前の仕事だ」

それ以上でもそれ以下でもない言葉が続ける。

「そしてシンレットの予定はそっちの事務方がなんとかするだろう。お前が心配することではない」

無理を言っているのはレイヴスかロイか。

それは聞く人間の立場に寄るだろう。しかし絶対的な差は命を下す人間と下される人間だということだ。

それは比較的良く見る光景ではあるが、シヨウコはどことなく違和感を感じた。

「同行はシンレットだ。お前よりも貴族連中に顔が利く。今回は皇后の顔見世でもあるからより有利な人間を選ぶ」

「…御意」

「それから、ケン・シヨート。護衛はお前に任せる。近衛軍の隊長と相談して人員を固める」

「分かりました」

ケンの簡潔な言葉に頷き、レイヴスは立ち上がると執務机に向かう。

話は以上だと切り上げた姿に、シンレットも受け入れるより他になかった。

「では僕は仕事に戻ります。」

皇后陛下、後ほど打ち合わせに伺います」

それだけ言うとシンレットは慌しく出て行った。決めてしまえば切り替えも早いし仕事も速い。最年少で大臣まで上り詰めた所以だろう。

「では私たちも戻りましょう。陛下、御前失礼いたします」

背を向けたままの相手に礼を取り、部屋を辞した。

新たに設えたシヨウコの執務室は皇帝執務室から直線距離にする
とそれほど遠いわけではない。しかし中庭を四角に取り囲んで対角
線上にあるので厄介と言えば厄介だ。

中庭に敷き詰められた青々とした芝生を走る風は気持ちいいが、
この国でそれを維持するためにどれほどの人手と金がかかっている
のかは想像したくない。

「突然すぎはしませんか？」

一歩後ろを歩くケンが呟く。それはシヨウコも感じたが、立后も
何もかもが突然だったため感覚が麻痺してしまった。

「まあ、陛下だしね」

その一言で何となく片がつく気がするのは間違っているのだろう
か。おそらく間違っているだろうと思いつつも、それ以外に言葉
が見つからない。

「でも、レイらしくない」

「そう？私から見た陛下って常にああいう感じだけど……。私より
ロイのほうがずっと付き合い長いものね」

言いながらシヨウコは先程感じた違和感の正体に気が付いた。

「ロイはシンレット殿との打ち合わせの時間を決めておいて。ケンは近衛軍の詰め所に戻っていいわ。護衛の打ち合わせしなくちゃいけないわよね？私は少し後宮に戻って、そちらを片付けてから執務室に戻ります」

言うだけ言うとシヨウコはくるりと踵を返した。

「シヨウコ様！」

「人の少ないところは通らないから」

ひらひらと手を振ってシヨウコは来た道に戻っていく。

しかし曲がった角は後宮とは反対方向だ。

後宮に戻ると言うのは嘘ではないのだろう。しかしその前に行くべき場所がるのは明らかで。

それを見送るしかない横の男にケンは幾分低い声で嘲った。

「無様ですね」

「……殺すよ？」

「出来ないでしょう。地位も身分も不確かな今の貴方には」

筆頭護衛官と執務官。階級で言えば全く同等だ。

「君は：レイが気に食わないんじゃないかなかったのか？」

「一体何を」

嘲るように息を吐くとケンは淡々と続けた。

「私が排除したいと思うのはシヨウコ様に仇なす者です。シヨウコ様が厭う者が私の敵。それを排するために利があるのなら誰とでも手を組みますが……」

続きは必要ないとばかりに途切れた言葉に、指先が震えるほどの怒りを覚えた。

それを悟られまいと軽妙な笑みを浮かべる。

すべては自分の責だと分かっているからこそ、そのすべてを甘受するより他にない。

ここで自由に振舞えるだけの地位がないのは、再三ドープでシヨウコに勧められたにも関わらず執務官になることを拒んだから。

シンレットに大きく水をあけられたのは、中央との繋がりを放棄して小さな楽園に籠っていたから。

つげが回ってきただけのこと。

「言ってくれるね」

「事実でしょう。無益な人間に用はありません」

それだけ言うとケンは何の詰め所に向かって歩き出した。

その背中を見送ることもなくロイも歩き出す。

今回はいい機会なのかもしれない。10日あれば地盤を固めるには十分だし、多少無理をすればかつての繋がりを復活させることも出来るだろう。その過程をシヨウコに見られなくて済むのは正直ありがたい。政は綺麗な手段ばかりを使うわけではないとシヨウコも分かっているだろうが、あえてそれを突きつけたいとは思えないから。

シヨウコは先程出てきたばかりの扉の前で逡巡した後、控えめに扉を叩いた。

許しを得て中に入ると、レイヴスは面倒くさそうに視線を投げたよこした。それに僅かに怯む心押し隠しつつ、シヨウコは略式の礼を取る。

「何だ」

「よろしかったのですか？」

「何がだ」

「ロイです」

「構わないだろう」

僅かな抗議を込めつつ首を傾げると、レイヴスは一つ小さくため息をつく。

「ロイが…何か言っていたのか？」

「まさか。ですが」

不必要に言葉を切ったシヨウウコをレイヴスが訝しげに眺める。視線がぶつかった瞬間を狙い済まして口を開く。

「ロイにあんなきついこと言うんじゃないって後悔している陛下のご尊顔を拝しに参ったまでです」

「…拝観料を払え」

「あら、山勘でしたのに」

「そうか。自分が仏になる気があるのか」

「宗教を気安く語るのは感心いたしません」

レイヴスは背中を椅子に預け仕事を一旦中断する様子を見せた。最近では会話の中で有耶無耶にされることや誤魔化されることが減ってきた。その分気を抜けない状況ではあるのだが、少なくとも向き合おうと言つ意思が互いにあることは必要だ。

「ロイは誰よりも賢かった。それこそ勉強だけ見ればシンレットよりも上だった。おそらく将来を嘱望された人材だったはずだ」

すべて過去形で語られる言葉。口にするレイヴスとしても楽しい内容ではないのだろう。

「だが足りないものがなかったというわけではない」

僅かに不快そうな面持ちは自分に対する苛立ちも混ざっているのだろう。

「それは…身分、ですか？」

軽く目を伏せたまま頷く。

「ですが、執務官は身分や職歴を問わないはずでは？」

「建前はな」

沈痛そうな面持ちにそれほど事情が単純でなかったことが分かつ

てしまった。

ロイの自尊心は決して低くない。

学舎では純粹にその能力だけが評価されるが、実際に働いてみれば人間は自分と近い人間と共同体を作るものだ。そこで行われる無意識の行動を制度だけで完全に排することは不可能だ。

それが積もり積もればいつしか学舎では自分より下だと侮つていた人間が並び追い越していく。

耐えられなかったのだろう。そして耐えるほどの価値を中央政府に感じなかったのだろう。

それを大人気ないと罵ることは簡単だが、そう思われてもした決断を切り捨てることは出来ない。持つ側の人間にはそれを理解することは出来ても感じることは出来ないのだから。

「では、ロイには頑張つて貰わなければなりませんね」

将来を囑望されてそれを振り切るように飛び出した後、風当たりが強くなかったはずがない。当然仲の良かったシンレットやレイヴスにも感じるものはあつたはずだ。

呼び戻すことに対しても反発はあつたに違いない。

それらを考慮してもなお、ロイにその価値があるとレイヴスが認めたとのならば。

ロイがそれを知つていても一度は捨てた場所に戻つてくることを決めたのならば。

「……そうきたか」

どこかあつけに取られたようにレイヴスはぽつりと言葉を残した。

「何か間違つていますか？」

「いや、お前はそれでいい」

「馬鹿にされているような気もしないではありませんが……、事情は理解しました。」

陛下の分かりにくいロイへの激励も、おそらくは伝わっているのでは？」

伝わっていると断言しないのがシヨウコだ。

レイヴスもそれに苦笑する。自分でも大概素直でないし分かりにくいとは思っている。

「ならば仕事にかかれ。言っておくがロイには何も言うな。アレが自分で片付ける問題だ」

「ご心配なく。それほど無粋ではありません」

もともと自分が心配するような話ではなかったのだ。ここに来たのは単なる興味で、何をどうことうしたかったわけではない。

自分でも何に対して言い訳をしているのか分からないまま、シヨウコは踵を返して歩き出そうとした。

「お前は」

呼び止められて首だけで振り返る。

「何のためにここにいるのか、決めたのか？」

そこには予想したようなからかいの色はなく、ただ真摯な瞳があった。

母の死を受けて目的を失ったと泣いた。それは数日経った今でもどこか現実味のない虚ろな事実だが、ゆるやかにではあるが受け入れ始めている。何に対しても時間というものは特效薬で、少しずつ癒しながら鈍感になっていくのだろう。

「そうですね。まだ、分かりません」

誤魔化すことは出来ずに声が少しかすれた。失ったものが大きすぎて簡単に代用品が見つかるものでもない。そもそもそんなものが存在するのかさえ分からない。

僅かに柳眉を寄せたレイヴスにシヨウコは内心で苦笑した。興味本位で尋ねたつもりが、探られたのはこちらだったようだ。

「ですが、取り敢えず今はそれなりに楽しんでいきます」

嘘をつくことが出来ないなら、これが今の精一杯だ。

「そうか。ならば問題ない」

「ええ。私も、そう思いたいです」

当然生活の中で腹立たしいことや辛いこともある。後宮は未だに針の筵だし、故国のことで当てこすりを言われることもままある。しかしそれら瑣末を補って余りあるくらいに充実していると胸を張って言うことが出来る。それを与えてくれたのは間違いなくレイヴスだ。

レイヴスは満足げに笑むと、視線を書類に落として言った。その直前、両の瞳に僅かに意地の悪さが光る。

「姉君に手紙は書いたのか？」

「……っ！」

レイヴスの視線が下がったままなので一瞬で固まった表情は見られずにすんだが、それも気遣いと分かれればむしろいたたまれない。

この方は、この方は、この方はっ！！

思わず奥歯をかみ締めた。気を緩めた一瞬を外すことなく打ち込んでくる的確さはどこで培ったのだろうか。

「まあ先三日は目の回る忙しさだろう。戻ったら出来る限り早急にかかるように」

私信なのに間違いなく命令された。それでも戻ってくるまで猶予が与えられたことに違いはない。

シヨウコも火急の用件だと言うことは分かっている。10年以上返信がなければ、リュミシャルの責任を問われても仕方がないことだ。それを避けるためにもそのない弁明と謝罪が必要だ。

それなのに時間をくれたのは、事情を慮ったことだろう。

「木乃伊取りが木乃伊、といったところですね」

「何？」

「南西の国の言葉です」

訝しげなレイヴスの疑問に、求められているものとは違う答えを返して部屋を辞する。レイヴスが言うようにやるべきことは山のようにあるのだから、これ以上ここで時間を浪費する訳にはいかない。

すれ違つ人々が自然に道を譲ることに抵抗はなくなつてきた。わざわざ脇に控える必要はないが、それも一種の様式美でそのほうが楽なのだと言われればそれまでだ。

採光と通風のために大きく切り取られた窓からは焼け付くような強い光が差し込んでいる。これほどまでに強い光はむしろ生物に命を与えるよりも略奪していく。強すぎれば何事も害だ。それはどこかレイヴスと似ているような気がした。

額に手で庇を作りながら、シヨウコは先程までの会話を反芻する。レイヴスとの会話は面白いと素直にシヨウコは思っている。初めて会つたときのような恐怖や再会したときの嫌悪はもうない。

すべてを肯定することは出来ないが、確かにシヨウコが持ち合わせていないものを持っている人だと思う。それが少し妬ましくて羨ましい。そしてそれ以上に凄いと思える。

でもそれが何だろう。

似たような感情はシンレットやロイにも感じるし、ケンやアオも尊敬すべき美点を持った人間だ。

少し考えてからシヨウコは何かを振り払うように軽く頭をふるつ。どうして急にそんなことを考えたのか。

それは考えないことにして。

風は変わらず

往路三日。

復路三日。

旧王都滞在時間実質一日足らず。

貴人の移動とは思えない強行軍だ。前例に従うのなら全行程合わせて20日以上が費やされるが、それには物見遊山が加わったこと。そういったものを排除して、やるべきことを最低限の労力で考えるのなら、これ以外の日程は受け入れられない。

どうせ形骸化しているのだから無駄は徹底的に削ぎ落とせというレイヴスの号令のもと組まれた日程に、シヨウコは全面的に賛成した。

「だからと言って…こうなるのね」

げんなりと広くはない空間でシヨウコはため息をついた。薄い帳が下りているので外の様子を窺うことは出来ない。ただぼんやりと影が動いていることを知れる程度だ。しかしシヨウコの視線は正面を向くことなく意思を持って外に向けられている。

舗装された道を走る車の乗り心地は決して悪くはない。難点と言えば車を引く馬を頻繁に交換しなければならぬところだろうが、人間にも休息は必要なのでそれは大きな問題ではないだろう。

「馬は駱駝に比べて体温調節が下手ですからね。どうしても長い距離を走ることではできません」

その後なたつぷりと休憩を取らせても半日が限度だと言う。加えて車を引いているのであれば余計にその消耗は激しいだろう。

「そうでしょうね…ですから車の数が多ければ無益に馬を疲れさせるということは分かります」

「その先はお言葉にせずとも結構です。……従うほかないでしょう。陛下のお言葉なんですから。私の事はお気になさらず」

気にするなといわれても無理がある。

分乗は無駄だと判断したのだろう。それは正しい。全く正しい。しかしだからといって仮にも皇后を、己の正妃を、歳の近い異性と狭い空間に放り込むのは如何なものか。それを全幅の信頼と云ってしまえばそれまでだが、シヨウコは兎も角シンレットの居心地の悪さは想像するに難くない。自分に非があるわけではないが、謝るべきなのかと真剣に考えた。

二人は視線を絡ませることなく、ため息をついた。

「シンレット殿。時間の有効活用を提案いたします」

「意義はございません。では、始めましょうか。まずは我が国の歴史の概略から」

本来ならば途中途中の休憩時間に予定されていたが、こう気まずい沈黙が続くよりは余程ましだ。おそらくこれも脚本の内なのだろう。

「これから向かう旧王都は、先々代皇帝陛下の御世までこの国の中心でした。現在の王都に移ったのは先代皇帝陛下の御世からです。それを更に発展させ、政治機能のほかに文化・商業・軍事の拠点としての機能を抱かせたのは今上皇帝陛下です。旧王都の歴史は古く

……」

「質問があります」

シンレットの話を遮って、シヨウコはつと手を上げた。

それに対してシンレットが軽く頷く。

シヨウコは学舎に通ったことがないので勿論意識した行動ではないが、それはまるで教師と教え子のようだ。

「皇帝陛下なのに王都とは、これ如何に？」

実は前々からの疑問であった。

皇帝・皇后と呼び習わすにも関わらず、王族・王都という名称がまかり通っている。しかし皆が当たり前のように使っているので、質問することも憚られて今日に至っていたのだが、今を聞いて聞く

機会は無いだろう。

しかしそれを受けたシンレットの反応は至って冷淡であった。

「陛下。失礼ですが、歴史を学ばれたことは？」

いつもより数段低い声に、シヨウコは自分がよろしくないものを刺激してしまったことを知った。

シヨウコがシンレットについて知っていることは多くはない。

つばに入ると笑いが尾を引く。レイヴスの腹心。皮肉屋。最年少大臣。

いまからここに知りたくない情報が一つ加わることを覚悟した。

「当然でございます。ですが、歴史書は最新の物でも20年前までしか書いておりません。つまり先代皇帝陛下の御世がまとまっていな
いことはご存知ですね？」

「確かに。先代皇帝陛下の時代は関係国で戦が多く、未だ正確な数字が把握できていないため、公式の発表は遅れています。ですが、一通り学んだのでしたら推測することは出来るでしょう」

当然のようにいうシンレットに、シヨウコはまだ互いに理解が足りないと感じずにはいらなかった。

悲しいことにシヨウコには基本的な知識がどうしても欠落している。それは子どもが周囲の大人から自然に吸収したり、童話やわらべ歌などでいつの間にか覚えていようなものだ。10でこの国に来て早々に腰を落ち着けたドーブでは、最初は完全な腫れ物扱いで、それが過ぎればシヨウコに気遣ってかこの国の歴史や風習を必要最低限以上に教えようとする者はいなかった。

押し黙ったシヨウコにため息をついて、シンレットは慣れた様子で語りだした。

「我が国は民族・文化・宗教の同一性を以って一つの国の形を成しているのではありません。究極的に言えば大国であることの利便性を求めて、地理的に近い地域が国を形成していると言えます。」

現在の状態に至るまでは各地に『王』と呼ばれる者が多数おり、それぞれが狭い範囲でその地を治めていました。そこから徐々に力

を持つ王が現れ徐々に周囲を飲み込んでいき、いつしか広大な土地を管理統括するようになりました。それが現在の王家の祖先です。

その王は他の王と己を区別するため、『皇帝』と名乗るようになりました。権力の所在をより明確化するため『皇』という文字は歴代皇帝及び皇后、そして今上皇帝の妃と子にのみ用います」

「つまり……」

複雑な話を整理しようとシヨウウコは平易な言葉を搜した。

「昔はたくさんの方がいたので、それらと現在の王家を区別する称号が、皇？」

「平たく言えばそうなります。現在でもかつて支配していた土地に戻れば小王と呼ばれる者たちもいますよ。勿論、ただの名残ですが」シヨウウコは話を聞きながらも違和感を隠せないでいた。

ひどく限定的な名称の変更の裏。それを考えずにはいられない。

「……ごく最近なのでしょう？」

「何がでしょう？」

「国が積極的にその名称を普及させたのは、極最近なのです。そうでなければ皇帝のおわす城は皇城、皇都が自然」

ふとシンレットは無表情になった。しかしそれも一瞬で、すぐにいつもの掴み所のない表情に切り変わる。

「陛下は少しばかり……。いえ、では、理由はどのようにお考えですか？」

「オースキュリテとの関係なのでしょう。故国くにでは皇族の血を引く者たちを王と呼びます。意味するところが違っても、訳してしまえば音は同じ。それでは釣り合いが取れないということから」

シンレットはご明察ですと目を細めた。

しかしシヨウウコはそれに対して僅かに眉を顰めるより他に対応が無い。シンレットはどう考えても話し過ぎている。嘘を言っているようにも見えないが、その意図するところは分からない。

「右手に見えますのがかの戦いの舞台となった高台です。あの場所
で第4代皇帝陛下は…」

「シンレット殿」

「何でしょう」

「見えませんが？」

休息のための急ごしらえの天蓋で、シヨウコは僅かに被っていた
ベールをずらして外を確認した。見えないのはやはり視界が悪いせ
いではない。

レイヴスの厳命により女官たちの最重要任務となったベール着用
は、今のところ守られている。肌を晒すな・焼くな・荒らすな。明
らかな暴行の跡でもなければシヨウコの容色如何で国交に問題が生
じるとは思わないが、一度拒否したときの女官たちの青ざめた顔に
は同情を禁じえない。

「そんなことはありません。見えますよ」

飄々と答えるシンレットにシヨウコは何の謎掛けかと頭をひねる。
緑の少ない荒涼とした大地は、砂埃さえ静まれば地平線が望める
のではないだろうか。そのどこに高台が。

「トリスバール様」

見かねて控えていたケンが声を上げた。

「うん？」

「高台までの距離はいかほどでしょう」

「そうだねえ」

ケンの厳しい声をもともせず、シンレットは可愛らしく小首を

かしげた。

「馬で一日とちょっとかな」

「……………」

「……………」

思わず言葉を失い顔を見合わせる二人にシンレットは快活に笑いかけた。

「心の目で見てください。両陛下が物見遊山として切り捨てなければ現地でご説明できたのですが、そうも言っていられないので。

貴族の中にはこういった歴史に触れることこそこの旅の目的と考える者も多いのです。私としても陛下とそういった方々との板ばさみと言いますか、ね」

皮肉な言葉にシヨウウコは作り物めいた完璧な微笑を浮かべた。それこそ、一切の反論を許さないような。

「精進なさい」

当然ケンはこの誰の横暴に対しても意義を申し立てるが、主の強権には何一つ口を差し挟むことは無い。

苦みばしった顔をするシンレットを横目に、シヨウウコは先程も感じた疑問の答えを模索する。

少し離れた場所では馬の取替えが終わり、出立の準備が進められていた。

旧王都にはゆるやかだが確実に退廃の空気が流れてた。

特に最近では現王都を中心にした交通網が整備され利便性が向上したために人口の移動が起こり、旧王都に暮らす人間は最盛期の三分の一までになったという。

それでも離れられない人間もいる、とシンレットは言った。国民性として合理的が挙げられるこの国でも、そう簡単に割り切れるものだけではないのだろう。少なくともベール越しに見た街は、愛され手をかけられていると分かった。

「シヨウコ様」

コツコツと小さく外から車の壁が叩かれ、馴染んだ声が出た。

「何か？ケン」

「これから旧王城に入りますが…少々道が悪いので中が揺れるかご注意ください」

シヨウコがそれを理解して内装の一部の取っ手を掴んだすぐ後に、車が大きく揺れた。

「いたっ…！」

シヨウコは勿論間に合ったが、普段身体を動かし慣れていない文官のシンレットは間に合わず思い切り壁に頭をぶつける羽目になった。

「大丈夫ですか？車輪が穴に落ちているようですね」

がたがたと大きく揺れる車の中でシヨウコは平然と話し続けるが、シンレットはそれどころではなかった。ぶつけた頭を抑えれば身体を支えきれずまた他の場所を強打する。こんな状況で話などしたら舌を噛むに違いない。

「馬には乗れるのでしょうか？同じ要領で揺れを殺せばいいのです」

「……っ！止める！」

らしくない荒れた声で命じるとシンレットは頭を押さえたまま扉に手をかけようとするがそれは叶わず、外から扉が勢いよく開けられた。

「如何なさいました、シヨウコ様！」

慌てた様子でケンと対照的に、行き場をなくした手を彷徨させた

後シンレットは疲れたように呟いた。

「君は…本当に皇后陛下のことしか考えてないね」

シンレットはケンを押しやってそのまま馬車を降り、納得したように頷くと馬の用意を命じた。

「陛下。申し訳ありませんが僕は馬を使わせていただきます。この揺れは耐えられません」

「シンレット殿？」

突然何を言うのかと身を乗り出し、シヨウウコは目を疑った。

美しい町並み。歴史溢れる街道。吹き抜ける風は花のにおいを運んでくる。

しかしそれらと相反するように、旧王城へ続く石畳の道はひどい状態だった。

「これ、は」

寸分の狂いも無く敷き詰められたはずの石畳は所々陥没し、そこに車輪が嵌ることにより大きく揺れたのだろう。手入れを放棄された石畳の端からは逞しく草が生えている。

「自然な腐食ではありませんね」

屈みこみ石畳を検分したシンレットは事も無げに言い放った。

「かつてこの城へと続く道は二色の石が使われた美しい姿をしていました。しかしそれも遷都が行われてからは、生活のため或いは抵抗の意思表示のために失われたと記録されています」

これほどとは思っていなかったとシンレットは続けた。周囲を見渡してみても随従してきた者たちは一様に驚きを隠せないでいた。

一時は国政の中心経済の中心として栄えた街の現在の姿はそれほど衝撃的であった。

「この分だと王城もどうなっているか。まあいずれにしてもあと少しです。行きましようか」

シンレットはシヨウウコを車の中へと促すが、意識する前にシヨウウコはそれを拒んだ。

「歩きます」

どうせ王城まではそれほどの距離は無い。

「陛下？」

「歩かせてください。お願いします」

それは警護のことや今後の予定を考えての謝罪であったが、譲る気配は全く無い。

シヨウコは風に流れる長い髪を押さえて、まっすぐに道の先にある王城を見据えた。

権力の象徴。

華やかなりし面影を湛えた美しい要塞。

しかしそれが持つ力はあっさり與人々の生活を変えときにひどく歪ませる。この道はその象徴だと思った。

そうであるならば受け止めなければならない。その立場にある者として、逃げてはならない。

その様子に何か感じるところがあつたのだろう。シンレットは小さく頷いてシヨウコに手を差し出した。レイヴスよりもケンよりも幾分細い手に手を重ね、慎重にゆるやかな坂道の一步を踏み出す。

ケンの響く声が警護の変更を告げた。

基礎は頑丈で当時の美しさを物語るが、それに施されていたであろう装飾は見る影も無い。正門をくぐり、まず入った場所はただただ広い空間だった。

「ここは近衛軍が皇帝の拝謁を給うための広間です。この都が退廃した原因の一つとして近衛軍が増長し、次期皇帝の人選にまで介入

するようになったためと言われています。その証拠に王城には近衛軍のための食堂、宿舎、浴場、舞踏会場、賭博場などが多数あります。そのどれもが常軌を逸した豪華さです。それらを振り切るためにも遷都が必要でした」

その説明には控えていたケンも息を呑んだ。

今は皇帝直属のもと統制が取れている近衛軍からは想像も出来ない。

「ではこちらに」

そう言ってシンレットが歩き出したのは、明らかにわき道だった。シンレット殿。そちら…ですか？」

正面奥にはおそらく政治の中心であった閣議室などがあるのだろう。しかしシンレットはそれらには目もくれず、どンドン歩いていく。

「どうせ表は現王城と大した違いはありません。それよりも陛下にご覧頂きたい場所がございます」

身体ごと振り返ってシンレットは表情を緩めずに言った。

「どうぞ陛下。こちらがこの時代の我が国の暗部。後宮です」

王城内にしては狭い廊下を抜けてたどり着いたのはそれほど広くは無い中庭だった。現在の後宮にも中庭はあるが、その様子は大きく異なり、各部屋から中庭を望む窓は少なく装飾も極めて少ないように感じられた。

「ここは憩いの場ではありませんでした」

添えられていたシンレットの手はいつの間にか離されていた。

「この芝生は何十、何百と言う皇子の亡骸を受け止めてきたのです」

「亡骸……？」

シヨウコは意識して手を強く握り締めた。そしてシンレットが手を離れた意味を知る。

王城までの道を歩くと言ったときから問いかけていたのだろう。

この国の過去も受け入れられるのかと。一それを知ったとき一人で立っていられるのかと。

「ここは処刑場です。新しい皇帝が決まるとその兄弟たちはここで絹の縄を使って首を絞められ殺されました。巨大な後宮では常に権力闘争が絶えなかつた。皇帝の身にいつ危険が及ぶか分からない。生きていれればいつ反逆の旗印として担ぎ上げられるか知れませんが、ならばいつそ考えたのでしょうね」

「それが……この場所ですか」
シヨウコは四方を見渡した。

それほど広くは無い、壁の一枚向こう側には殺される皇子の母親も姉妹も暮らしているというのに。誰もが静かに死んでいったとは思えない。泣き叫ぶ者も助けを求める者もいただろう。その声が女たちに聞こえていないはずはない。或いは嘆き悲しむ母の声を聞きながら逝ったのだろうか。

空はただ高く青い。
過ぎ去った日を思ってシヨウコはきつく瞳を閉じた。

後宮の日々の生活を営む区画には大きな違いは無い。ただ部屋数が多い上に大部屋が多数あつた。これは当時則妾として移民や奴隷階級から見目麗しい少女を選び育てていたためだという。人種が入乱れての集団生活ともなれば小さな争いは絶えなかつただろうとシヨウコは当時の皇后に同情を禁じえない。

「あまりご興味を引かれないご様子ですね？」

シンレットの声にシヨウコは苦笑した。
むしろこの場所を面白がっているのは、通常であれば絶対に後宮に踏み入れることは無い随従の者たちだろう。かつては皇帝のみが立ち入ることを許された場所となればそれはやむを得ないかもしれない。

「興味が無いというよりは、あまり変わらないので。現王城の後宮のほうが小規模ですが」

「そうですね。では奥にはもつと面白いものがございしますが？」
挑戦的な視線にシヨウコは一瞬怯むのを隠し切れなかった。

周りは物珍しい後宮に夢中で気付いた様子は無い。一声かければいいのだろうが、それは負けたようで癪だ。

忍ばせた懐剣の感触を確認し、すぐ近くだと笑うシンレットに続いた。

「ここは……？」

後宮よりも更に奥まった場所に広がっていたのは、損傷が酷い今でも当時の豪華絢爛な様子を思い描くことが出来る区画だった。

しかし窓という窓には尽く柵が埋め込まれ、出入りのための扉は漆喰で塗り固められた後がある。

その強烈な違和感に思わず漆喰の後を手でなぞった。劣化の具合から最近のものではなく、扉が出来た当時からつまりここが使われていたときから施されていたと判断した。

「陛下も一度は耳にしたことがおありでは？悪名高き、金の鳥籠を」

風は変わらず（後書き）

舞台は王都を離れ、そのせいでレイヴスなんて全然出てこない。あ
わわわわ。

誤字脱字報告お願いします。
ご感想もお待ちしています。

風、変わらずとも

「すべては姫様と国の御為に」

常とはまるで異なる静かで怜悯な空気を纏って、目の前の女はそう言った。

すべての答えを知っていて、また答えを知っているということを知られていると分かっていて、それでもその表情は揺るがない。

僅かに上がった口角は、笑みではない。

すべての問に対する、拒絶だった。

金の鳥籠。

旧王都時代の終末期に使われた至上の牢獄。

「これが…金の鳥籠」

呆然と呟いた言葉はごく小さかったがシンレットの耳に届いていた。

「はい。説明は不要でしょうか？」

シヨウコは首を横に振り改めて決して開くことの無い扉を見つめた。金の鳥籠の存在そのものは知っていた。

旧王都時代の終末期には絹の縄を使った絞殺は行われなくなった。

その代わりに使われたのが金の鳥籠と言われる牢だ。そこに囚われるのは皇子であるから、当然に生活は贅をこらしたものであり食事

や衣服は勿論、子さえ残さぬならば愛妾を持つことも許された。

絞殺が行われなくなったのは風習そのものが嫌われたのではなく、皇位継承権者がいなくなることを恐れたためと言われている。当時は戦が多く皇帝が戦場で命を落とすことも考えられた。皇帝が子を成していない場合を考えて、その兄弟が残された。血統の維持という一面だけを見ればそれで十分だが、その制度は多くの問題を孕んでいた。

「これが我が国最大の歴史の汚点です」

吐き捨てるようにシンレットは言う。

それは説明するというよりは、初めて目にした実物を前に怒りを押さえきれないからだろう。

「正常な頭で考えれば明白だ。物心ついてからこんな部屋で過ごしただ人間が、統治者になりえるはずが無い。目論見通り、傀儡の出来上がりだ」

与えられるものをただひたすら享受してきた人間に、突然国のことを考えると言ったところで無理がある。そこに付け込んだのが増長した近衛軍と後宮に暮らす女性たちだった。そのせいでこの国は一時存続の危機に立たされたことがある。

「……それで」

シヨウコが国政に携わると言ったときの年嵩の大臣たちの拒絶反応はここから来ているのだろう。また国が傾くのではないかと危惧していたのだ。

リュミシャルの最大の汚点。

今でも口にするのは憚られる歴史の澱。

だからこそ仮想最大敵国の内親王であるシヨウコには触れる機会がないと思っていた。それがこうもあっさりと。

「……シンレット殿？」

気配を窺うようにゆっくりと振り返ると、シンレットは怒りを湛えるでもない真剣な表情をして立っていた。

「レイの指示です。」

皇后陛下が望むならば一切を隠し立てするな、と。この国の影も知った上でどのように判断するのかはすべて皇后陛下次第だと」言葉の端々から、その態度の一つ一つから、シンレットがそれに同意していなかったことは明白だ。おそらく他の者もそう判断するからこそ、シンレットは従者を連れずにシヨウウコをこの場に導いたのだろう。シンレットとて、皇帝からの命令であれば大臣として抗弁を行ったはずだが、友人からの頼みとして引き受けたのだろう。

胸が詰まる。

これほどのことをしてくれているのに、自分何か一つでも返せているだろうか。

何一つ語ることが出来ず、己の中に閉じ込めたままだというのに。せり上がってくる想いを押さえ込み、シヨウウコは自分でも酷い出来だと分かってしまう泣き笑いを浮かべた。

こんなときに出来ない作り笑いの練習なんて、なんの意味も無いのかも知れない。

そんなことを考えていたら、声までが震えた。

「……シンレット殿。暫し、一人にしてくださいませんか？」

シンレットは一切の理由を問わず、小さく頷いた。

「わかりました。お声の聞こえる範囲にあります。…裏手に回っていただければ、世話係のための出入り口がございますよ」

去っていく背中を見送り、シヨウウコは所々風化し崩れた壁に沿って裏手に回った。粗野な出入り口から覗いてみても、奥は薄暗く判然としない。それでも何かに招かれるようにシヨウウコは薄暗がりの中に踏み込んだ。

足元に注意しながらゆっくり進んでいくと、時期に目が暗さに慣れしてきた。

様々なものが散乱し、荒らされた跡が残っている。あまりに歪んだ空間だった。

これでまっとうな精神が養われるはずが無い。

この国の退廃は故国にとつては歓迎すべきことなのかもしれない。金の鳥籠という制度が継続していれば、二つの大国が肩を並べるような状況にはなり得なかつただろう。何もせずとも国はその中心部から腐敗していくのだから。

こんな考えは故国に対する裏切りだろう。内親王として持つてはいけないとは分かつていても、今だけは。

汚れた床に膝をつき、ゆっくりと頭を垂れた。

この国が過去に賢明な選択をしたことに感謝を。

あの方の気質がこの様な場所で奪われずに済んだことを素直に嬉しいと思える。

その祈りはシヨウコの不在を知ったケンが探しに来るまで、静かに続けられた。

「明日の昼には王城に戻れます」

晚餐の席でシンレットは幾分緊張を緩めたように言った。

晚餐と言つても旅の宿である以上質素なものだ。それでも王都を離れたからこそ素朴な味が舌を楽しませてくれる。

席についてるのはシヨウコとシンレットの二人だけだ。皇后と食事を共にするには貴族でも高位の者に限られる。

シヨウコもこの国の礼儀作法を徹底的に叩き込んだが、シンレットの振る舞いは自然に身に付いた無駄の無い優雅さがある。平生はレイヴスと馬鹿をやっているので忘れがちだが、シンレットも大貴族の息子なんだと急に思った。

「皇后陛下？」

「……はい」

「間がありましたね。お疲れですか？」

揚げ足を取るのか心配するのかわどちらかにして欲しいと思うのは我俣だろうか。

「いいえ。私など楽なほうでしょう」

シヨウコが疲れているなどと言ったら、あまりに申し訳ない。

警護に当たる近衛兵の疲労など極限だろう。

「私はそういう話をしているわけではありません。他の者と比較するのではなく、陛下ご自身の体調を把握することは今回の責任者である私の仕事でもあります」

「そうですね。申し訳ありませんでした。」

私の疲れてはいません。残された行程も予定通りで結構です」

シンレットは一つため息をつく、酒の杯を傾けた。シヨウコにとっては喉が焼けるほどきつい酒をこの国の人は水のように飲む。

「陛下は気配りが過ぎます。もっと自分勝手になさってよいのですよ？」

「自分勝手…ですか」

「そう。行き過ぎは困りますが、あまり気を回されると距離を見誤る者も出てくるでしょう」

「……難しいことを、おっしゃる」

「まあ諦めてください。偉そうにするのも陛下のご公務ですよ。その点、レイは完璧ですね」

最後の言葉にシヨウコは思わず噴出した。

偉そう、というよりは実際に偉いのだが、それが嫌味なくあそこまではまる人間も珍しいだろう。

「あのようになるのは、私には無理です」

「それは勿論。むしろあそこまでいかれては困ります。少しでいいですよ。そうすればレイと陛下で釣り合いが取れるでしょう」

あれが二人となれば国は回りません、とシンレットは冗談めかして言った。

それを想像して思わずシヨウコは笑ってしまった。確かに面倒な事態になりそうだ。

「シンレット殿。皇帝陛下を肴に笑うなんて、不敬でしてよ？」

「陛下が秘密にしてくださいだされば、ばれませんよ」

シヨウコはシンレットとこんな時間を過ごしたのは初めてだった。

いつもシンレットと話をするときには、それが雑談であることもどこか緊張していた。

「シンレット殿もたまには王城でこの様に振舞ってくださいればよろしいのに」

「何の得になりますか」

「少なくとも、アオが怯えません」

予想外の答えに、シンレットにしては珍しく間の抜けた声が出た。それを隠すようにわざと不機嫌な声を出す。

「……どういことですか、それは」

「陛下よりもシンレット殿が怖いようです。何をしました？」

正確には、より得体が知れなくて気味が悪いと言っていたが、適度な脚色を施していく。

「何もっ！ どういことですか！」

「さあ？ ご自分で確認ください」

会話を楽しんでいるうちに、食事もあらかた終わった。

ご馳走様でしたと手を合わせるシヨウコを興味深げに見て、シンレットも立ち上がる。

「皇后陛下。この後のご予定は？」

夜も更けて何も無いことをわかって聞いている。訝しがりながらもシヨウコは首を横に振った。

「もしよろしければ、星の読み方でもお教えしましょう。ここは王都よりも光が少ないので、小さな星もはっきりと見えますよ」

そう言われては断りにくい。シヨウコは導かれるままにせり出したバルコニーに向かった。

滞在している館の周りは兵が囲んでいることもあり、警護は遠巻きについた。ケンが文句を言わないところを見ると、安全が確認されたのだろう。

砂漠の夜は本当に冷え込む。昼の暑さなど嘘のように、身体の芯まで冷気が染み入ってくる。

思わず身体を抱きこんだシヨウウコに、シンレットは厚手の上着を差し出し、そのまま簡素な席に誘導する。そこには幾種類かの酒が用意されていた。

「陛下が好まれないのは存じておりますが、身体が暖まりますので一口だけでも」

そう言つて注がれたのは黄金色の甘い香りを放つものだった。

「…頂きます」

恐る恐る口にすると、飲み口は意外なほど柔らかいが喉通りは焼け付くような強さだ。喉もとを押さえたのは無意識だった。

「まだ強いようですね。今度は割ってみましょうか」

「いいえ…もう結構です。これ以上は」

「では私も頂いてよろしいですか？」

「勿論」

シンレットはシヨウウコには考えられない純度の酒をあおると、杯を置くと同時に向き直った。

「さて、私は酒で口が軽くなっているのです。今なら陛下のご質問にお答えしますよ」

「は？」

その態度はまるで酔って口が軽くなったようには見えない。むしろ真正面から切り込んできた。

「気になることがあるのでしょうか？陛下も御酒を召し上がって酔われた。それでいいでしょう」

「……！」

「消化不良は良くないですから。但し今だけです。明日の朝にはお答えしたことも忘れます」

どうして急に、とか。

何か裏が、とか。

そういうことを考えなかったわけではないけれど、それよりもまず口について出たのは望まれたままの質問だった。

「皇太后陛下は、どういった方なのでしょう」

口が渴くのは先程飲んだ酒のせいではない。

本人がいないところでその秘するところを暴こうとする卑怯な行いのせいだ。以前レイヴスが話したがらなかったことを、人伝に知ろうとしている。

「リュミシャルでは代々後宮の最高権力者は皇后ではなく皇太后。妻は複数あれど母は一人だから…でしょう？それが変わったのは先代皇帝陛下が父を殺し母を殺し皇帝の冠を手に入れたから。その方の寵愛を一身に集めた方が陛下のお母上である皇太后陛下。その方が何故後宮を取り仕切られないのか」

シンレットの表情は変わらない。

それに急ぎ立てられるようにシヨウウコはなおも言葉を重ねた。酒のせいか、頭が働かない。口にしていいのか悪いのかを考える前に、言葉が零れてくる。

「思えば私は皇太后陛下のお顔を拝見したことがございません。御前試合のときも、立后の儀のときも、皇帝陛下のお隣は空席でした。公式の場にお顔を出されないのは、何故ですか」

手にしていた杯を置き、シンレットはぱちぱちと手を叩いた。

「非常に良い質問です。一つの問で多くの情報を引き出すことが出来る」

「それは…どうも」

褒められているのに観察されているような気分になるのはどうしてだろう。否、観察されている。

「先代皇帝陛下には数多の皇妃および側妾がおりました。その中で唯一御子を成したのが陛下の母君であられる皇太后陛下です。天逝した御子も含めれば、その数は二桁になりました」

皇帝の寵愛を一身に受けた女性。

女性の最高位に上り詰め、わが子を皇帝にした幸運の人。

しかし皇太后の現在の振る舞いはそのような光を感じさせない。表舞台に背を向ける姿は、過去を否定しているようだ。

「皇太后陛下はレイシア殿下を片時も離さないほど愛しておられました。今は喪失の悲しみが深いのでしょうか」

「レイシア…殿下」

シヨウコがこの国に来た様に、海を渡ってオースキュリテに行った皇子。当然名前は知っているが顔をあわせたことは無い。

子を送り出した悲しみは理解できる。しかしそれは10年も前のことだ。

「皇太后陛下はレイを恨んでいます」

唐突な言葉に、弾かれるように顔を上げた。シンレットの瞳は静かな怒りを湛えていて、冗談を言っているようには見えない。

「どうして……だって、レイシア殿下のことは陛下には関係が無いはず」

国家間の決め事にたとえ皇太子と言えども子どもが口を出せる話ではない。

それにあのときはそれが最上の選択肢だったとシヨウコは思う。長じて己の立場を理解するために当時の文献や公的文書や密約の類を読み漁った。その上で姻戚関係を結ぶことが選択されたのは正しいと思っっている。

「理由をお話することは簡単です。ですが、きつと聞けば陛下は後悔なさる」

それでもいいのか、と問いかけているというよりは、だからやめておけ、と言っていることが分かった。

「でも、陛下にならレイも話すかもしれませぬ」

続けられた言葉は意外で、それが表情にも出ていたのだろう。シンレットは苦笑でもなく嘲笑でもなく自然に柔らかく笑った。

「そうでしょうか。私には……」

そつは思えません。と続けようとしたがシンレットはすつと人差し指を立てて唇に当てた。

「お付き合いありがとうございました。明日も早いですし、戻りましょう」

「そうですね。置いていかれては困りますから」

「は？」

立ち上がると僅かに身体が傾いた。倒れこそしなかったが、足に来ているらしい。酒の良も慣れだろうか。少し飲む訓練をしたほうがいいのかもしれない。

支えようと腕を伸ばしたシンレットを制して、取り敢えず卓に手をつく。思いがけなく顔を覗き込むような体勢になったので、ついでにやりと笑ってやった。

「星の読み方を教えていただけなかったので。方角が分かりませんから王都に戻れないわ」

「王城に戻られましたら、夜を共に過ごす方にお聞きください」
結局はあれもこれもレイヴスに聞け、だ。

シヨウコは秘密主義者の耳元でちゃんと指を鳴らした。まさか手を挙げるわけにはいかない。おふざけにはこの程度が関の山だ。

「王城に戻ったら、不敬罪の構成要件を調べるわよ？」

「物証がありましたら、応じましょう」

隙の無い答えはいつもと変わらない。先程の笑みが嘘だったのだろうか。

「おやすみなさいませ。皇太后陛下。」

部屋までお送りしてくれ」

言われるまでも無くケンシヨウコはシヨウコの側に来ていた。

「……御手を」

「それほど酔っていないわ。」

シンレット殿、よい夢を」

「ねえ、ケン」

シヨウコはケンが用意した檸檬水を一口飲み、扉の横に立つケンに声を掛けた。明日の頭痛を回避するために最低一杯は飲めと言いなから、ケンは水差したつぷりと檸檬水を用意した。

ケンは部屋の奥に入ってくることはなく、特別な用事が無い限同席することはもう無い。

「はい」

王城に戻って日々に追われている間に、二人の間の距離感は大きく変わった。どちらが距離をとったというのではなく、そうすることが自然になったというだけだ。

「私はまだ内親王…よね？」

「当然です」

夜にまぎれてしまいそうな声にケンははつきりと応えを出した。

「シヨウコ様は正当な第三皇位継承権をお持ちです」

「……そうよね」

ケンからは見えない角度でシヨウコは顔を曇らせた。

それは詰まり付随する義務も権利も失っていないと言っことだ。

惑う心を悟られまいと、シヨウコは窓から夜の空を見た。

リュミシャル皇后としての自分とオースキュリテ内親王としての自分のどちらを優先するべきか、シヨウコはこの旅で見失ってしまった。

この国にいる第一の目的である母はもう亡い。これからどう生きるのかを決めることはシヨウコにしか出来ないことだ。そしてどちらを選んだとしても選ばなかった一方から、あるいは選んだ他方からも非難される。

故国の空を忘れた代わりに、この国の空を愛しく思う。

昼の抜けるように蒼い空を鮮やかに、夜の沁みるような漆黒を穏やかに思うようになった。

それは多くの人と知り合ったから。

ドーブの街で、王城で人の優しさも冷たさも知ったからだ。そしてそれらすべてを与えてくれた人がいる。

頭をよぎる、鮮やかな色彩。傲慢ともいえる表情。ときとして優しい手。

逢いたい、と思った。

逢えばきっと自分はオースキュリテ内親王としての人質の身分を思いう出す。そしてリュミシャル皇后としての振る舞いをする。

変わらす狭間でもがくことになるにしても、ただ逢いたいと思った。

「ねえケン。お姉様から手紙が届いたの」

「!?!」

過去に届いていた分が紛失していることは言えない。それは高度に政治的な問題になり得るから、ケンを巻き込むわけにはいかない。

「驚いた？私、すっかり見捨てられたのだと思っていたの。それでいいと思っていたわ」

「そのようなこと……あるはずがないのはお分かりでしょうに。しかし……懐かしいですね」

懐かしい、のだろうか。

シヨウコにはそれほど故国の思い出が無い。無論生まれた土地を懐かしむ思いはあるが、生まれ育った環境の特殊性と人との関わりが希薄だったため、郷愁という感情は薄いかもしれない。空の色の違いを感じることはあっても、それに起因する思い出はあまりない。否、新しい生活の中でどんどん薄らいでいっているだけなのかもしれない。

「……帰ってもいいのよ？」

意識するより前に言葉が零れていた。

背後でケンが纏う気配が凍ったのに気が付いたが、一度口から出た言葉はなくなることは無い。

「シヨウコ様？」

怒るのは当然だ。

来たくも無いのに無理に国の事情で付き添いを命じられて、異国の政治まで巻き込まれたのだから。

「帰れるのだから、帰ってもいいの。ケンとは違うのだから」
こちらに接触を図ろうとしているのだから、それなりに思惑があるのだろう。それと引き換えにケンとアオの帰国を願ってもいいはずだ。二人は人質の自分とは異なり、帰ることが出来る。国で待っている家族もいるだろう。

「シヨウコ様！」

夜の空気を震わせる声にシヨウコは身をすくめた。ケンがシヨウコに対して声を荒げることなど数えるほどしかなかった。それくらい言っではいけない言葉だった。

怒らせた。

最初の一言こそ意識したものでなかったが、続く言葉は結果を意図しなかったとは言えない。

ゆっくりと振り返って見たその顔は平生と変わらぬ様子だが、身体の横で握り締めた拳が白い。激情を堪える姿は数こそ多くはないが見たことがある。この国にいる限り、感情を殺して生きていかなければならないのはあまりに不幸だ。

「私は申し上げたはずです。御側にあると。その心を違えようと思っただことなどありません」

搾り出すような声に胸が締め付けられる。

ケンが嘘をついていると考えたことなどない。アオも然り。それを信じられる位には長い付き合いだ。

でも。
ただ、自分がケンやアオの期待する自分でいられなくなってしまった。今は誤魔化せてもいつ気付かれ失望されるのか。

「……お疲れなのです」

それはケンが自分自身に行っているように聞こえた。だからこんな

戯言は聞き流せと、言い聞かせるように。

「……ケン」

「ゆっくりとお休みください。私はこれで失礼いたします」
静かな音を立てて扉が閉められる。

立ち上がりかけたシヨウコは結局力を失ったように長椅子に座り込み片膝を抱えた。

空には幾千幾万の星々がきらめきを放つ。
旅の空は今晚で終わりだ。

赤と紅

「ただ今、戻りました」

帰城の挨拶でみた顔が以前とは違うことを認めざるを得なかった。

一体旅の空で何を知り何を思ったのか、聞きたいようでもその口を塞いでしまいたいような。

「……ああ。無事で何よりだ」

結局出来たことといえば、ありきたりな言葉をかけることだけだった。

自分で動かしたはずの秤が傾くを見たくなくて、そのまま手で押さえてしまう。

しかしそうしてみたところで、事實は決して動かないということも知っている。

夜でも煌々とした明かりが灯された広間で、シヨウコは周囲を見渡しした。

壁一面に掛けられているのは、歴代の皇帝・皇后の肖像画だ。その中に近々自分も加わるのかと思うと不思議な気分になる。

決して褒められた行為ではない。それは十分に分かっている。

人が隠そうとしていることを、どうして暴く必要があるだろう。そのままにしておけばいいのに、どうしてこの激情を止められないのだろう。

背中を嫌な汗が伝っていく。この期に及んで、自分が怖がっていることを知った。それでも止められないと人が言うのを、愚かなこと

だと笑ってきたはずなのに。
端から徐々に年代を下っていく。

時の情勢や流行、国力などによって肖像画の大きさや色使いは様々だ。その中でも一際大きな肖像画の前で足を止める。

先代皇帝。評価は真つ二つに分かれる政治をしたが、それでもその功績は否定できない。どれほど否定的な学者であろうとも、公正な視線を持っていれば失策も多かったがしかしと続けざるを得ない。

シヨウコが顔を見たのは、10年前の華燭の儀とその後の数日間だけだ。シヨウコがドープに引きこもったあとに亡くなっているので、葬儀に参列さえしていない。漠然とした印象はあるが、それを打ち切って視線をその横に流した。

金の髪に琥珀色の瞳。

「この方が……皇太后陛下」

金の髪に琥珀の瞳。優しげな眼差しの女性だ。この方が理不尽に自分の息子を恨んでいるとは思えない。

この国では正統派の美女といえるだろう。美醜の感覚が若干異なるシヨウコでも美しい人だと思う。歳を重ねているにしてもこれほどの人と王城の廊下ですれ違えば気付くだろうから、やはり皇太后は王城にはいない。会いに行くにはそれなりに面倒そうだ。

そもそも皇太后は今どこで暮らしているのか。当然記録はされていないだろうから資料を紐解けばいいのだが、何故必要なか問われたときに明確な答えを返せない。

シヨウコも簡単に会えるとは思っていなかった。むしろ会いたいという気持ちに折り合いをつけるために肖像画を見に来たのだが、やはり気持ちは釈然としない。

「何をしている」

突然背後の扉が開き、若干強張った声が掛けられる。

「……陛下」

驚きはしない。ここに来ることは隠してはいなかった。

疲れを取るために今日は休めと言われていた人間が出歩いていると知れば、この人ならやってくるだろうなと思っていた。それでも仕事に穴を空けるようなことは絶対にしないから、捕まるとしたら夜のこの時間だと読んでいた。それを承知の上で、シヨウコはこの場所にいる。

レイヴスは何も言わずに服の胸元をくつろげた。謁見を受けたのだろうか。衣装というのが相応しい豪華と言えば聞こえはいいが、着る人間の容姿が違えば装飾過剰な服は、自室に戻っても着ていたい服ではない。衣装を改める前に来てくれたのかと思えば、悪い気はしなかった。

それでも重さは不快らしく、装飾目的しかない上着を肩から滑らせる。

「お手伝いを」

「ああ」

レイヴスの後ろに立ち留め金を外した上着を受け取った。手にしてみるとずしりと重い。裏布にまで綺麗な刺繍が施されたそれは、見ている分には着ている人間の容姿も相俟って美しいが、着てみれば動きにくさと重さで酷い肩こりになりそうだ。

部屋を出たところで控えている侍女に渡せばいいだろうと判断し、取り敢えずは端に設えられた長椅子の上に置く。

「私は休めと言った筈だったが？」

「ええ。執務は明日から始めます」

食い違っているのはわざとなのだから如何ともしがたい。

呆れたようなレイヴスの視線を軽くいなし、にっこりと微笑んだ。

「綺麗な方ですね」

それが誰を示しているのかレイヴスは一瞬考え、視線の先を追って頷いた。

「一国の王が執着したのだから、そうなのだろうな」

「その返事はおかしいと思いますが」

「自分の母親に、美醜も無いだろう。もっとも、あちらがどう思っているのかは分からないがな」

自嘲的な言葉に眉を顰めた。

シンレットが言っていたように、皇太后が実の息子を恨んでいるというのには本当なのかもしれない。

「愚かな女だ。感情的で、たやすく人を信じ、そして裏切られる。よく飽きもせずに繰り返すものだ、呆れたな」

「陛下？」

「そして男も愚かだった。己を過信し、また疑い、結局は抜き差しならないところまで追い詰められた。……並べてみると似合いだな？」

「陛下、あまりに皮肉が過ぎます。ご両親ではありませんか」

あまりに常と異なる態度に違和感を覚えた。レイヴスは皮肉は口にする。本当のことは隠す。人を責めるときは容赦ないが、人を貶めることはしない。

硬い靴音が室内に響く。レイヴスはゆっくりと壁に沿って歩きながら、静かに言葉を重ねていく。

「両親、祖父母、曾祖父母……呆れるほど長い。お前はこの系譜がどれほどの犠牲の上に成り立っているか考えたことがあるか？これほどまで連綿と続いたものでなければいっそ救われたであろうに」
レイヴスは先代皇帝と皇太后の肖像画の前で止まり、それを見上げた。

まるで当人たちと相対しているかのように、睨みつけるといったほうが正しいような険しい視線を送る。

「私が覚えている限り、母は7回懐妊した。物心着く前のことを含めれば、二桁にはなっていたかもしれないな」

視線とは裏腹に、声の調子はまったく変わらない。

その奇妙さにシヨウウコは戸惑った。感情を殺すことが出来る人だと

いうことは知っている。しかし今は自分の中の感情を処理しきれずにいるように見えた。

「……陛下？」

「聞いたのだろうか？ シンレットから。だからこんな場所にいるのではないのか？」

確かにそうだ。気になって仕方が無くて、秘するところを暴きたくてここに来た。

だが、こんな風に追い詰められたわけではない。

「どう伝えればいいのか？ 悩んでいた。だが、結局は済んだこと口にしてしまえば下らない昔語りだ。それでもお前がこの国の暗部を実際に見て、それでも私の横に立とうというのなら知る権利があると思う」

シヨウコは慎重に言葉を探した。

秘するところはあつても嘘はつかないように。それだけのことなのにこんなにも難しい。

「私は……私が望み、陛下が望まれる限り御側にあります。先のこととは分かりませんが、今は陛下の立つその横で同じものを見たいと思います」

レイヴスは細く息を吐くと、十分だと言って笑った。

「建国王は倒した敵の血を見続けたせいで、その瞳を赤くしたと言われている。無論跡付けの話だが、この国の王権の象徴として赤い瞳が語られるのは事実だ。しかし他家の血を取り入れていけば、次第に他の色が出てくるのは当然だ。そんなものは何の問題もないはずだった。歴代の皇帝の肖像画をみれば分かることだが、瞳の色が皇位継承に関わるわけではない。」

父は左右の瞳の色が異なった。右は赤だったが左は茶色だった。何と言うことはない、それだけの話だ。……それだけで済む話だっ

た。私が生まれるまでは。

父は多くの変革を行った。それによりいつしか第二の建国者と言われるようになったらしい。このあたりは私も人伝の話だが。

そして生まれた子どもは先祖がえりのような瞳の色をしていた。血を分けた息子が王権の象徴のような外見をしていたのだから、それは父にとって己の正当性を示す最たるものだったのだろうな。

しかしそんなものは偶然だ。そして偶然は続かない。次に生まれた子どもは赤い瞳ではなかった。

父はその生まれて間もない、目を開いたばかりのわが子を殺した。その子は母の不貞により出来た子であり、自分の子ではない、と。そして次も、その次も……子が長じることは無かった。

正気の沙汰ではない。父は血に取り憑かれていたのだろう。幸か不幸か、世継ぎの子どもはいた。故に誰も功績ある皇帝の狂気を止めることは無かった」

調子は静かだがどこか苦しそうにレイヴスは語った。

シヨウコは何も言えなかった。レイヴスが何故苦しんでいるのかが分かるだけに、安易な慰めの言葉など掛けられない。

「私に……」

震える声を隠そうとは思わなかった。

「私に、出来ることはありませんか？」

癒せるとは思えない。慰めることも出来ない。

同じ痛みを抱えていると、傷を舐めあうことを求めてはいない。出来るだけ静かに歩み寄り、そつと肩に触れた。

レイヴスは払いのけることは無かったが、反応も無い。それが痛々しくて、シヨウコは僅かに手に力を込めた。

「時に、思う。口にしても始まらないが……私が第一子でなければ、母の子どもたちは命を落とさずに済んだのではないかと。父は、

子を殺さずに済んだのではないか……母が恨むのも無理は無い」
レイヴスが僅かに自責の念を込めて呟いた言葉は、予想と僅かに異なった。

やはり、強いなと思う。

自分にはない強さが眩い。

シヨウコは背中からレイヴスの身体に腕を回した。その存在を確かめるように、腕に力を込める。

「私は……こんなことを言うとは残酷かも知れませんが……陛下が先代皇帝の始めの御子で嬉しく思います。そうでなければ、きっとお会いすることは無かったですから。」

私は、生まれてこなければではなく、第一子で無ければと言える陛下が好きです」

気の利いた言葉なんて出てこない。

それを補うように温かさが伝わればいい。そう思った。

「弟は……レイシアは、母の執念で生き残った。結局は父が遠くへやってしまったが、それでもあれは母の慰めであったと思う。」

父はいざレイシアを送り出す段になって、私に意見を求めた。私は反対しなかった。国のことを考えれば、最良の選択だったと今でも信じている。しかし……母にはどう思われたことか」

「後悔をしておいでですか？」

返された答えは予想通りで、やはりこの人は強いと思った。

「冷えてきたな。戻るか」

すべてを聞いたわけではない。隠しているのか話す価値がないと思っ
ているのかは分からないし、究極的にはどちらでも同じことだ。

すべてを教えてもらえらると思うのは傲慢で、ここまで話を聞けばあ
とは調べることも容易だ。それはレイヴスとて分かっているのだから
問題は無い。

「お茶を淹れますわ」

いつかレイヴスが、皇太后が好きだと言っていた。

親子だからといって必ずしも繋がりが深いとは思っていない。血の繋がりが恒久的なものでないことは、財産や地位を巡って陰日なたに争いが起こる血生臭い世界に身をおいていれば嫌でも分かってくる。

だからといって、小さな糸まで断ち切ろうとは思わない。いつ切れるとも知れないからこそ、そのままにしておいても害はないはずだ。

「……悪くない。付き合おう」

「偉そうに…否、偉いですけど。本当に陛下を見習っていいのですよ。シンレット殿ともう一度お話をせねばなりません」

「何の話だ」

「秘密です」

明日には忘れてしまうような会話をしながら、二人は部屋を後にした。

夜の冷たい風に混ざって、花の香りが走り抜ける。

赤と紅（後書き）

何とか間にあいました……！

大望と野心

「私は確か七日間の旅をして、一日の休息を取って、そして今日執務に復帰したはずなんだけど……」

額に手を当ててシヨウコは唸った。状況の変化に頭がついていかずに情報が錯綜している。

「間違いないよ。シヨウコちゃん」

「そうよね。なら、この状況は何？」

ずらりと並んだ補佐官と護衛官にシヨウコは乾いた笑いを漏らした。先程ロイから受けた説明によれば、貴族の子息たちからは派閥の偏りなく偏見の少ない者たちを、一般試験で官吏になった者たちからは師事した教授の推薦が確かな者を集めてきたらしい。護衛官に関しては連携が要となるため、事前にケンが用意していたリストから所属部隊に掛け合って品行方正でかつ部隊長の推薦付きの者同士を手合わせさせて実力を確かめた上で集めてきたらしい。当然、派閥もきちんとして考慮されていた。

執務補佐官も護衛官も基本的に年齢層は若い。その点だけが奇妙といえは奇妙だった。

その上雑然としていた執務室は居心地よくかつ使い勝手よく整えられ、どちらかと言えば整理整頓を苦手とするシヨウコは使うのが怖くなるほどだ。

「うん……。無益な人間っていうのは正直堪えたからね」

当てこすりをされたケンは涼しい顔でいるので、シヨウコは会話の中でケンにむけて込められた隠された皮肉には気が付かなかった。

「無益？」

「そう。無益な人間ってどう？」

突然の質問に思いつくまま答えた。

「個人的には、有害な人間よりも嫌」

「うん。だから地ならし頑張っちゃった」

邪気のなさそうな顔で言うロイにシヨウコはがっくりと肩を落とすた。

「地ならしの域、超えてるわ」

戻ったら早急に手をつけなければいけないと考えていたことが綺麗に終わっていたというのは、部下の有能さを誇ればいいのか、予定管理の杜撰な己を嘆けばいいのか微妙なところだ。

「これからは閣議の前の根回しとかが随分楽になるはずだよ。それぞれ優秀さは僕が保障する」

「それはありがたのだけれど……」

シヨウコは目の前に並ぶ顔を見渡した。

「貴方たちはそれでいいの？私の下で働くことに不満はないの？私は自分の立場の危うさを理解しているから、拒否に対して一切咎める心算はないわ。」

ただし、一旦私の元で働くことと決めたなら、その後は意思確認なんてしない。

だから嫌なら今そう言うて」

部屋に緊張が走ったのは一瞬で、最前列の端に立っていた青年の苦笑ですぐにくだけた空気に変わった。

「筆頭補佐官に脅されてここに居る者は誰一人いません。皆、陛下の下で働けることを光栄に思っています」

そう言った青年は比較的年高なだろう。少なくともシヨウコよりは年上で、ロイと同じくらいだろうか。

「……利点はないわよ？」

「ご冗談を。今や陛下の執務補佐官という地位は皇帝陛下の執務補佐官に並ぶ人気だとご存知ないのですか？」

そこまで言い切られてしまっは、否定するもの申し訳ないし失礼だと判断して、シヨウコは全体を見渡すと隙の無い微笑を浮かべた。「これからよろしく願います」

執務補佐官たちは頭を垂れて、護衛官たちは敬礼でもってそれに応えた。

新しくシヨウウコの体格に合わせて作り直された机をそつと撫でる。一見質素だが、美しい木目と輝きを押しさえた金の控えめな装飾が気に入っている。端に揃えられた支障の束を手に取ると、それ自身の重みと責任で背筋が伸びた。

「では、始めましょうか」

とん、と紙の端を揃える。ケンが引く椅子に腰掛けて、流れるように所信を述べた。

「ロイはなかなかいい仕事をしていただろう」

珍しく共に摂ることとなった昼食の席で、レイヴスはどこか嬉しそうに言った。

「お友達自慢ですか？」

「そうだ」

「……言い切りましたね」

午前中を思い返してみれば、確かな人選だったといえる。まだこなれていない分些細な回り道はあるが、皆他人に与えられた指示を見聞きして自分の仕事を選別する。ロイが優秀さを保障するといったのも宣うべなるかなといったところだ。

「文句なしに優秀です。ですが……癖も多い」

「選んだ人間と使う人間に癖があるのだから、致し方あるまい」

否定し得ないところが悲しい。

「あれだけではない。色々と暗躍していたぞ？中々面白い見世物だった」

「暗躍!？」

その物騒な単語がどうして飛び出してきたのか検討もつかない。確かに執務補佐官たちはロイに脅されたわけではないと言っていたはずだが。

「ロイは如何せん中央との繋がりが少なかったからな。それを補うためには綺麗とは言いいきれない手段も使ったようだが、違法ではないから表立った文句は出なかった」

法に触れるか触れないかの手段が一番性質が悪い。

ロイが猫のような笑顔の下で一体何をしたのか、気になるようで気に入らないとシヨウコは思った。

「……って、どうして陛下がご存知なんですか」

周知の暗躍なんて成立しない。その当然の疑問をレイヴスはあっさりと解決して見せた。

「陳情があつた」

「は？」

「ロイから被害を受けたと陳情があつた」

なんとも情けない話にシヨウコは口をつぐんだ。

どこの家にも地元に行けば中央に報告していない利益や隠蔽があるのだろう。ロイが数ヶ月前まで国内外をふらふらしていた間にそんな面白い話を素通りしてくるはずが無い。それで脅して、加えて新しい儲け話までちらつかせたかもしれない。

そこまでは容易に想像できるが、実際に限られた時間の中で渡りをつけて交渉に臨むのは一苦勞だっただろう。なんでもないような顔をしてそれをやってのけるから、余計に空恐ろしいなと思う。

「どうして急にロイが無気力状態から脱したのか……。陛下、何かしましたか？」

純粹な疑問にレイヴスは海よりも深いため息を付いた。

「古今東西、馬には人参と決まっている」

「馬？人参？」

「そう。人参にも褒美が必要だな。欲しいものはあるか？」

「私？」

シヨウコの疑問を一切意に介さず、レイヴスは思いついたようにシヨウコの胸元にかかった紅玉ルビィの指輪を手を取った。長めの鎖に掛けられているとはいえ、引き寄せられれば身体も合わせて前傾せざるを得なくなり僅かに身じろぎする。

「宝飾品は好まないのか？」

シヨウコが普段から付けている宝石はレイヴスから受け取ったこの紅玉だけだ。確かに皇后としては少ないだろう。

「これでも身につけるようになったのですが……」

長い髪をまとめる場合に髪飾りを使うときもあるが、基本的には一つ付けているだけで十分だと思う。故国やドープでは滅多なことが無い限り宝石は身につけなかった。それにどうしても宝石のきらめきと着物の織の鮮やかさが競合してしまう。それを着こなす自信がないから、下品になるよりはいつそ付けられない方がいいと思っていた。立后に際して贈られた品々の多くは棚の中で眠ったままだ。

「何より似合わないんです。私の肌に金は映えませんが……」

レイヴスや後宮の女性たちを見ていると、金は褐色の肌にこそ映えると思う。一点ものならどうにかなるが、この国の特産品である赤みの強い金は象牙の肌に黒い髪にはどうしても白々しいのではないのだろうか。

シヨウコの言葉にレイヴスは暫し考え込むと、さらりと髪を一房捉えて撫でながら言った。

「確かに……豪華な飾りよりは華奢で造りに粋を凝らしたものの……金よりは白金がよく似合う。中心には金剛石ダイヤモンドか真珠でもあしらうか。

お前なら淡い色の石でも付けられるだろうが……」

「要りませんよ!？」

真剣みを帯びていたので思わず声が大きくなる。皇帝の財産が莫大とはいえ、無駄遣いは認められない。

「女は大抵、貴金属が好きだと思っていたが……」

疲れたようにため息をつかれてもどうしようもない。棚で眠る宝石も現金に換えてしまいたいくらいだ。

「それは似合う方限定です。分不相応なものを頂いても、宝の持ち腐れ。宝石も職人も悲しみましょう」

「お前が分不相応ならそれ以上の女がこの国にはいないが？国を馬鹿にする気か？」

「それは話のすり替えです！」

「まあいい。楽しみにしている」

「ちよつと待つて……」

「以上だ」

「……」

不満たつぷりの視線を送るが、レイヴスはそんなものを意に介さない。

早々に諦めをつけると、シヨウコはここ数日考えていたことを口にした。

「皇室財産には余剰が出ていますよね？」

「あれは皇帝・皇后の財産とは別で、動かすには閣議決定が必要だが？」

「別に、個人的に何かが欲しいわけではありません。余剰分で旧王都の整備をしてはどうかと思ひまして」

皇室財産は多くの場合霊廟の建設や王城の整備などに使われてきた。その用途が皇帝を象徴するものが多いために減らされること無きだが、比較的新しい王城と巨大霊廟の建設が無くなってからは大部分を繰り越しているのが実情だ。

だがレイヴスは旧王都と聞いて顔をしかめた。

「今あそこに残っているのは、旧王都時代の懐古主義者だけだ。それだけならまだしも、その連中は現王都は認められないと破壊活動までしているという情報もある。国の財産を壊す連中に国の財産を使って快適な生活を提供してやれと？」

「それはそうですが……」

旧王都がそういった活動の拠点になっていることはシヨウコも聞い

ていた。

「余程の理屈をつけないと閣議承認は難しい。一体何を考えている？」

「実際に見てみると石畳が破壊されていたり警備の人間が皆無だったり、あまりに惨い姿です。歴史は取り戻せないからこそ保存しなければなりません。後生に残してこそ教訓も活きるのです。ここまでは表向きの理由です」

「裏の事情は？」

「もつと単純に、利益の話です。公道整備事業として、王都から旧王都までを繋いだ場合の予想通行人数がこれです」

袂から隠し持っていた資料を差し出した。食事の場にはあんまりかとも思うが、そうでない時間にレイヴスを捕まえるのはとても難しい。降って湧いた好機は活用しろとせつつかれた。

眺めるレイヴスの顔を窺いながら、若干早口にシヨウコは説明を重ねた。

「今の王都は防衛目的で選定された地で、周囲に娯楽が少ない。それに引き換え旧王都は歴史があり周囲に明峰もあり加えて海まで近い。観光にはうってつけです。二枚目には旧王都を観光資源として捉えた場合の予想人数も書いてあります。諸々計算してみると、閑所通行料や産業の振興、旧王城拝観料で長期的にはかなりの利益が見込めます」

民が富めば国が富む。平時ならばこんなに分かりやすい話はない。ついでに旧王都の人々の「見捨てられた」被害感情も緩和でき、破壊活動に対する支援も減るだろうと説明した。防衛のことを考えても、もし王都が堕ちた場合にすぐに首都機能を移管できたほうがいい。

「危険分散の観点から言えば、拠点が複数あることは望ましい。だが、それをわざわざ問題の多い旧王都にする利点は何だ？加えて旧王都を懐柔することによって危険分子が逆上する可能性もある。その点については考慮したのか？」

午前中に組み立てた理屈の穴をどんどん突かれる。

こうなると頭の中で理屈を組み立てて満足してきたシヨウウコよりも、実際の議論で意見を戦わせてきたレイヴスのほうがはるかに有利だ。話しながら考えるということが自然に出来るのだろう。

押し黙ったシヨウウコにレイヴスがため息をつく。

今回は無理かな、と内心で午前中に激務に当たらせられた補佐官たちに詫びた。

「……試算の精度はどのくらいだ」

「六割五分……いえ、七割は固いかと」

「八割まで上げる」

次の仕事の指示。それはつまり

「いいんですか？」

「決めるのか閣議で、だ」

「ありがとうございます！早速作業に当たります。明日中には正確な試算結果をお持ちいたします」

食後の甘みの強いお茶を飲み干し、挨拶もそこそこに部屋を辞そうとしたシヨウウコを呼び止める。

しかし振り返ったシヨウウコはレイヴスが口を開くよりも早く、問おうとした答えを言った。

「ゆくゆくは、小規模な街と街も舗装道路で繋ぎたい、と言っていました。その費用を回収できたら関所もなくしたい、と。」

各地をふらふら歩いていたのは伊達じゃない……私たちにはない発想ですよ？私もここまででは想定していませんでした」

やはり話には続きがあった。しかし広大な国土をすべて繋ぐという壮大な目標は暫くは伏せておくのだろう。今回はそのための布石として、公道整備に財源を引っ張ろうという考えだ。

「ロイらしいやり口だ」

その使い方を知らなかっただけで、昔から文句なしに優秀だった。

一つのこと集中させれば、シンレットやレイヴスも敵わない。

うかつかしていると出し抜かれるなど剣呑な考えが浮かぶ。

「手綱は握っておけよ」

その声はからかいの調子ではなく、真剣みを帯びていた。
「……はい」

大望と野心（後書き）

誤字脱字ございましたら報告をお願いします。
コメント・感想・一言大歓迎です！

旋風と玉座

痩せぎすの身体にはさぞ大儀であろう豪華な衣装を身に纏って、かの人物は王城に現れた。

その顔には皇帝・皇后を前にした尊敬も恐れも無く、ただ軽薄な笑いを浮かべている。

その者は暫定皇位継承権第二位、イル・レビータと名乗った。

「イル・レビータは四代前の皇帝陛下の異母兄弟であられるお方が身分を剥奪された後に中堅貴族との間に設けられた御子の子孫にあたります。その後家系は王族との姻戚関係はありません」
事務的に説明をするシンレットだが、その顔は珍しく不愉快さを隠しきれていない。

「詰まり、陛下との血の繋がりは……」

「市井の場末の酒屋の水割り程度だね」

ロイがさらりと言つてのけた例えばシヨウコには理解できないが、シンレットが頷いているところを見ると適当といえるのだろう。

それだけ薄い繋がりと云うことか。

シヨウコは頭に年代表を思い浮かべながら、眉を顰めた。

シヨウコの執務室にいるのは、シヨウコとロイ、そしてシンレットだ。そこにレイヴスがいないだけで妙な取り合わせになる。全く興味を示さなかったケンは護衛官たちと訓練場に行ってしまったし、他の執務官は別室で作業中だ。

他には誰もいない部屋で、それでも三人は密談でもするかのように

声を潜めて話を続ける。

シンレットはいまいち事の重大さを理解していない暢気な二人に苛立ったように、声は潜めたままで声色だけを陰しくするという器用な芸当をやってみせた。

「状況を理解しておられますか？陛下！」

「状況…ねえ」

いまいち煮え切らないシヨウコの後を引き継ぎ、ロイが変わりに状況を整理する。

「例の水割りの皇位継承権は、オースキュリテのレイシア様に継ぐ第二位。なんでこんな状況になったのかは簡単で、その一族が余りに無能だったから先代皇帝陛下が処分し忘れていただけ。他に血の濃い連中は粛清の名の下ばったばったと切り捨てられた」

意外と詰めが甘い人だったのか。それとも忘却するほど目立たない一族だったのか。

いずれにせよ見事な柵から牡丹餅だ。

「で、それがどうしてこの時期に王城に？」

皇位継承権者が中央にやってくるとなれば、平穏なものであるはずが無い。

「焦れたんでしょね」

あっさりとシンレットは答えを口にした。

シンレット自身貴族の籍を持つが、一口に貴族といっても一枚岩ではない。王室の強固な安定を望む一派が、イル・レビータを発掘してきたと言つのが本当のところらしい。

「レイに子どもを望む声って、あるにはあったけどそんなに煩くなかったらどう？」

「それは…先代のことがあるからあまり強くは無かったけど。でも即位から随分経っている。そろそろ疑われるのは仕方ないといえは仕方ないだろう」

「男色とか、胤が無いとかねえ」

直球過ぎるロイの言葉に思わず顔をしかめつつ、シヨウコはさもありなんと思わざるを得ない。

先代が自分の生まれただけの子を殺し続けたという話は最近聞いたばかりだ。そういう環境で育ったレイヴスに子どもを設けると急かすのは難しかったのだろう。

しかし後継者がいない皇位など不安定だ。いつ何があるか分からない以上、仮初でも後継者を立てておきたいと考える人間がいても不思議は無い。

「……ちよつと待って。弟のレイシア殿という方はどうなの？」

「あれは…誰が頭を下げててもこの国の皇位なんて引き受けませんよ」

「そう。あいつが皇帝になったら三日で国を傾ける」

そんなに無能な人間なのだろうか。

その弟は姉の伴侶のはずだ。少しばかり心配になってきた。

しかしその不安を二人は一掃して、こう言いきった。曰く、やる気が無いだけだ、と。三日で国を故意に傾けることが出来るくらいには有能だと請け負った。

シヨウコが思い切り顔をしかめたのを見て、シンレットはさらりと違う方向に水を向けた。

問題のある皇子を押し付けたとは思われたくない。

「陛下の姉上というお方は、どのようなお方でしたか？」

「素晴らしい方よ」

あっさりと言いきったシヨウコにシンレットは少々驚いた。手放しで褒める様子に嘘は見つからないのに、まったく具体性が無い。

「そうね……泣き伏す代わりに端然と姿勢を正し、眉を顰める代わりに微笑む方。それが全く惨めな様子ではなく自然で、ああいうようになりたいと思っていたわ」

だから、とシヨウコは続ける。

「レイシア殿が貴方たちの言う様な方ならば、お姉様のお側には居難いでしょうね」

少々きつめの視線を投げかけられて、水の流れは全く変わっていない

かったことを悟って僅かに肩を落とした。

「早い話、レイに子どもが出来ればいいんですよ」

「それは陛下に言って頂戴。後宮には暇と美貌を持って余した女性が
いるわ」

あっさりと自分を対象から除外したシヨウウコに、二人の男は反応に
困る。

子を成すことも皇后の義務だろうとやんわりと言い募ったシンレッ
トに、シヨウウコは苦笑を返した。

「珍しい失言ね。それとも野心かしら？」

どこか諦めた表情に、シンレットは自分の考えが浅かったことを悟
った。

シヨウウコはオースキュリテの内親王としての身分を放棄していない。
皇位継承権もある。

必然的にシヨウウコとレイヴスの子は二大国の支配者となりうる可能
性を持つていることになる。上手くいあれば相手の国を支配できる
が下手をすれば自国が支配される。政情が不安定でうまみがあるな
ら兎も角、仮にも和平を結んだ現在はそんな危ない橋は渡れない。

当然のように穏やかな時間が流れているから忘れがちだが、シヨウ
コは間違いようも無く人質だ。

ほかの誰が忘れても、シヨウウコだけはそれを忘れず気を張っている
のだろう。

「もしかして、シヨウウコちゃんがドープにいたのは……」

「さあ。先代同士がどこまで考えていたかはわからないわ。でも…
お姉様が齋宮なもの、あるいはそのためなのかしら」

先々の争いの種を取り除くためにシヨウウコをドープに移したのだと
したら、レイシアの相手に絶対の純潔が求められる齋宮なのだとし

たら、自分たちはまだまだ先人に敵わない。
三者三様のため息をつきつつ、仕切りなおすようにシヨウウコはぱちんと手を叩いた。

「いずれにせよ、陛下がどうなさるか。それ次第よ」

「そうは問屋が卸さない、ってやつだねえ」

はははと乾いた笑いを零すロイとは对象的に、シヨウウコは額にうっすらと青筋を立てた。

「……逃げた……」

空になった執務室。

不在の間の指示だけはきちんとかつ大量に残して、レイヴスは昼の執務室から姿を消した。

しかしこれは嵐の前兆に過ぎなかったのだと、数時間後にシヨウウコは思い知ることになる。

「皇后陛下、ご裁決を！」

「内容にもよるけれど、二時間待ち」

「皇后陛下、近衛軍が動きました！」

「その先に陛下がいる可能性が高いわ！つけて！」

「陛下。イル様がお目通りをと」

「却下。丁重にかつ確実にお断りを」

「陛下。イル様が皇帝陛下にお目通りをと」

「却下！陛下は本日日頃の激務によりお疲れが出たと」

「陛下、先程の近衛軍の動きは陽動でした！」

「そんな報告はいらないわっ」

「陛下、イル様が城内に旅芸人を……」

「たたき出しなさい！」

「皇后陛下、イル様が街に出るとおっしゃって……」

「許可できるとでも!?」

閉まったと思ったら別の人間によって扉が開かれるたびに、シヨウコは声を張り上げた。

常の仕事に加えて代行しなければならぬ分はレイヴスの仕事が続いてきているのだから、目が回る忙しさになるのは仕方が無い。それでも代行できる分はまだましで、皇帝の専制権が及ぶ事柄に関しては事態に差しさわりが無い程度に整えつつも決定的な判断はしないという面倒な処理が求められる。

いつもは仕事中に余裕さえ見せるロイさえ、幾許必死な顔で机に向かっていてる。

シンレットさえ一旦自分の仕事を中断してシヨウコの手伝いに入っているくらいだ。何とか王城は正常に動いているが、いつまで保つかは分からない。

「……終わりが見えない」

シヨウコは仕事に関しての愚痴は殆ど言わない。

しかしこればかりは悲しくなった。

悲しいのは仕事が多いせいではなく、自分の能力の程を知ったからだ。

「取り敢えず、イル殿を地下牢にでも放り込みますか」

物騒なことを言うがそれは軽口というにはあまりに表情が実を伴っている。シヨウコも一瞬悪くない考えだと思っってしまった。

「イル、殿？」

「様なんでつけるような相手でもないでしょう」

シンレットの家のほうが貴族としては家格が上だが、皇位継承権第二位というのは軽くは無い。気分的には呼び捨てたいがそうもいかないので殿ということになったらしい。

否、そんなシンレットの葛藤は今はどうでもいい。取り敢えず気にするところではない。

シヨウコは不器用だと机の上に突っ伏した。

「シヨウコちゃん？疲れた？」

「何か問題がありましたか？」

「……。陛下はいつもこれをお一人でこなしているのよね。なんて言うのかしら……敗北感？」

普段なら愚痴を言う前に手を動かさせ、言い訳を考える暇があるならその間に働けが信条だが、ここ最近の疲れが今になって出てきたよな気だるさだ。

しかしそれをシンレットはあっさりと切り捨てた。

「あ、それは、うん。仕方ないですよ」

仕方ないは無いだろうと抗議の意味を込めてじとりと睨みつけると、ロイまでも横で頷いた。

「……確かに、私は経験も学識も不足しているけれど」

「そういう意味ではなく。経験不足は否めませんが、知識は十分ですよ。」

ただ、皇帝陛下は我々とは思考回路が違いますから、比べようとしても無意味だという話です」

「ほら、シヨウコちゃん。レイってよく話し飛ぶでしょ？」

「それが何か？」

「あれ、本人の中では全部繋がってるんだよ。僕も昔はよくわからなくて苦労したけど、説明されると納得できるよ。レイには多分、それが至極当たり前のことなんだと思う」

「つまりですね」

シンレットもついでに休憩という構えで話始める。

「我々の本棚は分野ごとに区分されて、繋がりはその分野の本と本の中では複雑だが、分野ごとの繋がりには少ない。ですが皇帝陛下の本棚は一見雑然として並びは滅茶苦茶に見えますが、本と本が分野を越えて結ばれているわけです」

そこまで言われれば、シヨウコにも察しがついた。

「そう…だったら陛下にはこんなものは難解でも何でもないわね」
机の上に広がった書類を指で撫でる。

題目だけ見ても、治安・経済・文化振興・区画整理。実務は学問とは違って系統別に並んでいるわけではない。貫くのは優先順位という柱だけだ。

シヨウコはそれらについて一つ一つを深く考えることは出来ても、一見して関連性を見出すことは出来ない。しかしレイヴスにはそれが出来る。それだけの違いだ。

逆に言えば、政治から軍事まであらゆることを司る皇帝という地位に就くためには、そうでなければならぬのだろう。

「……。うん。諦めがついた。気を取り直して頑張ります」

誰に向かって宣言するわけでもないが、改めて書類に向き直る。そんなシヨウコに二人も各々仕事に戻った。

出来ないことは仕方が無い。出来ないなりに時間と手間を掛けるしかないだろう。三人いれば何とかなるかもしれない。レイヴスが戻ったらきつちり落とし前をつけてもらおうと密かに決意する。

しかしそんな気持ちを嘲笑うかのように、蒼白な顔でもたらされた

報告に三人は目を見張った。

「皇后陛下！イル様が……イル様が後宮に……！」

廊下を早足に進み、いくつもの角を曲がって後宮の前に着くとそこには既に黒山の人だかりが出来ていた。

一際大きく靴音を鳴らすと、ざわめきと共に人並みが割れシヨウコの前に道が出来た。ゆっくりと一歩一歩進むごとにざわめきは小さくなり緊張と共に静寂が訪れる。

それを阻むかのように耳を澄ませば後宮の中から笑いさざめく声が聞こえてきて、シヨウコは思わず眉を顰めた。

「……説明を」

取り敢えず扉の前に陣取っていた執務官に視線を向けると、一瞬の躊躇いの後に重々しく口を開いた。

「イル・レビータ様が突然こちらにお越しになり、皇帝陛下からの許可を頂いているのでこの扉を開けるように、と。私には確認する術がございません故、すぐに皇后陛下に使いをやったのですが、……それを待つては下さいませんでした」

「……。分かりました。貴方に非はありません」

一介の兵士が貴人に手を触れることなど出来ない。それが身の安全のためであるなら兎も角、その行動を阻むことなど出来ないのは当然だ。

そして勿論後宮に入ることなど出来はしない。後宮に入ることが出来るのは奥勤めの女官か、或いはそこに暮らす者。そのほかには皇帝の許可を得た場合に限られる。この兵士は出来る限りのことをやったのだから、責めることはしない。

「私は陛下がイル殿に許可を与えたと言う話は聞いていないわ。シンレット殿？ロイ？」

二人は同時に否定した。

「恐れながら陛下……僕は許可が出ているとは……」
シンレットの言葉の先は聞かずとも分かっている。

そんな許可が出ているはずが無い。レイヴスはそれほど義務を疎かにはしないし、後宮の女性を守らなければならぬと一応は思っているはずだ。更に言うなら面倒ごとを嫌う人が、自ら刈り取らなければならぬ厄介の種を蒔くはずが無い。

そんなことは少し考えれば分かることだ。それなのに敢えてこんな暴挙に出たということはすなわち。

「……漏れたか」

ロイの呟きがすべてだった。

目的不明の皇位継承権第二位は、レイヴスの失踪を知っているのだろう。情報がどこから漏洩したのかは後々調べるとして、火急にこの状況に対処しなければならぬ。

中に入ることが出来るのはシヨウコだけだ。それを皆が分かっているのに行けと言わないのは、何かあったとしても誰一人対処に向かうことが出来ないからだ。

レイヴスが戻ってきたら絶対にこの問題を話し合おうと心に決めた。「私が行きます。保険として扉は開けたままで、聞こえるように話をするので記録に残しておくように」

心配そうなざわめきはあったが、止める者はいなかった。

優雅さなどがなくなり捨てて、足音も高らかに声のする方へ進んでいく。速度はかろうじて歩いているといえる位だ。

広間を突っ切り中庭に出ると、シヨウコは思わず低く呻いた。

美しく装飾された周囲に溶け込むように流れる水。水量まで計算された水路は見事な弧を描きながら、人工的な泉に流れ入る。それだけならばいつもと同じ光景だった。水が貴重なこの国でこんな贅沢なものと思いつつも、一息吐くことが出来る後宮の中では少ない

場所だ。

そしてこの醜態。この場所が後宮で本当に良かった。逆説的だが、ここが立ち入りを禁じられた場所で本当に良かったと今は思う。お気に入りの場所を汚されたという個人的な恨みの加わり、自分の取るべき態度は決した。

「随分と、楽しそうですね？」

いつもなら取り繕う柔らかい声音も表情も無く、シヨウコは不愉快満面で椅子に腰掛けた男を見下ろした。イル・レビータはゆっくりと顔を上げると殊更ゆっくりと首だけで振り返って軽薄な笑みを顔に浮かべた。

しまりの無い顔に更にシヨウコの中に嫌悪感が湧き上がる。

「これはこれは……皇后陛下」

粘着質な笑みも気に食わない。卑屈でそれでいて内心では人を見下している。

そんな心の内を一切明かさないうけ狸たちと丁々発止のやり取りをしている日々を省みれば、目の前の相手は何ら恐れるに足りない。さっさと片をつけてしまおうが勝ちだ。

シヨウコは意識してがらりと表情を変えた。目は細く、口元は慈愛の形に、僅かに首を傾げてさらりと髪を流す。

そしてそれに相手が一瞬驚いた隙を狙って、
全力で蹴り
落とした。

派手な水柱が上がリ悲鳴が響き渡る中、シヨウコは一緒に倒れてしまった椅子の行方を目で追っていた。

安くは無いだ。壊れていないと良いのだが、いずれにせよもう一度使うには徹底的に掃除をしてからだ。

「さて、目は覚めましたか？」

水面から顔をだしむせる相手を見下ろして言う。

「勝手に後宮に立ち入って、それだけでは飽き足らずにこの醜態。どうしてくれましょうか？」

シヨウウコは周囲に厳しい視線を投げかけた。

そこかしこに薄絹を纏った女たちが怯えている。中には女官だけではなく側妾まで混ざっているのだから救われない。流石に皇妃たちがこの馬鹿騒ぎに混ざらなかつたところが唯一の救いだらうか。

濡れた衣が張り付いてはつきりと分かる体の線は、さぞかし目の保養だつたことだろう。

「どういう…心算だつ……」

どうやら水を飲んでしまったらしいイル・レビータが泉から出ようと上げた頭をシヨウウコは若干手加減しつつも再度蹴り飛ばした。

「それはこちらの台詞です。ここは後宮。陛下以外の殿方が許可無く立ち入ることは許されておりません。その禁忌を破つた罪、お覚悟ください」

そして、と続ける。

「この騒ぎに加担した者も当然罪に問います。次の月の障りがあったと医師に確認されるまでは陛下のお目にかからないように」
それは後宮に暮らす女たちにとっては何もするなということと同じだ。存在する理由が無い。

一斉に湧き上がる不満の声に、シヨウウコは静まれと一喝した。

「後宮にいる私たちが仕えるべきお方は陛下お一人。それを破つてまでのこの所業。本来ならば十月と十日にしたいくらいだわ」

不実は無かつたと確実に言える期間を設けたかつた。間違つても皇位継承権に疑問がないように。

シヨウウコとてイルと後宮の女たちの間に不実があつたと思つていないわけではない。ただ、そう疑う者は確実にいる。だからこそその厳しい処置だ。

「さてイル殿？いつまで水遊びをしていらつしやるおつもりですか。一刻も早く表にお戻りください」

「……一つだけ、いいかな？」

不満と怒りを隠しもせず、イルは長い前髪をかき上げながら言った。ぼたぼたと落ちる雫に不快そうに眉を寄せる。

初めてまともな顔を見た。

「何の権限があつて、こんな真似を？」

皇位継承権第二位の自分に勝る力があるのか、とそう問うた。

「後宮では私が法です。そしてその法に服さずに済むのは陛下お一人。それが理由ですが、何か？」

明らかに歪んだ理屈をシヨウコは堂々と言い放った。

服の裾を濡らした皇后と、全身ずぶ濡れのイル・レビータを後宮の外で控えていた人間は恭しく出迎えた。

そのとき皇后の顔が晴れやかなことと対照的に、もう一人の顔がなとも形容しがたく歪んでいたことには誰も言及しなかった。

そして記録を命じられた執務官は、そつと速記した文書を燃やしたという。

イルをたたき出したその足でシヨウコは後宮内の自室に戻った。

いい加減濡れた衣服が不愉快だった。

部屋付きの女官たちは皆騒ぎの後始末に出払っている。シヨウコもこの後、騒ぎに加担した側妾と女官の軟禁場所を決めなければならぬ。とはいっても後宮は無駄に広いので、使われてない一角に押し込んでおけば良いだろう。

「……くたばれ……」

本気になった馬鹿は怖い。その意味ではシヨウコにとってイルは脅威だった。

物騒な独り言を漏らしつつ、シヨウコは濡れた服を勢いよく脱ぎ捨てた。

水を吸った布は意外と重い。皺になるとか色が落ちるとか考えるの

も面倒だ。表ではあれこれ働いていても、シヨウコは女性の嗜みである裁縫や刺繍は全く出来ない。根本的に身を飾ることに興味が無いのだから仕方が無いと諦めてはいても、流石に濡れた服の手入れの仕方わからないと言うのは問題かもしれないなとふと思った。指先で脱いだ服をつまんで見ただが、どうすればいつもアオがやっているような形になるのか皆目見当がつかない。膝の上に乗せてあれこれ悩んだが結局分からず、下着まで濡らすという二次災害まで引き起こしたただけだった。

「~~~~っ」

急激に疲れが襲ってきてシヨウコはがっくりと肩を落とした。諸悪の根源は何だ。

そんなもの決まっている。

「よくも逃亡してくれたわね……」

怒りに任せて乱暴に下着を脱ぎ捨て、乾いている部分で適当に髪を拭く。

僅かに湿り気を帯びた肌を風が直接撫でるのが気持ちよかった。

ゆっくりしているわけにはいかない。

重い腰を上げようとしたとき、続き間の扉が開けられる小さな音がした。

「……アオ？」

流石に自室とはいえ、こんなあられもない格好をしているのが見つかったらまずい。仕方なしに濡れた服に手を伸ばそうとしたところで、扉が開けられた。

「……皇后陛下？こちらにいらっしやっただのですか？！」

携えてきた酒や果物を慌てて置いたせいで少し大きな音が立った。

「貴女たちだったのね。たまには私だつて自分の部屋に戻るわよ」大袈裟なまでに驚いた顔に、シヨウコは自分の立ち位置を再確認した。朝起きるなり表で仕事、日が落ちるまで下手をすれば夜中まで後宮に戻ってこない皇后など後にも先にも自分くらいだろう。

しかしだからといってここまで驚かれるとは。少し後宮で過ごす時間を増やそうと予定と習慣を組み替えることにした。

「いつも明るいうちにお戻りになられますと、私どもはもっと嬉しいのですが」

入ってきたのはシヨウコ付きの女官三人だった。諾々と従うだけではないのはいいことだが、時に耳が痛い。

「どうしてこちらに……ああ、お召し変えですね？先ほどはさぞ大変でしたでしょう？」

女官たちは濡れた服を回収しつつ、すぐに着替えを用意した。多少口数は多いが優秀であることに間違いは無い。

「本当に……玉の肌とは陛下のことをいうのでしょうかね」

「祖国では皆同じよ」

「いいえ。最近是一段と光り輝くようですね。私どもも気合が入ります」

「……最近外に出ないからかしら」

言われてまじまじと腕を見ると、確かに色が抜けたようだ。ドーブにいた頃のように好き勝手に街を歩くようなことが無く、専ら室内で書類に向き合っているせいだろう。

「それだけではありませんわ。陛下の御下命のせいでしょう」

くすくす笑う女官たちにシヨウコは居心地の悪さを感じて身じろいだ。

御前試合のときからシヨウコの周囲に直接陽に当たるな外に出るときは薄絹を被れという旨の厳命が下され、未だにそれは守られている。

強い日差しには耐えられずすぐに赤くなってしまふ肌はどうしようもない。

問題は単なる健康上の配慮を周囲が勘違いしていることだ。

「他のどのお方にも陛下はそんなお気遣いはなさいませんのよ？これは本当に、溺愛、というのでしょうかね」

ねー、と同調するように首を傾げる様子に頭が痛くなった。

ここはきちんと誤解を解くべきなのだろうが、彼女たちは頑として受け入れないだろう。主人の寵愛が後宮での女官の立ち位置を決める。そしてそれは自身の結婚にも関わってくる問題だ。

「お肌だけではございませんわ。ご存知ですか？近隣諸国でまで黒曜石の皇后、東からの秘宝と噂されていることを」

「随分、昇格したものね」

忘らるる姫君、ではなかったのか。如実に変化した扱いに皮肉に顔が強張る。

考えを行動に移すだけでこれほど変わってしまうのは恐ろしいような気もした。

「そうですね。今や陛下は我が国だけでなく他国からも注目を集めるお方。ですからもう少し御身を飾ることにご興味を持たれませ」

例えばもう少し胸元を見せてみるとか、と好き勝手な言葉を続ける。「嫌。これで十分よ。体型が違うのだから、こちらの正統な衣装は着た所でみっともないだけだわ」

胸や背中や肩や拳句脚まで見せ付けるような衣装は絶対に似合わない。最初から想定している身体の比率が違うのだから。

「確かに丈は違いますが…陛下とてそれほどお胸が小さいわけでは」「美しい比率のお体でございますのに……」

残念そうに口を尖らせる女官たちは、諦めませんわと結束して笑った。

「……………帯」

中途半端に肩に掛けたままの着物の前を合わせて、力なくそう催促するしかシヨウゴには出来なかった。

「失礼します。陛下、筆頭女官殿が……」
執務室に戻って暫くすると、執務官の一人が申し訳なさそうにそう告げた。

「アオが？」

山積みになされた資料の谷間から顔を覗かせると、顔を引きつらせての肯定が返された。皇帝が失踪、シヨウコの認識としては逃走、のせいでいつも以上に激務についている皇后にこれ以上の仕事は頼めないとも思っていたのだろうか。

「通して」

シヨウコはあっさりとそう告げた。

「よろしいのですか……」

「ええ」

アオが長年シヨウコの側に居るのは伊達ではない。シヨウコの逆鱗に触れることが何であるのかはしっかりと心得ている。そのアオがこの忙しい時に来ているのだから、それなりの事態と見るべきだ。

通されたアオはいつものお転婆娘ではなく、皇后付き筆頭女官の顔をしてやってきた。

「お忙しい中お時間をありがとうございます。」

実は先程の後宮内での乱痴気騒ぎ……もとい響応の際に、床下水路に衣服が流れ込んでしまったようで、水路が塞がっております。後宮内の排水に一部支障が出ています」

簡潔なアオの報告に、ロイは一瞬で色をなくした。

「それ、本当に？」

「ええ。確認作業は終わっています」

どうやらそれでアオは先程シヨウコの部屋に戻らなかつたらしい。シンレットはアオの意外な優秀さに驚いていた。

「後宮の水路……それ、まずいよ」

「……確かに……厄介ですね」

ロイとシンレットは事態を重く見たらしい。

報告にきたアオは意外な方向に話が転がり始めたのを驚いた様子だ。

「え……後宮の排水路は三本です。他二本は問題ありませんが？」

アオの困惑した間に二人はシヨウコの顔を見て、説明が必要だと判断した。

「後で図面をお持ちして詳しくご説明いたしますが、先程筆頭女官殿がおっしゃったように後宮の排水路は三本あります。そのうち一本が浴室と調理場から繋がる再利用の出来ない水。残りは涼をとるためのものですからまず汚れることが想定されていませんので、表につながり掃除などに使われるか王宮の庭に繋がりそこで散水に使われます」

「つまり、一日二日なら何とかなるけど、さつさと復旧しないとまずいってこと。でも今が乾季じゃなくてよかったね。乾季だったらこんな馬鹿をした奴は吊るし上げだよ」

水が貴重なこの国では最後の一滴まで無駄にしないというのが常識だ。

すぐに事の重大さに思い至らなかったのは、シヨウコの中にも後宮内の女性と同じように水が貴重品だという意識が希薄だからだろう。

「え……でも」

「何か？筆頭女官殿」

シンレットの視線にアオは一瞬怯みつつも、真っ直ぐに見返した。

「水路を修復するには一旦石造りの床を外して、専門の職人を入れなくてはなりません。後宮内の女性はどうすれば」

「緊急時です。部屋に籠ってもらうしかありませんね」

「そんな……後宮内に陛下以外の男性が立ち入るには許可が必要なのでしょう？」

「緊急時、と申し上げたはずですが？」

「ですが皇統の正統性はどうなります！」

「そこまでっ！」

どこまで行っても平行線になりそうな話をロイが大きく手を叩いて打ち切った。

「どちらの主張にも一理ある。じゃあ、どうしようか、シヨウコちゃん」

そう言って促すロイの中にはもう既に答えはあるのだろう。しかし敢えてシヨウコに決断を委ねるのは、その顔を立てているからだ。

「……速やかに後宮内の人間を移動させて、その後水路の復旧作業に当たります。シンレット殿、城下から職人の方をお呼びしてください。ですが決して民業を圧迫しないよう、無理な都合を押し付けることのないように。アオ、一刻内に最低限の荷物をまとめるよう後宮内に指示を。ロイ、後宮内の準備が終わったら半刻の間皇帝陛下の私用区画とそれに続く国内向けの貴人区画を封鎖して。貴人区画の空き部屋に一時的に移動させるしかないわ。すべての裁決は私の名前で行います」

「圧倒的に部屋数が足りない。どうする？」

「今回の騒ぎに加担した人間は相部屋でいいわ。そのほうが監視も楽でしょう。最低限、皇妃には一部屋ずつ確保して頂戴」

「時間を優先すると、それなりに工賃が高くなりますがそれでも？」
「結構。それに関してはあてがあるから」

必要なことだけ確認すると三人はやるべきことをやるために散った。本当はこれでいいのかなんて分からない。じつくりと腰をすえて行う作業には自信があっても、急場を凌ぐような判断には自信がない。王宮内の稼動に支障をきたさないよう、水路の復旧を最優先するべきだった？

皇統が正統であることの証明を優先して、もっと確実な隔離策を取ればよかった？

どちらも選べなかった。それは間違いだろうか。

迷いを振り払うかのように頭を振って、シヨウコは部屋をでた。続

き間で仕事に当たっていた執務官たちが驚いたように立ち上がる。

「陛下、どちらへ？」

「イル殿にお会いします。それほど長くは掛かりません」

「どうぞ「ゆっくり」

「は？」

睨むように見返すと、緊張しつつも自信に溢れた顔があった。

「伊達に筆頭執務官殿に鍛えられていますから。お戻りになる頃には、机の上の山を綺麗にしておきますよ」

「……期待してるわ。後を頼みます」

「どういう心境の変化なわけ？」

「こんな短時間で変わるわけないでしょう」

先触れもなくイルの私室に宛がわれている部屋を訪れたシヨウウコは、
慥然とした態度の質問を傲慢に切り捨てた。

「ふん。いい度胸」

「ありがとう」

ちっともありがたくはなさそうに受け流すと、シヨウウコは置かれた
杯を口元に近づけ、顔をしかめるとそのまま戻した。冷めているだ
けなら我慢できる。しかしこの香りの無さは、一度冷めたものを温
めなおしたとしか思えない。茶菓子も硬くなっていて、一体いつ作
ったのかと聞きたい。

「じゃあさ、こんなとこまで何しに来たの？」

指先で茶菓子をつまみながらイルは尋ねた。
それ食べるのか。

「つていうか食べながら口開くな。」

色々突っ込みどころはあるが、突然の訪問に対する問はまっとうであるし周囲の取り巻き連中もようやく確信に話しがいったと耳を大きくしているので、シヨウコは取り敢えず咳払いをして気持ちを静めた。

「簡単なことです。こちらにご署名を」

「ずっと差し出した紙は上が折りたたんであり、そのままの状態で読めるのは「上記約定に同意する」という部分だけだ。」

「いいよ」

「ありがとうございます……はあっ!?!」

くるくると器用に羽筆を弄ぶイルの顔をシヨウコは凝視した。間抜けな声を出してしまつたと後悔するのは暫く後のことである。

取り巻きの中から何人かが思わず前に出てきてひつたくるように書類を受け取ると、中身を凝視した。

シヨウコもその顔を眺めつつ、今回イルを担ぎ出した中心人物である人間たちを記憶した。

「失礼ながら皇后陛下。これには同意しかねます。なぜ我々が国庫に財産を無償提供しなければならぬのですか」

「我々、ね」

相手の失言をしつかりと拾い上げる。

「いや……イル様は王城に来られたばかり……勝手を知っている者が後見人として教えて差し上げなければ」

「ご立派なお心がけです」

「しかし陛下がこのような……騙まし討ちのような真似をなさるとは、驚いてしまいますな」

「まあ私としたことが。こちらをお渡しするのを失念していました。どうぞご覧下さい。今回のお願いはイル殿のちよつとした悪ふざけが原因で甚大な被害が出てしまつたためです。以下事の次第が書い

てありますので、お読みくださればご納得がいただけると思います」
騙まし討ち云々については黙殺し、シヨウコはにっこりと微笑みつ
つ再度書類をイルの前に差し出した。

「些細なものです。その指輪一つ差し出していただければ、今回の
ことはすべて水に流すと言っているのですから。さあ」

意識すれば、抗うなら徹底的に叩く、だ。

真意に気が付いた者は青くなり身振り手振りで署名を促すが、イル
はとぼけたように頬を掻く。

「いいけど、条件付」

「何でしょう」

図々しいなと思いつつも、今は時間が何よりも大切だ。

「財産は納める。だからこれから工事が終わるまで一日半刻、陛下
の時間をそれで買う」

「……。……。」「冗談を」

理解するまで少し時間がかかった。そして鼻で笑う。

「呑むなら二倍納めるよ。指輪二個。どう？」

頭の中で算盤を弾く。いけないと思いつつも天秤は傾いた。

「ついでにこれもつける。さあ、返事」

大きな翠玉エメラルドの指輪が二つ、そしてついでにといって差し出された黄
金の腕輪が無造作に机の上に置かれた。

シヨウコは宝飾品について専門的な鑑定眼を持っているわけではな
い。しかし背後で後見人という名の取り巻きが蒼白の顔をしている
のを見ると、それなりの品なのだろう。

これだけあればついでに色々色々と改修工事が出来るだろう。

「……卑怯な」

「何か言った？金は正義でしょ」

金は正義。意外と現実主義な答えにシヨウコは驚いた。

ぼんやりとした傀儡候補のくせに、意外と地に足のついたことを言
う。

「正義は我にあり、とは言わないのね」

「何それ、言えないでしょ。でも金が絶対的な尺度であることは間違いない。だからそれで陛下の時間を買う。ただそれだけだよ」

「さも当然と言わんばかりの態度にシヨウコは負けた。何よりも資金。あんな馬鹿げた事の後始末に国庫を開いたと記録されれば、末代までの恥だ。」

「わかりました。ですが条件付です」

「そしてシヨウコは、宝石が修理費を下回る場合の補償、会談の時間と場所はシヨウコが指定することを求め、イルはあっさりと承諾した。」

「では、今後の予定については追ってご連絡いたします」
踵を返しシヨウコは部屋を後にした。

忙しく立ち回ってればいい。

そうすれば、寂しさなんて感じずに済む。

「認めない」

「ロイ」

「変更はないよ」

「ロイ？」

「……可愛いけどね。それとこれとは別」

イルの部屋から帰ってきて、シヨウコとロイはずっと押し問答を続けていた。

ロイとしては資金提供させる代わりに工事が終わるまで一日半刻の時間を買うなんて条件は絶対に認められない。そんなことが可能な

ら取り敢えず向こう十年の値段を知りたいくらいだ。言い値で買つてやる。

イルもイルだが、今回はシヨウコの浅慮だ。見えない角度で器用に青筋を立てつつ、貼り付けた笑顔でロイはシヨウコに相對していた。「何だか意地悪ね。嫌な仕事を頼んだから？」

その言葉にロイはぎよつとした。あの程度の仕事を難しく感じるような人間だと思われていたのか？的確な采配を振るってきたと自認しているだけに、山より高い自尊心が揺らいだ。

注意深くロイの表情を観察しつつ、シヨウコは一見しとやかにうなだれて見せた。

実はロイに報告する前にシンレットにも報告をしていた。シンレットはよくやったあわよくばもっと筆取り取って来いという一方で、ロイは十中八九苦言を呈するだろうからと秘策を授けてくれていた。その名も、泣き落とし。

「でもね、皆とても仕事が速くなって私がすべきことが減ってきているの。だったら事務仕事は任せて、私がすべきことをするべきじゃないかしら？……ロイなら分かってくれると思っていたのに……」

最後の一言以外はすべて本音だ。シンレットが決め台詞だと言った言葉は、どうにも恥ずかしく若干喉から出てくるのを渋ったが、なんとか搾り出した。

その僅かな逡巡が独特の間合いとなったことなどロイしか知らない。ロイが思わず口元を大きな手で塞ぎ天を仰いだことで、シヨウコは効果が現れたことを知る。

絶対無理だと思っていたのに……シンレット殿はロイのことを余程熟知しているのね。こんな薄ら寒い演技が通用するとは、まさに奇跡。

「見張り……つけるからね。少なくとも10人」

「勿論」

「時間になつたら容赦なく連れ戻すよ。攫つてでも」

「ええ」

「もう反故にしちゃわない？」

「それは駄目」

顔を背けて舌打をする。失敗した。

結局はシヨウコの望むままにするしかない。歯向かえないのだから仕方が無い。

上機嫌なシヨウコを見ながら、やっぱり笑っているのが一番いいと思うなんて我が事ながら随分と殊勝で気味が悪い。そんな自分に口イは嘆息した。

でも。

だからこそ。

欲しくて堪らない。

旋風と玉座 3 (後書き)

コメント・感想大歓迎です。

誤字脱字もご報告をお願いします。

浮遊する思い（前書き）

明けましておめでとございます。
今年も砂漠の蝶をよろしく願います。

浮遊する思い

疲れた身体を引きずって貴賓区画までやってくれば、そこでは廊下にまで少々元氣すぎる声が響いていた。普段は顔を見なくても生活できる相手と壁一枚隔てるか或いは同室で過ごすのだから、諍いや思わぬ意気投合があるのは当然かもしれない。

しかし疲れた身体にはそれを微笑ましいと受け流す体力は残っていない。

色々ありすぎてもう眠りたい。しかしこの場所ではそれは叶わないだろう。

突然方向を変えて歩き出したシヨウコに女官が驚いて声を掛けた。

「皇后陛下、お部屋はこちらにご用意しましたが？」

「別の場所を使います。ちょっと色々無理だわ」

「ですがもう部屋は……」

一杯なのだろう。それは分かっている。

「大丈夫」

後宮には当然戻れない。

しかしここでは休めないとなれば、選択肢は一つ。

「陛下のお部屋を使います」

意外なことに皇帝付きの女官たちは何も言わずに部屋に通してくれた。何か言われると思っていたが、シヨウコが把握していないだけ

で後宮から女が来ることは多いのかもしれない。

それについては色々と思うところはあがあるが、疲れた足を引きずってシヨウコは寝台に倒れこむ。

僅かに感じる、麝香の香り。

寝台の横の机には水煙草。

昨日までここで生活していたことは明らかなのに、その人だけがない。

思わず繻子の布を握り締めると、そこを中心に寝台に波が寄った。寂しい、のだろうか。

アオがいてケンもいる。シンレットやロイもいて、ドーブにいた頃よりもずっと身边は賑やかなのに。

普段それほど一緒にいるわけでも話をするわけでもないというのに、それでも心の中で物足りないと思ってしまう。

この感情に名前をつけることが出来ればいいのに。

「……最低」

レイヴスが危険な状態にあるといった心配は無い。あれは絶対に愉快犯だと思う。

だからこそ、心と日常の隙間を持って余ってしまう。

思わず緩みそうになる涙腺を叱って、シヨウコは枕に額を押し付けた。

眠りに落ちる瞬間に、誰かが頭を撫でたような気がした。

「木材の搬入？」

翌朝の執務室で受けたロイの報告は些細なものだった。

正直もうこれ以上の面倒は御免だと思っていたので、そんなことかといった思いが強い。

「専門家じゃないから分からないけど、基本石組みのはずだよね？」

「私も分からないけど、業者はシンレット殿が信頼できるところを選んでいるのだし大丈夫でしょ」

それに一切を今後宮の改修を取り仕切っているのはアオだ。そこで働いている分今までの不便も分かっているので、シヨウコが陣頭指揮を執るよりもいい。

「まあそりゃそうだけど。ぱつと見高そうな感じだったから、一応報告しといた」

報告したロイもあまり興味はないのだろう。既に視線は他に移っている。

「でさ、シヨウコちゃん。昨日の晩、どこにいたの？」

「へ？」

間抜けな声を出してしまった。頬杖をついていた顔を上げてロイを見ると、苦笑して空いた手に焼き菓子を一つ乗せてくれた。

木の实を練りこんで焼き上げた菓子は、一つでも結構な満足感がある。

「食べてね」

「何？賄賂？」

「違うよ。こんなんで買えると思ってないから。朝食食べに来なかったから、お腹空いてるかなと思って。ほら、食べないと頭回らないよ」

はしたないとは思いつつも執務机に向かったまま齧る。噛むほどに木の实の味がじんわりと口の中に広がって美味しい。

「で？どこにいたの？」

「……っ」

油断した。

食べ物にほだされて気が緩んだところを狙っていたとしか思えない。喉に詰まりそうになった欠片を飲み込んで、じとりと下から睨みつける。

「答えないの？食べたよね？」

ロイの笑顔には全く隙が無い。否、敢えて隙を作っている笑顔だ。そこに付け入ろうとすれば見事な返り討ちに遭うだろう。

「……やっぱり賄賂じゃない。卑怯者」

詰る声と表情を物ともせず、ロイは益々口角を吊り上げて笑う。何。この凶悪な笑顔。

朝だというのに背筋を冷たい汗が一筋流れ落ちる。

この感覚には既視感がある。

「……シヨウコちゃん？」

気が付いたら追い詰められていたような。

それに気が付いた後はじりじりと距離を詰められるような感覚。

「陛下……」

繋がった、と思った瞬間思わず口も動いていた。

「ロイ、陛下に似てるわよ」

何てこと、とシヨウコが呟いている間に、ロイの顔がみるみる不機嫌に歪んでいく。

「それ、すつごく不愉快なんだけど」

「そう。じゃあこの話は終わりにしましょう。ね？」

ひらひらと手を振って退出を促す。

絶対にロイの顔を見てはいけないことは本能が告げていた。

暫しの無言の戦いの後、覚えておくよと言葉を残してロイは出て行った。

広い背中を見送った後で、シヨウコは机に突っ伏した。

距離感を図りかねているのは自分だけだろうか。

間違いなく今仕事でシヨウコが一番近くにいるのはロイだ。その優秀さには舌を巻く。

しかし筆頭執務官というのはどこまで近くに置く存在なのだろう。昨日イルとこのことを強固に反対され、今日は昨晚の居場所から朝食のことまで把握している。

それが不愉快なわけではない。

だがこの国の皇后で曲がりなりにもレイヴスの正妃であるシヨウコとロイの距離はこれで適正なのだろうか。

「様、シヨウコ様？」

はっとして顔を上げると、入り口近くにケンが立っていた。

「申し訳ありません。何度かお呼びしたのですが……」

「ごめんなさい。少し考え事を」

きつと扉の外で何度か在室確認をしたのだろう。注意力散漫な自分の方こそ申し訳ない。

「何かあった？」

「はい。皇帝陛下の居場所についてです」

繕うようなシヨウコの様子を訝しがりつつ、ケンは職務に忠実に報告を始めた。

「厩舎から馬が消えていたのはこちらを攪乱させる目的でした。外に出たと思わせるためにわざわざ貴族の館に預けてありました。関所を通過した記録もありません。」

よって最初の予測どおり王宮内のどこかに潜んでいる可能性が高いでしょう。近衛隊長はおそらくすべて把握していますが、皇帝直属の立場なので吐くとは思えません。現在王城の南端から近衛軍の一部を使つて人海戦術であぶり出しを行っています」

精鋭ぞろいの近衛軍が人探し。

しかも対象が皇帝であるというのにこの緊迫感の無さ。

「……ごめんね」

何と情けない。

振り回される人間が哀れだ。

「いえ……近衛軍でも『皇帝陛下を見つけた奴は特務昇進』などと言われているまして……まるで遊びです。隊長が胴元になって賭け事まで始まっています。正直、近衛軍が真面目に搜索をすることは考え難い」

それはそうだろう。何といっても隊長に探す気がない。

「つまりそれは安全な場所にいることの証明よね」

「よろしいのですか？」

「仕方ないわ。個人的には思うところもあるけれど、王城にいるのであれば何かあれば出てくるでしょう」

近衛軍による搜索も終わりにするとケンに告げた。どうせ見つからない場所にいる。

切り替えたシヨウコに対してケンはやや不服そうな面持ちだ。

この生真面目な性格からすると、近衛軍の気風には合わないのかもしれない。ましてや職場で上司公認の賭け事など、想像も出来なかつただろう。

「そうですか。では見つからない、に賭けてきます」

「へ？」

「確実に勝ちを貰いました」

シヨウコの指示が現場に届くのは昼過ぎ。今から戻れば十分に間に合う。

しかし。

「ケン…随分頭柔らかくなったのね」

しかもずるい。明らかに賭けの本筋からは外れている。

そうでしょうか、と生真面目な顔で聞き返すケンに、シヨウコは思わずといった笑顔を見せた。

ずっと近くにいたドーブの頃とは違い、ケンにはケンの時間がある。変わっていくのは当然だ。

「いいことだと思っわよ」

「……私は変わりませんよ」

「そういうところは、変わらないわね」

ロイの変化とは違い、素直に受け入れられて喜ぶことができ、戸惑いは無い。この違いは何だろう。

「私も今度近衛軍の訓練を見に行こうかしら。楽しそうね」

ケンも今度近衛軍の訓練を見に行こうかしら。楽しそうね。

「では、安全が確認され駆逐作戦が終わり次第いらっしやってください」

「ケンのご同輩に会いたいのに」

「やめてください。目が腐りますよ」

「辛口ね？」

「むしろあれらは異文化交流だと思ってくだされれば結構です」

「面白そうじゃない」

軽口を交えた報告を終え、ケンはシヨウウコの机の脇に重ねてあった本をまとめて抱える。

「……今日は少ないですね？」

「その代わり、続き間は戦場」

執務補佐官たちに昨日から担当分を増やすよう要請され、シヨウウコの机はいつもに比べて随分とすっきりしている。

時折うめき声も聞こえるが、仕事振りは確実だ。

「すべて資料室でよろしいですか？」

「上五冊は資料室。下四冊は図書館にお願い」

持つてくるときは饑別の必要もあり自分で行くが、返しにいくのはケンがやってくれている。

なんせ一冊一冊が相当厚い。シヨウウコの力では資料室は兎も角ほぼ王城の反対の位置にある図書館まで一度で持つていくことは出来ない。それを全部まとめて片手で持ちなお余裕があるのだから、やはり鍛え方が違うのだろう。因みに大方の執務補佐官たちも本の重さには涙している。

「では、失礼致します」

「待つて。途中まで一緒に行くわ」

「どちらに？」

「送って行くという意味表示なのだろう。」

「そうね……」

事務仕事が減った分の代償だろうか。ケンに心配をかけない表現は

「……異文化交流？」

「こんなしなきやいけないほど、俺って要注意人物？」

庭の東屋にはささやかな茶会の用意と東屋の周囲には丹精込めて作られた見事な庭園。しかしその間にはずらりと近衛兵が囲んであり、四方八方隙なしといった風情だ。不敬な行いでもあるものなら容赦なく斬り付けるとばかりに、腰には剣を佩いている。

その凄まじいまでの険しい視線に若干怯えつつも、イルはやってきたシヨウコに軽口を叩く。

「いえ？一切お気になさらず。皇位継承権第二位のお方をお守りしているだけですから」

上座の椅子に腰掛けつつ、シヨウコは身体が柱の影にならないよう気を配った。

「白々しいよ。近衛軍って皇帝派なんでしょ？」

「指揮系統は陛下に属しますね」

さらりと受け流しつつ、シヨウコは一枚の書類を差し出した。

「貴方が国に納めた宝飾品の鑑定額です。十二分に改修費用に足りました」

横目で様子を窺うが、イルは何も言わない。
はつきり言つてとんでもない価値だった。

それもそのはずで、その中の一つはある有力貴族がかつて戦勝の褒美に皇帝から下賜されたものだった。石そのものの価値も高いが、歴史的価値が付加価値として認められれば小国が買える。

当然、イルの一族のものではない。
では何故イルが所有していたのか。何故その貴族は何も言わないのか。

「イル殿。私は正直言つて貴方の得体が知れない。

貴方は何故王城に来たのですか？」

真つ直ぐに瞳の強さを意識してイルを見据える。
ゆるゆるとイルが顔を上げて視線が合ったと思つた瞬間、瘦せぎすの身体が傾いた。

「イル殿!？」

浮遊する思い（後書き）

誤字脱字報告お願いします。

感想・一言・レビューお待ちしております。

よろしければ目次ページから「恋愛遊牧民」さまに素敵な旅路を。

浮遊する思い 2

鈍い音と共に石造りの床に沈みこむイルを見て、シヨウコは、ああ痛そうだなとぼんやり思った。

「……………」

ここは笑ってやったほうが良いのか、それとも見なかった振りをするべきか。どちらが自尊心を傷つけないで済むだろう。

遠巻きに人は多いが、誰一人助け起こそうとする者はいない。

諦めてシヨウコは椅子から立ち上がると、イルの横にしゃがみこんだ。

「大丈夫ですか？」

「……………痛い」

「でしょうね。立てますか」

「踏んでる」

「は？」

足元が引かれる感覚につられて目を向けると、イルの衣装の端が足の下にあった。

「失礼しました。布面積が広すぎやしませんか」

足を除けつつ、踏んでしまった部分のほこりを払う。

無駄に装飾過剰な衣装は見た目以上に布も使っているらしい。手にした服の端はずっしりと重かった。シヨウコならこんな重量物を身に纏って生活するのは御免被る。

「だよね。これ一着で普通の服何着作れるんだよって思ったし」

多分一家族分は賄える、と続けるイルの腕を支えて促すと、イルは頭を抑えつつ起き上がった。

「眩暈は？」

「ないよ。あーそれにしても驚いた。あの値段間違っていないの？」

「あの値段、というと宝石の評価額ですか？小さな傷はありましたので、あれ以上の評価は出来ません」

椅子に座りなおしながら、シヨウコは慎重に言葉を選ぶ。

あの値段で時間を買われた身としては、慎重にならざるを得ない。

「え？そっち？」

「そっち、ってどちらですか。意味のわかる言葉でお願いします」
冷やかな声にそれで引き下がるかと思っただが、意外にもイルは食
い下がってきた。

「いや、だから、高いほうに邪推するの？って意味でそっち。詰ま
り、あれ高すぎないって聞きたいんだけど」

「適正価格であると思います」

「……うわ〜」

うめき声と共に卓に突っ伏す。ちゃんと茶器を避けているあたり、
密かに器用だ。

「まったく、不思議な人ですね」

呆れた声にイルは首を回していじけたような視線をよこす。髪が茶
に浸ってしまいそうだったので仕方なく払ってやると、覗いた顔は
まるで子どもだ。

「一目で高級品だと分かるものを簡単に寄越して、私の時間を買う
と言う。そうかと思えばこんな状態になる。貴方は一体何がしたい
んですか」

「何って」

「最初から妙な人間だとは思っていましたが。何でこんな時期に継
承権を主張して王城に来たのか、一連の馬鹿騒ぎも奇奇怪怪。貴方
の行動に理屈を付けてみようと思ったのですが、お手上げです」

「そんなん、俺にもわかんないし。そもそもほんとに俺に皇位継承
権あるわけ？」

「は？」

顔を上げるとイルは頭を掻きながら言った。

「普通に生活してたのに、急に偉そうな人たち来てさ『国のために
王城に来い』って。凄い金とか見せられてさ。普通あんなん見せら

れたら目くらむって」

「ちよつと待つて」

「俺そのとき初めて血筋のこととか知ったしね」

「待つて！」

混乱した思考が更に混乱していく。

シヨウコは思わずイルの口を右手で塞いだ。

もごもごと何か言いたげに動く口を無視し、空いた左手で額を押さえる。

シンレットやロイと話していたことはそもそも前提からして間違っていたのではないか。イルは本当に、何も知らずに連れてこられただけなのだろうか。

思考に沈みかけたところで、あっさりと右手が外された。意外なほどの力で手首が握られる。

「何？一体何なの？」

シヨウコはどこか間の抜けたイルの顔を呆然と見つめた。

イルは血筋など忘れた生活を送っていたらしい。日々の生活は家族皆で小さな商店を営んでいたが、決して楽なわけではなく贅沢は出来なかった。それを不満に思うこともなく、家族全員で肩寄せあつて暮らしていた、というのが本人の弁だ。

そこに突然貴族の一派がやってきて、一家が五年は楽しんで暮らせるだけの金とイルの交換を申し出た。

身の安全は保障し、皇帝に子が出来ればすぐに家に帰すという。悩みはしたし怪しみもしたが、現金の力は強大だった。

「と、いう訳らしいわ」

執務室に戻るなり始めたシヨウウコの説明にロイは思い切り眉を寄せた。

「信じられるの？」

「多分ね。宝石の価値とかはさっぱりだし、嗜好品に拘りもない。金銭感覚が私たちとは大きく異なるの。立ち振る舞いも」

「演じてるだけ、とかは？」

「それほど賢いようには見えないのよね」

イルが王城で浮いて見えるのは奇抜な衣装やその言動のせいだと思っていたが、もともとの生活とすべてが違っていたからだと言われれば納得できる。

「でもいくら馬鹿でも後宮には入らない」

「そうね」

それに関してシヨウウコは思うところがあったが、今ロイに言うべき話ではない。

「とりあえず、先入観なしでもう一度イル殿の氏素性を洗い出して労働者であったことは間違いないから」

「どうしてそう確信できる？」

「痩せてはいるけど、結構しっかりした身体なの。自堕落な生活じゃああはならない」

かといってレイヴスやケンのような鍛えた結果というわけでもない。「なんて言うのかしら。全身じゃなくて、使うところだけ鍛えたような感じ。腕とかね」

触れた肌もそれほど手入れされているようには感じなかった。常日頃あのような派手な衣装で身を飾っているような人間だとすれば不自然だ。

「どうして？」

「だから……」

「触ったの？」

そこにきてシヨウコはロイの顔に青筋が立っていることによつちく気が付いた。

何が逆鱗に触れたのだろう。

「ねえシヨウコちゃん？」

顔は笑っているのに声は地を這うようだ。

扉はロイの後ろ。退路は絶たれた。

「いつ、どこで、どういう状況で、どんな感情の変化で、そういう流れになったのかな？」

一言一言殊更ゆつくりと、言い逃れなんかさせないという意思表示だ。

ロイは常ならば絶対にしないだろうが、両手をシヨウコの執務机について上体をかがめつつ顔を寄せた。

圧迫感と威圧感に思わずシヨウコは身を反らせる。

「ロイ？顔が怖いわよ？」

ぎこちなく笑ってみせるが、全く効果はない。

それならば、と思った矢先、しっかりと釘を刺すあたりやはりロイは抜け目ない。

「今回は、泣き落とし通用しないから。納得いくように説明してね？」

不退転の決意で尋問を始めたロイに、シヨウコはどんな説明をしても納得しないのではないかと頭の片隅で思った。

「偶然、イル殿が転んで！」

「で？」

「何て言うのかしら。流れで？ほら、助け起こすじゃない」

意味なく両手を挙げてシヨウコは抵抗の意思がないことを示した。しかしロイの追求は終わらない。

「誰か呼べばよかったんだよ」

「そんな…誰も来なかったし」

「呼、べ、ば、よかったでしょ？或いは放置してもいいくらいだ。」

死なないよ、馬鹿だから」

「冷たいでしょう。あんまりだわ」

「シヨウコちゃんはあれに甘い」

「そんなことないわ。誰にだって同じことをするわよ」

だんだんと嫌になってきてシヨウコはぞんざいな答えを返した。

「相手が僕でも？」

「当然でしょう。ロイ、変よ？」

「10年も前から一緒にいて、あれと同じ扱いか……」

その声が湿り気を帯びていたので、シヨウコは少なからず驚いた。

ロイは身体を引いてシヨウコを解放したので圧迫感は消えたが、その顔は逸らされていて見ることは叶わない。

考えてみれば付き合いの深さが異なるというのに、全く同じということはないかもしれない。シヨウコだってロイヤケンに同じことを言われたら、おそらくは受け流すにしても、万に一つは思うところがあるかもしれない。

「撤回。ロイだったらもつと心配するわ。大丈夫だと確認できるまで、側にいたいと思う」

ロイの反応はない。僅かに肩が下がっただけだ。

酷いことをしてしまったのだろうか。

思わずシヨウコは立ち上がるとロイの正面に回りこんで顔を覗き込んだ。

「ロイ？」

顔に影を作る髪を払おうと伸ばした手は、あっさりと捕縛された。

「言質、とつたから」

底冷えがするような声ではない。

先程までの湿り気を帯びたものでもない。

ロイ本来のからかうような声音だ。

「え？」

「楽しみだな。そのときはよろしく」
嵌められた。

見事なまでに。

自分の顔が紅くなるのを感じる。

「からかったの!？」

掴まれた腕もそのままにシヨウコはただでさえ短い距離を詰めて問いかけた。

本当は答えなんて分かりきっている。

「まさか」

「嘘!」

力いっぱい噛み付く勢いで否定すると、ロイは苦笑して肩をすくめた。

「からかってなんかいない。全部本当だよ。」

僕はそんなに心広くないからね。束縛したいと思うし嫉妬だってする」

「お戯れは、おやめください」

シヨウコが何を考えるより早く、ケンの声が割って入った。

はっとして身体を押し返すと、ロイは名残惜しげにシヨウコの黒い髪を撫でてから離れていく。

するりと零れ落ちる髪を押さえつつ、シヨウコは強烈な違和感に襲われた。

私の髪を撫でるのは、ロイじゃなくて。 。 。
では誰だと言うのか。誰に許した覚えもないというのに。

ただ触られた髪がそこだけずっしりと重かった。

「シヨウコ様、ご来客です」

「ええ。わかりました」

静かなケンの声は咎めているわけではなく、ここから脱出する言い訳をくれているのだと分かっている。

扉に足を向けようとしたとき、ロイがすっと一枚の紙を差し出した。

「ついでに、これお願い。イルの宝石を国財にする認め証」

ついでに、という言葉が痛い。

ロイだってシヨウコに客が来ていないことくらい分かっている。それでもシヨウコはこの場から逃げてロイは残るのだ。

「わかったわ」

「あと」

ひたりと見据えられた瞳を逸らす術をシヨウコは知らない。

少し、息が苦しくなった。

「からかってはいないから」

「貴方の性格が歪んでいることは知っていましたが、何もこんな時期でなくてもいいでしょう」

僅かに殺気をこめてケンは見据えた。

今は皇帝が失踪中でシヨウコは多忙を通り越して忙殺されている。

こんな時に余計な心労をかけなくてもいいはずだ。

「ん」。シヨウコちゃんも随分変わったよね。前だったら慌てて離れるなんてことしなかった。意識してくれるのは嬉しいけど、その変化がレイのおかげって言うのは嫌だな」

「下らない感傷にシヨウコ様を巻き込まないで下さい。迷惑だ」

「感傷？聞き捨てならないな」

心外だともいうようにロイはわざとらしく驚いた顔をする。

それを見てざわりと心が波立つ。

何かを勘違いしていたのかもしれない。

一歩一歩ロイがケンに近づいてくる。靴音まで高らかな威圧感だ。

「全部、偶然だと思っていたのか？」

シヨウコちゃんの旧王都行きも、シンレットの同行も。この時期にイルが来たことも？まさかそんな目出度い頭はしていないだろう」「凄絶な笑みは真実を覆い隠す。

王都に来て、多忙な日々の中で忘れていた。

笑顔も軽口もすべて仮面で、この男の本性は蛇だ。

旧王都行きが決まったときの稚拙な反論は単なる誘導。

旧王都にいつている間、ロイは何をしていた。

各派閥の貴族と強力な繋がりを作ったのは、日々の業務のためなどではない。もつともらしい理由をつけた、今回の出来事の伏線だった。

ロイはシヨウコを害することだけはしないと思っていた。

しかしそれは間違いだ。

シヨウコを手に入れるために手段は選ばない。これまではその対象に入っていなかったというだけだ。

「貴方は、シヨウコ様の敵ですか」
ならば容赦はしない。

主を守るために手段を選ばないのは、ケンとて同じことだ。

「その質問が、既に甘いよ。僕はシヨウコちゃんの敵じゃない。僕は僕の味方だよ」

「外道が……」
最悪だ。

飄々とロイが呟いた言葉は、動きが読めないという意味だ。あるいは、読ませないだろうか。

吐き出すように呟かれた言葉にロイは光栄だと笑う。

大股で扉に向かいつつ、思い出したように言う。

「ついでにもう一つ教えてあげるよ。」

レイが姿を隠したのは、酔狂じゃない。そうしなければならぬ理由があったからだ。

さあ、それはなんだろうね？」「
挑発するよじにくるりと振り返る。

袖が風に舞う。

浮遊する思い 2 (後書き)

久々の本領発揮をした人が一人。まだまだ黒いですよ。

バレンタイン小話のアンケートを実施しています。よろしければお願いします。

浮遊する思い 3

そろそろ限界だということは、見る人が見れば明らかだった。

皇帝の決定でなければ動かない事案もある。

それをシヨウコやシンレットが認められた権限の中で処理してきたが、綻びがないわけではない。

例えるなら、塞き止められた川の本流に支流を作るような作業だ。

それでも事情を知る者は一人として限界だと口にしない。

何といつても皇帝は表向きは静養中である。

健康に大きな問題はないが、疲れが出たと発表している以上、決壊させるわけにはいかない。

法の抜け道を探して、やり過ごすような状況が続いていた。

夜半に回廊を歩いていると思わず光に目が行った。

他の部屋は既に暗くなっているというのにこんな時間まで仕事を続けているのか呆れる。

まあ人のことを言えた口ではないが。

「お疲れですね」

疑問でさえないのは、シンレットとて疲れきっているからだ。

同じ量の仕事をしていて疲れていないわけではないが、疲れているかと聞けばシヨウコは否定するだろう。

突然の来訪にも驚かず、シヨウコは僅かに顔の筋肉だけで笑ってみせた。

「否定し得ないわね」

微妙な言い回しだが、それだけに伝わってしまう。正直シンレットは今回のレイヴスの失踪について、全く心配していない。

シヨウコと同様、レイヴスの身に危険があるとは露ほども思わない。しかしシヨウコにすべてを任せて、と言えば聞こえはいいが放り出していった状況については読めなかった。

おそらくレイヴスの期待通りシヨウコは動いている。間近で見ているシンレットに言わせれば期待以上だ。

その期待以上の働きを以つてしても、限界は近づいてきている。それなのにレイヴスはまだ姿を見せない。この状況を見ていないはずはないのに。

シンレットは初めて友人で主であるレイヴスに対して苛立ちを感じた。

「限界でしょう」

シヨウコが疲れた顔を向ける。しかしそこには若干怪訝そうな表情が浮かんでいた。

「これ以上は我々だけでは対処できません。私兵を動かしてでも陛下を捜しましょう」

「……」

「意地を張っている場合ではないと思いますが」

「そんな心算はないわ」

「では、無理、でしょうか。これ以上はお体も国政もちません」

「……分かってているわ。でも、もう少しだけ」

シヨウコとて自分を過信しているわけではない。むしろ一番最初に限界に気が付いたのはシヨウコだろう。日々流れてくる書類は僅かな綻びを如実に伝えてくる。

それでもシヨウコはシンレットに食い下がった。

「陛下は我侬で尊大で傲慢で自分勝手ですが、無責任ではないから。何か事情があるはずでしょう?」

その答えを知りたかった。

正直言つて今回の事態は不確定要素が多すぎる。

イルを送り込んできた王党派の貴族の動きは中途半端だし、イル本人は言うまでもない。シヨウコとてそれなりに思惑があつて動いているが、それ以上に今揺れているのは王党派には与さない貴族だろう。それに加えてレイヴスの考えはさっぱり理解できないし、それらのどれにも当てはまらない流れも存在しているのだろう。

これでは混乱していて当然だ。

「シンレット殿も会合があるのでしよう？もう下がっていいわ」

国内で五指に入る名門トリスバール家。思惑がないはずがない。それにシンレットが与するのは分からないし、いずれにしてもシンレット一人の自由意思というわけにはいかないのだろう。

仕草だけで退室の挨拶に答えると、シヨウコは誰もいなくなった執務室で瞳を閉じた。

レイヴスがいない穴を埋める方法がないわけではない。

しかもシヨウコが代行するよりも本来はずっと簡単で正攻法だ。これまではずっと避けようとしてきたむしろそれは最低の選択肢で、誰も言い出さないのをいいことに黙殺してきた。

だが限界だ。

レイヴスとてこの状況に気が付いていないはずはないだろう。また、この流れを読んでいないはずもない。

ならば予定調和だろうか。

シヨウコの気がかりは、それを実行に移すことでレイヴスが進めているであろう何らかの計画に影響が生じることだ。

そろそろ悩むものにも飽きた。結論を出さなければならぬ時期だ。

極論としては、自分ならどうするか。

シヨウコがレイヴスの立場だったら予想できるか否か。

首にかかる二本の鎖に指を滑らせる。

一つはレイヴスから贈られた紅玉の指輪。もう一つは皇后の印章。胸元で重なり小さく硬質な音を立てる。二つの重さをこれほど感じたことはない。それだけ大きな決断であることは分かっている。

空にはぽっかりと半月が浮かんでいた。

静まり返った朝議の席で、シヨウウコは静かに場を見渡した。

納得した顔は一つもない。嫌がる顔もない。皆一様に冗談だろうとでも言いたげだ。

「今……何と？」

小鳥のさえずりの次に静寂を破ったのは、何とも頼りない声だった。横目で今日初めて朝議に参加した、正しくはシヨウウコが引きずり出してきたイルを窺うと、状況についていけないのは明らかだった。

予想通りだ。このまま押し通す。

悠然と腰掛けたまま、その実つま先は緊張で冷え切っているのを意識しないようにシヨウウコはいつもより少し濃い紅を引いた唇で言う。

「陛下のお体が戻られるまで、皇位継承権第三位であるイル殿に代行をお願いしては？と申し上げました」

それはまさしく、爆弾だった。

誰もが押し黙った。

皇帝が政務に就くことが出来ない場合、皇位継承権者がその職務を代行することが出来ると法は定めている。

しかしその規定は皇帝が老齢の場合や継承権者が皇帝の実子である場合に適用されるのが殆どだ。最近では先代皇帝が戦場にあつたとき、当時皇太子だったレイヴスが皇帝の職務に就いていたことがある。

しかしイルはつい最近王城にやってきた、帝王学も学んでいない若者だ。

「失礼ですが皇后陛下……皇帝陛下はそれほどお体の具合が？」

「いいえ。もうじきご回復なさりますが、暫くは表の職務を控えていただこうかと」

表の、という言葉を強調したシヨウコに多くの視線が先を促した。にっこりと微笑む。過剰なほどの笑顔だと自分でも思うが、効果的だろう。

「陛下は表がご多忙ゆえ、奥でのお仕事が滞っていらっしやる。それでは国のためになりませんものね？」

意識すれば、後宮で子作りに励んでもらう、だ。

楚々嫋々とした風情で表情も穏やかなまま言葉の内容だけが刺激的だ。その場に居合わせた者はその有り得ない組み合わせに一瞬頭が活動を停止した。

それを見てまだまだ甘いな、とシヨウコは内心評価を下す。

これくらいの暴言を捌けないでどうするのか。

この嘘は非常に都合が良かった。

普通であれば皇帝の私的空間は意外と人の出入りが多い。しかし今その周辺は一時的に後宮の女たちが暮らしている。これ以上強力な門扉はない。

レイヴスが本当にそこにいるのかが確認できない状況がいとも簡単に作り出せてしまった。

いまだに現実を受け入れていない面々を残して、シヨウコは席を立つ。

驚きの内容を分析してみれば、イルに代行をさせるといふ発表が半分、シヨウコが語った赤裸々な後宮事情が半分といったところだろう。

シヨウコは公務と割り切っているので、一般的に女性が口にするのを躊躇うような男女の性愛についても抵抗なく言葉にする。それは後宮の人員削減のときも同じだったが、いまだに議会の面々は慣れないらしい。

「何か私を納得させることのできる反論がある者は、昼までに来るように。以上」

後は絶対に振り返らない。

シヨウコが出て行けばすぐにあの場は怒号が飛び交う戦場になるだろう。

ただ、そこに取り残されるイルは少し哀れかな、と思った。

皇位継承権者が代行する。簡単なことだ。

しかし誰一人としてイルにその役目を求めていなかったというだけ。イルを王城に連れてきた者たちにしても、若く健康な皇帝がいる以上イルは本当にただの保険だ。皇帝が暗愚であるなら話は変わるのだろうが、皇帝は議会からも軍部からも更には国民からの支持も篤い。政権の転覆など考えてもいないだろう。

それでも持てる手管は全部使って、状況も出来る限り分析して、その上でこれが最良だ。

限りなく最低に近い、最良ではあるけれど。

「あんだ、ほんつとくに無茶するね!？」

息を切らせて部屋に飛び込んできたイルにシヨウコは内心で舌打をする。

時間を確認すればあと半刻で午後だった。

「間に合うとは思わなかったのに。残念だわ」

「それ本音?! っていうか間に合わないって想定で、昼までに来るように。以上。とか言ったの? それって為政者としてありなんだ!？」

朝議の捨て台詞を再現されて少々気分を害する。微妙に口真似が似ているのがなお嫌だ。

「少し黙ってくれないかしら。これだけ片付けたら話を聞くから。ついでに貴方が開けた扉は閉めてくれると有難いのだけれど?」

後で聞いてくれるならいいやとばかりにおとなしく指示に従うイルは、王城においては希少価値だ。

そんなことを思いながらシヨウコは署名押印を終えた書類を揃えて机の端に置いた。

あれこれ興味深そうに眺めるイルを席に促し、その向かい側に座った。

「それで、何かご不満?」

「何かって全部だけど」

「どうして?」

「いや、無茶でしょ!」

その言葉は先程も聞いた。シヨウコはこめかみを押さえつつ言葉を搜す。

「貴方は皇位継承権者でしょう。義務を履行して欲しいだけです」
反論しようとしたイルを制して、冷ややかに告げる。

「それともここでただ飯食らいになる心算？それはね、貴方がこれまで必死で納めてきた税の無駄遣いな」

リュミシャルの税はそれほど高いわけではない。しかし決して万人にとつて楽な税額でもない。

イルの家の納税額から察するに、それほど収入があつたわけではなさそう。楽に納めていたわけではないだろう。

「それは……無理やり連れてこられたわけで！」

「国は頼んでないわ。安い市井の酒場の水割り程度の血縁とはいえ、どこにいても皇位継承権は変わらないもの。どこにいてくれても結構」

突然来られて迷惑だという意味が伝わったのか、イルはあっさりと黙り込んだ。

そして街の酒場なんて行ったこともなくせにと悔し紛れで見当違いな反論をした。

他愛ない。悪役の気分だ。

「勿論貴方に全権を預けたりしないわ。貴方が裁決する書類には全部『但し、上記内容はすべてレイヴス・シャルディア・リュミシャルによつて変更が可能なものとする』と入れるし。優秀な執務官もつけるわよ。裁決はすべて私との連名でなければ効力を生じないという条項も加える」

口にしてみると命令を受ける側に見ればとんでもない毒薬条項ばかりだ。

自分が命令を受ける立場だとしたらぞつとする。しかしそれ以上にぞつとするのは現状だ。

「つまり、頭の運動は一切不要。機械的に手だけ動かしてくれればそれでいいよ」

割り込んできたのは珍しく着衣を乱したシンレットだ。

閉めたはずの扉が開けられたことにも気が付かないくらい、シヨウコも実は気が散っていたらしい。

扉に身体を預けながらシンレットは服の裾を捌く。

「皇后陛下、お人が悪い。あの子の混乱を予想していらつしやいましたね？」

「昼までに間に合うとは思っていなかったわ」

「あっさりとしヨウコが白状すると、向かいのイルが疲れたように言う。」

「あのおっさんたち、凄かった。もう昼になる！今交渉に行かなきゃ時間切れだ！って言って言って解放してもらったけどさー」

「意外と機転が利きましたね。まあ、話は聞いた。さっさと了承してください」

「あんた反対してただろ！」

泡を食って叫ぶイルに、シンレットは馬鹿にしきった表情を浮かべた。

性格の悪さがにじみ出たような嘲笑だ。前言撤回。悪役は誰が見てもシンレットだ。

「家の手前、というのもありまして。何かあっても貴方は皇位継承権を放棄するくらいしか責任が取れないんだから、失うものなんて無いでしょう？」

シンレットの最終目的が垣間見える発言だが、シヨウコはあえてそれを無視することにした。

「議会の賛同は得られたの？」

「賛同、と言いますか…法文がある以上、代替案を示せなければ認めるほかありません。ですが、ほとぼりが冷めたら法の改正に踏み切ることになりましょう」

「それには賛成。解釈だけの問題なら、皇帝を軟禁して皇位継承権者が実権を握ることさえ可能なもの。穴が大きすぎるわ」

その穴を最大限活用したシヨウコでさえ、不完全さは是正されなければと思う。議会にしてみればなおさらだろう。

「議会も問題ない。皇后陛下のご推挙だ。まさか、断れませんよね？」

断らない、ではなく断れない。端から選択肢など与えていない。朝議の後の苛立ちを不当に発散しているようにも見えるが、というか凄みのある笑顔を見ているとそうとしか思えないが、シヨウコとしては最終的にイルが頷いてくれればそれでいい。じわじわと追い詰められたイルは、ついに圧力に屈して首を縦に振った。

それを見てシヨウコは会心の笑みを浮かべる。

押し切られたイルさえも、一瞬目を奪われるような表情だった。

「執務補佐官として、私のしたで働いているロイを使ってください。きつとお役に立ちましょう」

きつとこの声は続き間にも聞こえている。

今回はロイに反論を許す気はない。少し離れたほうがいいとも思っていたから丁度だ。

シヨウコは立ち上がるとイルの椅子の側に進んだ。

思わずのけぞったイルに苦笑しつつ、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「皇帝陛下が戻られるまで、臣下としてお仕え致します。どうぞ私もを信頼し、この国を平らかに治めください」

恭順を示す礼を取る。

明らかに動揺した気配が伝わってきたが、許されるまで顔を上げる心算はない。

掛け値なしの本音だ。

不本意なのを分かかっていて無理やり引きずり込んだ。後悔はしていないが罪の意識がないわけではない。

守ってみせる。

全力で。

伏せた顔は決意に硬くなった。

浮遊する思い 3 (後書き)

誤字脱字ありましたらお知らせください。
感想大歓迎です。

交錯する思惑（前書き）

今回短めです。

交錯する思惑

為政者が板についてきたな、と思う。

少し前までは、花がほころぶようなと形容される微笑や完璧に美しい作り物のような笑みを浮かべることが多かった。

この顔は違う。

たまにレイヴスもこういう顔をする。

シンレットとて正確に形容することは出来ないが、それだけで人を動かす顔だ。

どんな厄介ごとともその表情一つで受け入れてしまっ、力のある顔でも言えばいいのだろうか。

旧王都に行った帰り、シンレットはシヨウコにもっと偉ぶれと言った。

10年もの間ひっそりと暮らしてきたせいか、シヨウコはその地位と身分にそぐわないほど誰に対しても対等だった。

他者を尊重する姿勢は美德だ。

しかし時として人は圧倒的なものの前にしか膝を折らない。

政治には多くの反対を押し切る傲慢さも必要だ。

今回の一件の最大の収穫は、シヨウコがそれを体得したことだろう。そこだけは、イルに感謝してもいいかもしれない。思いがけない副産物だった。

政務も滞りなく流れているし、表立った問題はない。

しかしこれほど長く皇帝が不在でも滞りないという状況こそ、本来異常ではないだろうか。

「レイ……何をしている？」

返る言葉は当然ない。

渦巻く不安を振り払うように頭を振りゆっくりと息を吐く。

一度伏せた目がもう一度開いたとき、そこには不安の色は残って
なかった。

「そうか。下がっていい」

空気が僅かに動いたことで、退室したのだと知る。気配の無さにか
けては一級品だ。

皇帝直属の機関としては近衛軍が有名だ。

しかし歴代皇帝が用いてきたのはむしろ裏の仕事を専門に引き受け
る、器官と総称される部隊だ。

機関と器官。笑えるような区分けだが、それが長い間器官の隠密性
を保ってきた。

見たことを皇帝に報告する目。

聞いたことを皇帝に伝える耳。

皇帝からの指示を他に伝える口。

そして実行部隊の手。

この各部隊につながりはなく、すべての行動を把握しているのは皇
帝一人だ。自らを頭と自称した皇帝もいたというから、その繋がり
は代々強固なものだと知れる。

以前シヨウゴに後宮には耳と目がいると言ったことがあったが、当
然王城内のいたるところにすべての部隊が揃っている。

今回の一件についても当然レイヴスは各部隊を通して状況を把握し
てきたし、場合によっては状況を動かしました。殆ど計画通りとい
っても過言ではない。

しかし。

「……気に食わない」

口にしてしまうとそれだけのことだ。

気に食わないだけで問題があるわけではない。単なる気分の問題で、差しさわりがあるわけではない。

粗末な椅子が体重を受けて軋む。

普段の生活からは考えられないほど、身の回りは粗末なものだ。

戦場では月の下で眠ることもあるし、そうでなくても緊急時の天幕に比べればずっとましだ。だから生活が苦になって気が立っているわけではない。

認めるのは悔しいが、苛立ちの原因は報告の中身だ。

獣脂独特の臭いが立ち込める精製していない油は、灯りも弱い。

誰にも見咎められることがないのをいいことに、レイヴスは伶俐と評される顔を思い切りしかめた。

自分が表に出て行かない言い訳を作り出さなければならないのは、理解できる。

その状況に導いたという認識もある。

しかしどうしてその言い訳が子作りなのか。

しかもその間にシヨウコ自身は仕事をする気だ。曲がりなりにも皇后が、寵を競う心算はないと断言しているようなものだ。それを疑問に思わない周囲も如何なものか。

「……後で見ている……」

地を這うような声で不穏な独り言を残しつつ、早急に事態を收拾することを心に誓う。

そのためにレイヴスはいくつかの束になった資料に手を伸ばした。

本来この事案に手をつけるのは数年先だと思っていた。

しかし計算外であった新たな政治力　しかも裏切る可能性は極端に低い　　が加わり、計画が前倒しになったのは嬉しい誤算だった。

った。

二大国の一つとして強大な力を有するリュミシャルも、内実はそれほど盤石ではない。

表面化していないだけで、部族間の争いや民族紛争、経済闘争から領土問題までおおよそこの国でも頭を抱えるだろう問題が山積している。

その中でも頭痛の種は階級間の思想の乖離だとレイヴスは常々考えてきた。

良くも悪くも民衆は利に聡い。

彼らの行動を決するのは己のあるいは属する集団の利害であり、リュミシャルという国に愛着はあるだろうが仮に明日から皇帝が変わるとなっても、日常に変化がなければ受け入れるだろう。国民が国とともに滅ぶことを選ぶとしたら、それは為政者の洗脳と煽動だ。対して貴族はどうか。

彼らは時として国と滅びることを選ぶ。国を滅ぼすことを選ぶ。玉座を望む。結託し裏切り癒着する。

それを阻むことなど出来ない。しかし放置しておくことも出来ない。出来るのは内実を可視化することだ。

レイヴスが着手しているのはそのための挺入れだ。脳裏に別々の理由で二人の友人の顔が浮かんだが、それは私情だと切り捨てる。

おそらくあと数日あれば、公表できるところまで漕ぎつけられるだろう。

そうしたら。

豎琴を聞きながら茶が飲みたい。

誰の側で、というのは悔しいことに分かりきっていた。

予想外だ、というのが大半の意見だった。

人質としてやってきて皇后としての実権を有する今、他の皇帝候補を認めるはずがないと思っていた。

もし実現してしまえば、皇后が有する権限はすべて失われる。それが皇后の祖国のためになるはずがない。

予想外だ。
どうする。

ざわめく室内は灯りが落とされ、そこに居並ぶ人間の顔は判別できない。

それでいい。

誰が発言したのかなど問題ではない。

要は大勢の意見が決せられればいいのだから。

このような集会はここだけでなく数箇所で行われているだろう。

各々が主張するところは分かっている。

しかしすべて想定どおりにことが運んでいる集団はないだろう。

ある場所では皇帝を批判し。

ある場所では皇后を批判し。

ある場所では皇統の正当性を説き、ある場所は過激な正当性の誇示を説く。

語られる正論と弄される詭弁。

すべては夜の薄暗がりの中で行われている。

議会などまともに機能していない。

旧弊を引きずった選出方法さえ曖昧な議席を占めるのは古狸だ。

権限が与えられる大臣は皇帝の一存によって決まる。

近衛軍に入るには厳しい審査があり、皇帝に忠誠を誓うという特性上貴族としての力はなくなってしまう。

執務官として地道に経歴を重ねるには、自尊心が高すぎる。

力が欲しいなら暗躍しろ。

そついう風潮が生まれてもおかしくはない。

獅子身中の虫。

食い荒らした後に待っているのは己の破滅だと気が付いていない。

皇室に依存していると自覚していない。

あるいは国全体がそつであるという思い込み。

それに英断の斧が振り下ろされるのは、そつ遠い話ではない。

しかしその斧はあまりに強力で強大で、罪のない血まで流さずには
いられないだろう。

交錯する思惑（後書き）

誤字脱字報告お願いします。

コメント・一言大歓迎です。よろしくお願いします。

交錯する思惑 2

その日の朝議から、上座の配置が変わった。

中央に皇帝の席があるのはいつものとおりだが、そこは空席が続いている。

そしてその横に皇后の席があり、さらに第二継承権者としてイルの席が設けられた。

緊急の措置とはいえ、皇統ひいては現皇帝を信奉する立場の人間にとっては、面白いはずがない。

それを見越してシヨウコはロイと直属の執務官そしてケンに対して、どんな些細な動きも見逃さないよう伝えてあった。

そしてイルには、絶対に一人にならないこと及び極力自分の側にいるよう指示した。

少なくともイルは、それを監視としか考えていないだろう。

しかしシヨウコの周囲はそれを保護だと認識している。

不満の矛先がどこに行くか、考えるまでもない。

イルは今、シヨウコよりも暗殺されやすい立場に置かれていた。

どこか殺伐とした空気の中、朝議が始まる。

いつものように鮮やかな衣の裾を捌いて席に着き凜とした顔で資料を眺めるシヨウコの顔に、至る所から窺う視線が投げかけられた。

朝議の後、イルのことを信頼できる護衛官に預けて向かう先は後宮だ。

そろそろ工事が終わるらしく、一度状況を見に来てくれと頼まれている。

「シヨウコ様。あまりお疲れの出ませんように…」

「無理ね」

気遣いがにじみ出る言葉に返すにはどこかやさぐれている。

物言いたげな、なんて可愛いものではない。

明らかにそいつは邪魔だとシヨウコに訴える視線に気が付かない振り続けるのは案外消耗する。

「ねえケン？私を消したほうが早いつて思われたらどうしよう？」

「させません」

当然だと言わんばかりの態度に、張り詰めていた気持ちが一瞬弛緩する。甘やかされると分かるのは、気分がいい。

「でも、抜き差ししなくなったら二人だけで逃げてね」

「……当然、アオを連れ出すことも考えはしますが。シヨウコ様を置いては行きません」

考えはするという微妙な表現だ。

あまりにケンが真面目で相変わらずで、ちょっとした悪戯心が疼く。

「分からないわよ？首を差し出せとか言われるかも知れないし。

その代わりに貴方たちを逃がしてくれるなら、私は頷くわ」

「問題ありません。焼死体を提供します」

「は？」

「顔の判別がつかない程度に焼きます。移民で年恰好の似た女に心当たりがありますので」

あっさりと告げられたことの内容に啞然とした。

思わず振り返るとケンは涼しい顔で言う。

「貴人の警護の基本です」

「……ええ。あの…お世話にならないように頑張るわ」

畑が変われば常識も変わるものだ。

これ以上上げつない話が出てくるのを厭い、シヨウコはケンをからかうのは暫くやめようと心に決めた。

幾何学的な模様を描く床に、優美な線を描く水路。

まだ水は流れていないが、元の美しい姿を取り戻しつつあることは分かる。

それだけではなく痛んでいた箇所は修復され、尖っていて危険だった場所はそこに住まう女性たちに相応しい丸みを帯びたものに変えられている。

屈んでその縁を撫でながら、シヨウコは感嘆のため息を漏らした。

「何て素敵。流石はシンレット殿が太鼓判を押した職人集団だわ」

「お褒めに与り、恐縮です」

一点の妥協もなく作られた空間は見事の一言に尽きる。

控えめな受け答えをしたのは棟梁の息子らしく、代々続いた名工の家に相応しい品がある。

「やはり石の加工はリュミシヤールが素晴らしい。これほどのものは、故国では見たことがありません」

「ありがとうございます。木材の加工に関しては我々は御国の後塵を拝してばかりですから」

「気候の違いから来る文化の違いでしょうね。技術者の派遣…なんて出来たら、いい影響与え合えるのでしょうけど」

「それは素晴らしい案です！是非、実現の折は私の名を思い出していただければ」

「それにしても石の強度は含有する成分によって異なるのでしょうか？見分けることは可能なのですか？」

「まずは石を切り出した層で判断します。細かくは精査するための薬剤がありましてその反応ですね」

「石切り場から運ぶのも大変な作業でしょうね」

「馬や駱駝ではまず無理です。こればかりは人力を集めるしかないのが現状で」

「例えば、ですが。雨季の予測が的確に出来れば、その水脈を利用することも出来るのでは？」

「夢のような話です。運ぶ手間が軽減されれば、石材の家格はずつと安くなるはずですから」

「流通ね。今関所と関所を繋ぐ道の整備をするという話があった…」

「素晴らしい！石畳に関してはご協力させていただきませよ。人事ではありませんから」

「シヨウコ様、お時間です」

途切れそうにない会話を断ち切って、わざとらしい咳払いの後にケンが棘のある声でそう告げる。

基本的に興味の範囲が広いシヨウコは、その手の専門家との会話が楽しくて仕方がない。時間の制約がなければ探究心が満足するまで質問攻めにするのだろう。

シヨウコがいいならそれで良い。

ケンは本気でそう考えているし、比較的簡単に実行に移す。

しかしそれだけでは納まらないときもある。それが今だ。

「残念。楽しい時間をありがとう。仕上がりを楽しみにしています。」

ケンも、教えてくれてありがとう。行きましようか」

踵を返したシヨウコに、後ろから声がかかる。

「皇后陛下。実は我々今回さるお方からご依頼を受けまして、本格的な木材の加工に取り組みました。後ほど評価をつけて頂きたいのですが」

「？ 私でよければ。楽しみにしています」

改修に関する報告書を受け取ってシヨウコとケンは後宮を後にした。

執務室に戻ったシヨウコはいつになく上機嫌で、ロイはそれを微笑ましくイルはそれを胡散臭そうに迎えた。

「ご機嫌だね。何よりだ」

「ありがとう。後宮の改修が終わりそうなの。技術の粋を集めたって感じで、しかもそれなのに工賃格安なの！」

「……守銭奴」

「失礼ね。国の財源を浪費するなんて万死に値するわよ？」

極小さなイルの呟きを的確に捉え、さも当然というように反論する。ドーブでは市井で買物をしてその暮らしに馴染んできたシヨウコにとって、どんなに額が大きくても金は数字羅列ではなく生活の道具だ。

締まるところは締めて当然。それが自分の金でないなら尚更だ。

「何はともあれ、貴賓区画の閉鎖を解けるのは嬉しいわ。あれのせいで何をするにも遠回りだったものね」

「シヨウコちゃんも団体生活が終わってよかったね」

「……？ ええ。そうね」

皇帝の私室を無断借用中であることは言わないほうがいいのだろう。

「んじゃさ、後宮の改修終わったら、色ボケ皇帝陛下は戻ってくるわけ？ そしたら俺解放？」

色ボケ皇帝。

事実を把握しかつレイヴスの人となりも知っている二人にとっては、あまりに実情とかけ離れた表現に思わず固まってしまった。

この場にシンレットがいなくて良かった。

いたら間違いないイルは命がない。武術はからつきしだがシンレットは持てるすべての力を使って、たった今の不敬な発言をあの世で詫びさせるだろう。

普段なら容易く取り繕えることなのに、シヨウコとロイは自分を立

て直すのに必死になってしまった。

しかしイルはその間を都合よく解釈したようで、ぐったりと椅子の背に身体を預けてため息をつく。

「何だよ。戻ってこないのか。っていうかさ、あんたは参加しなくていいわけ？子作り」

皇后でしょ？と続けられた言葉に戸惑いと僅かな怒りを覚えた。

何も知らないくせに、表面だけを見て好き勝手なことを。

一瞬浮かんだ自分勝手な考えを打ち消す。

上手く笑えている自信はないが、せめて惨めに見えなければいい。

「そんなことを考える余裕があるなら、さっさとこれ読んで署名してくれるかしら？」

「それ、答えになってない」

「答える必要あるかしら？」

「いや、気になるじゃん。あんたがあの子集団の中でちゃんとやれてんのかなーとか。いじめられてるんじゃないの？」

「いじめって……シヨウコちゃんがそんなものに付き合うとでも？」

いじめという子どもじみた言葉に笑うロイに、イルは眉根を寄せて反論した。

「そうやって笑うけどさー、知らないだろ？どんな場所か。結構しんどいと思うけど？」

「そういえば、貴方は侵入した前科があったわね」

「いや違う。アレは皇帝から許可貰ったんだって」

小手先の言い争いをするロイとイルを放置してシヨウコは窓の外に視線を向けた。

ロイが本気になったらイルは一捻りされるだろうが、何だかんだと楽しんでいるようなので問題ないだろう。

何気ない言葉だったのに、動揺してしまった。

シヨウコ自身、想像さえしていなかった。

後宮の問題は人員削減程度では解決しないほど根が深い。しかもそ

れを詳らかにすることは非常に難しい。

何が気に食わないという理屈ではなく、ただ好悪をぶつけられる空間は居心地が悪い。

大きな害はないので肅々と受け流しているが小さな嫌がらせは頻発している。

受け流せる程度であるから余計に始末が悪い。例えば思わせぶりな陰口や部屋の前に小鳥の死骸があったり、夜中に部屋の扉を思い切り叩かれたり。

勿論シヨウコ付きの女官たちはアオを筆頭によくやってくれている。多くはそこで取り除かれシヨウコの目に触れるのはごく一部なのだろう。

一つ一つに反応していたらこちらの品格にかかわるような、そんな程度の嫌がらせでは動きようがない。

だからそのままずるすると放置するしかなく、しかも周囲は解決済みの問題として扱うので余計に進退窮まっていた。

そんな状況で正面から気遣いを向けられて、ほだされなかったと言えばそれは嘘だ。

どうしよう。

余計なことは考えたくないのに。

ふと窓に視線を投げて、口元を抑えるように手を当てる。

映った顔は少しだけ笑っていて、手で感じ取った唇の形も同じだった。

穏やかな午後の一時。

後宮が閉鎖されて狭い部屋に押し込められて、一時はどうなることかと思っただがそれほど酷い環境でもない。

少なくとも変化のある毎日だし、思っても見なかった人間と親しくなったりもする。

加えて目障りだった皇后の顔を見なくても済む。

いろいろと優秀なことは認めるが、慣例や習慣を無視したやり方は気に食わないし、それを許容する皇帝陛下や大臣たちもどうなのだろう。

「皇妃様、お茶ですわ」

「今日は珍しい果物が献上されました。見た目には難ですが、皮を剥くと鮮やかな色をしているそうです」

「あら、本当？」

女は差し出された南国の果物に目を細めた。
大丈夫。

いくら敵国出身の皇后がいても、私は尊重されている。

一時的にこの部屋に移ったときも、周りに比べれば広い部屋だし、献上品も増えた。

あとは皇帝陛下のご寵愛があれば文句は無いけれど、綺麗な服や豪華な宝石があれば十分幸せ。着飾って美しくしていればいつか皇帝陛下の目も向くだろう。

「じゃあお前。剥いて頂戴」

南国の果物は肌にいいという。

部屋の隅に立ち尽くす少女にそう命じる。

お気に入りの女官にはそんな作業はさせない。彼女たちの手は私を飾るためにあるのであって、こんな棘のついた果物なんて剥かせない。

「……………」

しかし少女は立ち尽くしたままだ。愚図でのろま。それでも従順な

ことがとりえだったのに、何だと言うのか。

「聞こえないのっ？さっさとなさい！手打ちにするわよ！？」
こういう手合いは甘い顔をしたら付け上がる。

女官たちも同調するように少女を責めるように睨み付けた。

大丈夫。私は正しい。

「……………」

のろのろと少女は戸棚から小刀を取り出すと、華奢な刃物を鞘から抜いて布巾で清める。

そして机の横に膝をついて、果物に手を伸ばした。

少女の手には大きすぎる果物。それを見て髪に半分隠れた少女の顔が僅かに曇る。

何よその顔。

そう思った瞬間には体が動いていた。

「……………」

蹴り上げた脚は少女の頬に当たり、そのまま小さな身体は体勢を崩して床に倒れこんだ。

手から落ちる果物は鈍い音を立てて転がり、持ち手を誤った刃物は少女の片手を傷つける。

「生意気ね。私から何か言われたら従いなさい！お前の代わりなんて、いくらでもいるのよ！」

のろのろと少女は起き上がるが、そのとき手から零れた落ちた血が絨毯に赤い染みを作る。

「本当に愚図ね！その絨毯一枚でお前の給金一生分でも足りないわ

！」

「……………」

謝罪さえろくに出来ないなんて最低だ。

仕草で下がらせるが、それにも気付かないのか立ち尽くしている。

「……………何」

「……………」

「気味が悪いわ！外に出して！」

周りの女官が立ち上がる。

その取り押さえられる直前、少女は身を翻した。

「っ！」

状況を認識する前に、背中に感じる堅さと頬に走る鋭い痛み。

「……、だろう」

自分に馬乗りになった少女が小刀を構えたまま低く呟く。

怖い。

これは誰だ。

あの少女が私に齒向かえるはずがない。

「お前の代わりだって、いくらだっているだろう！」

周囲の悲鳴が遠い。

振り下ろされる小刀をただ呆然と見上げた。

交錯する思惑 2 (後書き)

女だけの集団は、男性が思うよりも複雑だと思います。小さい頃から人中で揉まれていれば対応も簡単ですが、シヨウコには求めるべくもなく。

そんなときに何気ない一言は結構ぐつと来るはず？

ご感想・ご意見お待ちしております。

事の幕引き

「皇后陛下！ただ今つ後宮区画で…！」

飛び込んできた知らせに驚くというよりは、ついに来たかと諦めの気持ちのほうが強かった。

相容れない人間を普段よりも狭い空間に押し込んでいるのだから、当然厄介ごとは起こるだろうと予測していた。しかしいよいよ後宮の改修も大詰めというときまで大きなことはなかったので、気を抜いていたのも確かだ。

「状況は？」

隣のロイが呆れたように尋ねる。

ロイにとつてはシヨウコがここにいて無事なのだから、他は瑣末だ。責任問題にならない程度に解決できればそれでいい。

「下女が皇妃様を襲ったようで…刃物を持っていると！」

「うっわ。女つて怖いね」

「イル殿、茶化さないでください。それで？立て籠もっているの？
そういいながらシヨウコも冷めていた。

どうせ長くは続かない。小娘一人その気になれば何とでもなる。

飛び込んできた執務官は焦れたように叫んだ。

おそらくシンレットのところにも行って、それでも同じような反応しか返つてこなかったのだろう。

「何故そんなつ！陛下がいらっしやるんですよ！？」

「……陛下が小娘一人に不覚を取るとは思えません」

冷静に言いながらもシヨウコは対応にしくじつたと感じていた。

脇目で窺えばロイも不機嫌のせいかと見紛うほど僅かではあるが、表情を曇らせている。

レイヴスは後宮区画にはいないと知っているシヨウコたちには、問

題の本質は皇妃の救助であるが他からすれば皇帝の安否である。追いつかなかった思考を悔いながら、シヨウコは不自然にならない切り抜け方を模索する。

「いやでもさ、一応夫婦でしょ？心配する振りくらいしなよ」

イルの余計な茶々が入る。

しかしそれは一蹴された。

「皇后陛下！近衛軍に後宮区画に入る許可を頂きたい！」

「必要ないわ。私が行きます」

後宮区画にレイヴスはいない。

そのことを公にするわけにはいかないし、シヨウコには自分ひとりで解決できる勝算が十分にあつた。それが明らかだからこそ、ロイも何も言わない。

それはシヨウコにしてみれば当然で、シンレットもきつと同じ事を考えたに違いない。

「陛下！許可を！」

「後宮へ男性が立ち入る許可を出せるのは陛下だけよ。知っているでしょう？」

「それでも！お願いします！」

いつの間にか執務室の前には人だかりが出来ていた。

執務官や王城の下働きの者もいるが、その中に近衛兵が混じっている。

そして朝議で見かける顔が一つ。

「……あなたは……」

ようやく椅子から立ち上がり、シヨウコは執務官を通り越してその人物に歩み寄る。

しっかりと家系図が頭に入っていたわけではない。しかしその場の誰よりも心配そうな顔をみれば分かる。

「……娘を、助けたいだけなんです」

しわがれた声。

危うい自制の上になんとか平静を保っているのだらうと分かる、父

親の声。

衆人環視のこの場で、皇帝などどうでもいい、娘を助けただけだと言いつける愚かしいまでの親の愛情。

こんなものは知らない。これほどまでの無償の愛を知らない。触れたことがない。

眩しくて、眩しすぎて痛い。

「助けます。陛下もいらつしやる。安心しろとは言えませんが、ここで心配していただくされば結構です」

手出しは無用と言いつけられ、膝が崩れる。

シヨウコはそれに構うことなく視線を集めたまま歩きながら指示を飛ばす。

「ロイ、もしものために医師を待機。あなたたち執務官、何をしているの？ 牢の準備と調書を取る準備を進めなさい。娘の身元が分かっているなら親元に連絡を」

「御意。他には？」

「…ケンに伝えて。『貴人の警護の基本』を用意してと」
そしてシヨウコは後宮区画に向かって歩き出した。

それとほぼ時を同じくして、全く異なる理由でレイヴスは潜んでいた場所を出て駆け出した。

偶然にしては出来すぎている。

仕組みられたにしても出来すぎている。

だからこれは仕組まれたと考えるべきなのだろう。

人目につかずに後宮区画まで抜ける道を走るが、それでも途中ですれ違った人間は申し訳ないが眠ってもらおう。多少脳を揺さぶれば前後の記憶は曖昧になるが、それ以上の障害はないだろう。間違いないシヨウウコは一人で皇妃を助けに向かうだろう。

それ以外に選択肢はない。

後宮の問題だけならば放っておいた。いくらでも誤魔化しがきくだろうから。

まだ機は熟していない。今出て行けばあとは力技で押し切るしかなくなってしまうだろう。そんなものは趣味じゃない。

「……愚弟がっ」

噛み締めた歯の間をこじ開けるように漏れた呟きを聞く者はない。秘密裏にもたらされた情報は皇帝として看過できないものだった。それが公になる前に戻らなければ、すべての偽りが露見する。それこそレイヴスが温めてきた構想どころの話ではない。

しかしそれよりも根底にあった想い。

皇帝としての立場も兄としての立場もなく、ただ無意識に浮かんだものがあつた。

その知らせを聞くときに。

側にいてやりたいと、そう思った。

阿鼻叫喚の地獄絵図があるのかと思っていた。

しかし予想外と言っていていいほど、後宮区画は静かだった。勿論すすり泣く者や、疲れきった顔をしている者もいる。

しかし大多数が抱えているのは、無関心で無責任な興味だけだった。そして皆が等距離を保つ扉。

見てはいけないと決まっているのだろうか。誰もが好奇心に負けて視線を動かし、何に咎められたわけでもないのにすぐに逸らす。

扉の前に立つても物音はしない。周囲との距離を確認して一息に扉を開け放った。

倒れた花瓶に捲れ上がった敷物。

その奥に窓を背にしているのは皇妃の首筋に小さな刃物を突きつけた少女と、気を失ってぐったりとしている皇妃だ。

シヨウコを見ても全く動揺することはない。その姿はどう見ても異様だ。

「……その人を放しなさい。それからどうする見込みもないのですよっ？」

「……。」

ゆらりと揺れただけで全く反応はない。

少女は皇妃よりずっと小柄だ。それなのに意識のない人間を支えて全く疲れた様子がない。

「…反吐が出るわね」

それは少女に向けたものではない。

似た様子の人間には馴染みがあった。

シヨウコがドープに移ったばかりのころ、頻繁に刺客が送られてきた。

命を狙う者から証言能力をなくす程度の障害を負わせようとする者、民族人種性別諸々は様々だったが、共通していたのはその異様なほどの身体能力だった。

殴ろうが蹴り飛ばそうが切り捨てようが、命が尽きるその瞬間まで刺客たちは動き続けた。それは気力や根性というものでは説明がつかない。痛覚が欠如しているとしたか思えなかった。幼心に気味が悪いと思った。

最終的には問答無用でケンが切り捨てたがリユミシャルの刺客なのかオースキュリテの刺客なのかは分かっていなかった。ここに来て積年の疑問が解決するとは皮肉と言うか偶然と言うか。

「要求があるなら、聞きましょう」
倒れた椅子を起こして腰掛ける。

単なる時間稼ぎで反応は期待していなかったが、意外なことに少女は口を開いた。

「陛下」

「？」

「何故我々を切り捨てようとなさいますか」

「…何？」

「敬愛なる陛下。それを誰が望みましょう」

少女が言う陛下はシヨウコではない。少なくともシヨウコに敬愛なるといふ表現は使われない。

虚ろな表情で口を開く少女は何も見えていない。瞬きさえしていない。おそらく裏で糸を引く人間は、最初に現れる『陛下』はレイヴスと想定していたに違いない。後宮にレイヴスがいると思っっているならそれも当然だろう。

ふと暗くなつた部屋でシヨウコは思わず椅子から立ち上がった。

「親愛なる陛下。我々は……」

「…っ！」

もう一度暗くなつた瞬間を見計らって、シヨウコは少女と皇妃の奥の壁目掛けて椅子を投げつけた。

意外な重みに的が外れて、椅子は窓にぶつかり派手な音を立てて大きな窓の硝子が割れた。

一瞬注意がそれた隙に間合いを詰めてシヨウコは力任せに皇妃の腕

を引く。支えきれず諸共倒れこんだ。

細かい硝子片が降り注ぐ中、飛び込んできた人影にシヨウコは腹立たしいほどの安堵感を覚えた。

何のためらいもなく少女を気絶させる手際は見事としか言いようがない。

「……怪我は!？」

久々に聞いた声に、緊張の糸が完全に切れた。

窓に映った影でそこにいるのは気が付いていた。しかしそれだけだ。こんな力任せで行き当たりばったり、意思の疎通も何も無いような手段が功を奏するか勝算は半々だった。

この事件ではなく、横にいるべき人がいないという状況に耐えた数日分の重さを一気に感じる。

「……陛下、下」

むしる怪我をしているのはレイヴスだ。

シヨウコが渾身の力で投げつけた椅子が割った硝子片は窓の外に潜んでいたレイヴスに向かっていったのだから。

「大丈夫です。おそろくずっと気を失っていたのだと」

シヨウコの横の王妃が大きな音に意識を取り戻したらしく、身じろぎをする。その表情を覗こうと身を屈めると、焦れたように腕を引かれて立たされた。

「違う! お前だ! 怪我は!？」

「……ごさいません」

あまりの迫力に何故かすみませんと続けてしまったシヨウコに、レイヴスは一つ息を吐いて抱きしめた。

「…陛下のほうがお怪我を。いえ、それよりも。一体どちらに雲隠れを? その前に状況の報告でしょうか。私にも分からないことがあるのですが…」

突然の行動に驚いて支離滅裂になるシヨウコの言葉をレイヴスは腕の力と短い言葉で遮った。

「いい」

吐息とともに短い言葉が耳朶をくすぐる。

あまりの距離の近さに驚いて身じろぎしようとしたが、それは強い力に阻まれた。

「え？」

「今はいい。無事で…良かった」

無責任を責める言葉や、数日の恨み言は用意してあった。

それなのにずるい。

こんなことを言われたら、もう何も言えない。

「陛下も…」

恐る恐る腕を回して僅かに力を込める。

声もらしくなく震えてしまう。

「…無事で…よろしゅうございました」

外が騒がしくなったのを契機に二人は後宮を出た。

いつまでもゆっくりしていることは出来ない立場だということは分かっているが、落ち着かないものだと思う。一段落したら熟成させてきた恨み言をぶつけてやろうと密かに誓う。

無論少女に縄をかけるなどの処置は行ったが、明らかに利用されたとわかる少女にそれ以上のことは出来なかった。

一体誰かと零したシヨウゴに対してレイヴスはさあなと気のない返事をした。

それは特定できないと言っているのか特定することに意味がないと言っているのか判断できなかった。あまり踏み込むのも気が引けて、

結局シヨウコは口をつぐむ。

「これから慌しくなるな」

「誰のせいでしょう」

明らかに雲隠れしていた誰かさんの責任だ。それなら一人で処理してくれと思わないでもない。

しかしレイヴスはそれ以上口を開く気がないらしく、面倒くさそうに髪をかきあげた。

よくよく見ればその格好はどこかたびれていて、表情にも疲れが窺える。

しかしそれについて言及する時間はシヨウコには与えられなかった。無事を祝う言葉も、労を労う言葉もない。

悲鳴混じりの報告は信じがたく、それでも周囲の表情が真実だと告げていた。

確かに感じたはずの安堵感も、手のひらから零れ落ちる。

耳を疑う報告に横の存在さえも希薄になった。

立ち止まったのは一瞬。

弾かれたように走り出したとき、何も考えていなかった。

自分を呼ぶ声も引き止める腕も振り払って、シヨウコは日頃の優雅さとはかけ離れたいっそ無様と違っていい位の必死さで駆け出す。

転がり込むようにたどり着いた部屋で見たものは床に広がる一面の赤。

そして切り離された首と身体。

あまりの惨劇に誰もが目を背ける中、シヨウコはそれを呆然と見つめたまま力なく床に座り込んだ。

ひたりひたりとなおも広がり続ける赤が服を濡らす。

その瘦躯になぜこれほどの血があるのだろつと、場違いな感想が浮かび上がる。

「……イル殿……」

当然ながら、返答はない。

事の幕引き（後書き）

久々の更新です。お待たせいたしました。

事の幕引き 2 (前書き)

久々更新です。長々と放置していて申し訳ございませんでした。

事の幕引き 2

「下手人は不明：現在も捜索はしていますが、如何せん後宮での騒ぎに皆が気をとられており、全力は勿論尽くしますが……」

「…捕まらないのね？」

「努力いたしております」

皇位継承権第二位の者が殺されたというのに、城内はまったく動じることが無い。

それだけで、イルがどんな立場に置かれていたのかがわかってしまう。

シヨウコはため息をつくとき分乱暴な仕草で席を立った。

「陛下：どちらへ？」

次の報告の資料を抱えた者が困惑気味の声を掛けるが、シヨウコは振り返ることなく部屋を辞した。

「……イル……」

節くれ立った手が日々の労働を偲ばせる。

こんな状況になって初めて会ったイルの家族は、イルが以前言っていたように貴族的なところなど全く無く、こんなことでもなければ城に来ることなど無かっただろう。

震える手で遺体の顔に掛けられた布取り除くと、言葉にならない悲鳴が喉から零れた。

「お気持ちお察します」

こんな言葉をかけるときでさえ、シヨウコには一段上に設えられた席から立つことも許されない。

己の行為に矛盾を感じつつもそれを表情に出さずに努力をしている

と、イルの母親が冷たくなった頬に手を伸ばそうとした。

「…ご母堂」

シヨウコの呼びかけも聞こえていない様子を確認して、ケンがすと母親の手を押さえた。

「な…」

何故触れることさえ許されないのか、という非難の視線をケンは努めて平然と受け止めた。

「肉が…朽ち始めています。触っても崩れないとは、言い切れません」

一瞬呆けたような顔をして、イルの母親は棺に取りすがって慟哭した。

決して手入れが行き届いているわけではない白髪交じりの髪。

いつも声を張り上げて仕事をしているのだろう、かすれた声。

でもこれほど美しい母親の姿をシヨウコは見たことが無かった。

何故、どうしてと繰り返す声を聞きながら、シヨウコもこの一連の出来事に疑問を投げかけた。

レイヴスが突然王城から姿を消したこと。

時期を計ってイルがやってきたこと。

そしてイルが殺されたこと。

付け加えるなら後宮での騒動。

繋げることが出来るとしたら、結論は一つ。

あまりに不快な想像に胸をむかつかせながら、シヨウコは無神経と分かりきっているが必要なことを問いかけた。

「イル…殿は、皇位継承権を持っていました。その地位で他世へ旅立ったので、あなた方ご遺族には国から恩賞が与えられます。その手続を本日行っても？」

「は…」

イルの家族が、信じられないといった瞳を向ける。

それはそうだ。

シヨウコだってこんなことをこんな状況で言われれば、相手の神経

を疑う。

この補償は言うまでも無く今後もその血脈を守るためのいわば軍資金だ。

それを受け取るということは、王城と血生臭い縁を持ち続けることになる。

「……いりません」

か細い声が響く。

「そんなお金、いりません。この子が死んでもらえるお金なんて……今後家族を危険に晒すお金なんて、そんなもの！」

いつそ殴ってくれ、と思う。

誰のためでもない、シヨウコのために。

はじめは小さな違和感だった。

レイヴスが王城にいないせいかと思ったが、次第にそれだけではないとはつきり分かった。

だからこそ極力イルの側を離れないようにして、傲慢にも守れると思っていた。

イルに狙われていることを告げなかったのは、妙な動きを察知して相手方を刺激したくなかったから。違う。こんなものは建前で。

信頼していなかったのだ。心の底からは。

常に誰かから命を狙われていた幼少期。暗闇で襲ってきたのは友人と呼べる侍女だったことさえある。

そんな経験が尾を引いて、どこかでイルを疑っていた。

万一の可能性を捨て切れなかった。

王城の危機管理、為政者という視座であれば、間違った行いではない。

しかし、それは免罪符ではない。

守れなかったことは罪で、守らなかったことは悪だ。

「……もう、捨て置いてください」

イルの親族だろう、壮年の男が疲れたように呟く。

「私たち家族のことは、忘れてください。もともと皇位継承権なん

て知らんかったのです。

無くなつたつて、ちつとも困らん」

ああ。

思わず目を覆いたくなるのを、義務で堪える。

受け止めなければならぬ。

「私たちは、皇位継承権を、放棄します」

責められない。責められるわけが無い。

ましてや翻意を促すことなど。

「……分かりました。では別室で、手続を」

聞こえるはずの無い、高笑いが聞こえた。

してやられた。

完敗だ。

ぐつと拳を握る。

爪が食い込む痛みが、なんとか表情が歪むのを押しとどめた。

国葬さえ断られ、今後一切接触を持つてくれるなど念を押された。

影で国の威信がと囁く声には冷たい視線を投げつけるに留めておく。

国民の命を守れない国に、威信も何もあつたものか。

「シヨウコちゃん」

ぐつたりと椅子に身を沈めるシヨウコに気遣うような声が掛けられ

る。

額を手で押さえたまま視線をめぐらせると、悔しげな表情を滲ませ

たロイが立っていた。

「……ごめん、今回は負けたね」

「……そう、ね」

「責任は僕にある。いや、僕たち、かな」

「責めは私に。シヨウコ様は皇后としてなすべきことをなさいました」

控えていたケンの言葉に偽りは無いのだろう。

しかしシヨウコはそれに頷くことは出来なかった。

「違う。分かっているでしょう？……責めは私と……陛下にある」

あの時、後宮の騒ぎを鎮めに走ったことは間違っていないなかった。シヨウコを補佐し守ることが仕事のロイとケンが、後についてきたのも当然だ。

イルのことを誰にも指示しなかった。それは明らかにシヨウコの落ち度だ。

くしゃりと額にかかる髪を握りこむ。

「陛下の不在を知られる危険と、イルの命。私は前者を無意識に優先したのよ」

それはシヨウコの中では紛れも無い真実だ。

「悲劇を演じるのも、そのくらいにしていただけですか？」

異様なほど事務的な声が場を貫く。

嘲りの表情とは裏腹に、シンレットは優美な仕草でシヨウコの前に腰を折り、手を差し出した。

「臨時閣議のお時間です。皇后陛下」

差し出された手を一瞥し、シヨウコは辺りに憚ることなく顔を歪めた。

「私には、親しい友人の喪に服する僅かな時間さえ与えられないの？」

「その死を無駄にしないための閣議ですよ」

「そんな台詞はね、大臣。自分に帰責性が無いときにしか使えないわ」

「それは失礼しました。では陛下も、そんな我侷は国に対する責任

が無くなつてから口にしていただけですか？」

痺れを切らしたシンレットがシヨウウコの腕を掴み立ち上がらせた。文官とはいえ男の力だ。一掴みにされた二の腕が痛む。

あまりの暴拳に駆け寄ろうとしたケンを制して、シヨウウコは慣れた動きで肩を回した。

勢いよく振り回された肘が顔の前をかすめ、思わずシンレットは手を離れた。

「……お体の調子は良いようですね。何よりです」

「心と身体は連動しているから、最悪よ。それでもどうにかなる相手でよかつたわ」

引きずり回したり抗議を無視して連れまわすの暴君を相手にしていると、こんなことが躊躇無くできるようになってしまう。

とんだ弊害だ。

「それに、私にこの国に対する責任なんてあるのかしら？この国は専制君主制に変わったものとはかり思っていたのだけれど？」

「なっ!？」

国の体制に対するあまりの言葉にシンレットは喉を詰まらせる。

他のどの国よりもシンレットは自国の政治体制が優れていると自身を持つている。

シヨウウコの言葉はそれに対する侮辱以外の何者でもない。

流石にこの言葉にはロイも驚いた様子で目を見張っている。

「今のお言葉は取り消していただけですか。皇后陛下」

「取り消したいのはやまやまだけれど？」

これ以上争うつもりは無いとでも言うように、シヨウウコは扉に向かって歩き出した。

「国の大事な問題を放置して姿をくらまして。拳句散々な状況の後片付けにも参加せずにすぐに閣議？」

申し訳ないけれど、ついていけないわ。それが今しなければならぬことなのか、一度冷静になって考えてみてはいかがかしら？」

ぱたんと静かに扉が閉じられ、足音が遠くなったのを確認してからシンレットは大音声で叫んだ。

「何だ今の！何の癩癩だ！？」

先程までシヨウウコがかけていた椅子を指差し、同意を求めるようにロイとケンを見る。

「閣議！仕事！それを拒否か！？」

ロイはニヤニヤと笑い、ケンはすっと目を逸らした。

「笑うな筆頭執務官！ロイの責任でもあるだろう！？」

お前が甘やかすからだと妙な難癖をつけ始めたシンレットは相当混乱している。

シンレットにしてみれば、冷静沈着合理主義を地でいくシヨウウコの気が触れたとしか思えない事態だろう。

「まあ少し落ち着つけ。あんまり怒るとお前の評判に関わる」

「知ったことか、そんなもの。本当に閣議欠席するのか？それこそ皇后陛下の信用に関わる……」

「……むしろ、平気な顔をして出席するほうが人間としての信用に関わると思いますが」

嘲るでもなく宥めるでもない。

淡々とした声と顔でケンは小さく呟いた。

「……どういう、意味？」

「皇帝陛下はいいでしょう。故人と全くといっていいほど親交が無かったのですから。ですがシヨウウコ様は違います。陛下がいらつしやらない間、多くの時間をともに過ごされ、友人として接していました。」

傷ついていない、と本気でお思いですか？シヨウウコ様が悲劇に浸っているだけだと？」

責めるわけではない、ただ尋ねるだけの声に逆にたじろぐ。

それはロイも同じらしく、訝しげな視線をケンに送る。

「……シンだつてそこまで言っていない。でも、僕もシヨウウコちゃんらしくないと思うね」

「私もそう思います。シヨウコ様らしい態度ではない。」

「いわば職務放棄など、私が仮に死んだとしてもシヨウコ様は絶対しないでしょう。それはあなた方でも陛下でも同じだ」

「おい…待ってくれ」

シンレットの焦った声にケンが笑う。

「違います。何もシヨウコ様と故人が深い関係だったからというのではありません」

皇后が皇帝以外の男性と、例え気持ちだけにしても男女の関係があったなど冗談ではない。

ましてや複雑な立場を理解しているシヨウコがそんな愚を起すはずが無い。

「単に、シヨウコ様と故人は友人だった、というだけです。我々は故人である前に公人です。それについて回る責任も危険も理解して、その上でその立場にある」

そこまで口にすればシンレットもロイも察したらしく黙りこんだ。内実を知らずにただ皇位継承権者となったイルは、シヨウコに皇后としての振る舞いを何一つ期待しなかった。見よう見まねでそれらしく振舞っていたこともあったが、基本的にイルは私人であった。おそらくどんなにくつろいだ場においても、ケンたちがシヨウコを完全な私人として見ることは無い。

どこかにこの国の皇后だという意識があり、それを元に関係が成り立っている。

いくら幼い頃から共にいるケンだって、仮に命令だとしてもシヨウコ様の壁は越えられない。

公人として接してこなかった相手に、どうしてその死後公人として割り切った対応が出来るだろう。

それでも一見淡々と遺族との面会を行い、涙の一滴も見せていない気丈、というよりは痛々しい。

少しの間沈黙が降り、気まずさを誤魔化すようにシンレットが乱雑

に頭を掻いた。

「だからって話も聞かずに出て行くっていうのは如何なものかな。陛下だってレイがただ仕事を放棄していただけじゃないことはご存知だろうに」

「それをあなたが説明しに来たのが間違いでは？」

「へ？」

「それをシヨウコ様に伝えるのは、陛下のお役目ではありませんか？」

暗転、その間（前書き）

長々とご無沙汰を致しました。

暗転、その間

泣き暮らすなんて、柄でない。

だからこれはあてつけだと分かっている。

イルを悼む気持ちは嘘ではないけれど、とくに切り替えは出来ていない。

そう分かっているても、シヨウコは「本日の議題」と書かれた紙を指で弾かずにはいらなかった。

シヨウコの背後にゆらゆらと立ち上る不機嫌な気配を感じつつ、ケンは横に立つロイに小さく問う。

「…本日の朝議は、シヨウコ様ご欠席ではなかったか？」

お前が動くと言っていただろうと責める声に、ロイは苦々しげに返す。

「その予定だった。そのはずだった」

実際、ロイはシヨウコが提出した法律改正の議論を延期すべく必要な書類を提出した。

その先のことは思い出すだけでも不愉快だ。

皇后付き筆頭執務官が出した要請を、上位職である大臣が却下した。

ここはロイとシンレットの力関係である。

それに気が付いたロイはシヨウコの名前で更にそれを却下した。

ここはシンレットとシヨウコの力関係である。

それに気が付いたレイヴスが重ねてそれを却下した。

ここはシヨウコとレイヴスの力関係である。

ここまでくれば互いに意地。
ならばとロイは議論の延期ではなく、法案そのものを取り下げようとした。

しかしここで働いたのは法の壁である。

一定期間議題として登録されていながら議論まで至らなかった案件は、その価値なしとして再提出が出来なくなる。

議論の効率化と健全な議会運営を狙ったなんともまっとうな法である。

レイヴスが城を空ける前に提出され、重要議題であるが故に皇帝の意見を必要としたために審議は進められず、定められた期間はすぐそこまで来ていた。

強引に理屈をつけようとすれば、いくらでもできた。

たとえば、審議されなかったのではなく、審議できなかったのだ。

よって期間の延長は至極当然である……などなど。

それをしなかったのは、そこまで子どもになれなかったのに加えて泣きながら変更を告げに来る執務官が哀れだったからだ。

本来ならばあと20年王城勤めをしても叩けるかどうかかわからない扉を何度も叩き、その度に部屋の主に厳しい視線を投げられれば若年の執務官の心は崩壊寸前だ。

若い才能の芽をここで摘み取るわけにはいかない。

諾、と伝えたときの表情を見て、悪いことをしてしまったと僅かに良心が痛んだ。

そんなものが自分に残っていたことも驚きではあつたけれど。

荘厳な鐘の音が朝議の時間を知らせる。

部屋の外に感じていたざわめきが徐々に大きくなっていくのを敏い耳が捉えた。

鐘の響きが聞こえなくなっても暫くの間、シヨウコは椅子にかけたまま動かない。

性格からして、一度諾としたものを反故することはないだろう。

時間に遅れることも好まない。

それでもふんぎりがつかないのならば、主のために出来ることは唯一つ。

「シヨウコ様」

制するロイの視線をかわし、ケンハシヨウコの横に膝をつく。

どこか情けない困りきった表情は本当に久しぶりで、それを引き出したのが他の人間であることにやや寂しさを覚える。

それ以上に嬉しいと思えるのは、結局シヨウコとケンがどこまでも主従だからだ。

「分かつてはいるの、よ？」

だから怒らないで、とでも続けそうな雰囲気堪えきれずケンの口角が上がる。

「シヨウコ様が良いようになさればいいのですよ？」

「思い切ったことを言うのね」

「はい。おそらくアオも同じことを言います」

想像に難くない。

無条件で受け入れる。

シヨウコにとってケンとアオはそうであるつと昔誓った。

無条件で受け入れてくれる人がいるということは幸せだと思う。

同時に、無条件で受け入れられるほど信頼できる人がいることも、同じく幸せだと思う。

少なくともケンは、そのことを誇りに思っている。

「あんまり自分勝手をして、ドープに送り返されたらどうしましょ

う？」

「願ったり叶ったりかと」

真面目な顔でケンが言う。

「甘やかすのね。つけあがるわよ？」

「どうぞ、存分に」

「泣いて帰ってきたら？」

「仕返しの方法を考えておきます。陰険に」

似合いすぎだわ！とシヨウウコが笑う。

緊張は完全に解けた。

軽く拳を握って、開く。

堅くなっていない。大丈夫だ。

裾を捌いて立ち上がる。

膝をついたままのケンに嫣然と笑ってみせる。

「行ってくるわ。ありがとう」

「ご武運を」

凜とした背中が廊下の先を曲がっていく。

その後ろをロイをはじめとする専属の執務官たちが追っていった。引き連れて歩く姿も随分板についてきた。

少し前まで小さな町でゆったりとした時間を過ごしていた頃には考えられなかった姿だ。

今も多少の無理はしているだろう。

でもそれをシヨウウコが望む限り、ケンは全力で支えるだけだ。

「……ご立派に、なられた」
一抹の寂しさとともに呟く。

だらしのないなと思いつつも、開いたままの扉に背中を預けて腕を組む。

風の吹き込む先に目を向ければ、執務机の奥の窓が細く開いていた。

外に広がる景色は、砂漠の中とは思えないほど緑が瑞々しい。

張り巡らされた水路の上を通る風は、熱風が和らぐとともに適度な湿度が加えられていて瞼が重くなるほど気持ちがいい。

張り詰めていた心がほどけていく。

皇帝不在という真実を隠すために奔走したのはシヨウコやロイで、ケン
は警護という仕事から大きく外れていたわけではない。

常に緊張を強いられる仕事ではあるが、いつも以上に張り詰めていたのは、やはり主であるシヨウコが張り詰めた生活をしてきたからだろう。

以前ならばシヨウコにそんな負担をかけた人間を恨んでいたかもしれない。

今でも愉快的な感情はないが、選んだのはシヨウコ自身だという諦観がある。

「ケン殿……？失礼、皇后陛下は」

「ああ。陛下は既に議場に向かわれた」

書類を持って尋ねてきた執務官が弾かれたように走り出した。何か不備があったのだろうか。

それでも今のシヨウコなら、あっさりと笑って「今後気をつけるように」と言うだけだろう。

陛下、と。

緊張しながら口にした言葉は、思いのほか馴染みが良かった。

幼いときからずっと側で見ている。

女の子から少女へ。

少女から女性へ。

一番美しく変わっていくときを、閉ざされた場所でもとに過ごしてきた。

それは錯覚に似た恋だったのかもしれない。

誰も触れてくれるなと思う一方で、美しく咲き誇る姿を見せ付けてやりたいような。

それらすべての時間を愛しく過去にできる。

「……もう、お目にかかることはありませんね」

風に乗せてそっと別れを告げる。

恋人で。

妹で。

姉で。

母で。

娘で。

友人で。

誰よりも側に居た大切な女性に。

誰に聞きとがめることもなく、静かに一つ、時間に区切りを入れる。去っていく幻に、どうか幸せにと願いを込める。

もう「シヨウコ様」と名を呼ぶことはないだろう。

陛下と呼びかければ、困惑の視線を投げってくるに違いない。

それでも理由を尋ねてくることはないだろう。

それが新しい関係に相応しい。

守るべき存在ではなく、仰ぐ主として。

吹き込む風に髪を遊ばせて、ケンはそっと瞳を閉じる。

こんな穏やかな日に相応しい、小さく温かい葬送の時間。

暗転、その間（後書き）

枝葉のような回でしたが、ケンとシヨウゴにははっきりとした主従関係がお似合いかな、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4388e/>

砂漠の蝶

2011年5月9日21時08分発行